いのちの夜明け

ヘレン・ケラー 著

HELEN KELLER

ヘレン・ケラー著

いのちの夜明け

澁谷　夏雄訳

前篇

學　習　館
東　京

ヘレン・ケラーと、ミス・サリヴン

「いのちの夜明け」の飜訳出版にのぞんで

カネティカット州のウエストポートというところにある一軒の綺麗な家の芝生に、日本の石燈籠が一つ置いてある。この燈籠の灯は消されることなく、始終輝いている。ヘレン・ケラー女史が生きている間は、この灯は輝きつづけるであろう。

この永遠の灯には、多くの複雑な意味が盛られている。それを知つている人びとは、この燈籠を一つの大きな象徴として眺めるのである。盲人にとつては、この燈籠は暗闇を照らすものである。聾唖にとつては、沈黙の世界からのがれることである。ケラー女史が絶えず激励のことばをおくつている各国の不具者は、これに信念と勇気と、未来に対する希望の象徴を見出している。また、世のなかの多くの教師とその生徒たちにとつては、これは友愛の象徴となり、さらに、ケラー女史にとつては、この燈籠は「身体的不自由から解き放たれる世界、偉大な教師メイシー女史に再び指導をうけることのできる世界」の到来を意味するものである。

ケラー女史とその教師メイシー女史が、毎年授与されるルーズヴェルト記念賞牌を与えられたのは、メイシー女史が他界する二週間前のことであつた。それには、「二人の超人的な協力精神と行動、およびその意義の深さを世に示すために」という理由がつけられている。

「**いのちの夜明け**」は、この二人の人間の間に実つた協力の美しさを描いている。真の献身と忍耐と愛によつて綴られている。光明を求めるための協力と努力の劇的な物語である。アレクサンダー・ウールコットが言う、「人間精神の勝利をあらわすもののなかで、最も心あたたまる話」であると一般に認められたものである。

私自身盲人の教育と指導にあたつた経験を持つている。ペンシルヴァニア盲人学校の教師をしていたとき、私は盲の子供の態度の変化してゆくありさまを大きな興味をもつて見守つてきた。彼らは憐れみの目をもつて見られるのを嫌がり、皆ほとんどもれなく何か役にたつ技能を身につけたいという決心を抱いている。そうすれば、彼らは世間の保護をうけずにすむのである。これら盲人、あるいはその他の不具者の多くは、すでに自分の目的を教育や音楽の領野ではたしている。実業界に進出したものもいる。ヴァランタン・アウイとパーキンズ博士が盲人学校というものをつくつて以来、想像もできなかつた恩恵を盲人は享受できるようになつた。そして今日は、ケラー、メイシー両女史の啓発のおかげで、聾唖でしかも盲の子供たちの心にまで、われわれは手を伸ばすことができるのである。

私は、盲の子が花を〃眺め〃、花瓣を撫でては、視覚をとおしてのみ知ることのできる美の世界を、驚くほど正確に理解するという、ちよつと考えられないことをなしとげるのを、幾度

となく見てきた。目あきは自分の眼前にある美しいものになんらの感興もおぼえないところを、触覚と嗅覚だけがたよりのこれら盲人は、目あきよりも深く鑑賞するだけの鋭敏な感覚を発達させることに成功している。

一九三七年四月、ケラー女史は、盲啞教育にたずさわる日本の人びとに希望のメッセージを伝える目的を抱いて、浅間丸の船客となつた。そのとき彼女は、「同時にいくつかの人間になれることはなんと素晴らしいことであろう。私の一部は日本の美しさを期待する心で一杯である。ところが、別の一部は、日本中に盲人教育運動がおこるよう、日本人を説得するという困難な計画を前にして頭をなやましている。」と書いたが、日本に到着していくらもたたないうちに、日本の美しさは彼女にそうした心配を忘れさせるほど、彼女の心を打ち、彼女は彼女で、その心の美しさをもつて日本人の心を打つことができたのである。

ケラー女史はこの五月に日本を再度訪問することになつているが、彼女の一生を物語るこの「**いのちの夜明け**」がこうした際に出版されることは最も時宜を得たことであり、日本人全体がこれを読む機会を与えられることは、まことにうれしいことと思う。

昭和三十年四月

哲学博士　リオン・ピカーン

この本を、聾者が口をきけるようになり、大西洋からロッキー山脈にいたる
津々浦々からの言葉を聞く活きた耳を持つ様にお導き下された
アレキサンダー・グラハム・ベル博士に捧ぐ。

いのちの夜明け　前篇

目次

序

本文

序文

ヘレン・ケラーは、一九〇四年、優等生としてラッドクリック単科大学を卒業した。彼女の国語の先生であったタウンセンド・ユープランド氏と、文芸評論家ジョン・アルバート・メーシイ氏の激励と援助のもとに、この本が書かれ、そして出版されたのは、彼女が同校に二年生として在学中の時だった。この本には、彼女の二十才頃までの自叙伝と書簡の抜粋、それに、彼女を暗黒と音のない孤独の世界から救い出した最愛の〃先生〃ミス・アニイ・サリヴアンの手によって彼女の教育と、幼時の成長道程を描写した記録が収められている。

卒業後、今日に至るまで彼女は、多忙な、そして意義ある生活を続けている。彼女の関心が、自分と同じ盲や聾の人々の救済に向けられたことは想像に難くない。彼女は講演や論文、又「流れの中に」（一九二九年）という題の後半世記やヘレン・ケラー日記（一九三八年）などの一聯の著書を公けにするとともに、アメリカ盲者協会など、体の不自由な人々の保護団体

で重要な役割を果しているのである。彼女は、アメリカ全国は云うに及ばず、カナダに、ヨーロッパに、又近東にとこの仕事の為に寧日なく活動しているのであり、その方法も、単に自分が実際に経験したことだけでなく、少しでも不幸な人々に希望を与えると思われるあらゆる手段に基いているのである。

ミス・サリヴァンが初めて家庭教師として来た時、彼女は父母の寵愛は受けながらも、たよりない、何かすがるものを求めている七才にも充たない子供だった。この状態から総ての人生上の事柄に生き生きと反応する、自信に充ちた、手腕のある一個の人格へと成長して行く彼女の成長過程がここに剰すところなく繰り拡げられている。彼女の成長過程を読む人は例外なく、一本の植物がすくすくと育って行く姿を見る様な気持にならざるを得ないであろう。

家庭教師の天禀も又、教え子のそれと優るとも劣るものではなかった。ミス・サリヴァンはサミュエル・グリッドレイ・ホー博士がローラ・ブリッジマンの教育によって盲者の教育に先鞭をつけた所として有名なパーキンス盲学校から紹介されたのだった。貧しいフィンランド移民の子供に生れ、十才の時に悪評高い孤児院に送られた彼女は、開いた口が塞さがらない様な無関心さと手ひどい待遇を受けなければならなかった。若し彼女がその境遇に堪え得たとすれば、それは彼女の心身両面の頑健さを語る以外の何ものでもない。彼女の不撓不屈さは、そこ

でより一層きたえあげられたのである。彼女自身も病気の為に半ば視力を奪われ、一生それを恢復する事が出来なかった。パーキンス盲学校で教育を受けた彼女は、自分の経験と、未だはっきりした形態も持っていなかった教育方法だけを唯一の頼りとして、ヘレン・ケラーの所に来たのである。

然し、彼女はその教え児の人格にぢかに訴えると云う方法で此の不備を補ったのである。まず最初に彼女が手をつけたのは、服従の美徳を身につけさす事だった。それには、彼女が〝小さいジャジャ馬と〟呼んでいるヘレンの我儘な性癖に面と向わざるを得なかった。その頃ヘレンは掌に手指文字を書いて貰ったり、手で触れて外界のものを知り、それを身振りや無言劇で他の人々に伝えたりして意志の交換を行っていた。丁度その頃、彼女は自分でも文字を学び、それを使う事を勉強していた。（彼女が話す事を学んだのはそれから三年後の事であり、それも不完全なものだった。）そのうちに、あの記念すべき、ミス・サリヴァンが来てから一月とたたぬある日の事、彼女は〝総てのものに名前がある事〟を知った。自然、彼女は物の名前を知る事に夢中になったのである。ミス・サリヴァンは、その上、次から次へと、彼女が知らない物の名前まで教え、ヘレンは同時に、自分では物と名前を一致させる事が出来ないながらも、総ての名前は、実際の物を意味するという、それに劣らぬ大切な事を飲み込んだ。かくて

彼女のあくない知識欲は、常に次の二つの質問を発し続けた。この物の名前は何というんだろう？　この名前はどんな物を意味するのだろうか？　この問題を解決して行くには、先生にも教え児にも、坑夫の忍耐と、ピアノの弾奏者の精力、又は禁慾者の毅然たる態度と詩人の精妙なセンスを同時に必要とした。

ここで記憶しておくべき事は、ヘレンが一年七カ月の間、眼も見え、耳も聞えたという事であり、この僅かの印象が実に大きな意味を持っていたという事である。然し又、病気の後、彼女の眼底には、光も色も全然投影されなかったと云う事も事実であり、音に関しても、改めていう必要を認めない。音は彼女の耳を通しては絶対に響鳴しなかったのである。その為、音の調子を聞き分ける事は出来なかったからである。然し、音の波長だけは、空気の波長となって彼女の体に反響し、その意識を律動的に刺戟したのである。

ヘレンの数多くない不満の中でも、彼女を悩ましたものの中には、戸外を自由に歩き廻る事が出来ず、誰か手を引いて呉れる人を待ってぼんやり坐っていなければならないという事があった。一般の人々が、周囲の状況に応じて肉体的にも、又対人的にも自由に行動し得るのは、視覚と聴覚の、広範囲に及ぶ、遠視的な働きに依ってである。然し、ミス・ケラーは、視覚も聴覚も不自由だった為に、近視的な合図だけに頼らざるを得なかった。彼女の唯一のアンテナ

は、正確を期し難い、叉広範囲に感応する事を望み得ない嗅覚と空気の震動の感知だけだった。如に何不自由だったかは改めて説明するまでもないだろう。然し、私達は、此の不自由さを誇張して考える前に、人生に於いて、此らの刺戟が果してどの程度の役割を果しているのかを検討して見る必要がある。私達は、或る物を感覚するがためにではなくて、それを認識するが故に実際行動を取り得るのであり、此の認識が視覚に依るとか、聴覚に依るとか、叉、ミス・ケラーの場合の様に筋肉運動や触感や叉空気の震動や嗅覚の助けをかりるとか云う事は、第二義的な問題なのである。ウイリアム・ジェームズがミス・ケラーに宛てた手紙で云っている様に、私達の共通の精神的な場である、我々の〃内奥の世界〃は、私達の信念の場所である。同様に、美の世界でも、私達の感覚的な意識が理解し得るのは表面的なものに過ぎない。詩人は――心理学者は暫く措くとして――私達に、此の確信を示唆している。ワーズワースは、ピーター・ベルに〃河畔の桜草、黄色の桜草は私に捧げられたもの。それ以上の何物でもない〃更に〃のどかな青空は決して私の心の中に融け込まない〃と云わせている。然し、ミス・ケラーはピーター・ベル以上である。彼女のいつくしみ深さと、生き生きした環境への反応は青空をも、桜草と同じように自分の心の中に取り入れてしまい、此の二つのものは彼女の心の中で一つのものに融合し合ってしまうのである。

ミス・ヘレンと云うとすぐに、何かの不自由な所のある人、と考えるのが一般の風潮となっている。然し、若し彼女の人生から可視的な、又可聴的な要素を抜き去ってしまったとしても、自然も、歴史も、又社会も何らの損傷も受けずにその儘彼女の心の中に残るのである。総てのものが、その名称も、性質も又特有の動き方も、そしてそれらに秘められた情緒もその儘の姿で生き続けるのである。実体を備えた実在物は彼女のその他の感覚に依って――水は冷いが故に、花は香わしいが故に――認識されるのである。彼女の感覚的、味覚的、音反応的又筋反応的な、そして嗅覚的な感覚は、実に鋭いのである。彼女は私達が眼で見る様に、その指先で話し相手の表情を読み取るのであり、私達にそれが不思議でない様に、彼女にも至極当然の事なのである。私達が忘れていけない事は、彼女は視覚と聴覚は失ったが、その心は失わなかった、という事である。彼女は思考し、比較し、記憶し、予期し、交際し、想像し、熟慮し、そして物に感じるのである。彼女の世界は、私達の世界と同じ三次限の世界であり、彼女は会話する事でも何でも、彼女を取り巻く周囲と自由に交る事が出来るのであって、天与の積極性と生き生きした明るい性質をもって実人生にぶつつかって行き、それから様々の事を学び取るのである。

ヘレンがハンデキャップを負っていた事は――誰か負っていない人が一人でも居ると云うの

だろうか——事実である。然し彼女が彼女たる所以はそのハンデキャップ自体ではなくて、彼女が如何にそれを克服したかと云う事にあり、更に、それを利点にさえ変えてしまった事にある。彼女に同情したり、又その労苦をいたわってやったりするのは当っているが、彼女を哀むのは見当違いの事である。それ所か、彼女に会ったり、その文章を読んだりする人は例外なく讃歎と祝福の言葉を漏さざるを得ないだろう。若し彼女が甘されて育ったならば箸にも棒にもかゝらないものになっていたかも知れない。ミス・サリヴァンが彼女の我儘を矯正したのである。そして、その後は、彼女自身が、強い理知的な意志を現存主義的な考え方で自分の生活を制馭したのである。彼女の生涯は生ま柔しいものではない。然し彼女はそれに打挫かれなかった。落胆の深淵に沈んだ事も一再ではなかった。その上彼女は不幸を人一倍強く感ずるせん細な感受性を持っているのである。此の間の事情は彼女自身の言葉に剰す所はなく云い表わされている。

〃成長するに従って私の世間知らずな楽観的な物の見方は次第に、此の世に充ちている醜さを知ったり、又それにもめげずより良い物を望み続け、落胆させられた時でも決して挫けない一つの信念に変形して行った。〃

私自身の彼女との個人的な接触は稀なものではあったが、深い印象を残している。彼女がラ

ッドクリックの四年生の時、私としてはハーヴァード大学教授になって二年目の年だったが、哲学史概論を一緒に勉強した事がある。今でも一番よく思い出すのは、私の講義の要点とか酒落とかがミス・サリヴァンの手とその耳を通じて彼女に伝わった時に自然にその顔に表われる理解したという微かな微笑である。

それはすぐには起らなかった。然し、クラスの人々の笑った後、暫くの間を置いて、その都度表われるのであった。話はずっと飛ぶが、昨年の十一月、ケンブリッジのロバート・ファイファ氏夫妻の所で会った時は、本当に楽しいそして熱の籠った、陳腐な表現で云えば、互に胸襟を開いての会話に、二時間を過したのである。

そして改めて彼女の生き生きした反応に深い印象を受けたのである。

彼女と話す人なら誰でも、彼女の内奥の耳、そして心眼に訴え得たと確信する事が出来る。そしてこれこそが、精神的な感覚が損われていない方々の間にかわされる、会話なるもの、以上のものとなってゆくのである。

一九五四年

ラルフ・バートン・ペリイ

前がき

此の本は三部より成る。最初の二部は、自叙伝と書簡の抜粋になっており、ヘレン・ケラー女史自身の手になった唯一の彼女の生活記録である。彼女の書いたものをより良く理解するために必要な、彼女の受けた教育については、ミス・アン・マンスフィルド・サリヴァンの記録と書簡の抜粋に依って説明する事とした。その上ケラー女史のひととなりや業績をつけ加えるのは、屋上屋を架する恐れがないでもないが、彼女とその先生が歩んだ道を、いくらかでも明らかにするのに役立つ事と思う。

第三部は、私の筆になったものではあるが、ミス・サリヴァンの提供して下さった記録と、彼女の援助に負う所が大きい。又同時に、「ザ・レデース・ホーム・ジャーナル」と、その編集者エドワード・ボク氏とウイリアム・アレキサンダー氏にも深い謝意を表しておきたい。両氏は「ジャーナル」誌のために撮られた写真の総てを提供して下され、何にくれと御心労

をわずらわして下さったのである。更に、多くの書簡や、資料を提供して下さったケラー女史の多くの友人、とくにローレンス・ハットン夫人、聾者に関する種々の助言を下さった聾者教育局長、ジョン・ヒッツ氏、又、ミス・サリヴァンの、何者より雄弁にケラー女史の教育を説明してくれる手紙を、多量に参考に供して下さった、ソフィヤ・C・ホプキンス夫人などを初め、影になり、日向になって御援助下さった、多くの友人諸氏に深く感謝する。

又、ホートン・ミフリン出版社は、特別の御好意に依って、「オーバー・ザ・ティー・カプス」に掲載された、ケラー女史の、ホルムズ氏宛の手紙、ウィッティア氏の、ケラー女史宛の手紙の引用をお許し下され、ウィッティア氏の秘書S・T・ピッカード氏は多くのケラー女史からウィッティア氏にあてた手紙を提供して下さったのである。

一九〇三年二月一日　マサチューセッツ州　ケンブリッジにて

ジョン・アルバート・メーシイ

アイゼンハワー米大統領と、ヘレン・ケラー

訳者より

私は、訳者としてではなく、一読者として、自分が感じた事を書き、訳者の序に代えたい。何故なら、私は読者の立場からであったら、実に沢山の云うべき事を持っているが、訳者としては述ぶべきものは何も持っていないからである。

私の心を最も強く打ったのは、ヘレン・ケラーと云う女の人に形を取った実に力強い、人間の生命の力であった。その力は肉体とか、精神とかに範疇づける事が出来ない程混然としている。若し生命力が単なる肉体の新陳代謝力に基き、その機械的な動作にだけあらわれるとしたならば、多くの欠陥を持ったヘレン・ケラーを、あれ程までに美しく成長させた事は出来なかっただろうし、単に精神的なものであるとすれば、彼女の肉体が示めした、微妙で、更に意志的な、生きようとする慾求を無視してしまう事になる。生命力こそが人間を導くものであり、此の盲目的な意志こそが、生きなければならない人間の、唯一の支えである。此の力を生き生きと感じた人だけが幸福になり得るのではあるまいかと思う。此の力を美しく、何物にも歪められずに持っている人だけが、美の極致と先験的な真理を感じ得るのだと思う。何故なら美と

か真理とかは、此の力を核心にして、此の力が生きていた「時」と、「処」を、その外面的な表われとしているものであるからである。私は、一読者として、此の力がヘレンの中に実に生き生きと活動しているのに強く心を打たれ、同時に私の生活にも強い自信を感じさせられて非常に嬉しかった。此の力が、此の力だけの意志で活動するには恵まれた環境が必要である。自由の国アメリカは、此の力にとっては最も恵まれた所である。それは管々しく説明する必要がないだろう。又、現在の日本の社会程、此の力が自由に振る舞い得ない所も少いだろう。そしてこれも説明の必要を認めない。でも、そんな事は問題ではない。私達は、此の意志的で、直感的な、素晴しく弾力性に富んだ力を持っているからである。此の力の声を聞き、此の力を慰めとして生活したら、ヘレンの肉体的欠陥がかえって彼女の特権になってしまった様に、私達を取り巻くすべての困難もより美しく、より高貴な人間を鍛練する上の最も効果的な要素になるのではないだろうか。D・H・ローレンスの主張も、ウイリアム・フォークナーの闘争も此れを目ざしたものである事をつけ加え、日本にも此の力をもっと素直に、そして積極的に認める風調が出て来る事を望みながら筆をおきたいと思う。

一九五四年十二月十二日

渋谷夏雄

出版者だより

米国が生んだ偉大なる世紀の女性ヘレン・ケラー女史の自らの手になる尊い生活の記録を集めた原名書（The Story of My Life）一九五四年版の日本語版を刊行することは、私の大きなよろこびと感激を覚えさせました。

それは、本書の刊行によって、ケラー女史の全身に脈々として鼓動を搏つ血汐が、美しい声となって世の多くの人達に「光」と「希望」を与え、ほのぼのとした「いのちの夜明け」が、おとづれてくることを信ずるからです。

本書は第一部「わたくしの生活」と第三部「教育」の一部を前篇として出版し、あとの第二部「書簡抜粋」と「教育」の中の「ひととなり」「文体」「講演集」を後篇に集録することにいたしました。

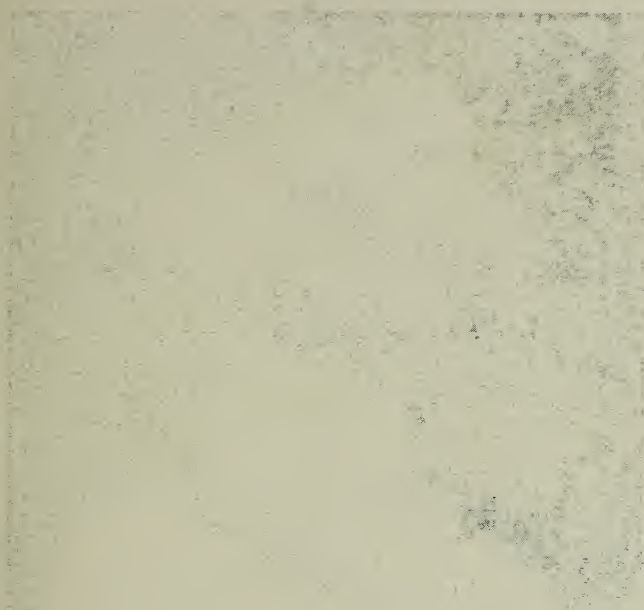
尚、私はこの出版を記念するために、利益の一部をさいて世の不幸なる人達のために最も適

切なる事業の建設を企画いたし、明るい希望の実現に努力し、ケラー女史の意志に御報いいたし度いと思って居ります。また連絡機関として、全日本ヘレン・ケラー会を創立し、組織だった積極的な活動をいたし度いと思いますので、御共鳴の方は、私宛御賛同の御連絡を御待ちいたして居ります。

一九五五年二月七日

学習館教育局

筒井光彦

七才のヘレン・ケラー

いのちの夜明け

第一部　わたくしの自叙伝

第一章　タスカンピアの小さな町に生る

私は、自分の半生について書き初めるにあたって一種の不安を感ぜざるを得ません。私の幼時に纒りついているぼっとかすんだ金色のもやを払い去るのに、私はあたかも迷信に似たためらいを感じます。自叙伝を書くという事は実際並大低の事ではありません。さて幼時の記憶を秩序立てようとすると、様々の事件や、その時に感じた事は、現在と過去とを絡ぐ時間というものと互に縺れ合っているのだと気がつく始末なのです。特に女の人は幼時の経験を自分だけの気に合う様に書き勝ちです。私の、今までの生涯からも二、三の記憶だけが鮮やかに浮び上りますが、その外のものは真暗な陰に覆われています。その上、子供の時の喜怒哀楽はその時の感激を失っていますし、私の受けた幼時の教育に関する一番肝要なことがらなども、次々に開かれた新しい世界への扉の鍵の発見という昂奮のために影が薄くなっています。そう云う訳

で躊躇し出したから切りがないので、私が一番面白く且つ重要だったと思う事だけをスケッチ風に書き綴りましょう。

私は、一八八〇年の六月二十七日、アラバマ州北部のタスカンビヤという小さな町に生まれました。

父系をたどると私の先祖は、メリーランドに移住したスイス人のカスパー・ケラーという人の血を引いています。スイス人の先祖の中には——偶然の一致なのですが、——チューリッヒで聾学校の草分の先生で、その教育法について本を書いている人が居ます。胡瓜の蔓に茄子はならぬとは良く云ったものと考えている次第なのです。

ケスパー・ケラーの子供である、私の祖父はアラバマ州に移住して来て、結局そこの宏大な平野の中に落着きました。私は、祖父が年に一回、農場に必要な物を買いに、馬でタスカンビヤからフィラデルフィヤに出かけて行った事をよく聞かされましたし、叔母は、その時の事を生き生きと興味深く伝える祖父の家族あての手紙を沢山保存しています。

私の祖母は、ラファイアットの助力者だったアレキサンダー・ムーアの娘で、初期のヴァージニャ総督だったアレキサンダー・スポッツウッドには孫娘に当り、ロバート・E・リーとはまたいとこになっています。

父はアーサー・H・ケラーと云い、南北戦争の南部同盟軍大尉でした。母の、ケート・アダムズは後妻で、年は随分違っていました。

母方の祖父、ベンジャミン・アダムズは、スザンナ・E・グッドヒューと結婚し、マサチューセッツ州のニューベリーに永年住んでいました。その息子のチャールズ・アダムズはニューベリー・ポートで生れ、アーカンソー州のヘレナに移り、南北戦争の時は南軍に加わり、旅団長にまでなっています。彼は、エドワード・エヴァレットや、エドワード・エヴァレット博士を生んだエヴァレット家のルーシイ・エヴァレットと結婚しています。

南北戦争が終ると家族はテネシイ州のメンフイスに移住しました。

私は、聴覚と視覚を奪ってしまった病気にかかるまで、大きい四角な部屋と、召使にあてがはれていた小部屋二つきりの小さな家で成長しました。此の様な家は南部に良く見うけられ、何かの時に使う様に母屋のすぐ傍に建てられているのです。父は南北戦争後、母と結婚してその家に住んでいたのです。壁も見えない位に蔦やバラ、それにすいかづらなどが縺みついていて、外から見るとまるであづま屋みたいなのです。小さなポーチは黄色のバラや、南方しばで、かくされて眼にもつかない位でした。それで可愛い小鳥や、ブーンブーン云う蜜蜂の恰好の訪れ場所だったのです。

一族の人々が住んでいたケラー家の母屋は私達のあづま屋から一寸離れた所に建っていました。その家は周囲の木立や塀など総て見事な英国常春藤に覆われていたので、常春藤の家といわれていました。その古風なは、私達幼い子供達に取って、此の世の極楽だったのです。

家庭教師について勉強する前から私は、四角ばった黄楊の柵伝いに、匂をたよりに菫や百合を捜り当てたりしたものでした。癇癪を起したりすると、ひんやりした木の葉や草に火照った顔を埋めて気を鎮める為に、よく庭に出ました。今思ひ出しても胸が躍る様な気がします。

庭の花の中に埋れて、あちこちと一人で歩き廻り、突然美しい葡萄を捜り当てたりするのです。そこには仙人草が這い廻り、ジェスミンが垂れ下り、しほやかな花弁が蝶の羽根に似てる所から蝶百合という名のある、珍しい花などが咲き乱れていました。その中でも殊にバラが好きでした。北部では決して此の南部のあづまやに這い纏っている様な心温まるバラはなかったのです。

そのバラは懐しいポーチから長いはなづさになって垂れ下り、夢見る様な香気をあたり一面に漂わしていました。殊に朝など、露に洗われた時は、本当にビロードの様に美しく、そして清浄で、神の園に咲く、しぼまずのアスフォデルってこんなかしらと思う程でした。

私の幼時は他の人々の場合と同じ様に全く平凡なものです。初孫が例外なくそうである様に

私も全くの凱戦将軍でした。そして例の如く、名前の事で大論争を起させたのです。初孫の名前は浮わついたものではいけないというのが圧倒的な意見でした。父は非常に尊敬していた先祖のミルドレッド・キャンベルにちなんだ名前がいいといって頑としてゆづりませんでしたが、結局は、母方の祖母のヘレン・エヴァッレトの名前を貰うのが一番望ましいという母の意見に落着いたのです。所が父は、私を教会に連れて行く途中、あまり昂奮していたものですから、私の名前を控えていた紙片を失してしまったのです。といっても、父はその名前には反対だったのですから当然の事だったと云えるでしょう。そして牧師に尋ねられた父は、何でも祖母の名前だったと思い出し、ヘレン・アダムズといってしまったのだそうです。

私は揺籠に入っていた頃から強情で負けず嫌いだったと良く云われます、他人のやってる事なら何でも真似して見るんだといってむづかったのです。生後六カ月で〃こんにちわ〃と片言を云いましたし、はっきりと〃お茶、お茶、お茶〃といって皆を驚かした事などもありました、病気にかかってしまってからでも、その頃に覚えた言葉を一つだけ忘れずにいました。それは、〃みず〃ですが、発音という事をすっかり忘れてしまった後までも、それと聞き取れる様に〃み、み〃と云い続けていたのです。〃み〃〃み〃と云う発音をしなくなったのは、やっと此の言葉を書き表わす事が出来る様になってからでした。

私は、生後まる一年で歩いたと云う事です。或る時母が私を湯舟から上げて膝に抱いていたのですが、突然私は、陽が一杯に当っている磨き込まれた床に、木の葉の緑がちらちらと踊るのに気を取られて母の膝からずり落ち、殆んど駈ける様にしてそれをつかみに行ったのです。

でも私はすぐに転んでしまい、母の膝に抱き上げられ、泣きじゃくってしまいました。でも幸福な日は長くは続きませんでした。のどかな駒鳥や、物真似鳥の囀る春が過ぎ、豊かな木の実や、バラに美しく色彩られた夏も、黄金色に、そして、桃色に極彩色された秋も、私の生涯に忘れ去る事の出来ない様々の豊富な色と音の贈物を残して早々と過ぎ去ったのです。そしてあの思い出してもぞっとする二月のある日に、私は聴覚も視覚も奪い取られ、生れたばかりの子供の世界につきもどされたのです。胃と脳髄にひどい充血を伴う病気にかかったのでした。医者は絶望と見たのですが、或る朝全く突然、奇蹟的に熱が引きました。丁度襲った時と同じ様に。家中躍り上って悦びました。然し誰も、――医者でさえも――私が永遠に見、聞き出来なくなるのだとは思っても見なかったのです。

しかし私には今もって此の病気の事がはっきり解りません。ただ、痛い痛いと泣き叫んでまんじりともしない私を、やさしく慰めて呉れた母の姿や、痛さと切なさにやり切れず、びくっと頭を擡げては、熱がこんでヒリヒリする眼を、日日に薄れて行く、嘗ってはあんなにも私を

明るく幸福にして呉れた光からそむけて、壁の方に寝返りを打った事などをぼんやり思い出します。そして、此の記憶の部類にも入らない記憶だけが、実に鮮やかにいつでも思い出されその他の事は、全部が全部、悪夢の様に忘れ去ってしまいました。苦しみながらも私は次第に私を取巻く闇と静寂に慣れて行ったのです。此の闇と静寂が、違った二つの要素なのだという事さえも家庭教師に教えて貰うまでは知るよしもありませんでした。でも私は、たとえ短い間であったとは云え、生後一年半、広々とした緑の野原や、きらきらと輝き渡る空、そして木々や花を見ています。そして突然に襲った暗黒の世界の中でも此の鮮やかな印象は実に生き生きと生き続けたのです。一度でも眼底に焼きつけられたものは私のものであり、その真の姿は永遠に払拭し去られる事がありません。

第二章　妹ミルドレッド

病後の一ケ月にどんな事件があったかは何一つ覚えていません。ただ母の膝に抱かれたり、家事をする母の着物にすがりついたりした事だけは覚えています。私の手は総ての物に触れ、その動き具合や、性質などを感知しました。間もなく私は自分の考えている事を他人に伝えよ

うとする慾求に動かされ、おぼつかない手振りをする様になりました。頭を左右に振るのが、〃うゝん〃で、上下に肯くのが〃うん〃、顎を引くのが〃来る〃、突き出すのが〃行く〃、といふ具合でした。若しパンが慾しい時には？　その時には物を薄く切りそれにバターを塗る真似をするのです。夕食にアイス・クリームが慾しい時には、冷凍機が廻る様子を手真似し、〃冷い〃といふ事を知らせる為に身震いして見せました。有難い事に、母は実に良くその意味を察して呉れました。反対に、母が私に何か持って来て貰いたいのだなという事も解りました。そして、二階でも、何処にでも、ゆびさされた所に行ったのです。本当に、暗黒に包まれた私の世界を少しでも明るく、そして和やかにして呉れたのは母のやさしい思いやりでした。

私には、可成りはっきりと周囲の事が感知されました。夕方に洗濯屋が持って来る清潔な衣類を畳んだり、しまったりする事を覚えましたし、その中から自分の物を撰り出す事も出来たのです。又、母や叔母が出掛けようとするのを、着物を着換える様子から察してしまい、必ず、連れて行って呉れとせがみました。私はお客様などがあるときっと出迎えましたし、その人達が帰る時には手を振ってお別れの挨拶をしました。然し、果してその時、どんなつもりで手を振っていたのかは、はっきり思い出せません。

或る日、二、三人の紳士が母に招かれた事がありました。私は玄関の戸の転りからお客様が

ついた事を知り、もっと綺麗な着物に着換えようと、大急ぎで二階に駈け上りました。鏡の前に立ち、見様見真似で覚えていた通り、髪に油をつけたり、厚く白粉を塗ったり、肩まで垂れるベールをうまく波うたせたり、その上、殆んどスカートからのぞき出す様な長い腰当まで小さな腰にぎゆっとしめつけました。こういう姿でしゃなりしゃなりと、客間に、お客様をもてなすべく降りて行ったのです。

私が他の人々と違っている事に気がついたのは何時頃の事かはっきり憶えていません。でもそれが、家庭教師が来る前だった事は確かです。私は、母や友達が自分の意志を伝へる時に、私の様に合図や身振りをしたりしないで、口で話す事に気がつきました。時々、私は話し合っている二人の人の間に立ってその唇にさわって見たりしました。どういう事を云っているのかさっぱり見当がつきません。そしてとても苛ら苛らしました。私は自分の唇を動かしたり、気狂い染みた身振りをして、どうにかして普通の人達みたいに話をしようとしたのですが、総ては無駄だったのです。此の様な時ほど私を苛立たせせる時はありませんでした。絶望に駈られて私は、凄いかんしゃくを起し、物を蹴跳ばしたり、喚き叫んだりしたのです。そして、くたくたに疲れ切って静かになってしまうのでした。

私は、自分が暴れ廻っている時でも、自分はいけない子だな、という事を感じていたらしい

です。その訳は、乳母のエラを蹴りつけたりすると、彼女がとても悲しそうになるのが解りましたし、癇癪が鎮った後は、例外なく後悔に似た淡いやるせなさに陥し入れられたからです。でも此の気持も、自分の思い通りの事が出来なかったり、思い通りの物が手に入らなかった時の何とも云えない苛立たしさをおさえるには、殆んど無力だったのです。

その頃は、コックの子供である、マルサ・ワシントンと、若い元気な時は素晴しい猟犬だった、セッター種のベルという老犬がお気に入りの遊び友達でした。マルサ・ワシントンは私の合図をよく悟り、殆んど私の思い通りに私の相手になっていました。この子を自分の顎一つで動かすのは、何とも云えない得意な事だったのです。そして此の子も、私とつかみ合いの喧嘩をするよりはましだと云う風に、従順に私の意必に従っていました。私は向うっ気が強く、行動的で、結果にはくよくよしない性質なのです。その頃から自分の気質を飲込んでいて、たとえどんな無理を通してでも自分が一旦やろうと思った事は最後までやり遂げました。私達はパン粉をこねたり、アイス・クリームを作る手伝いをしたり、コーヒー豆をひいたり、かと思うと、お菓子の分け前の事で喧嘩をしたり、又、戸口の所に集る七面鳥や鶏に餌をやったりして一日の大部分を台所で遊び過しました。鶏は本当に良くなれていて、私の手から餌をついばんだり、私の愛撫に体をまかせたりしました。と、或る日の事、一羽のいたづらな七面鳥が私の

持っていたトマトを奪って逃げて行ったのです。多分此の七面鳥の親玉の成功に冒険慾を煽られてだと思いますが、私達は台所から料理人が焼き上げたばかりのお菓子をひそかに持ち出し、薪の陰で、一くずも残さず食べ尽してしまいました。後で私はとても気分が悪くなり、同じ様な天罰があの七面鳥にも下ったに違いないと思ったりしました。

ホロホロ鳥は人目のつかぬ所に巣を掛けたがるものですが、草がぼうぼうと身の丈ほどに繁ってる所をかき分けて、卵を捜し廻るのは何とも云えない楽しみでした。無論私は、卵捜しに行きたくても、マルナ・ワシントンにそれを口で云う事が出来ません。でも私は腕で輪を作り、それを地面につけて見せるのです。

それは草の中にかくれている丸い物、という意味でした。マルサ・ワシントンはそれで一切を悟ったのです。運良く卵を見つけたりしても、私は決して彼女が家に持って行くのを許しませんでした。激しい身振りで、落して割ってしまへと命令するのです。

穀物小屋、馬小屋、朝な夕なに牛乾をしぼる家蓄小屋も、私とマルサ・ワシントンの楽しい遊び場でした。乳しぼりの人は乳をしぼっている間、私を牛にさわって見させたりして呉れました。私は牛がびくっと動くたびにはっと吃驚りしたものです。

クリスマスの準備も又、無性に楽しいものでした。勿論私にはどんな事が起るのか解りませ

んでしたが、家中にみなぎっている活気が私の心をうきうきさせたのです。それに、私とマルサ・ワシントンが邪魔にならないようにと握らされるお菓子も悪いものではありませんでした。此の事から考えて見ると私達は随分邪魔になったらしいのですが、此んな事などは、楽しくはずんだ小さな二つの心に影を落す事が出来なかったのです。私達は薬味に使う草の根をひいたり、乾葡萄を撰ったり、沸々と煮え立っている煮物の味見をさせて貰ったりしました。私は、皆の真似をして寝台にストッキングを吊して置い事だけは覚えてますが、その他の礼拝の儀式の事や贈物を見けたりした時の事は、さっぱり覚えていません。

マルサ・ワシントンは私よりも幸福な子供とは云えませんでした。二人の子供が或る七月の暑い日盛りの午後、ヴランダの石段に腰を下ろして遊んでいます。その一人は栓抜きみたいにくるくるとちぢれ上った黒い髪を、靴ひものリボンで束ねた、漆の様な子供です。もう一人は雪の様に色の白い、長いふさふさした金髪をしています。一人は六才で、も一人は二つ三つ位年上でしょう。小さい方の子は盲なの――つまり、此の二人が私と、マルサ・ワシントンなのです。二人は紙人形を切り抜く遊びに夢中になっていたのです。やがて此の遊びにも飽き、靴ひもも切りこまざいてしまい、手のとどく限りのすいかずらの葉もむしり取ってしまうと、私の退屈し切った眼はふとマルサ・ワシントンの栓抜き頭に向けられました。彼女はどうしても

云う事を聞かなかったのですが、渋々賛成しました。交り番にやるのがフィヤ、プレイだという訳で、マルサが初めに私のカールした髪に鋏を入れました。
若し運良く母が通り掛らなかったなら恐らく二人共丸坊主になっていたでしょう。
もう一人のお気に入りであるベルは、老いてのらくらし、私と一緒にふざけ廻るのよりは、火の傍に寝そべっている方が好きでした。
私は、私の合図を教え込もうとしたのですが、此の犬と来たら頭が悪い上に、覚えようとする気もないのです。いくら私が熱心に教えようとしても、そんな事にはおかまいなしに、むっくり起き上って、ぶるぶるっと体を震り、それっ切り、何にもうけつけませんと云う様にそっぽを向いてしまいます。私にはベルのその様な態度が何を意味するのかよく解りませんでしたが、私の云う事をきいているのでない事だけは察しがつきました。此の事が私を苛立たせ、ベル教育はいつもボクシングの一人試合になってしまい、ベルはうるさくてたまらない様におみこしをあげて別の炉辺の方に行き、又長々と寝そべるのです。結局私はすっかり退屈してしまい、マルサを捜しに出て行くのでした。
此の他にも、活気に溢れた世界から隔離された寂しい記憶がはっきりと数多く思い出されます。その記憶に纒りついている暗さ、静寂、それに無目的性は、しみじみした感じなしにはし

のぼれるものではありません。

或る日、私はエプロンに水をこぼしてしまい、居間の炉に燃えていた火にかかげて干そうとしました。所が中々思い通りに乾かなかったものですから、もっと近づいて早く乾かそうとしました。と突然、今まで、白い灰位にしか思っていなかった火が、その猛威を遺憾なく発揮し、あっという間に私を取り囲んでしまったのです。着物は燃え出し、私は金切り声を上げました。ヴィンニィ（私の老い乳母）が、あわてて飛んで来て、頭からすっぽり毛布を掛けました。私は殆んど窒息しそうになりましたが、おかげで火は消えました。それでも、両手と髪に軽いやけどをしてしまったのです。

丁度此の頃でした。私は鍵の使い途を知ったのです。或る日私は母を食糧室に閉じ込めました。折悪しく、召使い達は遠い所にいたので母は三時間もそこに監禁されていました。母は内側からどんどん戸を叩くのですが、私は、ポーチの階段に坐り込んでその音の快いリズムにすっかり魅せられていました。この種の始末に負えない悪戯の為に両親は出来るだけ早く、私の教育を始めようと決心させられました。家庭教師のミス・サリヴァンが雇われて来ると私は、何とかして彼女を、彼女の部屋に監禁出来ないものかと、そのすきばかり窺っていました。

ある時、私は母に、ミス・サリヴァンに或る品物を渡す様に云いつかって二階に上って行きま

した。私はそれを彼女に手渡すか手渡さないうちに戸をぴしゃりと閉め鍵をかけてしまい、鍵は広間の衣裳戸棚にかくしてしまったのです。そして鍵を何処にやったと問いつめられても決して口を割りませんでした。私の悪戯はまんとまと図に当り、父ははしごを持って来て、ミス・サリヴァンを窓から救い出さなければならなかったのです。一カ月経って私はやっと鍵を出しました。

五才位の時、私達は小さな葡萄蔓のからみついている家から大きい新築の家に移りました。家族は父と母、二人の異母兄、それに後で生れた妹のミルドレッドでした。私の一番古い父に関する記憶は、私が、あたり一面に散ばっている新聞紙をかき分けて這って行った時に見つけた、顔の前に大きい新聞紙を拡げて読みふけっている姿です。私は父が一体一人で何をしているんだろうと、とても不思議に思いました。私は眼鏡をかけるとその不思議が解けるものと思い込み、眼鏡までかけて父の真似をして見ました。然し、それでも解りませんでした。それが新聞というもので、父もその編輯者なのだと知ったのはずっと後の事でした。

父は非常に思いやりのある、寛大な人で、家族の事をとても心配し、狩猟のシーズン以外は殆んど家をあけませんでした。彼は狩の名人で、家族の次に彼が大切にしたのは犬と鉄砲です。彼の客好きも大変なもので欠点といっても良い位なのです。

何処かに出かけると必ず客を引っぱって来るのでした。

彼が一番自慢にしていたのは、広い庭で、そこには郡でも一番の出来栄えと評判だった見事な西瓜や、ストロー・ベリイが実っていて、彼はいつも初成りの葡萄や、美しく熟れたいちごを採って来て呉れました。私は、父が抱きかかえる様にして私を果樹から果樹へ、花から花えとつれてあるいて呉れたのを覚えていますし、私がはしやぐのを、私以上に悦んでくれたのも忘れる事が出来ません。

彼は又、とてもお話の上手な人でした。私が言葉を覚えると彼は無器用な指つきで私の掌に、種々の素晴しいお話を書き綴って呉れました。少し間をおいて私にそのお話を繰り返えさすのが、彼の最大の楽しみだったのです。

あの時は、未だ北部に滞在していた時でした。私は一八九六年の夏も末に近づいた素晴しい日々を送っていました。とその時です。晴天の霹靂の様な、父死去すとの報せを受け取ったのです。病気の床についていたのもほんの短い間で、ひどく苦しもせずにあっけなく他界してしまったのでした。此れは、私が味わった最初の悲しみであり、死というものの、初めての経験でした。

母の事はどういう風に書いたら良いのでしょうか。あんまり身近に感じ過ぎるものですか

ら、何を書いたら良いかさっぱり見当がつかないのです。
私は妹を邪魔者に思っていました。というのは母の寵愛を一身に受ける事が出来なくなってしまったのですから、私は強い嫉妬を感じていたのです。妹はいつでも、今までは私が占めていた母の膝に抱かれたり、母の関心をすっかり独り占めにしてしまっている様に思われました。そして或る日、私の傷つけられた心を更に深くえぐる様な事件が起ったのです。
その頃私はナンシイと云う、いつも愛撫してるものだから真黒になっている人形を持っていました。此の人形は、何かにつけての、私の感情のはけ口だったものですから、見るも無惨な姿になっていたのです。私は口をきいたり、泣いたり眠ったりする人形もいくつか持っていたのですが、此の哀れなナンシイが一番のお気に入りだったのです。ナンシイは揺籠を持っていました。私は彼女を寝かせようと一時間でもいくらでも揺り続ける事があったのです。私は、此の人形と揺籠が誰かに取られはしまいかといつも気を配っていました。所が或る日私は、妹がナンシイの揺籠の中で眠っているのを見つけてしまったのです。私は此の憎らしい赤ん坊の僭越さにかっとなってしまいました。ぱっと揺籠につかみかかるや、見事にひっくり返してしまったのです。若し母が落ちようとする赤ん坊を抱き止めなかったら、そのまま死んでいたかも知れません。私達姉妹が思いやりのある言葉や、やさしい行為、それに一緒に居るのだとい

う感じから自然に湧き出る愛情と云うべきものを感じ合ったのは、とても寂しい渓谷を散歩した時が初めてだったのです。それから後、私がどうやら普通の子供らしい物の感じ方をする様になると、私とミルドレッドとは互に、かけ換えのないものとなり、仮え妹は私の指話を理解出来ず、私も彼女のとりとめのない片言を理解出来はしなくても、いっも二人で手をつないで歩くのにこの上もないの悦びを感ずる様になりました。

第三章　六才の頃の私と、アレキサンダー・グラハム、ベル博士

そうこうしているうちにも、私の自己表現慾は増大する一方だったのです。今まで使っていた僅かの合図では到底間に合わなくなり、自分の意志を取り違えられてはいつもかんしゃくを破裂させるのでした。眼に見えない力が私を押えている様な感じなのです。私はそれをはね返そうとして気狂い染みた努力をしました。

一人で苦しみました。苦しんだり、身もがきしたりしただけで事は解決しません。それでも困難を克服しようとする意志はとても強かったのです。生じっか意志が強かったために絶望に

駈られ、最後にはわっと泣き出すか、くたくたに疲れるまであばれ廻るのがおきまりでした。若し、母が傍にいなかった時などは、今思い出しても涙が出て来そうに、ごくつまらない事からどうしようもなくなってしまい、母の胸を求めて這い廻ったのです。此のかんしゃくは日を逐って、いや時間を逐って激しくなるばかりでした。自分の意志を伝える方法を見つける事が、今や一刻も許さぬ火急の用になったのです。

両親は深く悲しみ、そして当惑しました。私達は聾学校からも、盲学校からも遠く離れた所に住んでいました。そしてタスカンビヤみたいなへんぴな所までわざわざ盲で聾の子供を教えに来てくれる人は見つかりそうにもなかったのです。私の友達も、又、親戚も人々も、私は教育を受けられないものだと思い込んでいました。所が、母は唯一の希望をディッケンズの〃アメリカ手記〃の中に見つけたのです。彼女は、ローラ・ブリッジマンの事を読んで知っており彼女が、盲で聾であるにも関らず教育を受けたのではなかったかと、朧げながら思い出しました。然し、悲しい事には、盲で聾の人を教育する方法を発見したホー博士は既に此の世の人ではなかったのです。その教育法も、博士と共に忘れ去られているに違いありません。若しそうでないとしても、どうしたらアラバマの片田舎の子供がその恩恵に浴し得るというのでしょう。

私が六才の時、父は、絶望と見られた幾人かの盲人の手術に成功したバルティモアの有名な眼科医の事を耳にしました。両親は、私の眼を診て貰うために、私をバルティモアに連れて行く決心をしました。

今でもはっきり覚えていますが、その旅行はとても楽しいものでした。私は汽車の中で沢山の人々と友達になり、或る婦人に貝殻の入った箱を貰いました。父は貝に穴を開けて糸で絡げる様にして、私に恰好の遊び道具を作ってくれました。車掌さんも親切で、彼が廻って来ると私は、切符を調べたり、鋏を入れたりする彼の服の裾をひっぱったりしたのです。彼は鋏を貸してくれたのですが、私はそれで娯しく時をつぶしたのです。というのは坐席の隅に丸くなって、色々の空想に耽りながら厚紙に穴をあけるのです。

又、叔母はタオルで人形を造ってくれました。それは全くおどけた、ぼわぼわして形もはっきりしないものでした。此の即興人形は、眼も口も鼻も耳も何も持っていなかったのです。全く変な事なのですが、何がなくても平気だった私は眼のない事に気がついてびっくりしました。私は熱心に眼をつけてくれと頼んだのですが誰も取り合ってくれません。でも突然私は素晴しい考えを思いつきました。

坐席からすべり下りて、坐席の下に置いてあった玉飾りのついたショールを見つけました。

私は玉を二つ取って、それを人形の眼にしてくれと合図してみせたのです。叔母は私の手を取って自分の眼にさわらせ、これか、と云いますので私はユックリ、ユックリ肯きました。そして玉は眼のあるべき所に縫いつけられたのです。私は嬉しくて、嬉しくて、じっとしていれない位でしたが、いざ眼がついて見ると私は、すぐにその人形に飽きてしまいました。旅行中に私は一度もかんしゃくを起しませんでしたが、それ程に此の旅行は楽しく、そして珍らしい事が沢山あったのです。

バルティモアに着くと、チショルム博士は私達を温く迎えてくれましたが、私の眼だけはどうにも出来ませんでした。それで博士は、私に教育を受けさせる道は残っていると云い、ワシントンの、アレキサンダー・グラハム・ベル博士に相談して見る様に助言してくれたのです。ベル博士だったら、学校の事や先生の事等についてきっと力をかしてくれるだろうとの事でした。チショル氏の助言に従って私達は直ぐに、ベル博士を訪ねてワシントンに向いました。父は度重なる絶望にすっかり力を落していましたが、私は方々を歩き廻る嬉しさにすっかりはしゃいでいました。ベル博士に会って見て私は、子供心にも、その威大な業績と共に人々を魅きつけずにはおかないやさしい人柄にうたれたのです。博士は私を膝の上に抱き上げ、私が珍しそうに時計を見凝めるのに気がついて、気作にそれを鳴らして見せたりしてくれました。然し

此の会見が、闇から光明へ、孤独から、友情、知識、更に愛情への扉が開かれようとは夢にも思わなかったのです。ベル博士は、ホー博士一生の苦労の形晶であるボストンのパーキンス盲学校の経営者であるアナゴス氏に、私の教育をまかせうるに足る有能な先生がいるかどうかを問い合わせて見る様にと、助言してくれました。

父は云われた通り、直ぐに問合せの手紙を書きました。それから三週間と経たぬうちに、アナゴス氏から、先生が見つかったと云う嬉しい返事が届いたのです。然し返事が来たのは一八八六年の夏の事でしたが、ミス・サリヴァンが来たのは翌年の三月でした。

此の様な経緯を経て私はやっと暗黒の世界から脱出して、広々とした光に溢れた平野を眺め渡す事が出来る山の頂きに立つ事が出来たのです。神聖な力が私の魂に触れて心眼を開けてくれたのです。そして私は沢山の素晴しい物を見つけました。更に、〃知は愛なり、光なり、幸福の幻なり。〃という神聖な山の厳かな声を聞いたのです。

第四章　ミス・サリヴァンの出現

私の生涯での一番大切な日は、私の先生、アン・マンスフィールド・サリヴァンが私の所に遣わされた日なのです。その日を境にして私の生活は百八十度の転換をしたのです。それは一八八七年の三月三日で、私が七才になる三カ月前の日でした。

この感激に充ちた日の午後、私は期待に胸を躍らしてポーチに立っていました。私は朧気ながら、母の合図や、家の中のそわそわした空気から何かただならぬ事が起るに違いないと察し玄関から外に出て見たのです。午後の陽射しがすひかづらの繁みに降り注ぎ、そして私の顔に明るく反射していました。私は無意識に、南国の春を迎えてやっと拡り始めたすひかづらの葉をむしっていました。私は、自分の未来がどんな素晴しい物になるのかを知らなかったのです。それを予想するにはあまりに憂欝な、かんしゃくと苛立たしさの日々が続いていました。

読者の方々は、濃い霧が一寸先も見えない程に深くたちこめた日に船に乗った事がありますか。船は全船体を神経にして、水深を計る測鉛を下ろして、海岸に向って進みます。乗客は、胸を押えて、何かしら不慮の事件が起るのではないかと気を揉んでいます。教育を受ける前の私は丁度此の船みたいでした。

私は羅針盤も測索もない、港が何処にあるのかという見当もつかない船だったのです。〃光を授けて〃というのが私の魂の叫びでした。その光が、愛の光が、実に此の日、私の頭上に注

がれたのでした。

私は足音が近づいて来るのを感じ、母だと思って片手を出しました。誰かがその手を握ったと思う瞬間、私は、私の魂の眠を開ける為に――いや、私を愛する為に来て呉れた人の腕に強く抱かれていたのです。

翌る朝先生は、私を自分の部屋に呼び、人形の贈物を下さったのです。それはパーキンス盲学校の小さい盲目の子供達が買い、先生が着物を着せたものでした。もっともその事を知ったのはずっと後の事でした。暫く私はその人形で遊んでいましたが、と突然先生が、私の掌に、〝にんぎょう〟という言葉をゆっくりと書いたのです。私はその意味も知らず、此の遊戯に興味を駈られてその真似をして見ようとしました。やっとの思いでその字を正しく書く事が出来た時の私の無邪気な悦び方と誇らしさを御想像下さい。階下に居た母の所に駆け下りて行くや、私はその掌に〝にんぎょう〟と書きました。然し私は、自分が字を書いている事は勿論、字というものの存在をすら知らず、単に猿の物真似みたいに指を機械的に動かしていたに過ぎなかったのです。

次の日から私は、沢山の字を書く事を覚えました。帽子とか、コップ、坐る、立つ、それに歩く、などという少数の動詞でした。然し、私が、総ての物に名前があるという事を理解する

には、数週間の勉強が必要だったのです。

或る日私が新しい人形で遊んでいると、先生が、大きい、ボロボロの人形をも私の膝に抱かせながら〃にんぎょう〃と書きました。〃にんぎょう〃という言葉が新旧二つの人形に同時に通用するのだという事を理解させる為だったのです。その日の朝、ミス・サリヴァンと私は、〃湯呑み〃と〃みず〃という言葉で大変な苦労をしていたのです。ミス・サリヴァンは〃湯呑み〃という言葉が、湯呑という物であり〃みず〃という言葉が、水という物である事を覚え込ませようとしたのですが、私はどうしても此の二つの物を一緒にして考える事が出来ませんでした。それで彼女は又いつかの良い折を見るために、その朝は、それだけにしたのでした。此の様な経緯があったものだから私は、彼女の執拗さに思わずかっとして、人形を床に投げつけました。人形は砕々にくだけ、私は一種の快感を感じました。悲しみも、後悔も感じませんでした。私はその人形を愛していなかったのです。音のない、そして真暗な私の世界には、同情とか、愛情とかの、心温まる感情は何処を捜してもなかったのです。私は、先生が破片を炉の片偶に掃き寄せるのを感じ、不快の原因が取り除かれたので晴々しました、彼女はその次に私の帽子を持って来ました。私は、温い日光が降り注ぐ外に出られるのだと感ずきました。

此の考えが――若し表現されぬ感情でも〃考え〃という事が出来るならば――私の気持を浮

き浮きさせました。

私達はすいかづらが一面に這い纏って、香わしい匂を漂わしている井戸小屋に真直下りて行きました。誰かが水を汲み上げていました。先生は私の手を樋口にさわらせ、冷い水がどっと溢れ出ると、空いている方の手に〃みず〃と、初めはゆっくり、そして次第に早く書き綴ったのです。私は、じっと突っ立って、私女の指の動きに全神経を集中しました。

突然私は、ぼんやりとではあるが、何か忘れていたものを思い出す様な、言葉という神秘的な扉が開かれた様な気持に打たれたのです。私はその時、此の〃みず〃が、現に自分の手に溢れ出ている、素晴しい、冷いものを意味するのだと悟ったのです。此の生きた言葉が、私の魂を揺り起し、それに光明を、希望を、歓嬉を与え、そして束縛を解きほぐしてくれたのです。でも末だ障碍は克服され切っておりません。それは事実です。然しその第一の関門は突破されたのです。私は、学ぼうとする慾求に追い立てられる様にして井戸小屋から帰りました。総ての物は名前を持っているのです。その名前が新らしい世界を私にひらいて呉れたのです。私達は家に帰りました。ふれて見る家財道具の総てが生命を持っている様に感じられました。何故なら、私は総ての物に、今までとは別の態度で接したからです。

戸口を入ろうとするとき私は、先刻壊した人形の事を思い出しました。手捜りで炉辺に行き

その破片をつぎ合わせて見ようとしたのですが無駄でした、私の眼には涙が溢れ出ました。その時初めて、私は自分のやった事の非道さが解ったのです。そして初めて、真の後悔と、悲しみを感じたのでした。

私はその日沢山の新しい言葉を覚えました。どんな言葉だったか良く覚えていませんが、父、母、妹、先生、などという言葉だけは確かにその日に覚えたものでした。此等の言葉こそ、私の世界を明るく楽しい物にする力を持っているのです。その日の、感激に充ちた一日も終りに近づいた時、私は、自分の部屋に横になり、新しい発見に胸をときめかせて明日という日の早く訪れん事を待ちこがれたのでした。その時の私ほど幸福だった子供を捜し出す事は、殆んど不可能な事なのです。

第五章　私の心の開眼

私は、自分の魂が突然眼を醒した一八八七年の夏に起った様々の事を、眼に見える様に思い出す事が出来ます。私は、夢中になって手摸りして廻り、触れる程のものの名前を、覚えまし

た。沢山の物を知れば知る程、私は自分を取り巻く周囲に対する愛著を深めて行ったのです。

雛菊や金仙花が咲く季節になると、ミス・サリヴァンは私の手を引いて野原を散歩しました。そこには種播きに忙しい人々が点々としていました。テネシイ河の土堤に行き、そこの温い草に腰を下ろして、私は初めて自然の恵について話してもらったのです。私は、太陽や雨が如何にして、美しく、そして栄養のある植物の芽を大地から萠え出させるのか、鳥は如何にして巣を作り、そして次々に繁殖して行くのか、リスや鹿、それにライオンなどは如何にして餌を獲ったり、かくれ場所をみつけたりするのか、などという話でした。知識が豊かになればなる程私の日々は明るく、楽しいものになりました。算数や、幾何を学ぶ前に、まず第一に、香り高い木や、緑色に萠える草や、赤ん坊のぷくぷくした頬に〝美〟があるという事を教わったのです。ミス・サリヴァンは私の眼を、自然界に向けさせ、小鳥や、花も、人間と少しも変らぬ、美しい生命を持ったものだという事を、感じさせようとしたのです。

然し、私は、その頃、自然が常に親切であるとは限らないという経験をしました。或る日先生と私は、長い散歩から家に帰る途中でした。その朝は、とても気持が良かったのですが、私達が帰り途につく頃になると、段々蒸し暑くなり、二度三度と、木陰に休まなければならない程だったのです。最後に休んだのは、家から程遠からぬ、ごつごつした桜の大木の下でした。

その木陰はひんやりと気持よく、その上、木も、とてものぼり易かったので、私は、先生に後押しして貰って、易々と木の枝にまたがる事が出来ました。木の上は実に涼しく、そして気持がよかったものですから、先生は、そこでお弁当を開こうといって、家に弁当を取りに行ったのです。私はその間木の枝にまたがって待つ事にしました。

と、突然、空模様が変り出したのです。暑さが急に引き、湿気を持った風が吹き出しました。私にも、空が真暗になるのが、空気の冷え冷えして来た事から感じられました。その上、地面から何とも云えぬいやな匂が立ち始めたのです。私はその匂に覚えがありました。雷の前ぶれなのです。私は恐ろしくなってただ胸を抱いてふるえているだけでした。全くの一人ぼっちだったのです。大地からさえ離れているのです。何か巨大な、名状し難いものが私の全神経を凍りつかせてしまいました。私は胸を押えてじっと眼をつむっていました。悪感がざわざわと背筋を走ります。私の頼みの綱は、先生が早く帰って来る事です。それはそれとしても、私は、どうにかして木から降りられないものかと一生懸命に努力して見ました。

一瞬息の窒る様な静寂が訪れ、木の葉が悪魔の歯ぎしりの様にざわめき始めました。木はぶるぶるっと身震いし、風はどっとばかりに、死に物狂いになってしがみつく私を吹き落そうとします。枝は左右上下に波打ち始めます。小枝が頬を打ち、髪にもつれかかります。〃ええ飛

び下りよう〃、という考えがちらと頭をかすめましたが、それも恐ろしくて出来ません。それでも私に下枝までずり降りて行きました。枝がびしびしと鞭うちます。私は執拗な、断続する震動を感じました。何かしら重いものが落下して、その地響が私の体にまで反響して来る様な感じなのです。私は最悪の場合を考えました。あ、私、木と運命を共にするんだわ、と観念の眼を閉じました。と、その時、先生が突然私を木から降して呉れたのです。私は両足でしっかりと大地を踏みしめた時思わず泣き出し　、しっかりと先生にしがみつきました。私は、その時新しい教訓を学び取ったのです。

此の事があってから、私は長い間木にのぼりませんでした。木にのぼると考えただけでも思わず毛穴が立つ思いだったのです。それにも拘わらず、私をうまく誘惑してしまったのは、枝一面に花の厚化粧をしたミモザの木でした。或る麗らかな春の日に、私は、あづまやで本を読んでいたのですが、何か、とても甘美な匂が漂って来るのに気がつきました。私は、突然立ち上り殆んど反射的に手を突き出しました。何かしら、春の妖精みたいなものが、すうっと通り過ぎた様な気がしたのです。

〃何だろう〃と私は考えて見ました。そして、すぐに、それがミモザの匂だと気がつき、その木が立っている、道を曲った所の塀の、隅に手捜りで行って見ました。やっぱりそうでし

た。暖い日光を全身に浴び、細い枝がしなだれて草とすれすれになる程、美しい花を誇示していたのです。

私には、此んなにあでやかなものが、此の世に二つとはないだろうと思いました。華美なそして繊細な花は、卑俗なものが近寄ったりすると萎んでしまうほど高貴に見えました。此の世の木、というよりは、楽園の木が移植されたといった方が良いのです。私は、花瓣の緞帳をくぐって幹の傍に立ちました。暫くは決心がつかずに幹に手をおいて立っていましたが、ふらふらっと木に抱きついてのぼり始めました。でも幹が太く、それに木の肌がざらざらして手が痛く、とてものぼり難いのです。それでも私は、木の魅力にそんな事も忘れて、どんどんのぼり、遂に誰かがずっと前に作っておいた、今では木の一部みたいになっている巣床にたどりつきました。私はそこに坐り込むと、時のたつのも忘れて、桃色の雲に包まれた春の妖精みたいな気分になって、夢の様にたのしい空想に耽ったりしながら甘美な春の日を過したのです。

第六章　言葉を知る鍵

私は、既に、総ての言葉を知る鍵を手にし、それを利用する事で夢中になっていました。

何の不自由もない子供は、他の人々の唇から生き生きと飛び出す言葉を、嬉々として、容易に自分のものにしてしまいますが、聾の子供は、言葉を生きたままで捕える事が出来ないのです。散々に苦労して、やっと捕えるものは、言葉の死骸なのです。それにしても、それを理解した時の悦びは、筆舌に尽し得ません。私達は、覚つかない一語一語の綴りから、広々としたシェークスピヤの世界にめざして進んでいました。

最初のうちは、先生が新しい事を話してくれても、私は、ごくつまらない事しか質問できませんでした。私の理解は充分でなく、語調も不足していたのです。でも、知識が豊富となり、語調も豊かになって来るにつれて、私の質問は急調子になりました。私は、もっと深い意味を捜り出そうと、同じ事について何度も何度も繰返して質問したのです。それで時には、ずっと以前に覚えた言葉が、生き生きした映像を伴って蘇って来たりする事もありました。

私は〃愛〃という言葉を初めて質問した時の事をはっきり憶えています。それは、未だあまり沢山の言葉を知らない時の事でした。私が、一番早く咲いた菫を先生に見せた時です。先生は私にキスしょうとしました。でも私はその時まで、母以外の人にキスを許した事がなかったのです。ミス・サリヴァンは、それで私の掌に、〃私、ヘレンを愛す〃と書いたのでした。

〃愛ってどう云う事?〃私は尋ねたのです。彼女は強く私を抱きしめ、〃此処にあるものなのよ〃と云って私の胸を指すのです。私は、その時、彼女の胸の鼓動を感じました。それだけで、彼女の意味するものは全然解りません。何故なら、私の理解は、その時まで、手で実際にさわり得るものに限られていたのですから。

ふと、彼女の手にある菫の香りがしたので、私は半分は言葉で、半分は身振りで〃愛〃って、花が綺麗だという事か、と尋ねました。

〃いいえ〃先生は云うのです。

私は、一層解らなくなってしまいました。と、その時、暖い陽光がぱっと雲間からもれて来たので、

〃あれが愛なの〃と、太陽を指しながら私は尋ねました。

私には、総ての物をすくすくと成長させる太陽こそ一番美しいものだと思われたのです。

然し、ミス・サリヴァンは頭を左右に振ります。私は、更に解らなくなり、又、同時に落胆もしました。私には、先生が愛を指さしてくれないのが不思議でたまりませんでした。

それから二、三日後の或る日、私は、珠数玉を、始めは大きい玉二つ、次は小さい玉三つという風につないで遊んでいました。私は幾度もその順序を間違えます。ミス・サリヴァンは、その度毎に根気よく注意してくれます。そのうちに、こんがらかってどうにもしょうがなくなってしまい、私は、どうしたら順序を直す事が出来るだろう、と一生懸命に考えました。とその時、ミス・サリヴァンが、私の額に〝考えなさい〟と書いたのです。

ぱっと、私は、此の言葉こそ、私の頭の中で起っている思考の行程を云い表わすものなのだなと悟ったのです。此れが、私の抽象概念理解のスタートだったのです。

それに励まされて、私は、膝の上の珠数玉の事も忘れて、〝愛〟の意味を解こうと一心に考えました。その日は、暗雲が低くたれこめ、時々驟雨のある天気でしたが、突然南国特有の強烈な、明るい日光が雲を破って射し輝いたのです。

〝此れが愛じゃないの〟私は此の間の質問を繰返しました。

〝愛ってね。太陽が出る前の雲みたいなものなの。〟彼女は答えました。そして(その時は何の事か解らなかったのですが)、やさしく、嚙んで含める様に説明してくれるのです。〝誰

でも知ってる様に、雲にはさわれませんね。でも雨を降らすのは解るでしょう。そして、暑い暑いと、はあ、はあ、云っている花や、土地が、どんなにほっとするかも解るわね、愛にもやはり触っては見られないの。でも、愛を受けた時の悦びは感じ取れるの。もし愛が此の世になかったら、あなたは幸福にも、楽しくもなれないわ。〟

私は、ぱっと暗い心の中に眼も眩むばかりの巨火が灯された様な気がしました。その時、お互いの心は、眼に見えない糸でしっかりと結びつけつけられ合っている、のだとと悟ったのです。

私を教育するに当って、ミス・サリヴアンは、私を不具の子供として、あつかわない方針を実行しました。ただ一つ違う所は、直接に話すかわりに、私の掌に文字を書くという事だけなのです。若し、私が自分の意志を充分に表現するのに、言葉が足りなかったりすると、彼女はその時だけの事ではなしに、一般的な意味まで説明しながら、その不足した言葉を補ってくれました。

此のやり方は数年続きました。何故なら、聾の子供には、たとえ簡単な日常用語であるとはいえ、その数限りない単語を全部覚えてしまうのは、到底短時日では企て得ない事だからです。耳の聞える子供は、絶え間ない繰り返えしと、それを真似する事に依ってそれらを物にし

ます。

自然に入って来る話が、その心を刺戟します。刺戟された心は自分から面白そうな話を捜します。その話は自然な、自分の頭の中で形成された表現となって口から流れ出るのです。

此れが、聾の子供にはないのです。先生は此の事を念頭に置いて、私に出来るだけ多くの刺戟を与えようとしました。彼女のやり方は、絶え間ない同一語の繰り返しと、それを実際に使える機会を与えるようにする事でした。然し、私が、自分から会話の仲間入りをしようとする気を起すまでは、そして、私がピントの合った応答が出来るようになるまでは、長い長い時が必要だったのです。

聾で盲の子供が、会話の楽しさを自分の物にするのは、実際並大底の事ではありません。此の事は、一般の人々のより深い認識を必要とします。考えても御覧なさい。彼等は、音声の偕調も聞けずに、微妙に意味を左右する抑揚をつけなければならないのです。それに、本当の意味は表情にだけ現われる事が少くないというのに、それをすら見る事が出来ないのです。

第七章　実生活に即した教育

私が次に克服しなければならなかった事は、読む、という事でした。私が二、三の言葉を綴れる様になると先生は、厚紙の紙片に凸版された単語カードを与えてくれました。私は、すぐに、此の凸版された言葉が、それぞれ、物や、その行動や、又その性質を意味するのだと悟りました。私は、単語を並べて文章を作る盤を持っていましたが、その上に直接文章を並べる前に、実際の、物、でやっていました。例えば、〝にんぎょう〟〝ある〟〝の上に〟〝ベッド〟というカードを実際の、物、の上にのせるのです。そして、人形をベッドの上に置き、それに〝ベッド〟〝の上に〟〝ある〟と続けるのです。此の様にして、文章を、実際の、物、に即して覚え込んで行ったのです。

或る日ミス・サリヴァンの指示通りに私は、〝しょうじょ〟というカードをエプロンにとめて衣裳棚の中に入り、その中で〝いしょうだな〟〝の中に〟〝いる〟というカードを並べました。此れこそ素晴らしい思いつきだったのです。私は夢中になって幾時間も、此の文章遊びを

しました。そして仕舞いには、部屋中の家具が全部文章通りに並べ変えられる始末でした。凸版のカードから、本へはほんの一またぎでした。私は〃初めて本を読む人のために〃という本を手にして、自分の知っている言葉を捜しました。知っている言葉を見つけた時のスリルは、かくれんぼで、かくれている子を見つけた時のそれに似ています。

私は、全然正規の教育を受けていませんでした。どんなに熱心に勉強している時でも、それは勉強というより遊戯といった方が正しいのです。ミス・サリヴァンは、総ての物を、美しい話や、詩の様に説明してくれました。私が悦ぶように、彼女もすっかり子供になり切っていたのです。大部分の子供が思い出すだけでもちぢみ上ってしまう。文法や、算数なども、私に取っては楽しくてたまらものだったのです。

ミス・サリヴァンが私に示して呉れた思いやりと、同情の深さは、到底筆舌には尽し得ません。多分それは、長い間盲の人々に接している間に培われたものと思います。その上彼女は素晴しい描写力を持っていました。彼女は私に興味の湧かないものを押しつけたりしませんでした。一昨日教えた事を覚えているかと試したりなどしなかった。無味乾燥な科学なども、少しずつ、そして、私の記憶に残らざるを得ない様に、身近かな例を引いて説明して呉れたのです。

私達は、家の中よりも、陽射しの暖い戸外を選んで勉強しました。私の幼時の勉学の記憶には野葡萄の匂と混り合った、快い松脂の匂が纒りついているのです。ゆりのきの爽かな木陰に坐って、私は、総ての物が学ぶ価値を持っていることを学びました。〃美しが、私に総ての存在意議を悟らせた〃のです。山川草木、花鳥風月、総てが私の勉強を助けたのです。ぎゃあぎゃあ云う蛙、うっかり、掌に握られている事を忘れて鳴きだすこほろぎ、それにきりぎりす、うぶ毛も可愛いひよこ。さんしゅゆの花、牧場の菫、若葉の果樹。私は、割れた殼からのぞいている棉の実にさわったり、そのけば立った種をつまんでみたり、風にそよぐ麦の穂や木の葉の音楽に聞き入ったり、又元気に跳び廻る小馬の背中をなでたりしながら沢山の事を学びました。その中でも小馬は大の気に入りで、その口にクローバーを押し込んでやったりして一緒にふざけ廻ったのです。ああ今でも、その、クローバーの匂が、小馬の鼻息が、私の頬に感じられる様に思います。

時々私は、まだ明けやらぬ、しっとりと露に湿った庭に、ベッドから抜け出しました。バラの花瓣のビロードの様な触感や、朝風にゆらぐ百合のみやびやかな姿を想像して見る悦びは、私にだけ許されたものなのです。たまには花の中で眠っている羽虫を捕える事もありました。寝込みを襲われた此のお寝坊さんの、柔い、かすかな羽根の音も忘れられない物なのです。

もう一つのお気に入りの場所は、七月早々に熟れた実を実らせる果樹園でした。大きい、うぶ毛の桃が手の届く所に成っていましたし、爽やかな風がさっと吹くと、リンゴがころころと足もとに転げ落ちたりするのです。ああ何て楽しい日々だったでしょう。エプロン一杯に果物を拾い、太陽の余熱で温いすべすべしたリンゴに頬ずりしながら、スキップで家に跳び戻るのです。

私達の散歩のコースは、南北戦争の時に兵隊を渡した事がある、テネシィ河畔の、今は崩れ落ちてしまっているケラー渡場への道でした。私達はそこで遊戯混りの地理の勉強をしたりして楽しく時を過しました。小石でダムを築いたり、島や湖を作ったり、それに河を流し込んだりしながらの勉強は、勉強というにはあまり楽し過ぎるものでした。私は、ミス・サリヴアンの噴火する山や、火山灰に埋められてしまった都市、流れる氷の河などの種々の不思議に充ちた丸い、大きな地球についての話に耳を傾けました。彼女は、私が山裾や、谷にさわったり、うねり曲った河のコースを指でたどって見たり出来る様に、粘土の地勢模型を造ってくれました。私はそれにはとても悦ばされましたが、地球を経度や緯度、それに両極に分けたりするのにはとても混乱させせられ、そして苛立たせられました。今でも、本物の糸や、極を表わす蜜柑のへたは、余り実際に近いので、温度帯というと、すぐにみかんを思い出す程なのです。若し

うまく仕掛けたら、北極に白熊が本当にのぼるんだと、私を信じさせる事も出来るでしょう。
それでも算数だけはどうにも好きになれない課目でした。初めから興味がなかったのです。ミス・サリヴアンは、珠数玉を糸につないだ物で数える事を教えようとしました。そして、寄せ算や引き算はキンダーガーデンストローで習いました。私は、五回も六回も、此の退窟な珠の遊戯を繰り返す事に我慢出来ませんでした。ただ早く此の勉強が終る事だけを待ち望み、終るか終らぬかのうちに、遊び友達を求めて外に飛び出してしまったのです。
此れと同じ様な、まだるっこい方法で、動物学と植物学を習いました。
或る時、今その名前は思い出せませんが、一人の紳士が、私に、小さい軟体動物の綺麗に色彩られたものや、小鳥の爪の蹟がついている砂岩、それに美しい羊歯が浮彫になっている物などの、化石のコレクションを贈ってくれました。此れこそが、私にノアの洪水以前の世界の扉を開いてくれる鍵だったのです。
私は恐しさにぶるぶる震えながら、間の抜けた、舌を噛む様な名前のついた太古の昔に森林を抜渉しては巨大な樹木を折りしだいて食物にしたり、気味の悪い古い湖沼に埋れて死んで行ったりした凄い巨獣の話に耳を傾けました。長い間此の気味の悪い怪物は夢の中に現われ、陽光やバラ、それに暢かな私の小馬の嘶きが聞える、生き生きとした昼の世界と恐ろしい対称を

なす暗い夜の世界を形造ったのです。

その次の時には、美しい貝のコレクションを贈って貰い、私は、小さい軟体動物が自分の棲家の螺管をどういう風に作るのか、又どういう風に、微風も吹かぬ静かな夜に鸚鵡貝が、その真珠製の舟に乗ってインド洋の青海原を渡るのかという様な事をいちいち驚いたり感心したりして学びました。激浪が逆巻く中で、水熄が太平洋特有の美しい珊瑚礁を築き上げる経過や、多く有孔虫が万里の長城の様な白亜質の丘を作る過程など、海中生物の生活や習性について、多くの面白い事を学んだ夜、先生は、ベッドに入ってから〃寝室に入った有孔虫〃という本を読んでくれました。そして、軟体動物が貝を作る経過は、人間精神の成長を象徴していると教えてくれました。丁度有孔虫の、不思議な働きを持った外套膜が海水と一緒に飲み込んだ砂礫を、分泌物で包んで遂には美しい真珠を造る様に、私達の知識も同じ過程を経て思想という真珠になるというのです。

その次に私の学んだ事は植物の成長についてでした。私達は、百合の鉢を買って来て、日当りのより窓辺に置いて観察を続けたのです。数日を出ないうちに、緑のポツンとした芽が、大きくふくれ始めました。美しい女の人の指みたいな小さい葉は、はにかんでいる様におずおずと、少しずつ開きます。所が一旦開いたとなると、一定な形を守りながらもぐんぐんと大きく

なります。次から次へと大きくなる芽の中には必ず一際目立って大きい、そして美しいのがあって、柔い絹を纒った様に、自分は神のお恵めを特別に多く享けた百合の女王様だといわんばかりに、ポツと、外覆を破って頭をもたげるのです。そして、その近くには、彼女よりは内気な妹達がきまり悪そうに、緑の帽子を覆ったままでいるのでした。そして、たちまちのうちにその百合は美しい花とむせ返る様な匂を漂わせて、見事に成長したのです。

十一匹のおたまじゃくしが、水草の一杯に浮んでガラス鉢に入れられて、窓辺を飾った事がありました。私は、それから一つの大切な事を学び取りました。鉢の中に手を突込んでおたまじゃくしが指の間を、ヒラヒラと泳ぎ廻るのを感ずるのはとても面白い事でした。所が、その中に一匹大胆なのが居て、或る日、大冒険を企てて、ガラス鉢の縁を跳り越えたのです。それは床に落ちました。私には死んだとしか思えませんでした。生きているという唯一の証拠は、尾がピクピクと動いている事だけでした。所が水の中に帰してやると、すぐに底の方にもぐり込んで、嬉しくてたまらないという様に盛んに泳ぎ廻るのです。それは大冒険をしてより広い世界を見ました。然し、それはガラスの家の、釣浮草の下で生活し、遂には蛙に成長する事に、何の不満も感じなかったのです。後で、そのおたまじゃくしは、庭の隅にある、木の葉が覆いかぶさっている池に移りましたが、そこで風変りな、恋の唄を歌って夏の夜を楽しんでい

ました。

此の様にして、私は実生活に即した学問をしました。私は、最初のうち、単なる可能性の芽にすぎなかったのですが、それを成長させ、見事に開花させたのは、実に、私の先生だったのです。彼女が現われて初めて、私を取り巻くものが深い意味を持ち、生き生きと生活するものになったのです。彼女は総ての物が秘めている美を指摘する機会を逸しませんでした。折に触れ、事につけて、私の生活を意義深いものにしようと心を砕きました。

私の教育の第一年目を、こんなに美しいものにし得たのは、先生の天稟であり、敏感な感受性であり、更に、愛情の表現の巧さだったのです。そして、それに相応した効果をおさめる事が出来たのは、彼女の機会をつかむ巧みさのおかげした。彼女は、子供の心というものは、そこここに、花や繁み、それにぽっかり浮んだ雲などを映して、教育という石塊の河床をさやさやと流れる小川みたいなものだと云う事を知っていたのです。彼女の目的は、その心の小川を、静かな河面に、大きくうねる山陵や、きらきらとゆらぐ大樹の影、それに広大な青空などをも、可憐な花を映すと同じ様に容易に反射させ得る程に広く、悠々たる流れにする事でした。それまでになるには、ある時は溪谷のせせらぎとなり、又ある時は日の目も見えない地下の流れとなったりしなければならない事を知っていたのです。

どんな無能な先生でも、生徒を教室に連れて行く事は出来ます。然し、習得させる事も、という訳には行きません。それには、生徒に、自分達はのびのびとやって行けるのだと思わせなければなりません。生徒達が、健気にも、よし勉強しようと決心した時には既に、勉学に一番大切な落着いた気分を失ってしまっているのです。

私の先生は、彼女から離れた私、を考えて見る事も出来ない位に常に身近かに感じられるのです。私が持ち得た、美しいものへの強い愛着と、深い理解は、彼女の眼を通じて獲得されたものです。私の才能も、希望も悦びも、総て彼女の慈しみの賜なのです。

第八章　先生の贈物は可愛い歌手

ミス・サリヴアンがタスカンビヤに来た最初の年のクリスマスは全くの大事件でした。家中の人々は私をびっくりさせようと大童わでしたが、それよりも大変だったのは、先生と私が家中の人々の度胆を抜くためにやった準備でした。贈物はなんだろうと云う期待は又、何よりも私の心を浮き浮きさせました。総ての人々が、私の好奇心を煽ろうと、ヒントや、半分だけの

文章を私の掌に書いて、明されぬ思わせぶりをしたのです。ミス・サリヴァンはそれを推察する事で、どんなやり方よりも効果的な言葉の勉強をしました。毎夜毎夜、私達は、チロチロと焚火の燃える炉端に坐って、此のあてごっこをしたのです。それはクリスマスが近づくにつれて段々面白味を加えて行きました。

クリスマス・イヴに、タスカンビヤ小学校の子供達が、クリスマス・ツリーを作って、私を招待してくれました。教室の真中に、やわらかな光につつまれて、素晴らしくも不思議な果物をつけた美しい木が立っていました。私は有頂点になって木の廻りを跳び廻りました。その上、一人一人の子供達が私に贈物をしてくれるというのです。何よりも嬉しかったのは、此の木を作ってくれた親切な大人達が、私の方からも贈物をしても良いと云ってくれた時でした。皆に贈物を渡しながらも私は、自分が貰ったものは何だろうと楽しみでたまりませんでした。そして遂々、もう本当のクリスマスを待つばかりとなるともう我慢が出来なくなって、それを開いて見ました。然し、それは思わせぶりなヒント程のものではなかったのです。でも先生は私が受け取るべきものは、品物ではなくて、その気持なのだと教えてくれました。それで私は、開けて見るのは学校で貰ったものだけにして、残りは次の朝まで待つ事にしたのです。

その夜、私はストッキングを吊してベッドに入ると、サンタ、クロースがどんな事をするの

か見ようと眠った振りをしていました。が、知らず知らずのうちに、新しい人形と白熊を抱いて眠りにおち入ってしまいました。でも次の朝、〃クリスマスお芽出度う〃といって家中の人々を起して廻ったのは私でした。私は、ストッキングの中だけならいざ知らず、テーブルの上にも、椅子の上にも、戸口の所にも、果ては窓辺にも、あっとびっくりするものを見つけたのです。包装紙につゝまれたクリスマス・プレゼントにつまづかないでは一歩も歩けなかったのです。そして、私の先生が、カナリヤを贈ってくれた時、私の悦びは絶頂に達したのでした。

此の可愛いらしいテイムは、とてもよく馴れていて、私の指にちょんと止っては、掌から砂糖さくらんぼをついばむ程だったのです。

ミス・サリヴァンは、此の新しいお気に入りの世話の仕方を落度なく教えて呉れました。毎朝食事の後に水を浴びさしたり、籠を掃除したり、又、餌入れに新らしい穀物と、井戸小屋から汲んで来た水を入れてやったり、はこべの茎の止り木を取り換えてやつりしました。

或る日の朝私は、水を浴びさせる為にの水を汲みに行く間、籠を窓辺においていたのです。帰って来て戸を開けた途端、大きい猫が、さっと身をかすめて逃げ出したのです。初めはどんな事が起ったのか解りませんでしたが、籠に手を突込んでみてはっとしました。

テイムの柔い羽根に触れもしなければ、その小さい爪が、私の指をつかもうともしないので

す。私はもう二度と、私の可愛い歌手を見る事が出来なくなったのです。

第九章　ボストン旅行

次に取り上げなければならない事は、一八八八年の五月のボストンへの旅行だと思います。つい昨日の事の様に、大童わの準備、劇的な出発、そして到着した時の事などをはっきりと思い出します。二年前のバルテイモアへのと違って何と素晴らしい旅行だった事でしょうか。私は、もう、カヤカヤと騒ぎ廻って車輛中の人々の注目をひく様な子供ではなかったのです。私は、ミス・サリヴァンが説明してくれる窓外の景色に注意して静かに坐っていました。綺麗なテネシイ河、広い棉畠、丘、森、それに停車毎に甘いお菓子や炒蜀黍を売ってる、汽車が動き出すと手を振って左様ならするニグロの事など。私の向いの席には真新しいギンガムの服と、けば立ったむぎわら帽子を覆った、大きい、ボロボロの人形、ナンシイが珠数玉の眼を見開いて坐っていました。ミス・サリヴァンの話がとだえた時は、ナンシイを抱き上げたり、寝かしつけたりして、少しも退屈しませんでした。

ナンシイの事を話す機会はもうありそうにも思えないですから、序に、ボストンに着いてから彼女の身の上に起った悲しい事件をお話しします。彼女は、一度も好だと云った事もない、パイを押しつけられて口のまわりを真黒にされていたのでパーキンス盲学校の洗濯婦が彼女に風呂を使わしてやろうと、そうと持ち出したのです。然し、それは、哀れなナンシイに取っては過ぎた好意でした。風呂から上って来た彼女は、見るかげもないボロボロの綿くずに変り果て、眼だけが非難する様に私を見凝めるのでした。

待ちに待ったボストン停車場に列車がすべり込んだ時の印象は、丁度、おとぎの国についた時の様なものでした。〃昔、昔、〃というのは、今、で、〃ある所に〃は、此処、今私が立って居る所だったのです。

パーキンス盲学校につくと私は、すぐに盲の小供達と仲良しになりました。その子供達が手指文字を知っているのに私は何とも云われぬ悦びを感じました。自分達の言葉で話すって事は何と素晴しい事なんでしょう。それまで私は、通訳をつけて話す外国人みたいなものだったのです。此の、ローラ・ブリッジマンが教育を受けた学校に、私は祖国を見つけ得たのです。私の新しい友達が盲だという事に気がついたのは余程経ってからでした。私は、自分が盲だという事は知っていたのですが、私の周囲に集って、楽しく、明るく遊戯の仲間になってくれる思

いやり深い子供達までが、盲だなんてとても信ずる事が出来ませんでした。私は、その子供達が、会話の時には、私の手を自分達の手に重ね、本を読む時には指を使うのだという事に気がつきびっくりし、又、悲しく思いました。というのは、如何に私が自分の人一倍不自由な体の事を知っていたとしても、此の新しい友達からも同情されなければならないというのは、あまりに非道すぎる事だったのです。それでも私は、周囲の明るい雰囲気に融け込んで楽しい日々を過す事が出来ました。

盲の子供達と過した一日は、新しい環境を、とても居心地の良いものにして呉れました。そして私は、時の経つのも忘れて、屈托のない毎日を送ったのです。ボストンこそは、私に取って唯一の世界だったのです。

ボストン滞在中に、私達は、バンカー・ヒル（独立戦争の史蹟――訳者）を訪れて。初めての歴史勉強をしました。私達が現に立っている場所で戦った勇敢な人々の話は、私を非常に昂奮させました。私は、石段を数えながら記念碑にのぼり、兵士たちが此処によじのぼっては敵弾に射ち落されたのではなかったろうか、などと考えて見たのです。

次の日、私達は船でプレイマウス港に行きました。それは、最初の海上の旅行だったのです。それにしても、何と活気と躍動に充ちた旅行だった事でしょう。でも私は、機関のブルブ

ルという音を雷と間違えて泣き出してしまったのです。だって、雨が降って折角の遠足が出来なくなったと思ったんですもの……。私はアメリカに最初に渡って来た、巡礼達が上陸した岩に一番興味を魅かれました。それにさわって見れた為に、巡礼達が味った労苦や、彼等の行った偉大な事を切実に感ずる事が出来たのです。私は巡礼記念館で貰ったプレイマウスの岩を、その後も時々取り出して見ては、その形をさぐって見たり、割れ目や、一六二〇年と刻み込まれた数字を指でたどって見たりして、巡礼者に関する様々のエピソードを思い出すのでした。

私の無垢な想像力は、彼等の高貴な魂と共に無限に翼を伸ばす事が出来ました。私は、どんなに彼等が新しい土地を開拓するのに大きな希望と情熱を注いだか、そして人格的には度量の大きい人々だったろうかと考えて見ました。そして、後で、彼等がやった、偏見に充ちた迫害を知るに至った時は、たとえ、彼等の此の美しい国土を築くに当って示めした勇気と精力には心を打たれながらも、やはり失望を感ぜざるを得ませんでした。

ボストンで得た沢山の友達の中には、ウィリアム・エンディゴット氏と、そのお嬢さんが居ります。此の人達の親切は生涯忘れられないものです。或る日、私達は、ビーバリイ農場の美しい家に、彼等を訪ねました。楽しかったバラの花園の散歩、誰よりも早く私達を迎えに飛び出して来た、大きい犬のレオと、小さい、毛むくじゃらなフリッツ、私の手に鼻を押しつけて

砂糖を食べた農場中で一番足の速い、馬の〝ニムロッド〟の事などは今でも鮮かに思い出されます。又、初めて砂遊びをした浜辺の事も忘れられません。その砂浜は、ブルスターの、貝殻や昆布などの混った大粒のザラザラした砂とは違って、サラサラした小粒のものでした。エンディゴット氏は、ボストンからヨーロッパに向う船の事について話してくれました。彼にはその後も幾度か会いましたが、いつも変らぬ親切な友達でした。私に取って、〝ボストン〟が、〝親切な人々の町〟であるのは、彼がいるからなのです。

第十章　夏休みの生々しい印象

パーキンス盲学校が夏休みになる一寸前に、私達は親しい友達であるポップキンス夫人と共に、ゴット岬のブルスターで夏を過す事にしました。私は、夏休みになるのが待ち遠しくてたまりませんでした。

その夏中で一番生ま生ましい印象を残したのは、大洋です。私は内陸地方で成長しましたので海を見た事がなかったのです。でも、〝私達の世界〟という厚い本で海ってどんなものか読

んだ事だけはありました。海の描写は私をとても魅きつけ、男性的な海に接し、怒濤の吼り狂う音を聞いて見たいものだと長い間思っていたのです。そして、今や、それが実現されようというのです。

私は、海水着に着換えると、恐れ気もなく冷い水に飛び込みました。大きい波の上下するのが感じられます。水の浮力は、私の心にまで作用しました。と、突然、私は、岩に足をぶっつけ、そのひょうしにがぶっと頭から波を覆りました。私は夢中になって何かつかもうとしましたが、空しく、ほんだわらを顔に叩きつけられるだけです。波は私をなぶりものにしている様に思われました。あっちに押しやったり、此っちにひきもどしたり、手荒に小突き廻すのです。懐しい、どっしりした大地は私の足もとになく、生命も、空気も、あたたかさも、愛情も総てのものを閉め出してしまう冷酷な水だけがあったのです。

でも遂に、海は、此の新しい玩具に飽きた様に、私を砂浜に打ち上げました。と、先生が、ひしと抱きしめてくれたのです。その温い抱擁の、何と安堵感に充ちたものだったものだった事でしょうか。やっと物をいえる位に元気を恢復した私が云う事は、〃一体、誰が海に塩を入れたの〃でした。

此の時に受けた恐怖感が薄らぐと私は、海水着を着て岩に腰を下ろし、全身に飛沫を浴びて

波に足をなぶらせるのがとてもよい気持でした。私は、重々しい波がぐつと押し寄せる毎に、さざれ石がごろごろ転がるのを感じました。波が押し寄せて来る度に、海岸線は弛み、空気は悲鳴をあげます。巨濤は、突進に反動をつける様に一旦ぐつと身を低くするのです。波が打ちかかる度に私は、全身を硬ばらせ、蛇に見込まれた蛙の様に岩にしがみつきました。波打際に長く坐つている事はとても出来ませんでした。でも貝殻やさざれ石、小さい昆虫が巣をつけているほんだわら、それに強い磯の香、新鮮な、身も心も伸び伸びして来る様な新鮮な空気はすつかり私の心を奪つてしまいました。或る日、ミス・サリヴアンに教えられて、日向の浅瀬でたわむれている不思議なものを見つけました。それは私が初めて見る、大きな甲蟹だつたのです。私はそれを家に持つて行く途中、何て不思議な奴なんだろうと思いました。そして、とても面白い遊び友達になれるなと思い、両手でしつかりつかんで道を急ぎましたが、此れは全くの大仕事だつたのです。何故なら、それはとても重く、半哩の道を運んで行くには、全力を出さなければならなかつたのですよ。私は誰にも此の甲蟹を渡そうとしませんでしたが、ミス・サリヴアンに説得されて、井戸端の、誰にも取られる心配のない水槽に入れる事にしました。でも次の朝、その水槽に行つて見ると、甲蟹の姿は何処にもありません。そして誰も知らないというのです。本当にがつかりしてしまいました。然し日が経つにつれて、私は、あの甲

蟹を、海からつかまえて来た事は思いやりのある事でも、賢い事でもない事に気がつき、あの甲蟹は、きっと海に帰ったんだろうと、一人慰めていました

第十一章　山荘の思い出

私は、沢山の楽しい思い出をみやげに、秋になってから家に帰りました。私は、北部での滞在を思い出す度に、その豊かで、変化に富んだ生活に驚きを感ずるのです。それが契機になって私の眼前に、新らしく美しい世界がひらけたのです。見るもの聞くものが、総て、新しい知識の対象だったのでした。私は、自分を総ての物の中に没入させ、一瞬たりともじっている時がありませんでした。私は全生涯のあっという間に過ぎてしまう、生命の短い昆虫よりも忙しかったのです。私は、私の掌に書き綴って話してくれる人の総てに合い、その人達の暖い同情に、私の気持は伸び伸びと総てのものを容け入れたのです。

私と、他の人々の間に横たわる不毛の土地は、見事なバラを咲かせたのです。

私は、その秋を、家族と一緒に、タスカンビヤから十四哩も離れた山荘で過しました。その

山荘は、近くに、今では廃坑になった石炭石の石切り場があった所から、フアーン、（羊歯）クウオリ（石切り場）と呼ばれていました。

岩の間から湧き出す、三本のせせらぎが、岩にせかれたり、地下にもぐったりして、嬉々と流れていました。ひらけた所は羊歯が一杯に生い繁って、石炭石の岩肌を完全に覆いかくしていました。他の所は木々が密生し、巨大な樫や、松の柱みたいな幹をした常緑木があり、その枝からは、常春藤や寄生木、それに柿のはなづさが垂れ下り、その芳香は、気を遠くさせる様にあたり一辺に漂っていました。そして、そこ、ここに麝香葡萄やスカパーナスグの蔓が、枝から枝へと這い廻り、四六時中蝶や、羽虫の群れ成すあづまやを作っていたのです。此の様な緑の洞窟の中で道に迷い、夕暮れ時に地面から立ちのぼる清々しい、甘美な匂を嗅ぐのはとても気持の良い事でした。

私達の山荘は、樫や松の疎林の中に立っていて、そこからの見晴しはとても素晴しいのです。その構造は、小さい部屋が屋根のない細長い広間の両側に並んだものでした。その廻りには広い廻廊がありました。私達は大抵その廻廊で、勉強や、食事や、遊戯をしたりして時を過しました。裏口の所には大きい胡桃の木が立っていて、それを取りまくように階段が地面に降りていました。表の方は、すぐ近く、手がとどく位の所まで木々が生えていて、風に弛む枝の

様子や、秋風に舞い落ちる木の葉の気配も感じ取れたのです。
ファーン・クリオリには大勢の人々が訪ねて来ました。夜になると男の人達は焚火を囲んでトランプをしたり、お話をしたり、ゲームをして時を過しました。彼等は、鴨や七面鳥を撃ち落したとか、元気の良い鱒を釣ったとか、とても悧好な狐をつかまえたとか、袋鼠の裏をかいてやったとか、足の速い鹿に追いついたとか、云う、水鳥や、魚や、四つ足相手の武勇談を後から後から出しました。

仕舞には、私など、ライオンや、虎、熊などの猛獣も、到底此の頭の良い猟師たちに合っては手も足も出ないと思い込んだ程でした。

〃明日は猟だ〃というのが、此の愉快な人々の、おやすみなさいでした。男の人達は、私達の部屋の外の広間に寝たのですが、私は間に合わせのベッドに横になった、此の猟師や犬達の安らかないびきを聞く事が出来ました。

夜明け方に、私はコーヒーの匂や、銃のガチャ、ガチャ云う音、それに、〃さあ今日は大猟だぞ〃と叫び合いながら、ゴトゴトと歩き廻る足音に眠りを破られました。彼等が町から乗って来て、立木につないでいた馬の地面を蹴る音も聞えました。馬達は一晩中そこにつながれて、夜があけるのを待ちこがれていたのです。遂に男の人達は馬に乗りました。古い歌に云

う様に、くつわをならし、鞭で風を切り、犬に導かれて駒は行く、だったのです。やっほう、やっほうと元気良く、此の天狗猟師達は山に入って行ったのです。

太陽が高くなった頃私達は、丸焼きの準備をしました。地面深く掘られた穴に火が燃され、その上に鉄の細い棒が渡され、それにさされた肉がジュージューと脂をたらしながら焼かれるのです。火の廻りには、長い枝を持ったニグロが坐って蝿を追いました。肉の焼ける匂は、食卓の用意も出来ないうちに私の食慾をそそるのでした。

食事の用意の忙しさが頂点に達した頃に、猟の一行が三三、五五、はあはあ云いながら帰って来ました。男達は上気してくたくたに疲れ、馬は口から泡き吹き出し、犬はあえぎあえぎ、……。然し、獲物は何一つなかったのです。でも、大きい鹿が目の前を走り去ったとか、もう少しで兎の足をつかむ所だったとか、口だけは元気を失ってませんでした。結局、犬がどんなに獲物を追い出しても、銃の狙がどんなに正確につけられても、いざ引き金を引こうとなると獲物の姿は消えてなくなるのでした。

でも彼等はたちまち元気を取り戻し、鹿の肉ではなしに、小牛や豚などの、より足のおそい動物の肉が並べられた食卓についたのでした。

或る年の夏、私は、私の小馬をファーン・クウオリに連れて行きました。私はその馬に、ブ

ラック・ビューティ（黒美人）という名をつけていました。というのは、それが、私の読んだ本に出て来る同じ名前の馬と、艶々した黒い毛並から、額の白い星に到るまで実によく似ていたのです。私は、此の馬に乗って楽しい時を過しました。時々、天気の良い日、先生が手綱を取ってくれるのです。小馬は気儘にぶらぶらと、細道の両側に生えた草や、木の葉をむしったりして歩いたり止ったりしました。

馬に乗りたいと思わない時には、朝食が済むと、森の中に分け入って、牛や馬などが通った跡以外は、道らしい道もない、灌木や蔓草の中でわざと道に迷うのです。時にはどうしても廻り道をしなければならない様な繁みに出合う事もありました。そして家に帰る時になると私達の腕には、抱え切れない程の、月桂樹や、あきのきりんそうや、羊歯、それに南部特有の眼もさめんばかりの水草が抱えられているのでした。

時々、私は、ミルドレッドや、幼い従妹を連れて柿を拾いに行きました。それを食べる訳ではないのですが、その香が好きでしたし、木の葉や草の中から捜し出す事が又何とも云われぬ楽しみでした。栗拾いにも行きました。私は幼い子供達に、栗の毬を開けてやったり、ヒッコリー・ナットや、ワルナットの殻を割ってやったのです。あゝあの大きい、綺麗なワルナット。

山の麓を鉄道が通ってましたので、私達は汽車が走り去るのを飽かず見凝めました。時には汽笛に音に、あわてて駈け出す事もありました。ミルドレッドは、私に真顔で、いつか、牛だったか馬だったかが線路に迷い込んだ事があると話してくれました。話は別ですが約一哩離れた所の深い谷間に鉄橋がかかっていました。

それはとても渡り難いのです。枕木と枕木の間が広く、それに幅が狭いものですから、まるでナイフの上を歩いている様なのです。それを渡った事はなかったのですけれど、或る日、ミス・サリヴァンと、ミルドレッド、それに私は、森の中で道に迷ってしまい、全く途方に暮れてしまったのです。と、突然ミルドレッドが小さい指を上げて、ああ鉄橋が見えるわ、と叫びました。別の道を取ろうとすればとれない事もなかったのですが、もう暗くなり始めていましたし、鉄橋は近道だったのです。私は鉄橋をつまさきでさぐりながら渡らなければなりませんでしたが、恐いとは少しも思いませんでした。うまく渡り了えようとした時、突然遠くの方から、ポッポッと云う汽車の音が聞え出し、ミルドレッドが〝汽車だわ〟と叫んだのです。私達は夢中で支脚にしがみつきました。あつい蒸気が顔にあたり、灰や煙で息がつまりそうになりました。汽車が轟然と渡る間、支脚はぶるぶると震え、私達は谷底に払い落されてしまうのではないかと生きた心地もしませんでした。やっと汽車が通り過ぎた時程ほっとした事はありま

せんでした。再び橋の上にかえった時はもうすっかり暗くなっていました。帰って見るとガランとして人っ子一人居りません。皆私達を捜しに出かけたのでした。

第十二章　ボストンの冬

次の年から私は、殆んど毎年の冬をボストンで過しました。その間に池は氷に閉ざされ、野は雪に覆われたニューイングランドの村を訪れたりしました。今まで見た事もなかった雪の秘庫に入る事が出来たのはその時の事です。私は、雪の神秘的な手が、木や籔の葉を、ちぢれ切った二三枚の葉だけ残してすっかり剝ぎ取っているのに気がついた時の驚きを、まざまざと思い浮べます。小鳥は姿を消し、空の巣には雪がつまっていました。野も山も冬でした。大地は寒むそうに身をちぢめ、木の精は地中深くもぐり込んで冬眠しているのです。生命の潮は総て引き去り太陽が顔を出している時でも、

血潮は若さを失いて古び、寒々としなびて彼女は起き上れり、
いまわの微光、地と海にさしければ……

だったのです。
枯れた木や籔は氷柱の森に変貌していました。と、或る日、吹雪の前ぶれである厳しい寒波が襲って来ました。私達は初めて見る雪を掌に受け止めようとして外に出ました。幾時間も幾時間も、雪の花瓣は、ぼうと曇った中天から、静かに、柔らかに大地へ舞い下り続け、見渡す限りは、たちまち平な銀世界に変ったのです。雪の夜は静かに帳を下ろしました、翌朝眼を醒して見ると、総ての道路は姿を消し、境界標一本見えない雪野原に枯木だけがポツンポツンと立っていました。
夜になると北東の風が激しくなり、雪は物凄い吹雪となって所嫌わず吹き込みました。勢いよく燃える焚火を囲んで私達は、外界からの音信も絶たれ、雪の荒野に取り残されている事を忘れて、楽しいお話や遊戯に夜の更けるのも気附きませんでした。然し、皆がベッドに入った頃から吹雪は一層激しさを加え、私はとても不安になりました。風が野山を駈け廻る度に、垂木はたわみ、周囲の木々は窓を打つのでした。
吹雪は三日目で鎮りました。太陽が厚い雲を破って広漠たる銀波の平原に輝きました。高い山や、幻想的な形をしたピラミッド、通り抜ける事も出来ない吹き溜りが、そこここに出来ていました。吹き溜りには細い道路が跨り抜かれ、私はマントと頭布を覆って外に出て見まし

た。寒気がピリット頬を刺します。

跨り抜き道や吹きさらしの道を通って私は、やっと野原を見渡す事が出来る松林の所につきました。松の木は大理石色のフライズ織りを着た人の様に黙然と突っ立ち、松葉の匂もありませんでした。陽の光はさんさんと降り注ぎ、私達がゆする木からは、小枝がダイヤモンドの驟雨となって頭上に落ちて来ます。実にまぶしくてそのきらめきは、私の眼を覆っている黒ベールをとおす位だったのです。

日が経つにつれて吹き溜りは段々低くなって行きましたが、又すぐに吹雪がやって来るので時々は樹氷が融けたり、葦ややぶも姿を現わす事があったのですが、湖だけは、太陽が輝いても固く閉ざされたままでした。

その冬で一番楽しかった事は、トボガン乗りでした。湖岸の所々に、高く盛り上った丘があり、その坂を滑り下りるのです。私達がトボガンに乗ります。すると男の子がぐっと後押ししてくれます。ふき溜を突っ切り、洞になった所を飛び越え、湖に真直突っ込んで行くのです。何て楽しく、スリルに富んだ遊びだった事でしょうか。野性的な歓喜に、私達は大地からの束縛を断ち切って、自由に大空を駈け廻る空気の仲間入りをするのです。

第十三章　話すことが実現された感激

私が話す事を学んだのは一八九〇年の春でした。私の声を出そうとする本能は、とても強かったのです。私は、片手を喉にあて、他の手で唇をおさえて声を出して見たりしていたのです。私に取って音を出すものは、何でも楽しいのでした。猫がゴロゴロ云ったり、犬がワンワン云ったりするのにさわって見ては面白がっていました。又、唄っている人の喉にさわって見るのも好きでしたし、弾奏されているピアノにさわってみるのも楽しい事でした。視覚と聴覚を失う前の私は話す事を覚えるのがとても早かったのですが、耳が聞えなくなってからは話す事も出来なくなったのです。私は一日中、母の膝に抱かれてその顔に手をあてていました。彼女の唇の動きがとても面白かったのです。その真似をして、何の意味にもならない片言を云って見たりしました。私の友達は良く、私が普通の人の様に笑ったり泣いたりすると云います。そして、病気になった当座は、言葉とも取れる沢山の音を出していたのだそうです。というのは、音を出すという事が私の発音機関の自然な欲求だったからです。然し、〃みず〃という言

葉だけは可成り明瞭に発音し続けました。〃み〃、〃み〃と発音したのです。その発音をしなくなったのは字を憶えてからの事でした。
私は余程早くから、他の人々が私とは違った方法で意志の交換をしている事に気がついていました。そして聾の宿命を意識しない儘に、自分の意志表現法に不満を感じていました。此の不満が私を苛立たせました。そしてあせればあせる程、混乱に陥るだけだったのです。
何か他人に伝える必要のある事が頭に浮ぶ度に私は、生え揃わない翼で嵐を突っ切ろうとする小鳥の様にもがきました。私はどんな困難を克服してでも、唇と声で自分の意志を表現出来る様にしようとする気持を捨てなかったのです。友達は、絶望を味わせたくない事から此の考えに反対しました。然し私は承服しなかったのです。それから間もなく、永年の望みが実現される機会に恵まれたのです。というのは、ラグンヒルト・カッタの話を聞いたのでした。
一八九〇年に、ローラ・ブリッジマンの先生の一人で、ノルウェイからスウェーデンを旅行していた、ラムソン夫人が私の所に尋ねて来て、ラングヒルト・カッタという、彼女が実際に話す事を教えて来たノルウェイ少女の事を話してくれたのです。ラムソン夫人の話が終らないうちに、私はじっとしておれなくなってしまいました。私は、是が非でも、話す事を学ぶんだと、決心しました。私の夢は、先生が意見を聞いたり、手助けをして貰ったりする為に、ホレ

ース・マン聾学校の校長先生である、ミス・サラ・フーラを連れて来てくれて、いよいよ実現の段取りとなったのです。此の、美しい、思いやりのある先生は一切を引き受けてくれる事になりました。それで私達は、一八九〇年の三月二十六日から勉強を始めたのでした。

　ミス・フーラの方法というのは次の様なものでした。先ず私の手を彼女の顔に軽くおかせ、彼女が発音する時の舌と唇の位置を私に解らせるのです。私はその運動を細大もらさず熱心に真似しました。そして一時間後には、M・P・A・S・T・Iという六つの音を覚えたのです。ミス・フーラは全部で十一教えてくれました。〃今日は暖い〃と初めて纒ったことを話した時の感激は終生忘ようとしても忘れられるものではありません。無論それは正確でも、流暢でもなかったでしょう。でも、人間の話しには相違なかったのです。私の魂は、新しい味方を得た悦びに、広い知識と、浄い信仰を獲得しようと奮い立ったのです。

　聞いた事もない言葉を話せる様になる為に、永遠の寂漠が支配する灰色の監獄から抜け出そうともがいた聾の子供なら誰でも、此の大きな感激を味わっています。此の様な子供達だけが私の熱心な人形や、石、木、小鳥、そして動物相手の一人芝居の意味を理解出来るのです。更に、私の呼び声に、ミルドレッドが駈けて来たり、私の犬が云うなりになった時の悦びも、その子供達以外には想像もつかない事なのです。私はもう、通訳なしに話す事が出きるのです。

自由に、伸び伸びと。指なんか使わなくても良いのです。折角の良い考えを、一文の値うちもない苦しみで窒息させたりしなくてもよいのです。
でも、私がすぐに話せる様になつたと考えてはいけません。私は音標文字を覚えたに過ぎないのです。ミス・フーラや、ミス・サリヴアンは、理解出来ても他の人々には百に一つも理解出来なかつたのです。又、音標文字を覚えると、後は一人でやつたと考えてもいけません。ミス・サリヴアンの天稟に、弛まざる忍耐、それに献身的な愛情がなかつたならば決して流暢に話せる様にはなれなかつたでしよう。それに私も、最も親しい人々に解つて貰う為にさえ、日も夜も休みなく練習を続けたのです。固々の音を正確に発音するためには、又それを結び合せて一つの意味を持たせるには、ミス・サリヴアンの指導なしには考える事も出来なかつた事です。今でも彼女は、私が発音をまちがえると必ず訂正してくれます。
聾教育者なら誰でも此の苦労を知つています。私は、先生の云つてる事を指先にたよつて理解しなければなりませんでした。喉の震え、口の動き方、顔の表情も手の触感だけで知らなければならないのですが、時々は間違う事があつたのです。その様な時は、一つの言葉や文句を正しく発音出来るまで何時間でも繰り返さなければならなかつたのです。私の勉強は一にも二にも実験だつたのです。勇気を挫かれるのはいつもの事でした。然し、次の瞬間には、もうす

ぐ話せる様になるのだという考えと、その時の家族の人々の悦びに溢れた顔を想像して、猛然と奮い立つのでした。〝可愛い妹が私の云う事が解る様になるんだ〟という考えが総ての障碍を打ち砕いてくれました。私は、〝もう唖じゃない、唖じゃないわ。〟と独り言を云って頑張りました。母に話しかけて、その返事を唇から感じ取る事が出来ると思うと落胆している暇などありませんでした。又、話す方が、指で書くよりずっと楽なのにびっくりしました。そしてすぐと手指文字を使わなくなってしまいました。でもミス・サリヴァンや友達は、返事をする時、唇を読ませるよりも速くて正確ですのでそれを使い続けています。

此処で私は、私達の事をあまり良く知らない人々がいつも驚歎する手指文字について説明したいと思います。私に本を読んだり、話をしたりする人は、聾人一般に広く使われている手指文字を使います。私は、自分の手を、話す人の手の上に軽くのせます。手の位置は、本を読む時の、本の位置位の所におくのです。私は、読書する時誰も一語一語意識して読まないようにばらばらな単語などは感じません。絶え間ない練習で指の働きは驚くべきものになっているのです。私の友達には熟練したタイピストの様に早く書ける人も居ます。そうなると、もう、紙に書くのと全く同じ事なのです。

とうとう、私が自由に話せる様になった時私は、家に飛んで帰りたい程でした。遂に夢にま

で描いた場面が実現されるのです。私は家に帰る汽車の中でも、ずっと、ミス・サリヴァンを相手に話し続けました。単なるおしゃべりではありません。最後まで悪い所を改めようと努力しての事だったのです。そうしているうちに汽車はタスカンビヤ停車場に着きました。そこには家中の人々が出迎えに来ていました。その時の、母が感激に言葉もなく、ただ私の云う言葉に一々肯いては抱きしめた事、幼いミルドレッドが私の手にぶら下ってキスしたり、跳び廻ったりした事、父の無言で、満足した様にうなづいている姿などを思い出すと、私の眼は自然に涙で一杯になるのです。〃総ての丘も、山も、どっと汝の前に進み出て歌い、野の木々は総て拍手を送らん〃というイザヤの予言が、私の身の上に実現されたのです。

第十四章　一八九二年の冬の暗雲（霜の王様事件）

一八九二年の冬、かがやかしい私の少女時代の日に、にわかに暗雲があらわれました。私はとても憂欝で、懐疑的になり、不安と苦慮のうちに毎日を過しました。本を読む気にもなれませんでした。今でも、その時の事を考えるととてもいやな気持になります。〃霜の王様〃とい

う、私の短いお話が事の起りなのです。私はその時事件を考え直してみるつもりで細大もらさず公平に書いて見るつもりですが、やはり、私達の方が正しかった事になってしまうのです。
　私がそれを書いたのは、話す事を覚えた年の秋の事でした。その年は例年より長く山荘に残っていたのです。その時に、ミス・サリヴァンは、秋の終り頃の草叢の美しさについて話して呉れました。その話が、ずっと以前に読んだ話を蘇らせたものと思われます。然し私はその時子供が良く云う〃お話を作っている〃と思い込んでいたのです。私は良い構想を忘れてしまわぬうちに、というので一生懸命に机にしがみつきました。文章はすらすらと出て来ます。私は文章を書く悦びにひたっていました。言葉や幻想がどんどん湧き出て、次から次へとブレイル式点字板に書き下されました。然し、言葉や幻想が此んなに調子よく出て来るのは、それが私自身の頭の中で創り出されたものではなしに、何処からかまぎれ込んで来たものが、そのまま、流れ出ているのだという証拠だったのです。その頃私は、手当り次第に乱読し、読んだものはそのまま
うのみにしていたのです。その結果、今でも、自分の頭の中にあるものが何処まで自分独自のものであり、何処からが借り物であるかさっぱり見当がつかない始末なのです。此の傾向は、私の概念受容が総て他の人々の感覚を通して行われるという事でも強められているのです。

書き終ると私は、それを先生に聞いて貰いました。その時の、発音を正されたり、単語の誤用を指適されたりして読むのをさまたげられて感じたじれったさを、今でもはっきり思い出します。夕食の時私は家中の人々に聞いて貰いました。皆はあまりの出来栄えに感心して、何かの焼直しではないか、と尋ねるのでした。私は此れにはびっくりしてしまいました。何故なら私は、そんな本を読んだ覚えなんか全然なかったのです。私は〃違うわ、私が作ったのよ。アナゴスさんの為に書いたのよ〃と大声で云いました。

私は、それを清書すると、彼の誕生日のお祝に送ったのです。題は、〃秋の木の葉〃だったのですが、〃霜の王様〃の方が良いと云われて、それに変えました。殆んど宙を歩いている様な気持で、郵便局に持って行きました。

此の、誕生日のお祝のために非道い目にあわなければならないとは夢にも思っていなかったのです。

アナゴス氏は〃霜の王様〃をとても悦び、それを、パーキンス盲学校の機関紙に発表しました。此の時が私の幸福の絶頂だったのです。然し次の瞬間私は、その絶頂からもんどり打って転げ落ちなければならなかったのです。というのは、私の短いボストン滞在中に、〃霜の王様〃によく似た〃森の妖精〃というお話が、私の生れる以前に〃ハーディとその友達〃という

本に載せられている事が発見されたのです。二つの話は着想から用語まであまりによく似ていましたので、ミス・サリヴァンが、私にそのお話を読んでくれた事があるのは疑う余地のない事になりました。そして、私のお話は、剽竊、という事になるのです。此の事を私に理解させるのは難しい事でした。そして、納得した時の私のショックと落胆は眼も覆いたくなるものだったのです。その時の悩み様といったらありませんでした。私は自己嫌悪をしだすと共に、総ての物へ懐疑の眼を向ける様になりました。所で、それにしても、どうしてこんな事が起り得たのでしょうか。私は一生懸命に、〝霜の王様〟を書く前に読んだ、森に関する話を思い出して見ようとしました。然し思い出したのは、ごくありふれた話の〝森太郎〟と〝森のきまぐれ坊や〟という児童詩だけだったのです。そして此の二つの話を使わなかった事は明かな事でした。

困った事になったとは思いながらも、アナゴス氏は初めのうち私を信じていてくれました。彼は非常に親切に私を慰めていたのですが、ふとした事から疑念が頭を擡げたのです。

私は、彼に気を使わせたくなかった為に、冬間近かに迫っていたワシントン祭にしょんぼりした顔を見せたくなかった為に、成可く快活に振舞おうとしました。その日、私は、私達盲の子供達に贈られたお面を覆って、シアレス神に仮相する事になっていたのです。明るい衣裳を

づけ、鮮かな黄葉の冠を覆り、足もとには種々の果物をつまれた外面的には華かな私の心は、段々複雑になって来る此の問題の暗雲に閉ざされていたのです。お祭の前の夜に、盲学校の一人の先生が霜の王様の事について私に色々の事を尋ねるのでした。そこで私は、ミス・サリヴァンに、〃森太郎〃が素晴しい活躍をするお話を読んでもらった事があると答えました。と、その先生は、これを、ミス・キャンビイの〃森の妖精〃を読んだ事があるという告白を意味するものと取ったのでした。私は、そういう意味でないと主張したのでしたが、彼女の考えはそのまゝ、アナゴス氏に伝えられたのです。

一旦そうと信じてしまったアナゴス氏は、私の涙ながらの抗議を冷くはねつけました。彼はミス・サリヴァンと私が、他人の名誉をぬすみとろうと企んでやった事だと考えてしまったのです。私達は、その学校の先生と職員で構成されている委員会の席に呼びつけられました。そして、ミス・サリヴァンは私を教育する資格がないと云われたのです。私は、誘導尋問としか思われない、しつこい尋問の矢を注びせられました。その質問の一つ一つに、彼等の心の奥深く根を下している疑いと、今までは温かった思いやりが、急に冷い軽蔑になっている事を感じました。胸は早鐘の様に鼓動し、やっとの思いで口を開いても、出て来るのは一口云いだけでした。やっとその部屋を出ても良いと云われた時は、すっかり頭が混乱し、私の先生のやさし

い抱擁も、友達の讃辞も、全然受け容れる事が出来なかったのです。

その夜、ベッドにもぐり込んだ私は、心ゆくまで、泣けるだけ泣きました。その夜はとても寒かったので、〝あたし、泣きながら死んでしまうんだわ〟と思いました。と、此の考えが昂奮を鎮めるのに役立ったのです。そしてぐっすり眠ってしまいました。若し、此の事件が、もっと大きくなってから起ったとしたら、私は二度と明い子供に返る事が出来ない程の打撃を受けたと思うのです、然し幸にも、忘却の天使が、心の隅々まで清掃し、その埃塵を何処とも知れぬ所に運び去ってくれたのです。

ミス・サリヴァンは〝森の妖精〟についても、それが載った本の事も何一つ知りませんでした。彼女は、アレキサンダー・グラハム・ベル博士と一緒に、此の事件を注意深く解明して見ようとしました。そして遂に、ソフィヤ・C・ホップキンス夫人が、ミス・キャンビイの〝ハーディとその友達〟という本を、私達が彼女と一緒に、ブルースターの海岸で過した一八八八年の夏に所持していた事が解ったのです。それが解った時ホップキンス夫人は、その本を見つける事は出来ませんでした。然し、彼女は、ミス・サリヴァンが留守だった時に、私を退屈させまいとして沢山の本を読んで聞かしてやった、というのでした。然し私も、彼女も、〝森の妖精〟を読んだ憶えはありませんでした。でも、その中に、〝ハーデイとその友達〟は確か

にあったのです。彼女は、その本が見えなくなった理由を、此の間家を売り、それと一緒に沢山の古本を処理したので、その中に、ハーデイとその友達も入っていたのでしょうと説明るすのでした。

その時読んで貰った話はそんなに面白いとも思いませんでした。然し、何の楽しみもない子供には、単なる字の型だけでも深い印象を残すものなのです。私は、その本を読んでもらった時の事など何一つ覚えていなかったのですが、話の筋だけは、ミス・サリヴアンが帰って来たら話してやろうと一心に覚えたらしいのです。そしてその表現や単語は、深く、私の脳裡に刻み込まれたのです。

ミス・サリヴアンが帰って来た時、私は、彼女に〃森の妖精〃の話をしませんでした。それは多分、彼女がすぐに〃小公子、フォントローイ〃を読んで呉れたからだと思います。このお話は私を夢中にしてしまいました。そして何もかも忘れてしまったのです。然し、ミス・キャビイのお話を読んだ事は事実です。然しそれはあまり完全に忘れられてしまったので、いざ蘇る時には、まるで別の子供の頭の中に蘇る様な具合になったのです。

面喰った事に、私は沢山の同情や、励しの手紙を受け取ったのでした。たった一人の例外を除いては、誰も私を見捨てなかったのです。

ミス・キャンビイは、自筆で〃いつかあなたは、沢山の楽しい、そして為になるお話を、あなた自身の頭から生み出すでしょう〃という親切な手紙を下さいました。然し、此の思いやりのある予言は未だ実現されていないのです。

此の事件の後長い間私は、自分の書いた物が、真に自分のものではないのではなかろうか、という考えに悩まされました。手紙などを書きながら――母に書いている時でさえ――今書いている文章は、何時か本で読んだ事があるのじゃないかという疑問に打たれ、それを打ち消す為に、何度も書き直す事があったのです。若し、ミス・サリヴァンの一貫した激励がなかったら、私は文章を書く事を全くあきらめていたかも知れません。

私は、〃森の妖精〃を読んでからずっと、ミス・キャンビイの表現をかりて手紙を書いている事に気がつきました。一八九一年七月二十九日附けの、アナゴス氏に宛てた手紙などには、単語から文句からすっかり同じ所があるのです。その様な例は、〃霜の王様〃では枚挙にいとまもありません。此等の事からも彼女の文章は余程深く印象されていたものと思われます。私は、ミス・サリヴァンに、独白みたいな調子で〃え、その美しさは、夏の去った悲しさを賠ってあまりあるのです〃などと、〃森の妖精〃そのままの表現を使って、黄葉の美しさを描写したりしていたのです。

此の様な、自分が興味を感じたものに、自己を全く同化させて、それを自分自身のものの様に平気で使うというやり方は、既に、私の幼時の手紙や作文に出ています。ギリシャやローマの古都を描写し文章には、やはり、或る有名な本からその表現を借りて来ています。或る時私はアナゴス氏が古代ギリシャやローマに強い憧憬を持っている事を知りました。そこで私は、それまで読んだ総ての本から、それに関する文章や詩を集めて作文を書きました。アナゴス氏はそれを批評して〝この文章はとても詩的〟だと云ってくれたのです。然し、私には、どうして彼が、その作文が、聾で盲の十一才の子供に書けると思ったかは理解出来ません。とは云っても私の短い作文には全然取る所がないという意味ではないのです。それは、少くとも、私が、素晴しい文章や詩に強く魅きつけられていた証拠にはなるのですから。

此の種の、幼時の作文は、頭脳の柔軟体操なのです。私は、総ての初心者の様に、同化作用と、模倣に依って知識を蓄えたのです。本の中で発見された素適な文章や、美しい詩句は、意識的に、又は無意識に私の心に記録されたのです。ステーブンソンが云った様に、若い人は素晴しいと思ったものを、本能的に模倣するものなのです。そしてその模倣こそ、素晴しい変貌を逐げさせるのです。偉大な、といわれている人々も、例外なく、此の様な過程を経て来ているのです。此の過程を経てこそ、無数の言葉を自由自在に操る事が出来るのです。

私は、未だ此の過程を卒業していないらしいのです。私は、自分自身のものと、他人から借りて来たものとの間に境界線を引けないのです。何故なら、たとえ、それがもとは他人のものであつたとしても、今では私の一部となつているのです。ですから、私の文章は例外なく、七八才の子供の手になる補綴細工みたいなものです。その補綴細工には、確かに、目もさめるようなビロードや、絹の布も縫い合まれています。所が、目につくのは、見るのもいやな真黒な色や灰色の布なのです。同じ様に、私の文章も、偉大な文豪の華麗な表現や、深遠な意味を持つた単語が象眼されています。然し矢張り、全体の印象は、未熟な、訥々たるものである事に変りないのです。文章を書く事が非常に難しいのは、私達が良い可減に考えた、四離滅裂たる考えを、合理的な、教養ある人々が使う言葉で表現しようとするからではないでしょうか。文章を書く事は、支那人をびつくりさせる位に難しい事なのです。私達は、頭の中に表現さるべきものを持つているのです。然しいざ表現しようとなつて、言葉を持つて来て見ると、その言葉が大げさすぎたり、軽るすぎたりするのです。然し、立派な文章を書いている人々が居るのです。誰でも、劣等感を感じて悦んでいる人は居りません。それで私達は、此の困難な事に、雄々しく挑戦を続けるのです。

〃独創的になるには、その様に生れつく以外に方法がない〃と、ステーブンソンは云ってい

ます。私は、その様には生れついては居りません。然し、私は、自分の借り物だらけの文章がいつかは独創的なものになる事を望んでいるのです。その様になって初めて、私の思想や体験も独創的な姿を与えられるのです。

私は未来を信じ、希望を失わず、〃霜の王様〃の苦い経験が無駄に終らぬ様に努力を続けているのです。

此の意味で、此の事件は私に良い結果をもたらしました。唯一つ、私が残念に思う事は、最良の友アナゴス氏を失ってしまった事です。

〃我が成長記〃が、婦人家庭誌上に連載され始めると、アナゴス氏は、メシイ氏宛の手紙で〃霜の王様〃事件当時、彼は、私に罪がないと信じていたという事を言明しました。彼の云う所では、私が呼び出された委員会は、四人の盲の人と、四人の普通の人で構成されていて、そのうちの四人は私の無罪を主張したのだそうです。そして、アナゴス氏もその中に入っていたというのです。

然し、その時の事情が、又、アナゴス氏の意見がどの様であったにしろ、私が入って行った、嘗ては和気と愛情に充ちていた部屋には、私を疑っていた人々ばかり居ましたし、悪意と憎悪に充ちた雰囲気が漂っていたのです。実に、此の雰囲気から、私の苦悩は産み出された

のです。初めの二年間、彼は、ミス・サリヴァンと私が潔白である事を信じていたのです。然し、その後、彼は、此の有難い信念を撤回してしまったのです。その理由は私にも解りません。どういう方法で調査が続けられたのかも解らないのです。又、その委員会にはどんな人々が出席していたかも知りません。私はとても昂奮し、恐れ戦いていて、何が何だかさっぱり解らなかったのです。何んな事を質問されているのか、自分がどういう風に答えているのかさえ解らなかったのです。

私は、此の〝霜の王様〟事件が、私の半生と、教育の上に重大な意義を持っていると思ったから取り上げたのです。誤解を受けるといけませんので、自己弁護をしようとも、反対側に立つた人々を責めようともしませんでした。ただ、私の眼に映じたまゝに書いて見ただけなのです。

第十五章　一八九三年の夏・万国博覧会見学

〝霜の王様〟事件の年は、夏も冬も、家族と一緒にアラバマで過しました。ボストンからの

帰郷は、楽しい思い出となっています。そこでは、総てのものが芽を吹いたり花をつけたりしていました。幸福でした。霜の王様は忘れられました。

私が、自分の生活の記録を書き始めたのは、〃霜の王様〃を書いてから丁度一年経った、黄葉が地面に厚く散り敷かれ、庭の隅のあづまやをおおった麝香の匂がする葡萄の葉が、陽光を浴びて黄金褐色に輝き出す頃でした。

私は、依然として、自分の書く文章に神経質な注意を払い続けていました。自分の書いている文章を、自分のものと認め得ぬ悩みが私を苦めました。此の悩みを知っているのは、ミス・サリヴァンだけでした。私は極度に〃霜の王様〃について話すのを避けていました。

偶然その話が出たりすると私は、先生の手に〃私の作品か、はっきり解らないわ〃と書くのだったのです。又或る時は、文章を書く筆を休めて、〃若し、此の事がすっかり、誰かに書かれた事があるとしたら〃と独り言を云ったりする事もあったのです。そんな考えに取りつかれると、もう筆は一語を書く事も肯じません。

此の種の不安は、今でも時々頭を擡げるのです。ミス・サリヴァンは、あらん限りの智慧をしぼって私を慰めたり激励したりしました。然し、私が経験したばかりの恐い事件は、此の頃になってやっとその意味が判りかけて来た大きな打撃を私の心に加えたのです。

ミス・サリヴァンが、〝青年の友〟に、私の生活についての短い文章を寄稿する様に、私を説き伏せたのも、私に自信を快復させるためだったのです。私はその時十二歳でした。私がそれを書き上げる事が出来たのも、それを書き上げる事に依って良い結果を得る事が出来ると予想していたからだったのです。そうでなかったらきっと失敗していたに違いありません。

私は、おづおづと、然し、固い決心を胸に抱いて書きました。傍には、私が、此の試練を克服出来たら、きっと、再び自信を取り戻せると確信していた先生がつきっきりでした。

〝霜の王様〟事件迄の私は、ほんの、無邪気な子供だったのですが、此の事件を境にして、私の眼は内面に向けられる様になり、眼に見えないものを凝視する様になったのです。私は、実行に依って得た澄み切った心と、実生活へのより正しい認識に依って、此の事件の陰影から逃れ出したのです。

一八九三年の重要な出来事はクリーヴランド大統領の就任式の時のワシントン訪問と、ナイヤガラ旅行、それに万国博覧会を見た事でした。此の様な忙しい生活の為に、私の学勉はついとだえ勝ちで、時には何週間もそっちのけにされていたのです。そう云う訳で、それに首尾一貫した説明を附す事は出来そうにもありません。

私達は、一八九三年の三月にナイヤガラに行きました。アメリカ大瀑布の傍に立ち、大気が

戦き、大地が震動するのを感じた時の、私の昂奮は到底説明しきれるものではありません。私が、ナイヤガラの美しさと規模の大きさに度肝を抜かれたといっても、本当にしない人々が居ります。その人々は〝此の大景観や、大音楽があなたに解るというんですか、あなたには滝壺に逆巻く浪も見えないし、地を揺るがす大音響も聞えないじゃないですか。〟と、尋ねるのです。常識的にはその通りでしょう。でも、私にもし、此の大瀑布の魅力を説明する事が出来ないとしても、それは、地の人々に、愛とか、宗教とかの定義が出来ないのと同じ事なのです。

一八九三年の夏、ミス・サリヴァンと私は、アレキサンダー・グラハム・ベル博士に連れられて万国博覧会に行きました。私は、此の、子供の思いつきの様な、奇想天外なもよおし物を回想する度に、とても複雑な感激を新たにするのです。私達は想像の翼に乗って世界一週旅行をしました。発明の粋や、工業技術の結晶など、世界の隅々から集められた沢山のものを見て廻ったのです。国や人種を異にした人々の活動の結晶が、実際に私の指先に触れたのです。

私は、ミッドウエイ・プレイザンスが好きでした。そこはまるで、アラビヤン・ナイトの世界なのです。高貴なもの、珍奇なものに充ちていました。私が本で読んだ象の神や、シバの神や、不思議な物市場などを中心にした印度もありました。又、回教寺院や、長い隊商の列が行

進するピラミッドの国エジプトも、水の都ヴェニスもあったのです。ヴェニスで、私達は、夕映えに市街や泉が赤く染まる頃に舟遊びをしました。又、小船の群から少し離れた所にもやってあった海賊船にも乗って見ました。私は以前にボストンで軍艦に乗って見た事があったのですが、その時の事も思い出しながら、海の男の、頭脳と、筋肉と、自尊心だけを頼りにした生活を想像して見たのです。

此の船の近くに、サンタ・マリヤ号の復製があったので私は、それを丁寧に見学しました。その船の船長は、コロンブスの船室に案内し、机の上にある砂時計を見せてくれました。此の小さい道具が、私に深い感銘を与えたのです。何故なら、私は、それを見凝めながら、自分を暗殺しようと謀む、捨て鉢な乗組員に囲まれて、どんなにかやる瀬ない気持で、あの偉大な冒険王が、一粒一粒落ち続ける砂を凝視しただろうかと、考えたからです。

博覧会の主宰者であるヒジンボタム氏は、特別の好意で展覧物にさわって見る事を許してくれましたので、私は、ペルーの宝物を掠奪したピザロの様な飽く事を知らぬ熱烈な欲望に駈られて、私の指先から、博覧会の精華を吸収しました。此の、西部に急造された都市は、触って見る事の出来る万華鏡だったのです。面白くないものとて一つもなかったのですが、その中でも一番私を魅きつけられたのはフランスの青銅彫刻でした。その肉附けは実に真に迫ってい

て、此れを造った芸術家は、地上世界の素材を、神の国の霊魂にもりあげたのだと考えたのです。

希望峰会場では、ダイヤモンドの採掘過程を見学しました。さわっても良いと許しが出る度に、実際に動いている機械を手捜りして、計量や、砕石、それに研磨の過程を学んだのです。又私は、洗滌機の所に落ちていたダイヤモンドを見つけて、それこそ、アメリカ大陸で発見された、最初のダイヤだ、とひやかされたりしました。

ベル博士は、片時も傍を離れず、興味に溢れたものを、いやが上にも魅力のあるものにする独創的な説明をしてくれました。電気の家、では、電話や、オート・ホーン、それに蓄音機など、様々の発見品を見学しました。彼は、信じられない程に遠い所に、あっという間に通信出来る事だの、プロメシュースの様に、空から火を持って来る事などを理解させてくれました。人類学会場にも行って見ました。私は、大自然の、文字をも知らぬ子供である（と私はその時に、触って見ながら考えたのですが）太古人の単純な記念物であり、又同時に、その時代の唯一の生活記録に相当する石製の、古代メキシコ遺物や、さわって見るのも恐い様なエジプトのミイラが、王様や、聖者の業々しい記念物が地に埋れてしまっているのに、いつまでも生き残る事に心をうたれました。此等のものから、私は、本では学び得ない貴重な事を沢山知ったの

です。

此の博覧会での見聞は私の語調を非常に豊富にし、僅か三週間の間に、妖精譚や玩具の頑世ない子供の世界から、実際の、力動的な進展を続ける大人の世界へと私は、長足の進歩を示したのです。

第十六章　ラテン語を学ぶ

一八九三年の十月迄の私の勉強は、散漫で、止りとめのないものでした。ギリシャやローマ、それにアメリカの歴史などを読んでいました。又その頃、私は凸版になったフランス語文法の本を持っていました。それで少しの言葉を覚えると、難しい文法的知識や、学術語を使わなくても良い様な、短い、簡単な文章を考えて見るのが好きでした。私は、新しい単語の意味や発音も独力でものにしようとつとめました。云うまでもなく、此れは無鉄砲な事です。でもそれは、雨降りの日の退屈凌ぎになりましたし、ラ・フォンテーヌの〝寓話集〟や〝気に合わぬ医療〟、それに〝アタリ〟などを、隅から隅までとは云いませんが、楽しんで読める位の進

歩をもたらしました。

私は又、多くの時間をかけて、自分の話しを直そうとしました。大声で本を読んだり、そらんじている詩の一節などを吟誦して、ミス・サリヴァンに聞いて貰うのです。彼女は発音を直したり、音節の切り方や、その調へ方を教えてくれました。此の様な事は続けていましたが、私が、時間を定めた、特定の方針のもとに勉強を始めたのは、一八九三年の十月、万国博覧会での感激と疲れが漸く落着いた頃からだったのです。

ミス・サリヴァンと私は、その時、ウイリアム・ウェード氏を訪ねて、ヘンシルバニヤのハルトに居ました。その近所に住んでいたアイアン氏は、ラテン語学者だったので、彼の指導を受けて勉強する事になったのです。彼は、稀に見る、博識と温情の人でした。彼に教ったのは、主に、ラテン語文法でしたが、一番苦が手の算数にも手をかしてくれました。アイアン氏は、私と一緒に、テニソンの〃イン・メモリアム〃を読んでくれました。私は、その前にも沢山の本を読んだ事はあったのですが、考えながら読んだのは初めてでした。私はその時初めて著者についての知識や、その文体に留意する事を知ったのです。

ラテン語文法には、最初のうち気が向きませんでした。意味の解っている言葉を、やれ名詞だとか、所有格だとか、単数だとか、その性はなんだとか云って小突き廻すのは時間の空費の

様に思えたのです。若し、私が、小猫のタアベイをよりよく知る為だと云って、門は背髄動物、目は哺乳類、綱は四足獣、科は猫、属は猫、個はタアベイなどと考えたらどんな事になるのでしょうか。然し、やってみているうちに、段々興味が出て来て、その美しさが、私を魅きつける様になって来ました。私はラテン語の文章を読みながら、自分の知っている言葉を拾ったり、解らぬ言葉の意味を想像してみたりしたのです。此の暇つぶしはとても楽しいものでした。

私には、自分が手に入れた新鮮な言葉で書かれた美しい幻想の世界を、夢心地で逍遙する程楽しい事は考えられないのです。ミス・サリヴァンは、私の傍に坐って、アイアン氏の言葉を細大もらさず私の掌に書き綴ったり、新しい言葉を辞書で調べたりしてくれました。アラバマの家に帰る頃には、シーザーの〃ガリヤ戦記〃を読む程に進歩していました。

第十七章　独語仏語を学ぶ

一八九四年の夏に、私に、チョトーカで開らかれた全米聾者会話教育促進大会に出席しまし

た。そこで私は、ニューヨークの、ハムソン聾学校に入学する事になったのです。そして、その年の十月に、ミス・サリヴァンに伴われて同地に向いました。その学校は、特に選ばれた聾の人が、最高の会話能力を身につけるために建てられた学校なのです。会話の外に、私は在学中の二年間算数と地理、それにドイツ語とフランス語を勉強しました。

私のドイツ語の先生であるミス・トーミイは手指文字を知っていましたので、私はドイツ語の単語を覚えると、機会ある毎にドイツ語で話しかけました。それで、二、三カ月後には、彼女の云う事が大低解るまでになりました。そして一年も経たないうちに、私は〃ウイルヘルム・テル〃をとても感激して読んだのです。実際、ドイツ語の進歩は驚くべきものがありました。フランス語はそう云う訳には行きませんでした。私のフランス語の先生は、オリヴイエ夫人と云うフランス人でしたが、彼女は手指文字を知らなかったので、全部会話に頼らなければならなかったのです。彼女の唇が何を云ってるかは殆んど解りませんでした。ドイツ語に見せた進歩は望むべくもなかったのですが、それでも〃気に合わぬ医療〃を読み返す事が出来ました。それも、大変面白かったのですが、ウイルヘルム・テルで味った感激とはくらべものにもなりませんでした。

読唇術と、会話は、先生も私も、短時日のうちにたやすく身につけられるとは思ってません

でした。でも、普通の人々と同じ程度に話せる様になるのは私の夢であり、先生も私も、此の夢はきっと実現出来るものと確信していたのです。それに関わらず、いくら一生懸命にやっても、はかばかしい進歩は見られませんでした。今考えて見ると、望みがあまりに大きすぎたらしいのです。それだけあせりも人一倍だったのです。話は飛びますが、算数が、苦手な事にはその時も変りありませんでした。私は、合理という広々とした大河をさけて、あちこちの細流ばかりを手捜りして廻って、私だけでなしに、先生をも困らせていました。手捜りをあきらめたと思うと、すぐに結論に飛びついたりするのです。生来の頭の悪さと、方法のまずさの為に私はいらない苦労をしなければなりませんでした。

此の様に、つまづきは沢山ありましたが、他の課目ではいつも新しい興味を持って勉強する事が出来ました。その中でも地理学が好きでした。旧約聖書に、美しく描写されている天の四隅から吹き起る風の様子、地の果てから立ち昇る湿気の事、岩を侵蝕して流れる河、木の根でひっくり返された山、の話や、人間は何時になったら地球の王者になれるかという問題などで自然の神秘を捜り出すのはとても楽しい事でした。兎に角、ニューヨークでの二年間はとても幸福でした。今思いだしても、思わず顔がほころぶのです。

特に深い印象を残しているのは、市内で、一番私の気に入った中央公園の散歩でした。どん

なに些細なものでも美しく見えました。毎日毎日、その公園は装いを変えて私を魅了しようとするのでした。

春には、私達は方々の興味ある所に遠足しました。いつかは、ハドソン河を逆行してブライアントが好んで詩のテーマにした緑の堤防をさまよいましたが、その淡白で野性的な断崖のスケールの大きさにはとても深い印象を受けました。又いつかは、ウエスト・ポイント陸軍士官学校や、タリイ・タウン、ワシントン・アーヴィングの家などを訪ねました。アーヴングの家では、眠の洞窟をくぐり抜けたりしたのです。

ライト・ハムソン学校の先生達は、聾の子供達にも、耳の聞える人達たちの悦びをわけ与えたり、いじけた心を素直にしてやる為には日夜心を砕いていました。

私は、ニューヨークを去る直前に、父の死に、次いで悲しい思い出であるボストンのジョン・P・スポールディング氏の訃報を受けました。ただ彼の人柄を知ってる人だけが、私に示してくれた深い思いやりを想像し得るのです。同情深い、春風駘蕩たる雰囲気が彼の廻りにはかもし出されていて、総ての人々を幸福にせずにおきませんでした。私達には、単に、彼が柔しい眼射しで見守っていて呉れると考えただけで、如何なる困難をも克服しようとする勇気がふるい起されるのです。彼の死は、私の心に、終生充たされる事のない空隙を残したのです。

第十八章ケンブリッヂ女学校入学と大学入学前期試験

一八九六年の十月、私は、ラドクリッフ大学へ入る準備のため、ケンブリッジ女学校に入りました。私は、小さい時ウェルレスレイに行き、そこの子供達が、口々に、〃私大きくなったら大学に行くの。それもハーバードよ。〃というのにびっくりさせられた事があるのを思い出します。どうしてウェルレスレイを選んだのかと尋ねられて私は、〃だって女の子だけが居るんですもの〃、と答えたのでした。大学に行こうという望みは長い間、私の胸に秘められていてそれは年と共にはっきりした形を取って来たのです。当然私は、心からの、そして賢明な友達の反対を押し切って、眼も見え、耳も聞える人々と争って、学位を得るために励まなければならない破目になりました。ニューヨークを去る時、此の決心はもはや動かすべからざるものになっていました。私はいよいよケンブリッヂに行く事になったのです。此れが、ハーバードへ入学しようという、私の子供染みた放言を実現するための最短コースだったのです。

此の計画は、ミス・サリヴァンを、私と一緒に教室に出て、講議内容を通訳せざるを得ない

事にしてしまいました。

勿論、先生達は不具の子供を教育した事がないので、私と彼等の意志疎通は、読唇術だけで行われたのです。第一年目の勉強課目は、英国史、英文学、ドイツ語、フランス語、算数、それにラテン語作文と、時々の課題作文でした。私は、それまで、大学への準備という考えで勉強した事はありませんでした。でも、ミス・サリヴァンのおかげで、国語の基礎は充分出来ていましたので、先生達は、大学から要求されている、本の批評的勉強の外は、特別な指導をしなくても良いと解ったのでした。それに、フランス語の基礎もしっかりしていましたし、ラテン語も六ケ月やっていたのです。ドイツ語は云うまでもなく得意中の得意なのです。

然し、此等の利点があったにも関わらず、私の勉強には大きな障碍がありました。ミス・サリヴァンは、私に一冊の本を理解させる程の事を、私の掌に書く事は出来なかったのです。又、教科書を凸版にする事も不可能でした。フィラデルフィヤからも、ロンドンからも、同情に充ちた手紙を貰いました。私は、友達との朗読会のために、ラテン語の本を、グレイル式点字に書き直して貰わなければならなかったのです。それでも、学校の先生は間もなく私の質問に答えたり、私の誤りを訂正する事が出来る程に慣れて来ました。私は教室でノートを取ったり課題作文を書いたりする事は出来ませんでしたので、家に帰って来て、タイプライターで書

きました。
来る日も来る日も、ミス・サリヴァンは底知れぬ忍耐力で私の掌に、先生達が講議する事を書き綴りました。時間中に、私の知らない単語を辞書で調べたり、凸版になっていない本を繰り返し繰り返し読んでおかなければならなかったのです。どんなに退屈だった事か、想像に絶するものがあります。グローテ夫人と、校長先生のギルマン氏は、私の為にわざわざ手指文字を勉強してくれました。彼女は、自分の手指文字が不完全でスピードが出ないのを一人でやきもきしていました。彼女は、ミス・サリヴァンに少しでも休養を取らせようと、週二回、特別に私の掌に大骨折りをして書き綴りながら教えてくれたのです。此の様に、周囲の人々は皆親切な良い人々でしたが、私の苦役を楽しみにしてくれたのは、実にミス・サリヴァンの右手だったのです。
その年に、私は算数の本一冊と、ラテン語文法、それに、シーザーの〃ガリヤ戦記〃の中の三章を読みました。ドイツ語では、ミス・サリヴァンの助けをかりたりして、シラーの〃鐘によせる歌〃〃水禽〃ハイネの〃冬の旅〃フレイタークの〃フレデリック大王の国家〃リールの〃美への呪い〃レッシングの〃ベルンヘルムのミンナ〃それにゲーテの〃我が人生〃を読みました。此等の本はとても感激して読みましたが、中でも、シラーの抒情性や、フレデリック大

王の輝しい業績、それにゲーテの生活の細い事を読むのは何とも云えない楽しみでした。私は自然が自分自身の感情であり、恋人であり、そして栄養である人にだけ期待し得る素晴しい言葉や魅力的な描写に依って、葡萄の蔓の這い廻る丘、陽光の下にさんざめき、そして唄を口ずさんで流れる小川、伝統や伝説が豊富な末開地、夢の昔に姿を消してしまったフランシスコ派の尼僧などが次々に現われる、〃冬の旅〃は読み終ってしまうのが残念でたまりませんでした。

ギルマン氏は英国文学を、教えてくれました。私達は、〃お気に召すまゝ〃バークの〃和解の演舌〃マコーレイの〃サミュエル・ジョンソンの生涯〃を一緒に読みました。ギルマン氏の歴史的な、そして文学的な知識の豊富さは、生じっか私が教室でノートを取れなかった為に、無味乾燥に陥る恐れのある勉強を、生き生きした楽しいものにして呉れたのです。

バークの〃演舌〃は、私がそれまで読んだ政治的な問題をあつかった本のうちで一番優れたものでした。不安に戦く時代と、相争う両国民の生活が如実に思い浮べられるのです。私は、その堂々たる、巨濤が逆巻く様な雄弁を読んで行くうちに、どうして、ジョージ王や、その大臣たちが、アメリカの勝利と、イギリスの屈辱を予言する警告に耳をかさなかったのか、不思議でたまらなくなってしまいました。又私は、偉大な政治家たちが自分の政党のために、そし

て国民のために儘す細い退屈な事柄を読みました。私は、此れらの真実と、知性の尊い種が、どうして此んな、無知と腐敗の土地に播かれなければならないのか不思議でたまりませんでした。

それと違った意味で、マコーレイの〃サミュエル・ジョンソンの生涯〃は面白いものでした。私の心は、苦境のどん底に陥り、貧しいパンをかじりながらも、貧しい人々や、世間から忘れられた人々に温い援助の手をさしのべた孤高な魂に、魅きつけられたのです。私は彼の成功に悦びました。彼の種々の欠点は見て見ぬ振りをし、彼の業績というよりは、どんな苦難にも打ち挫かれなかった強い意志力に感激させられたのです。私はマコーレイの、陳腐なものをも新鮮に感じさせたり、豪華な絵巻物の様にしたりする手腕には感心させられましたが、その余りにも物を割り切った物の見方に退屈を感じ、効果だけを狙って大切な真実を略いてしまう態度には、私が嘗って、大英帝国のデモステネスと崇めていた態度を変えざるを得なかったのです。

又私はケンブリッヂで初めて、聞えもし、見えもする同年輩の友達を得る事が出来ました。私は、その学校でも、特色の一つだった学校と棟続きの、嘗っては、ハウェル氏が住んでいた家に、四五人の友達と一緒に生活し、家庭生活気分を満喫しました。若し、盲人の雪中行軍み

たいなものであったとしても、私は、彼女等の遊戯に成るべく多く加わりました。一緒に長い散歩をしたり、勉強の事で討論したり、面白いと思った本を朗読し合ったりしたのです。中には、ミス・サリヴァンの通訳がなくても、私と話せる様に手指文字を習った人も居りました。

クリスマス休暇には、母と妹が尋ねて来て、一緒に過しましたが、その時、ギルマン氏は親切に、妹を彼の学校で勉強さしてはどうかと申し出てくれました。そこでミルドレッドは、私と一緒にケンブリッジに残り、幸福だった六ヵ月の間、二人は片時も離れようとしなかったのです。その期間中に二人で互いに励し合って学んだり、遊んだりした事は、いつ思い出しても心の和む思い出なのです。

私は、一八九七年の六月二十九から七月三日にかけて、ラッドクリッフの前期試験を受けました。私の選んだのは、基礎ドイツ語、上級ドイツ語、フランス語、ラテン語、国語、ギリシャ語、それにローマ史を九時間でやるものでした。全部に及第し、特に国語とドイツ語では〝栄誉〟を受与されたのです。何かの参考になると思われますので、その時の模様を書いて見る事にしましょう。受験生は、基礎課目の十二時間と、上級課目の四時間、合計十六時間で答案を書き上げなければなりません。そしてそのうちの五時間は予備という事になっています。答案用紙は九時にハーバードで配付され、学校職員がラッドクリッフへ持って来るのです。受験生

は総て番号で識別されます。私は、二三三番でしたが、タイプライターを使わなければならなかったものですから、皆の注目を浴びました。

タイプライターの音が他の人々の邪魔になってはいけないというので、私だけは別の部屋で受験する事になったのでした。ギルマン氏が全部の答案用紙を手指文字で私に読んでくれました。又もう一人が邪魔の入らぬ様に、入口に立っていました。

最初の日はドイツ語をやりました。ギルマン氏は、私の傍に坐って、問題を始めはずっと通して、次に、文章毎にゆっくり読んでくれました。私は、問題が解ったという事を知らせる為に、大声で、その後から復唱しました。問題はとても難しかったものですから、タイプライターで答えを書きながらも、やきもきしました。ギリマン氏は、私の答えを、私の掌に書いてくれました。私はそれで、訂正すべき所を訂正し、ギリマン氏に書き入れて貰ったのです。私は此処で、此んなに有利な試験を、その後受けられなかった事を特記しておかなければなりません。ラッドクリッフで受けた時は、私の答を読んでくれる人がなく、誤りを訂正しようにも、それが出来なかったのです。ほんの、思い出す事が出来ただけの訂正を答案用紙の片隅に書くのがやっとだったのです。若し前期の成績の方が、後期のそれよりも良かったとしたら、原因は此処にあるのです。それに、前期の時は、ケンブリッジに入学する前からやっていた課目を

選んだ故もありましたし、又、ギルマン氏が、その学年の初めに、前年度のハーバード大学入試問題を私に見せてくれ、それをやって見ると、国語、歴史、フランス語、それにドイツ語には良い点を取れたのです。

ギルマン氏は私の答案を、受験生二三三番が書いたという証明書と共に試験官に送りました。

その他の課目も此れと同じ方法でやりました。最初のドイツ語が一番難しい様でした。私はラテン語の答案用紙が渡された時、シイリング氏が入って来て、私がそれまでの試験に良い成績で通ったと云う事を知らせてくれたのを憶えています。此れに元気づけられて、最後の課目まで冷静に、調子よく頑張る事が出来ました。

第十九章　ラ大学後期試験

ギルマン学校の二年生になった時、私の胸は、楽観的な予想にふくらんでいました。然し、その学期が始った当座の二、三週間の間、私は思いもかけぬ伏兵に襲われたのです。ギルマン

氏は、その年私が数学を主としてやる事に賛成していました。私は物理学、幾何学、代数学、天文学、それに、ギリシャ語とラテン語を選びました。でも困った事には、私の教科書を凸版にするのがおくれてしまったのです。それに勉強に使う大切な器具がなかつのです。クラスの人数は大勢で、先生達が私に特別教育してくれる事も不可能でした。ミス・サリヴアンは、総ての教科書を私に読んでくれたり、先生の云う事を通訳したりしなければならなかったのですが、彼女の能力ではもう間に合わないのではないかと思われたのです。

教室で、代数の問題を解いたり、幾何の図形を描いたり、又物理の問題を解いたりしなければならなかったのですが、ブレイル式点字板が着かないうちはそれも出来なかったのです。それなしには、順調な勉強所か、その第一歩すら踏み出す事が出来なかったのでした。私は黒板に書かれた図形を見る事が出来なかったので、坐席の傍に曲線や直線の針金を使って、それを真似して見なければならなかったのです。ケイス氏が、云っていられる様に、数学の行列や、数学の仮設やその結論それに証明などをいつも心の中に持ち運んで歩かなければならなかったのです。一言で云えば、何一つやるにもそれ相当の障碍を克服しなければならなかったのです。私は途中で勇気を失い、今思い出しても恥しくなるような、特に、ミス・サリヴアンに—数多くの友達の中で、私の苦難を安楽に、悲しみを悦びに変える事の出来た唯一の人、ミス

・サリヴァンに、当り散らしたりしては、自分自身を裏切ったのでした。

然し、私の困難は徐々に克服されて行きました。凸版になった本や、その他の器具が着き、再び勉強に没頭出来る様になったのです。然し数学と幾何だけは頑強に攻撃を退けました。前にも述べた様に、数学は性に合わなかったのです。腑に落ちない点がそのままに残されていたのです。幾何学の図式は特に私を苛立たせました。何故なら、座席の傍でやっても、線と線の関係がはっきり頭に浮んで来ないのです。少しでも解って来たのは、ケイス氏に指導して貰ってからでした。

此れらの困難を克服し続けていた時でした。総ての事がらも一遍に変えてしまう様な事が起ったのです。

凸版の本が着く一寸前の事でした。ギルマン氏が、私は余り無理勉強をしていると、ミス・サリヴァンに忠告したのです。そして、私の懇望にも関わらず、復習科目を減らしてしまったのでした。初め、私達は（若し必要だったら）五年でも何年でも、勉強を続けようという覚悟だったのですが、一年の時の試験の結果で、そんなに激しく勉強しなくても、後二年で大丈夫だという見通しが、ミス・サリヴァンや、バルブオ氏（ギリマン学校教頭）初め、その他の人々にも明らかになったのでした。ギルマン氏もそれには異論がなかったのですが、私の過労を

気にして、もう三年残るべきだと主張するのです。私はその主張には賛成出来ませんでした。級友と一緒に大学へ進みたかったのです。

十一月の十七日、私はどうした事か気分が優れず学校に行きませんでした。ミス・サリヴァンは、それをあまり重視しなかったのですが、此れをききつけたギルマン氏は、此れを私の計画の挫折と見て、私が後期の試験を級友と一緒に受けられない様な処置を取ってしまいました。結局、ミス・サリヴァンと、ギルマン氏の意見の衝突の為に、母はミルドレッドを引き取らなければならなくなったのでした。そして私もケンブリッジを引き上げる事になったのです

その後、私の勉強は、ケンブリッジのマートン・S・ケイス氏を雇って続けられる事になったのです。その冬からの数カ月を、ミス・サリヴァンと私は、ボストンから二十五哩離れた、レンサムのチャンバアリンズで友達と一緒に過しました。

一八九八年の二月から六月まで、ケイス氏は、週二回レンサムにやって来て、代数、地理、ギリシャ語、それにラテン語を教えてくれました。ミス・サリヴァンは、相変らず彼の講義を通訳してくれました。

一八九八年の十月、私達はボストンに帰りました。ケイス氏は、八カ月の間、週五回一時間の割りで講義してくれました。彼は、前日にやった事で解らない所があると、それを説明し、

その日にやる範囲を決め、それから私が一週間書き溜めておいた課題作文を自宅に持って帰り隅から隅まで筆を入れて返して呉れるのでした。

此の様にして、私の大学準備は何の支障もなく進められました。私は、数室で講議を聞くより、自分一人でやった方がずっとやり易く、そして楽しいという事を発見したのです。あせる事も頭を混乱させる事もありませんでした。先生は、時間に余裕を持ってましたので、理解出来ない所は充分に説明してくれました。そういう訳で、学校でやるよりも早く、順調に前進する事が出来たのです。でもやっぱり、数学は苦が手でした。私は代数や幾何が、歴史や語学の半分位でも楽になるといゝなあと思ったりしました。然し、ケイス氏は、数学をも楽しいものにしてしまったのです。彼は、数学から私でも飲み込める程に、角を取ってしまったのです。彼は、私を熱心な態度を取る様に仕向け、今までの、盲目滅法に問題の中に飛び込み、結局は答も結論も解らなくなる様なやり方の代りに、冷静に論理を追って行き自然な結論に達する方法を練習させました。どんなに私の理解が遅かろうと、又自分の主張をまげなくても、彼はついぞ怒り出す事がなかったのです。

一八九九年の六月二十九日と三十日、私はラッドクッフの後期試験を受けました。第一日目には基礎ギリシャ語、上級ラテン語を、二日目には幾何、代数、上級ギリシャ語をやったので

す。

大学当局では、ミス・サリヴァンが私に問題を読んでくれるのを許可せず、パーキンス盲学校の先生であるユーグン・C・ヴァイニング氏を頼んで、それを、アメリカ式点字に直させたのでした。ヴァイニング氏は、私と一面識もない人で、点字以外の私に話しかける方法を知りませんでした。試験監督も又、私の知らない人でしたし、話しかけようとする素振りすら見せませんでした。

点字は、語学の場合には何の欠点もないのですが、数字となると困るのです。私は、とても困りました。そして、時間を空費してはいらいらしたのです。特に代数の場合がそうでした。その訳は、私は語学的な面で使われている総ての点字、英国式、アメリカ式、それにニューヨーク式などにはよく通じていたのですが、幾何や代数の記号や符号を表わすのに用いられていた三型式の点字には慣れていなかったのです。私は代数に英国式点字だけを使っていたのでした。

試験の二日前、ヴァイニング氏は、二、三年前の、ハーバード大学の入学学問題の写しを送って来てくれました。私は、それがアメリカ式点字だったのでびっくりしてしまいました。私はすぐに机に向って、その記号を説明してくれる様に、ヴァイニング氏に手紙を書きました。

彼は返事と一緒に、記号の表を送ってくれました。それから覚えにかかったのです。死に物狂いでやったのですが、試験前夜になっても、大括孤や小括孤、それに根軸心などの区別がつかないのです。私もケイス氏も非常に落胆してしまいました。でも次の朝、私達は、試験の始まる一時間位前に大学に行き、ヴァイニング氏に精わしい記号の説明をして貰ったのです。

幾何の場合で一番困った事は、今まで定理を印刷された線や、掌に書かれた線で覚えていた為に、定理そのものを知っていても、それを表わしている点字に混乱させられて、問題の意味をつかめなかった事でした。然し、代数の場合は、それ所でなかったのです。憶えた筈の記号がさっぱり解らず、自分がタイプライターで書いた事も読めないのです。私は、今までそれを点字で書くか、掌に指で書いていたのです。ケイス氏は、私の能力を過信して、答案を実際に書く練習をさせてくれませんでした。それで私は、解答を書く前に何度も繰り返して問題を読まなければなりませんでした。全部の記号を間違いなく読めたとは今でも思っておりません。

然し私は誰をも責めようとは思いません。ラッドリッフ大学当局では、此の試験のために私の周囲の人々がどんな苦労をしたかも、又、私のハンデイキャップがどれ程大変なものだったかも理解してくれようとはしませんでした。然し、私は、彼等の認識不足のために、私の頭上におおいかぶさった困難が、必要以上に大きなものになったのだとしても、それを見事に克服

した事で慰められているのです。

第二十章　ラ大学入学

大学に入学する為の悪戦苦闘は終りました。そして私は、自分の好きな時にいつでも入学出来る事になったのです。然し、入学する前にもう一年、ケイス氏のもとで勉強した方が良いという事になりました。それで、私の夢が実現されたのは、一九〇〇年の終り頃でした。

私は、ラッドクリッフでの最初の一日の事をはっきり覚えています。その日こそは、見る物聞くもの総て光輝に充ちてる日でした。その日の事を私は長い間夢見つゞけていたのです。友達の説得を、はね返し、女々しい私を鞭韃する、強固な内在意志が、私を、見えもし、聞えもする人々との競走に馳り立てたのです。多くの障碍がある事は初めから覚悟していました。でも、それを克服する熱心さを持つていたのです。私は、ローマの賢人の〝ローマーより放逐さるを望まば、ローマーを出るに足るべし〟。という言葉を肝に銘じていました。知識の大道から隔離されていた私は、道なき道を手探りの旅行をしなければならなかったのです。此れに加

う可き言葉はありません。大学に入って私は、迷路のあちこちで、私と同じ様に途方に暮れている友達に合ったのでした。

私は、海綿が水を吸う様に勉強し始めました。私の眼前には知るべき価値のある美しい世界がひらけ、私は、自分の体内に、それを自分のものにしうるだけの力を感じました。心という不思議の国では、私にも、何の制限も加えられていなかったのです。大学に住む人々、その雰囲気、校風、歓嬉、叉、悲劇こそは、現実の世界の生きた代弁者なのです。講堂には偉大で賢明な精神が充ち、教授は叡智の権化である様に思われました。事実はそんなものではないにしても、私は自分の考えを変えたくないのです。

でも私は、間もなく、大学は私が想像していた様な、ロマンチックなアリストノールの学園でない事に気がつきました。私の純真な夢は日々に色褪せ、感激に溢れた日々も、次第に平凡なものに変って行きました。私は、大学に行くのが億劫になって行ったのです。

一番痛切に感じた――今でもその考えに変りはありませんが――のは、忙しすぎるという事でした。それまで私は、自分の事について考えたり、反省したりして時間を費したのでした。夕暮れ時などに、先生と私は、深く愛誦した詩人が、暇な時にだけ聞入る事の出来る、魂の奥深く奏でる、心琴の妙なる音楽に耳を澄しながら、じっと、坐っていたりしたのです。然し、

大学では、お互いに心の内をさらけ出して語り合う時間がないのです。大学に行くのは、学ぶためであって、考える為ではない様に思われたのです。一旦校門に入るや、微風が枝を渡る外界にある孤独や、読書、それに気儘な空想の楽しさを捨てなければならないのです。未来の幸福の糧を蓄えているのだとも考えられるでしょう。然し、私は、冬の日に備えて食糧を蓄えるにはあまり即興的で現実的なのです。

一年目の勉強課目は、フランス語、ドイツ語、歴史学、英作文、それに英国文学史でした。フランス語の時間には、コルネーユ、モリエール、ラシーヌ、アルフレ・ド・ムーセや、セン・ブーヴなどの諸作品、ドイツ語の時間には、ゲーテやシラーの物を読みました。

歴史では、ローマ帝国の滅亡から十八世紀までの復習を、英国文学史では、ミルトンの詩やアレオパジイティカの批評的講読をしました。

私は、良く、〝大学では様々困った事があったでしょうが、どう云う風にやったのですか〟と尋ねられる事があります。教室では、事実上、私は一人ぼっちでした。教授の声は、電話でも聞いている様にかすかでした。講義内容は、凄いスピードで私の掌に書き込まれ、私はそれに全神経を集中しなければならず、教授の個性などは殆んど解りませんでした。言葉は後から後からと、そそっかしい猟犬の様に飛び込んで来ました。でも此の点でだったら、ノートを取

っている人々より不利だとは思いません。何故なら、聞いた事を物凄いスピードでノートするという機械的な仕事に心を奪われていれば、その内容に注意する事など殆んど不可能な事だからです。私の手は、聞く事に精一杯で、到底、それをノートする事など出来ませんでした。それで家に帰ってから、頭に残っている事を略記しました。私は、課題作文や訳文、それに批評・一時間テストや中間試験、それに学期末試験などをタイプライターで書き、教授達が私の頭の悪さを判断する資料としました。ラテン作詩法を習った時は、韻律や音節の長短を表わすのに符号を考え出して、それを教授達に説明したのです。

私が使っているのはハモンド式タイプライターです。種々使って見ましたが、私の仕事にはこれが一番適当です。これには、動き篋かがありますし、ギリシャ語、数学の記号、それにフランス語などの、任意の文字を打てる、夫々の篋が備っているのです。此れがあったからこそ大学へも行けたのではなかったかとも思っています。

講義に使われる本は、盲人向きに印刷されてなかったので、それを掌に書いて貰わなければなりませんでした。自然私は、復習や予習に他の人々より多くの時間を費さざるを得なかったのです。手指文字は不便なので、他の人々には解らない苦労をしました。時には自分だけ読書室に残されて、僅かの文章を読むのに必要以上に頭を疲らせ、外で明るくさんざめく友達の笑

声を聞かされる時などは思わず神様を恨みたくなるのでした。それでもすぐに元気を取り戻しては、不満を心の隅に押しやりました。真の知識を得んと望む人は例外なく苦難の山道をたどらなければならないのです。頂上への鋪道がない以上、自分の道は自分の手でひらかなければならないのです。ずり落ちるでしょう。転びもします。立ち止らされたり、草叢にかくされた罠にも落ち込むでしょう。気を失ったり、息を吹き返したりさぞかし忙しい事でしょう。でもその度に落着を加えます。そして登り続けるのです。一寸高く登ったなと思ってみます。勇気附きます。高く登るにつれて益々熱心になり、次第にひらけて来る美しい視野に有頂点になります。苦闘、それこそ勝利なのです。もう一踏張り。綾に輝く雲、埃一つなく高く澄んだ蒼天、憧れの天上はすぐなのです。でも此の闘争で、私は常に一人ぼっちではなかったのです。ウイリアム・ウェード氏や、ペンシイルヴァニヤ盲学校のE・E・アレン校長先生は私の為に沢山の凸版の本を手に入れてくれたのでした。彼等の用意周到さは、彼等自身でも気がつかない程、私を勇気附けてくれたのです。

ラッドクリッフの最後の年である二年目には、英語作文法と英国文学としての聖書、アメリカ及びヨーロッパの政治型態学、それに、ホレースの頌歌集やラテン語のコメディを学びました。作文法の時間が一番楽しみでした。その時間は活気に充ちていました。講義は常に発溂と

し、奇智と興味に溢れていたのです。先生はチャールス・タウンセンド・コープランドといいましたが、彼は実に独創的で新鮮な、そして力強い調子で話を進めるのでした。僅かな時間で、厄介な解釈や註釈抜きで古代の巨匠の作品の美しさを味わせて呉れたのです。その素晴しい思想を紹介してくれたのです。旧約聖書に出て来る雷鳴も、ジャヴェや、エロヒムに邪魔を入れられる事なしに聞かして貰いました。私達は、表現さるべき精神と、表現すべき文体が完全な偕調を保っている最高の傑作を観賞し得たという悦びと、その様な美しい古典からこそ新しいものが生れるのだという確信に、勇んで家に帰って行くのでした。

その一年は最も楽しいものでした。何故なら私は、経済学やエリザベス朝文学、それにシェークスピヤなどを、ジョージ・L・キッタージ教授に、哲学史をジョシィア・ロイス教授に学んだからです。哲学に依って、私達は理解に生み出された共感を抱いて、それまでは何の関係もなく、又合理性も持っていないと考えていた、遠い古代の伝統や、思想に入って行く事が出来たのです。

然し、大学は私が考えていた様な、全宇宙を包含するアテネではありませんでした。大学では成程、偉大な人々や、賢明な人々と顔を突き合わせる事は出来ます。然し、その人達の実生活にふれる事は出来ないのです。そこに偉大な人々が居る事は確かです。然し彼等はミイラな

のです。私達は教養という、ひびの入った殻から彼等を引きずり出し、メスを入れ、分析して見て初めて、彼等が単なる巧く出来た模造品ではなしに、真のミルトンであり又、イザヤなのだと理解出来るのです。大部分の教授達は、私達の偉大な文学作品への興味は、理解よりも、感じ、にかかっているのだと云う事を忘れている様に思われるのです。困った事には、彼等の苦労の結晶である説明は私達に何らの印象も残さないのです。花や根や茎、又その他の部分も、又その成長の過程を研究に依って解明する事は、きらきらと朝露に輝く新鮮な花の観賞とは似て非なる事なのです。私は幾度も我慢し切れなくなって〃どうして此んな説明や仮説が必要なのだ〃と自問して見ました。此の自問は盲の小鳥みたいに、私の心の中を、あっちにぶっつかったり、こっちに突き当ったりして気が狂った様に飛び廻りました。私達が読んだ有名な作品を理解するのは無駄な事だと、云っているのではありません。私が賛成出来ないのは応接にいとまない註釈や、〃いかつい批評なのです。然し、一旦キッタージ教授の様な偉大な学者が、巨匠の言葉を云い換えて説明し出すと、私達は〃盲目が眼をあいた〃様な気持になるのです。彼だけが、シェークスピヤを詩人にかえす事が出来るのです。

私は、自分の頭から、せめて半分なりとも、何の役にも立たぬ知識を掃き出したくなる事が屢々あります。何故なら、折角貴重な代価を払って手に入れた物を、観賞する事が出来ないか

らです。一体、一日に数冊の全く何の関連性もない本を、自分が何を読んでいるのかを意識して読む事が、出来るというのでしょうか。筆記試験や、テストの準備に、ただがつがつと読んだりすると、私の頭は、何の足しにもならぬ骨董品みたいなものだけを覚えてしまうのです。私の頭は、整理のつきそうにもない骨董品の蔵なのです。それで、嘗つては、私の心を限りなく慰めてくれた所に行くと、私は、自分自身を瀬戸物屋で暴れ廻る牛の様に感ぜざるを得ないのです。幾千もの知識という瀬戸物が、グワラグワラと頭上に降って来て、そこから逃げ出そうとすると、定義の悪魔や、年代記の一つ目小僧が追いかけて来るのです。そして私は、最後には、どうぞ命ばかりはおたすけ下さい、今まで深くも考えずに礼拝して来た偶像を叩き壊しますと、歎願せざるを得ないのです。

それにしても、大学おばけの中で一番怖いのは、試験おばけです。私は此の怪物を何度も何度も投げとばし、強かに砂を嚙ませてやりました。それでも彼等は変な手附きをして性懲りもなく起き上るのです。私は、ボソヴ・エエーカーの様に、スーッと勇気が抜けてしまうのを認めざるを得ないのです。此の怪物に立ちむかう前には、神秘的な定義や、八頭蛇の年代記を覚えなければならないのです。そして遂には、本も、科学も、人間も、底なしの沼に沈んでしまえ、と呪わざるを得なくなってしまいます。

そして遂に、恐怖すべき試合となるのです。その時に、用意はすっかり出来ていると思えたり、又、幾らかでも助けになる正しい考えを思い出したり出来る人は運が良いのです。

でも、勝利のラッパを吹き鳴すにはあまりにも不注意だったと思う時があまりにも多すぎます。いくら思いだそうとしても、又、うまく表情しようとしても、此等の能力が自分を見捨ててしまっている事に気がついた時程に、間誤つかされ、そしていらいらさせられる事はありません。此のまごつきと、いらだちこそは、見事に失敗したという明瞭な証拠なのです。

〃フスとその業績について簡単に説明せよ。〃 フス? 一体どんな奴だっけ。どんな事をやったんだろう。その名前は不思議に、親しいものとして感じられるのです。ボロ袋の中の絹の布を捜す様に歴史の知識の袋をあさります。袋の上の方にあった筈なのです。確かに、宗教改革の始めの方を読んだ時に見ているのです。でも何処へ行ったんだろう。ボロの全部を取り出します。革命・教会分離・虐殺・政治形体・でもフスは? 何処に居るんだろう。自分が、問題に関係のない事は実に沢山知っているのに驚いてしまいます。最後には面倒になって袋を逆さにして見ます。ああありました。隅っこの方に、彼を捜して私達が大騒ぎをしているのを知らぬ気に、涼しい顔をして瞑想に耽っているのです。

と、その時、終りのベルが鳴り渡るのです。

向っ腹を立てて、ボロ布を蹴とばし、教授達の、生徒の許しもなしに勝手に問題を出すという神聖な特権を剝奪しようという革命的な考えを抱いて家に帰るのです。

此の事は、実際に私の身の上にも起りました。ごちゃになった暗喩が、青白い顔をした怪物や、瀬戸物の砕片に埋った瀬戸物屋の中の牛を指さしながら私をあざけったり、私の眼りの前をうろちょろする様な事が。分析も出来ない、いまいましい怪物、勝手になさい。

此の怪物に私は色眼を使った事があります。そして実際に、此のてんやわんやな雰囲気の中で生活したのです。そして今は、口を拭って、私の大学に関する考え方は変りましたなどと、乙にすましているのです。

然し、私のラッドクリッフでの日々は、まだ未来を持っていました。段々薄れて行きましたが、まだロマンティックは輪光は完全には消えていなかったのです。私は、ロマンティックな世界から、現実的な世界に移る過程で、実際に経験しなかったら、知り得ないでしまったであろう沢山のことを学んだのです。その一つは、私達は学問する時、丁度田舎道を散歩する様に、あせらず心を一杯に開いて、総ての印象を受け収れなければならないという事でした。此の種の認識が、私達の生活に幅を与えるのです。〃知識は力なり〃と云いますが、私は、知識は幸福だといいたいのです。

何故なら、博い、そして深い知識こそが正邪を正し、高低に区別をつけるのです。人間の進歩を跡づけた思想や、芸術品を理解する事こそが、幾世紀も脈搏ち続けて来た人間性の皷動を知る事なのです。そして若し、此の脈搏ちのうちに、天上を目指して苦闘し続ける人間の魂の叫びを感じ得ない人が居たら、その人は、人間の命のリズムに聾なのだと云われても仕方がないのでしょう。

第二十一章　私の教育法の主眼

私は今まで、私の生活の些事を素描して来ましたが、本の楽しさとか、有益さについては少し書いただけで、それが実人生に齎らす人間的な味についてはふれませんでした。実際、私の教育について、本は、他の人々の場合よりも大きな意義を持っているのです。それで、此の事を主眼として、話を私が初めて本を読んだ頃の昔に戻しましょう。

私は、七才の時、つまり一八八七年の五月に初めて本を読みました。私はその日から現在に至るまで、私の飢え切った指先がふれる総ての印刷されたページを、むさぼる様に読んで来た

のです。
前にも云いました様に、私は少女時代に正規の教育を受けませんでした。又、一つの法則に従って読書もしなかったのです。
初めの頃は、初めて本を読む人の為にとか、童話集、〃私達の世界〃という地球についての本など、二・三の凸版になった本を読んでいました。それで全部だったと思います。それでも、私は幾度も幾度も、遂には凸版が磨り減ってしまい、何が書いてあるか判らなくなるまで繰り返し読みました。時には、ミス・サリヴァンが、掌に短い話や、やさしい詩などを書いて呉れました。でも私は、独りで読む方が好きでした。どうしてかと云うと、面白いと思った所を何回でも繰り返して読めたからです。
私が読書らしいものを始めたのは、最初のボストン滞在の時でした。私は先生の許しを受けて、毎日毎日、何時間かを、盲学校の図書館で、書棚をあさり廻りました。私はとても熱心に、解ろうが解るまいが、そんな事には一切おかまいなしにむさぼり読んだのです。時には、十に一つ、非道い時には、一頁に一つか二つの割合しか自分の知ってる単語を探し出せない事もありました。でも言葉そのものが私を魅きつけ、内容なんか問題でなかったのです。私の心は、その当時、とても印象づけられ易すかったと見えて、沢山の言葉や云い廻しを蓄えまし

た。後で此れらの言葉や云い廻しは、文章を書いたり、話したりする時に、極めて自然に流れ出て、私の友達を語調の豊富さに驚ろかしたのです。〃小公子フォントローイ〃を読むまで、私は本の一部分や（その頃私は、本を一度も読み通した事がないと思います）、沢山の詩などを、此の様な気まぐれな方法で読みました。そして、〃小公子フォントローイ〃こそが、多少なりとも理解して読んだ最初の本だったのです。

或る日先生は、図書館の隅で〃緋文学〃のページを熱心に見凝めている私の姿を見つけました。その時私は八才だったのです。彼女は、小さいパールは好きかと尋ねたり、二、三の言葉を説明してくれてから、〃緋文学〃よりもずっと面白い、小さい男の子の事を書いた本があると云うのでした。その本が〃小公子フォントローイ〃だったのです。彼女はそれを読む約束をしました。それを読み始めたのは八月に入ってからでした。海辺での初めての二、三週間は、海に夢中になっていて本の事などすっかり忘れてたのです。それに、先生は一寸用があってボストンに行って居たのでした。

彼女が帰って来ると、旅装を解くのももどかしく、私達はすぐに〃小公子フォントローイを読み始めました。私は、此の魅力に溢れた子供の話の第一章を読め始めた時の事をはっきりと憶えています。私達は、家から程遠からぬ松の木に吊されたハンモックに坐っていました。私

達は出来るだけ多くの時間を読書に使える様に大急ぎで昼食の後片づけをしました。ハンモックの所に、長い草をかき分けていそぐ途中、蝗がバラバラと私達にとびついて来ました。先生は、此の蝗を全部つかまえようと云い出すのです。私はやきもきしてしまいました。ハンモックには、先生が留守の間誰も坐らなかつたので、松葉が沢山たまっていました。暖い陽光が松の木に降り注ぎ、香わしい松脂の匂いがあたりに漂っていました。磯の香が強く鼻を打ちました。いよいよ読み始める前に、彼女は私に解らないと思われる様々の事を説明してくれ、難しい言葉は読みながら教えてくれました。初めのうちは難しい言葉が沢山出て来てその度に読書は中断されました。然し、段々話の舞台がはっきりして来ると、私は話の筋に夢中になり、ミス・サリヴァンのくだくだしい説明に我慢が出来なくなってしまいました。彼女の指がもう一語も書けない程に疲れた時程、自分の不具の身の悲しさを痛切に感じた事はありませんでした。私は自分で本を取り上げ、今に忘れられない、切ない慾望にかられて、空しく本をなでて見るのでした。

後で、アナゴス氏は、私の懇望に動かされて此の本を凸版にしてくれました。私はそれを空で覚える程何度も何度も読みました。私の幼児を通じて、此の〝小公子フォントローイ〟は美しくやさしい伴侶だつたのです。私が、くだくだしく此の本の事を書いたのも、此の本が、幼

児の混乱した暗黒の世界を、明い、合理的な世界に切り換えるスウィッチの働きをなしたからなのです。

〃小公子フォントローイ〃は、私の、本に対する真の興味の第一歩となるのです。それに続く二年間に、私は自分の家やボストンで沢山の本を読みました。どんなものを、どんな順序で読んだかは良く覚えていませんが、その中には〃ギリシャ英雄伝〃ラ・フォンテーヌの寓話や、ホーソンの〃ワンダーブック〃〃聖書物語〃ラムの〃シェークスピヤ物語〃〃少年英国史〃ディケンズの〃アラビヤン・ナイト〃〃スイス人ロビンソン一家〃〃小さな婦人〃〃遍路歴程〃〃ロビンソン・クルーソー〃それに、後でドイツ語でも読んだ、美しい、小さなお話、〃アルプスの山の娘〃などがあったと思います。私はこれらの本を勉強や遊戯の合間を見て、段々夢中になりながら読みました。私は、それを勉強のつもりで読んだのでないですから、分析して見ようとも、良く描けているか、又その文体は、著者などという詮索もしませんでした。此等の本は、その豊な果物を私の足もとに置いたのです。私はそれを何の躊躇もなく、太陽の光や、友達の愛情を享受する様に取り入れました。私は特に〃小さな婦人〃が好きでした。私は、此の本で、見た事も合った事もない少年や少女に深い親しみを感じさせられたのです。

私の生活は極度なハンディキャップを負わされていましたので、外界の事柄を知るには本に頼らざるを得なかったのです。

遍路歴程には特別の興味を惹かれませんでした。多分途中で投げ出してしまったかも知れません。〝寓話集〟も同じでした。それを初め英語で読んで余り面白いと思えず、後で原語で読んだ時も、生き生きした描写力や、言葉の魔術には感心しながらも、やはり好きになれませんでした。その原因は解りませんが、動物を人間と同じに話させたり行動させたりする書き方が私にピンと来なかったからだと思われます。動物をかりて来たこっけいな諷刺画だけがはっきり浮びあがって、その裏にかくされた彼の道徳観は見逃されてしまったのです。

再び、ラ・フォンテーヌの事ですが、彼の道徳観は、もはやや、私達の心に訴える力を持っていません。彼は結局、自己愛と理性だけを主張しているのです。〝寓試集〟を貫いている精神は人間の道徳は自己愛から生れるものであり、幸福は、自己愛が理性にうまく統御された時に感じ得るものだという事なのです。然し、私の考えでは、自己愛こそが、総ての悪の根源なのです。と云っても私の方がまちがっているでしょう。何故なら、フォンテーヌは私とはくらべ物にならない程に、多くの人間を観察する機会に恵まれていたからです。それにしても、私は、その場限りの真理が、猿や狐に依って教えられる様な、シニックで、諷刺に充ちた、寓話

に、むきになって反対したいとは思いません。

私は、〃ジャングル・ブック〃や〃私の知った野獣〃が好きです。私は、獣その物が好きなのです。何故なら、彼等は真の獣で、人間の諷刺画ではないからです。誰でも彼等の愛情や、憎悪に同感出来ますし、その喜劇に腹を抱えて笑ったり、その悲劇に涙をしぼって泣いたりする事が出来ます。然し彼等の道徳性となると、もしそれがあったとしても、余りに稀薄で私達人間には気がつかない程なのです。

私は極く自然に、そして生き生きした悦びを感じながら、古代、に入って行きました。古代ギリシャは、私をあやしくも魅了してしまいました。異教的な男神や女神は、私の空想の世界に濶歩します。私の心の奥深い処には、彼等を祀る社が鎮坐しています。神様や英雄や、半神半獣、それに妖精の種類を全部覚え、そして愛し——いいえ、全部を愛したのではありませんメデイアやジャソンなど、惨酷で貪婪な奴は許せません。あまりにひどすぎるのです。私は、どうして神様達が彼等の悪事を見て見ぬ振りをし、大変な事をしでかしてしまってから始めて罰するのか、どうしても理解する事が出来ないのでした。そして今でも解らないのです。私は時々、どうして、

神は知らぬ気に耳をおおう

罪はほくそえんで、時、なる彼の家にしのび込む。

のだろうか、と考えて見るのです。

ギリシャを私の楽園にしてくれたのは、イリアッドです。私は、トロイの話を原語で読む前に知っていたので、退屈な、文法と云う国境線を乗り越えると、たやすく、ギリシャ語に、その宝物を奉献させる事が出来ました。ギリシャの詩を理解するのに一番大切な要素は、感受性に富んだ心です。此の簡単な真理が、繁瑣な分析や説明それに四苦八苦の註釈で折角の偉大な詩を、骨抜きにしてしまう大学者には解らないというのでしょうか。文法的な知識も、必要な事には違いありません。又、ギリシャ語の教授が、私には捜し出せない美しさを同じ詩の中に見つける事が出来るのも知っています。然し、私は身の程知らずの慾深姿さんではありません。私よりかしこくなりたい人はどうぞ御自由にかしこくなって下さい。然し、彼等の偉大な知識も、彼等が偉大な詩に感じた美しさを測定するのには役に立ちません。それは私が出来ないのと同じ事なのです。私は、イリアッドの素晴しい詩句を読んだとき、自分の心に翼が生えたのを感じました。私は大空に翔け上ったのです。

無窮の大空、大気の流れる大空、それは私のものだったのです。

私はイーニードにも純粋な悦びを感じましたが、イリアッド程には夢中にされませんでし

た。私は註も読まず、辞書も引きません。特に美しいと思った箇所などは飜訳して見ます。ヴアジルの描写力は素晴しいものがあります。彼の描く神や人物は、エリザベス朝の仮面劇に出て来る着飾った人々の様に、激情的な戦争や、悲劇や、恋の場面などでも静かに歩き廻るだけなのです。然し、イリヤッドの人物はかけずり廻ったり、とんぼ返りを打ったり、あたり構わず放吟したりするのです。ヴアジルは月光を浴びた大理石のアポロの様にうるわしいのですが、ホーマーは、長髪を風になびかせ、さんさんたる日光にくっきりと照し出された、元気はつらつたる若者なのです。

本の翼に乗って大空を翔け廻る事は何て素晴しい事なんでしょうか。それに反して、あの本から此の本へと、知識を求めてうろつき廻るのは考えて見るだけでも退屈な事です。学校というものに依って仕掛けられた試験のわなに落込んだり、文法や辞書の迷路に踏込んだりしている間に、世界を何周も出来ます。学校でやる方法は知識の獲得という事で合理づけられ、又、その方法でも、時には美しい物を、観賞する事が出来ない事はないのですが、やはり私には尽きざる道の徒歩旅行とだけしか感じられないのです。

私は、良くも理解出来ない頃から聖書を読み始めました。私は今、当時の自分が、その驚歎すべき大音楽に聾だった事が不思議でなりません。私は、雨の日曜日に、とても退屈して、従

姉に聖書のお話を読んでくれとせがんだ事があるのを思い出します。彼女は、到底私などには理解出来ない事を知っていましたが、ヨセフとその兄弟の話を読んでくれました。然し、それは私の興味を魅く事が出来ませんでした。耳慣れない言葉、それに同じ言葉の繰り返しが、その話を作り事の様に思わせ、カナンをいよいよ遠い土地にしてしまったのです。それで私は、兄達が色とりどりの着物を着てヨセフの所にやって来、ロから出まかせの嘘を云う所で眠ってしまったのでした。

此の様に、ギリシャの物語にとても魅きつけられ、聖書の話には一向に興味をそそられなかったのは、私がボストンで幾人かのギリシャ人と知り会い、彼等の国に対する興味をかき立てられたのに、不幸にも一人のベブライ人にも、又エジプト人にも会えなかったために、彼等は野蛮人であり、その物語も皆造り事で、その証拠には、繰り返しや、変な名前があるではないかと思い込んでしまったためだとしか考えられません。全く滑稽な事なのですが、そのくせ、ギリシャの祖父名は〃変〃でなかったのです。

然し、その後に私が聖書に見つけた感激は筆舌にも尽せない様なものでした。それからずうっと私は、次第に深まる理解と悦びにうたれて聖書を読み続けています。此の本こそが、私の最愛の本なのです。然し時々反撥を感じる事があります。此の本は最後まで読み通さなければ

ならないんだという周囲の人々の考えが厭なのです。私は、それに依って得た歴史や、原典についての知識などで、聖書が私に押しつけた退屈さえ見逃してやろうとは思いません。私は、（ホーウェル氏も同じ意見なのですが、）古代の文学が、その内容から醜いものや、野蛮な点などを純化されたら良いと思うのです。と云っても、私は、それらの偉大な作品が骨抜きにされたり、意味を変えられたりするのには人一倍反対なのです。

エスターの話には実にショッキングな純粋さと単刀直入さがあります。エスターが、彼女の邪悪な主人の前に立ち、正面切ってそのまちがった所を非難する場面程に劇的な場面は到底考えられません彼女は自分の運命が主人の掌中に握られている事を知っているのです。それでも彼女は、女々しい心に鞭ち〝若し私が死んでもそれまでの事、私が若し死ななかったら、全同胞の命が救えるのだ〟という崇高な愛国心に勇気づけられた主人の前に出て行くのです。

ルースの話にしても同じです。それにしても、何と東洋的なんでしょうか。此の単純な田舎の人々の生活は、ペルシャの都でのそれと何て大きな相違なんでしょうか。ルースは実に忠実で思いやりのある少女なのです。黄金色に波打つ麦畠で刈取りにいそしむ人々の中の彼女を見たら、誰でもすぐに好きなってしまうでしょう。彼女の浄らかな、素直な心は、惨酷で暗黒な時代に深夜の月となって輝きわたったのです。相争う教会や、根深い人種闘争の混乱の中でさ

えも光を失わぬ愛、ルースの愛こそが真の愛なのです。
私はバイブルに、眼に見える物は一時的であり、見えざるものこそ永遠に滅びない、という深い慰めを見つけのです。
私は、本を読み始めてから、片時も、シェークスピアを愛さなかった事はありません。何時頃、ラムの〃シェークスピア物語〃を読んだものかは憶えていませんが、訳も解らないままに、息をもつかずに読んだ事だけは記憶に残っています。一番生ま生ましい印象を残したのはマクベスです。一度読んだだけで色々な細い事まですっかり覚えてしまいました。読んだ当坐は、幽霊や妖女が毎夜毎夜夢枕に現われました。ありありと、短剣やマクベス夫人の白い、小さい手を見ました。身の毛もよだつような、血腥い、悲しみに打ちひしがれた女王の様な印象を残したのです。
〃マクベス〃を読んでから、〃リヤ王〃を読みましたが、グロースターの眼が飛び出す場面の恐しさは生涯忘れそうにもありません。私は義憤に馳られてぶるぶると体を震わせました。子供の感じ得る最大の怒りで私のこめかみは、づきんづきんと鳴ったのでした。
私は、シャイロックとセイタン（悪魔）を一緒に覚えました。此のユダヤ人は混合されてしまっているのです。当時私は、彼等を哀れに思いました。漠然と、善良になろうと思えばなれ

るのにと思つたのです。ただ彼等はその機会に恵まれなかつたのです。今でも私は、彼等を完全には憎み切れません。時々私は、シイイロックや、ユダ・それにデーヴルさえも、いつかは必ず修繕される、善良という大車輪の折れた輪骨だと考えて見る事があります。

シェークスピアを読んで恐しい事だの、気持ちの悪い事ばかり憶えているのは一寸不思議に思われます。その当時は、輝やかしい、やさしい、そして空想に充ちた戯曲に少しも興呼を感じませんでした。多分その雰囲気が、自分の実生活とそんなに変り映えのしないものだつたせいかも知れません。然し、子供の頃の記憶ほどあてにならないものはありません。何を憶えてようが、どれを忘れようが全く、自由自在、なのです。

私はシェークスピアを空で覚える程何度も何度も繰り返して読みましたが、いざどれが一番好きだと尋ねられると、はたと困つてしまいます。個々の作品は、私の読み取り方の様に千差万別なのです。短い唄やソネットも、戯曲と同じ位の魅力を持つています。然し、如何にシェークスピアを深く愛していたとしても、批評家みたいな読み方で彼の作品を読んだらたちまち退屈になつてしまいます。私は、註釈を覚えようとして見たのですが、その為に興味をそがれ、頭を混乱させられてしまつたのでした。そこで私は、そんな無駄な事は二度としないとひそかに決心したのです。

でも、此の決心は、キッタージ教授にシェークスピアを学んだ時に見事に破られてしまいました。私は、シェークスピアの世界に、今まで想像もつかなかった深い意味が潜んでいる事に気附き、それが次々に明らかにされて行くのに新鮮な悦びを感じたのです。

詩の次に好きなものは歴史です。私は無味乾燥な年代記から、グリーンの偏見がなく美しい文章で書かれた〃英国民の歴史〃や、フリーマンの〃欧州史〃、エマーソンの〃中世紀〃に至るまで手当り次第に読み漁りました。私が朧げながら歴史の重要性を認識したのは、十三才の誕生日に、お祝として贈られた、スウィントンの〃世界史〃を読んででした。今では、それをあまり価値のある本だとは思ってませんが、私の思い出の書として、大切に保存されています。その本で私は、民族の繁栄や荘麗な都市の建設、偉大な指導者の活躍、新しい国土を拓いた技術と知識、文化圏の消長、天才的な宗教家の良民済度など沢山の事を知りました。

大学に居た間に私は、多少なりともフランス語とドイツ語に通ずる様になりました。ドイツ人は、実生活でも、又文学でも、美よりも力を、因習よりも真理を大切にします。彼等がやる総ての事には、赤熱した大槌の様なものを感ずるのです。彼等が話すのは、他人に理解して貰う為ではなく、、話さなければならない衝動に馳られるからなのです。

当然、ドイツ文学には、私の好きな作品が沢山あります。一番私を感激させるのは、自分を

犠牲にして愛する人のために尽す女の人々を書いたものなのです。此の思想はドイツ文学全般に行き渡っていますし、ゲーテのファウストの中に神秘的に表現されています。

この世のもの　すべて果敢なし
かりそめの象（すがた）としてのみ　この世にあるにすぎず
大地、また果敢なくも　植物は、すくすくと成長する

女性の魂（たま）の　いさおしは
かれらを前進の彼方へと　みちびき進む
かくてこそ、言葉にも表現出来えぬ　尊きものそこに実る

私が読んだ範囲でのフランスの作家では、モリエールとラシーヌが一番好きです。バルザックやメリメも、海の香気の様に鋭く私達をうつものを持っています。アルフレ・ド・ミュッツには全く及びもつきません。ヴィクトル・ユーゴーも驚歎すべき作家です。彼の天稟と輝やかしさと、その浪漫主義的な美しさが好きなのです。でも彼は、私の文学的な情熱をあふる人ではありません。然し、ユーゴーにしても、又、ゲーテやシラーなど、その他の偉大な国々の大詩人は永遠なるものの代弁者であり、私の精神は畏懼しながら、彼等に導かれて美真善が一致

する世界に入る事が出来るのです。

つい調子に乗って少し書き過ぎた様ですが、此れでも一番好きな作家について書いて見たに過ぎないのです。此の事から、私の心の友達の範囲は非常に狭く、そしてあまり民主的でもない事に容易に気づかれるでしょう。そしてあまり快く思わない方もあるでしょう。私は多くの作家が様々の理由で好きなのです。

カーライルの武骨さ、ワーヅワースは、自然と人間が一体である事を教えてくれた人として、フッドの奇抜さ、ヘンリックの作品の一風変った面白さ、百合とバラを一種にした様な芳香を放つフウィッティアの詩と、その道徳的な人柄の魅力は、彼を個人的に知っているという理由で倍加されるのです。私はマーク・トウェンを愛します——一体彼を好きでない人が居て良いものでしょうか。神様も彼を愛したのです。それで彼に叡知を、彼が非観論者になるのを恐れて愛と信仰を授けて下さったのです。スコットはその新鮮さと直情の故に好きです。又、ローレルの様に、時折は激怒して、同情と憐愍の赤熱した光を発する誠意や歓嬉となって、赤々と燃え上る情熱的な作家ならどんな人でも好きです。

一言で云うならば、文学は私のユートピヤなのです。そこでは絶対に市民権を奪われる事がないのです。感覚的な障碍も苦になりません。そこの市民はお互に心を割って話し合います。

私が今までかかつて蓄積して来た物も、彼等の〃深い愛と、底知れぬ寛度〃に較べてみると、吹き出したくなる程にちつぽけなものなのです。

第二十二章　自然から受けた楽しい印象

読書の事ばかり書きすぎてしまつたものですから、読者の方々には、他に楽しみを持つてなかつたのかと考える人もあるかも知れません。実は、私を楽しませしてくれたものは沢山あつたのです。今までも度々、自然から受けて楽しい印象と、戸外での遊戯について書いた筈です。私は、まだほんの子供だつた時、ボート漕ぎと水泳ぎを覚え、マサチューセッツのレンサムに滞在していた時などは夏中ボートを漕ぎ暮しました。訪問して来た友達をボートにさそう程楽しい事はありませんでした。云う迄もない事ですが、私は舵を取る事が出来ません。誰かが、私の漕いでいるボートのともに坐つて舵を取ります。でも時々は舵なしに漕ぎました。水草や百合や水際に生い繁つている藪などの香を頼りにして漕ぎ廻るのは何とも云われぬ楽しさです。私は、舵が、とも鍵から抜けない様に、革ひもで結びつけられているボートを使いまし

た。水の抵抗でうまく水を掻けたかどうかが解りましたし、水流に抗っているかいないかなども解りました。風や波に逆って漕ぐのも楽しいものです。自分の運命を小さいボートにまかせ、何はばかるも事なしに、力一杯、ざわざわする波を突切ったり、重々しいうねりを乗り越えたりする程心の躍る事はありません。

カヌー漕ぎも好きでした。特に月夜の……とまで云うと、我が意を得たりと思わず微笑む方も居らっしゃるでしょう。松の葉かげから淡い光を投げかけて静かに中天に昇る月は見えませんが、その衣づれの音は聞える様な気になるのです。時には、可愛い小魚が指の間をすり抜ける事もありますし、沼百合が羞しげに私の指先に触れたりします。入江になった所から漕ぎ出た時などは、空気が急に爽やかに、広々としてくるのが感じられます。輝きに充ちた暖かい空気が、やさしく私の全身をつゝむのです。此の空気が、陽の光に暖められた森影から流れて来るのか、青く透きとほった水面から漂うのかは解りません。此れと同じ様な事を市街を歩きながらも感じます。寒い日にも嵐の吹きすさぶ日にも、又、夜にも昼にも感じました。云わば、温いキスを顔に受ける様に感ずるのです。

大きい帆前船での航行も楽しいものです。一九〇一年の夏、ノヴァ・スコティヤに行き、初めて、太洋に出て見たのです。ロングフェローが夢の国にうたいあげているエヴアゲリンの国

に、二、三日滞在し、それからミス・サリヴァンと私はハリファックスに行き、そこで夏を過したのです。その港こそ、私達の夢の国だったのです。ベードフォード・ベーズンやマックナッブ島、ヨーク・レッダウト、それに、ノースウエスト・アームへの船遠足は何て素晴しかった事でしょう。巨大な、無口な軍艦の陰に坐って、私達は静かな月の夜を過しました。総ての物は尽きざる興味に溢れ、そして美しさに輝いていたのです。此の思い出は永遠に色褪せない光輝に輝いているのです。

或る日私は思い出してもぞっとする様な経験をしました。ノースウエスト・アームで、沢山の軍艦からボートを出して、ボート・レースが開らかれたのです。私達は沢山の見物人に混って帆前船で行きました。幾百の帆前船が芋の子を洗うように右往左往していました。海は穏かでした。競技が終り、家に帰ろうとした時に誰かが、海面にぽっつり浮んだ黒雲を見附けたのです。その雲は見るみるうちに全天を黒々とおおってしまいました。風が出始め、波は、見知らぬ邪魔物に、白い牙をむいて噛みついて来ました。然し私達の小船は、一杯に帆を拡げ、帆綱をぴんと張って、恐れ気もなく激浪に立ち向ったのです。彼女は風を叱咤する様に帆をばたつかせながら巨濤と死に物狂ひの激闘をしました。遂にかじが折れてしまいました。私達の胸は早鐘を打ちました。手は武者震いします。恐ろしくて

震えたのではありません。だって私達はヴィッキング（北欧海賊）の血を引いているのです。それに私達は船長を信頼していました。彼は今まで、その赤銅色の腕で幾多の大暴風雨を乗り越えて来たのです。やっとの思いで港に帰って来ると、大きい軍艦などは私達の船が側を通る毎に挨拶し、乗組員は、勇敢に嵐を突切って来た此の帆前船の船長に大声で賞讃の言葉を投げかけるのでした。

ようやく棧橋の板を踏んだ時には空腹と、疲労で一歩も動けなかったのです。

昨年の夏は、ニュー・イングランドのとても美しい村で過しました。マサチューセッツラのレンサムには楽しかった思い出も、悲しかった思い出も生き生きと残っています。三、四年の間私達は、キング・フイリップス湖の湖畔の、J・E・チャンバレン氏と、その家族の家である、レッドファームに滞在しました。私はその人々の親切さと、そこで一緒に過した幸福だった日々を云い尽せぬ悦びを感じながら思い出すのです。

彼等の子供達の美しい思いやりは本当に有難いものでした。私は、森を散歩したり、水遊びをしたりして、いつも彼等と一緒に過しました。彼等の取り止めのないおしやべりや、私が話してやる妖精や小人、英雄や賢い熊の話に夢中になって聞き入った彼等の幼い姿なども懐しく思い出されます。チャンバレン氏は私に、木や野生の花の神秘を解き明してくれました。私は

樫の木汁が幹の中を流れたり、陽光が木の葉から木の葉へと飛び廻るのを感ずる様になったのです。というのは、

地の底深く潜む根も

陽、空、小鳥を感ずる。

梢の歓喜のごとく

我も、また自然への情感によりそれを感ずる

そんなわけで、眼に見えない物の存在を確信する様になったのです。

私は、太古から人類が持ち続けて来た印象や情緒は、今、現に生活している私達の心の中に生きていると考えるのです。私達は、緑の大地や、さざめく小川の流れを、意識的に記憶しています。此の古代人の贈物を奪い取る事は、耳が聞えないという事も、眼が見えないという事も出来ないのです。此の綿々とうけ継がれて来た能力は、感覚し、聴覚し、視覚し、叉触覚もする魂の感覚――一種の第六感とも云うべきものなのです。

私は、レンサムで沢山の木々と友達になりました。その中の一人である樫の大木は私の誇りなのです。私は、友達の全部に、此の樫の王様を見せびらかしました。それは、キングフィリップ湖を見下す崖の所に立っていて、樹木にくわしい人の意見では、八百年から千年の年月を

経ているのです。そして此の木の下で、キング・フィリップと云うインディアンの酋長が最後の息を引き取ったという伝説があるのです。

私にはもう一人、やさしい、此の樫の大木よりは親しみ易い木の友達がありました。それはレッド・ファームの裏に生えていたリンデンの木なのです。

或る物凄い雷雨の午後、家に何かぶつかる大きな物音を聞き、あゝリンデンの木が倒れたんだなと解りました。私達は幾多の風雨に堪えて来た英雄の最後を見ようと外に出ました。雄々しくも力一杯闘い、遂に力つきて倒れた彼の、痛々しく横わる姿に、私は涙を禁じ得ませんでした。

思わず脇道にそれてしまいましたが、試験が終るとミス・サリヴァンと私は、レンサムを有名にしている三つの湖のうちの一つの湖畔に立っている小さい家に急ぎました。そこは全くの別天地で、勉強や大学、それに騒々しい都会の事は頭の隅に押しやられました。レンサムには、騒々しい世の中で起っている戦争とか同盟とか、又社会闘争とかは噂みたいにかすかに聞えて来るだけだったのです。私達は、残酷で不必要な、遠い太洋で闘われている戦争や、資本家と労働者の争議を風のたよりに聞きました。私達は、私達のエデンの園の外側で、沢山の人々が、その気になれば送れる楽しい日曜日に、額に汗して歴史を生みだす為に苦しんでいるの

を知っていました。でも私達は、そんな事には一向に気を止めませんでした。それらの事は、知らず知らずのうちに忘れ去られてしまうでしょうが、此処にひろがる森や湖、広々とした、雛菊の咲き乱れる野原、それに香わしい牧場は永遠に消える事がないのです。

人間の感知は、眼や耳を通してだけなされるのだと考える人々は、私が、舗装のない所は別として、街の中を歩いているか、田舎道を歩いているかを云いあてるのにびっくりしてしまいます。そう云う人々は、私の全身が、私を取りまいているものに生き生きと反応している事を忘れているのです。街角の騒音は私の顔にぶっつかり、眼に見えない大群衆の足音は私の足から伝わり、調子はずれの狂音は私の全身をいらいらさせるのです。舗道に鳴るゴロゴロという重い荷馬車の音やガチャガチャという機械の音が、眼の見える人々に堪え得るのは、彼等が視覚する物に気を取られているからなのです。

田舎で眼にするのは、自然の美しい姿だけなのです。私達は、混乱した都会で闘われる悲惨な生存競争に悲しませられる必要はありません。私は数回貧しい人々が住んでいるごみごみした狭苦しい所を尋ねた事がありますが、金持ちの人々が、貧乏人は胸がむかつく様な日当りの悪い棟割り長屋に住んで醜く萎びて行くのに、自分達だけは綺麗な家に住んでより強く、そして美しくなって行く事に満足しているのに思わずかっとなってしまいました。此の様な、ごみ

ごみした小路を這いずり廻るボロボロの着物を着、いつも腹を空かしている子供達は、金持の人を見ると、こそこそと姿をかくしてしまうのです。あゝ可愛そうな子供達、私は、日も夜も彼等の事を考えて頭を痛めるのです。一方大人達は、苦役にごつごつした体つきになり、腰も曲つてしまつています。私は、彼等のゴツゴツした手に触って見て、喧嘩より良い所のない、生きる為の闘争とはどんなに苦しいものである事を知りました。彼等の生活は、努力と報いのひどい不均衡に痛めつけられているのです。私達は、太陽と空気は神の、誰にでも与えられべき恵みであると思つています。果してそうでしょうか。彼方、都会の谷間には太陽も輝かず、空気も新鮮ではないのです。あゝ人間よ、

どうしてお前達は自分の仲間を苦めるの。一方には食物のない人が居るというのに、平気で〃我等に日々の糧を与え給え、アーメン〃など云えるの。その様な人々が、業々しさや、騒音や、お金を捨てて都会を去り、森や野原に帰つて簡潔な、そしていつわりのない生活を送れたらどんなに良いでしょうか。そうすれば彼等の子供達は高貴な樹木の様に逞しく成長し、彼等の思想も道傍の草花の様に美しくそして清純になるでしょう。都会で一年生活して田舎へ帰つた時、私は痛切に此の事を感じたのです。

再び柔い春の大地を踏んだり、サラサラと唄を歌いながら羊歯の草叢の中を流れる小川に指

をひたしたり、石塀によじ登って畝々と波打つ緑の野原を眺め渡したりした時、私は、思わず叫びだしたくなる様な悦びを感じました。

ぶらぶら歩きに次いで楽しい事は、二人乗りの自転車を乗り廻す事です。空気を切ってペタルを踏む爽快さ。銀輪の跳動に身も心もはづみ、一人でに唄が口をついて出るのです。

犬は、散歩だろうが自転車乗りだろうが、そんな事には一切おかまいなしに必ず私の後を追つて来ます。私は沢山の犬の友達を持っています。大柄なマスタップ、眼の可愛い狆、森に明るいセッター、正直で人なつこいバル・テリヤ。その中でも一番のお気に入りはバル・テリヤです。彼は系統正しい系図を持っています。くるっとしたしっぽ。犬だという割引きをしても吹き出したくなる様な御面相。私の犬友達は、私が不自由な身の上である事を知ってでも居る様に、私が一人ぼっちでいる時など、ぴったり私により添うのです。

彼等の思いやり深い仕草や、雄弁な尻尾の揺れ動きは、私の心をほのぼのと温めてくれるのです。

雨降りで一日中家に閉ぢ籠められた時は、他の少女達と同じ様な方法で無聊をまぎらわします。編み物やクローセ細工も好きです。気儘な本の拾い読みもします。時には友達とチェッカーやチェスをします。私は、私用の特別のチェス盤を持っています。それは四角な穴が明き駒

がしっかり立つようになっています。黒い駒は平べったく、白の方は一寸盛り上っているのです。全部の駒には真中に孔があいていて、その中に、王様と歩兵の区別をつける真鍮のつまみが差し込まれる様になっています。駒の大きさは白と黒では大きさが違い、白の方が少し大きいのです。ゲームが始まると私は、手でふれて見て相手の陣形を知ります。自分の番だなという事は駒を動かす音で判るのです。

若し、まるっきり一人で、とても退屈な時には〃一人遊び〃をするのですが、これがとても面白いのです。それは、右上方の隅にブレイル式点字で点数が示めされているトランプ・カードでやるのです。

「小さい子供達が居る時は良く彼等と遊びますが、此れ程楽しい事はありません。どんな小さい子供でもとても楽しい相手になってくれますし、彼等に、あなたすき、と云われる程嬉しい事はないのです。彼等は私の手を引っぱっては、自分達が興味を魅かれたものを見せようと躍起になります。勿論彼等は私の掌に字を書くことは出来ませんが、彼等の唇を私が読み取る事はどうにか出来るのです。それでも何を云ってるのか解って貰えないと、彼等は無言劇を始めます。時々は、それでも解らずとんちんかんな返事をしたりする事があります。するときんきんと云う子供の笑声が私に、自分の間違いを感ずかせるのです。此んな風に、幸福な、翼の生

えた時間はどんどん経ってしまい、ついぞ退屈だと思う事はないのです。

博物館や美術骨董品店も楽しみを提供してくれます。眼の助けもなしに、手だけで冷い大理石から、ムーヴマンや、情緒やそれに美などを感じ取れると云ったら不思議だと思う方もいらっしゃるでしょう。然し、私が偉大な芸術品に、触って見るだけで純粋な悦びを感ずる事が出来るのは事実なのです。私の指先は、大理石の線や肉附きから、芸術家が吹き込んだ思想とか情緒とかを感知してしまうのです。

私が会話の時など話相手の顔に触ってその表情を知ると同じ方法で、神や英雄の顔から、憎悪、勇気、愛情などを捜り出すのです。私は、ダイアナのポーズに、森の奥深く秘められた自由としとやかさ、ライオンや怒り狂ってる人々を宥る冷静さを感じます。私の魂は、ヴィナスのゆったりした慈愛のあふれる肉附けに歓喜を感じ、バレのブロンズにはジャングルの神秘を捜り出す事が出来るのです。私の書齋の壁には、その悲しみに充ちたやさしさの中にも凛とした所のあるホーマーの大メダルが、手に触れる位の高さで懸けられています。私はその広い額の皺を一本残らず知っています。その皺の一本一本に、彼が実生活で体験した苦悩を読み取れるのです。然し彼の冷い、見えない眼は、彼が憧憬してやまなかったヘラスの青い空を、私の部屋の壁土にさえ見続けているのです。それに、その美しい、しっかりした、嘘りのない、や

さしい口元、此れこそ詩人の顔であり、悲しみを知り尽した人の顔なのです。私には、彼の不自由さを、永遠に光を望み得ない境遇をよく理解出来るのです。

闇の闇。白昼の闇。

取り返すすべもなく、総ては蝕ばまる。

太陽のかけらをも望み得ず。

私は、ホーマーが、生命を、愛を、戦いを、高貴な民族の偉大な業績を歌いながら、あちらの野営、こちらの仮寓と、自分の道を、おぼつかない、何物かに追われる様な足取りでさまよい続ける姿をありありと瞼に描く事が出来るのです。その歌は光輝に充ちたものなのです。そして私の盲目の詩人は不滅の王冠と永遠の讃歎を与えられているのです。

私は、どうして手が、眼よりも彫刻の美を感じ取る力がないとされているのだろうかと考える時があります。私には、律動的な線の流れは視覚よりも、より微妙に触覚されるのではないかと思われます。それはそれとして、私が大理石の男神や女神に、古代ギリシャ人の脈搏を感じ得る事は事実なのです。

もう一つの楽しみは――他の楽しみより恵まれる機会が少かったのですが――劇場に行く事です。私は、戯曲を読むより、現に舞台で演じられている事を掌に書いて貰う方が好きなので

す。何故なら、その時は、自分が大事件の渦中に居る様に感じられるからです。

総ての人々を、時間も場所も忘れさせてロマンチックな昔の生活に引き戻してしまう偉大な俳優に個人的に会う事が出来るのは、私とだけ恵まれた特権なのです。私はミス・エレン・テリイが、私達の憧れの的である女王に扮していた時に、その顔や衣裳にさわらして貰う事が出来ました。彼女には、敵をたじたじとさせてしまう様な威風がありました。彼女の傍には、王様の装いをしたヘンリイ・アーヴィング卿が立っていました。彼の態度や真面目さには、欠点である神経質な素顔を補ってあまりあるものが感じられました。彼のお面を覆った様に化粧した舞台顔には、とても印象的な、悲しみに充た威厳がありました。

私はジェファソン氏を知っています。私は、彼を私の友の中に数えあげる事の出来るのを誇りと思っています。若し、私の旅行先で偶然彼の公演にぶつかったりすると、必ず彼にお目にかかる事にしているのです。初めての彼の演技を見たのは、まだニューヨークの学校に居た頃でした。"リップ・ヴァン・ウインクル"をやっていたのです。私は、その筋書きを読んだことがあったのですが、実際に見た時程鮮やかに、のろまで、一風変ったリップの魅力にあふれた親切な人柄を、感ずる事は出来なかったのです。ジェファソンの、ペーソスが漂う見事な演技は、私を夢中にしてしまったのでした。幕が降りると、ミス・サリヴァンは、私を楽屋に連

れて行ってくれました。私は、彼の奇妙な衣裳や、長い髪やひげにさわって見たのです。ジェファソン氏は、不思議な二十年の眠りから覚めた時リップがどんな顔をしていたか解らせようと自分の顔にさわらして呉れと哀れなリップが、立ち上ろうとした時にどんな風によろめいたかと実際にやって見せてくれました。

私は、彼の〃ライバル〃も見ました。何時か、彼をボストンに訪ねて行った時、彼は、〃ライバル〃の中でも一番劇的な場面をやって見せてくれました。客間が舞台に早変りしたのです。彼と令息の二人が食卓についています。ボッブ・コーカーが決闘状をつきつけます。私は掌に書いて貰っても解らぬ様な細い演技を、一々さわって見てはっきりと感じ取る事が出来ました。二人は決闘の為に立ち上ります。私は電光石火の様な打ち合いや、力尽きてよろよろと倒れる哀れなボッブの動きにさわったのです。と、此の偉大な俳優が上着をひっぱったり、口をもぐもぐさせたりしました。と、どうでしょう。私の体はたちまち、滝の村、に飛び、私の膝にはシュナイデルのもじゃもじゃした頭が伏せられていたのです。ジュフアソン氏は、〃リップ・ヴァン、ウインクル〃の中の一番素晴しい独白を聞かしてくれましたが、その時、彼の顔からは微笑が消え、その眼には涙が浮かんでいたのです。彼は、私に舞台監督をやって見る様にと云いましたが、私は演劇のセンスを持っていないので、良い加減の想像でごまかしてし

まいました。でも彼は、私の出鱈目な指示に従って見事な芝居をやってのけたのでした。リップが、〃人間て別れてしまうと此んなにも疎ましくなってしまうものなのか〃、と呟きながら犬を捜したり、自分の長い眠りの事を考えて見たりする時のあわて方や、デリックとの婚約書に署名する時の、ふき出したくなる様な迷い方などは、実人生そのものの様に思われました。つまり、事件が起るべくして起る理想的な人生なのです。

私は、初めて劇場に行った時の事をはっきりと覚えています。十二年前の事でした。少女俳優の・エルズ・レスリがボストンに来ていました。ミス・サリヴアンは、私に〃乞食王子〃をやる彼女を見せるようと劇場に連れて行ってくれたのです。私はその時に見た、美しい小劇に纏る悦びと悲しみ、それを演ずる驚くべき少女を忘れようとして忘られられません。

幕になると、私は楽屋に行き、王子の装いをした彼女に会わせて貰いました。房々とした金髪を肩に垂らし、大観衆の前で演じ終ったばかりなのに疲れた様子も見せず、明るく笑むエルズ程に可愛い子供は、此の世に二人と居るものではありません。その時、私はやっと話せる様になったばかりの時でしたので、彼女の名前を間違いなく発音しようと随分練習しました。彼女が私の片言を解ってくれ、優しく手を握ってくれた時の嬉しさは、読者の御想像にまかせる以外に表現の方法がありません。

此れでも、私が、生き生きした美しい生命の種々の面に触れたというのは嘘だというのでしょうか。総ての物は夫々の素晴しい面を持っているのです。暗黒にでも、又音のない世界にでも、私は、自分がどんな環境に置かれようとも、その條件のもとで幸福になれる方法を学んで来たのです。

事実私は、生命を封じ込んだ扉の前で、それが開かれるのを待ち佗びながら独りじっと坐っている時など、屢々、冷い霧の様な孤独感に襲われました。その扉の内側には光明や音楽、それにやさしい友達が居るのです。でも入れないのです。運命に、無言な、無慈悲な運命に禁ぜられているのです。私は彼の命令に反抗しようとします。私の心はまだ若くそして情熱的なのです。然し、私は咽もとまでこみ上げて来る不満をぐっと飲み込んでしまいます。その不満は遮られた涙の様に、再び胸に収められるのです。無言、というものが私の魂の自由を奪っているのです。希望がやさしく〝自己を忘れなさい。楽しくなれますよ〟と囁くのです。そこで私は、他の人々の光を太陽とし、他の人々の音楽を私の交響楽とし、他の人々の唇にほころぶ微笑を私の幸福とするのです。

第二十三章　私の成長記

若し此の本を、私の幸福の為に尽してくれた総ての人々の名を挙げて豊富する事が出来たらどんなに素晴しいでしょう。その中には、文学史の中に並べられて多くの人々に親しい名前もありますし、誰も知らない市井の人もあります。然し、彼等の名前はたとえ有名にならなくても、その心尽しに依って美しくされ高貴にされた魂の中で永遠に生き続けるのです。立派な詩の様に私達の心を励してくれる人々や、表現し尽せぬ同情の籠った握手をしてくれる人々、又、私達のガツガツした心をやさしく慰めてくれる神聖な、豊かな心持を持った人々に合った日こそ、私達の人生の祝日なのです。私達のかんしやくは悪夢の様に拭い去られ、元気を恢復した眼で神の園を見、新しい耳で天人の奏でる音楽を聞くのです。私達の日々の生活を充たしていた空虚は、突然、実を結ぶべき花となって満開するのです。

解り易く云うと、此の様な友達を身近に持っていた時こそ私達の心は穏かなのです。多分その人達は会った事もない、又此れからも会えない人々でしょう。然し、彼等の円熟した人格

は私達の不満に注ぎ込まれる神酒なのです。私達は、彼等の温い手を、慈母の手の様に感ずるのです。

私は時々〝人々と話して、退屈する事はありませんか〟と尋ねられる事があります。私には、此の質問の意呼が解りません、私は、物見高い人々、特に新聞記者の訪問は歓迎出来ません。私は、人と話す時に手加減する人を嫌悪します。それは、散歩の時に歩調を合せようとするのと同じ事なのです。

握手は、最もよくその人柄をあらわすものなのです。私は握手してまごつかされる事があります。まるで北風と握手している様に感ずる、感激を欠いた冷い手を握る事などがあるのです。また、心の奥まで温められる様な握手をする事もあります。その様な手は子供の手に多いのです。握手に、私は、眼射しを感ずるのです。心の籠った握手や、思いやりのある手紙には純粋な悦びを感じさせられます。

私は、一度も合った事のない遠隔の地の友を持っています。あまり数が多いものですから、一々返事を書けない程なのです。そこで私は、此処に、たとえその意呼は充分に理解出来なくても、いつも彼等の思いやりのある言葉に感謝しているという事を書いて置きたいのです。

私は、私の生活が多くの真面目な人々に理解され、又その人々に話しかける事が出来るの

を私の最大の特権の一つに数えています。

ブルックス司教の人柄を知っている人々だけが、彼の友情は、それを真に信じた人々だけのものであるという悦びを知るのです。私は、子供の頃彼の膝に坐り込み、その掌をもてあそぶのが好きでした。そのあいだミス・サリヴァンは、彼の、神や、精神的な世界についての話を私の空いてる方の掌に書いて呉れました。私は子供らしい驚きと悦びに充たされて彼の話に聞き入りました。私は、到頭彼の云ってる総ての事は理解出来ませんでしたが、その中から実生活の美しさや、私の成長につれて美しさと深さをまして行く思想を、吸収する事が出来たのです。或る時私は、あまり沢山の宗教があるのに当惑させられた事がありました。〃絶対唯一の宗教があるのだよ。それは愛の宗教なのだ〃彼は云うのでした。〃天の父を愛し、出来るだけいつまでも神の子を愛しなさい。そうすれば天国に行けるのだよ〃

彼の生活こそは、彼の偉大な説教の生きた実例だったのです。彼の心の中では、愛や博識がその信仰と混り合って洞察力を成していたのです。彼は、

自由たらしめ、高揚せしめ、

謙虚たらしめ、甘美、そして心和ませる総てのものに神宿る。

のを見たのです。

ブルック司教は、特別の教義も、又教理も教えてくれませんでしたが、父としての神、という事と、同胞としての人類、という二つの大切な概念を私の頭に植えつけてくれました。此れこそが総ての教義や礼拝儀礼の根本なのです。神は愛であり、私達の父であり、私達は一様に彼の、子、なのです。それ故に、暗雲は散り、正義が屈服する事はあっても、悪が凱歌をあげる事はないのです。

私に取って、自分は、神の美しい、何処かの園で私を待っているなつかしい友達を持っているという事を除けば、此れからの人生についてあれこれと空想を廻らす程楽しい事はないのです。その友達は、死んでしまってから長年経つのに、いつか突然やって来て、生前の様に私へやさしい言葉をかけてくれたとしても、少しも意外に思わない程、常に身近に感じられるのです。

ブルック司教がなくなられてから、私は聖書を通して読んで見ました。それからスウェーデンボルグの〃天と地獄〃や、ドラムモンドの〃人間昇天〃など幾冊かの宗教哲学書を読みましたが、ブルック司教の、愛の教義以上に私を感激させるものはありませんでした。私はヘンリイ・ドラムモンドを知っています。彼の力強い、そして温かな握手を神の祝福の様に思い出します。私の友達のうちでも最も思いやりのある人でした。彼は実に多くの事がらを知ってい

てそれに心がやさしかったものですから、彼の居る所で退屈するなどと云う事は絶対にありませんでした。

私は、オリヴァ・オェンデル・ホルムズ博士を初めて訪問した時の事をはっきり憶えています。彼は、ミス・サリヴァンと私を、何時かの日曜日に訪ねて来る様にと、招待してくれました。それは、私がやっと話す事を覚えた年の早春の事でした。私達はすぐに図書室へ通されました。彼は、炉に急よく燃える火の傍の肘掛け椅子に坐っていました。そして彼は考え込みながら別の日に来てくれと云うのです。

〝それであなたは、一人で静かにチャールズ河のさゞめきに聞き入っているとおっしゃるのですか〟と私は当て推量をして見ました。

〝そうです。〟彼は答えました。〝チャールズ河には沢山の懐しい思い出があるのです。〟部屋の中には本がぎっしり積んであるという証拠に、インキや、革の匂が漂っていました。私は反射的にそれにふれて見ようと手をさし出しました。それにふれたのは、美しい装訂のテニソン詩集でした。ミス・サリヴァンにそれを知らされて、私は

砕けよ。砕けよ。砕けよ。
汝の灰色の岩頭に、おゝ海よ。

と口ずさみました。でも私は突然やめました。
私は、自分の手に涙がこぼれ落ちるのを感じたのです。私は、私の愛する詩人を感泣させたのです。そして私も強い悲しみに打たれたのでした。彼は私を自分の肘掛け椅子に坐らせました。そして何か面白そうなものを持って来て私にさがさせました。私は彼に頼まれて〝寝室におさまったおうむ貝〟を朗読しました。その詩は、当時私のとても好きなものだったのです。それから後も私は、彼に何度もお目にかかりました。彼に、私は人間を愛する事を教わったのです。
ホルムズ博士を訪問してから少し間をおいて、ある美しい夏の日、ミス・サリヴァンと私は、ウイッティアを、メリマックの閑静な住居に訪問しました。彼のやわらかな物腰と、一風変った話振りに私はすっかり魅きつけられてしまいました。彼は、自分の詩の凸版を持っていました。私はその中から、〝学校時代〟を読んだのです。彼は私が上手に発音するのを聞き、何を読んでいるかすぐ解るといってくれました。それから私は詩の事についての色々の質問をしました。私は、彼の答えを、唇で読んだのです。彼は、詩に出て来る小さい少年は自分だとか、名前はサリイだとか答えました。然し、その外の事は皆忘れてしまいました。私は、又〝ラオス・デオ〟を朗読しました。私が最後の数行にさしかかると、突然彼は、私の手に奴隷

の像を握らせたのです。そのうずくまった体からは将に枷が落ちようとしていました。後で私達は彼の書斎に行きました。彼は、私の先生に対する讃辞を（汝の教え児の精神のいましめを解きし、汝の高貴なる業績に深甚の敬意を表しつつ、我は汝の真の友たるを誓う、ジョン・G・ウイッティア）書いたのです。そして私に、〃彼女こそあなたの魂の解放者だ〃と云ったのでした。帰るとき彼は門の所まで送り、やさしく額にキスしてくれました。私は、来年の夏もお伺いしますと約束したのですが、その約束を果されないうちに彼は此の世を去ってしまったのです。

エドワード・エヴアレット・ヘール博士も私の古くからの友達です。私は八才の時彼を知り、以後年と共に親しくなって来ています。

彼の賢明な、やさしい同情は、長い間私とミス・サリヴアンの精神的なより所だったのです。彼の力強い腕は、幾度も私達を虎口から救い出してくれたのです。その上、彼は、私達にやったと同じ事を、幾多の、苦難と闘い続けている人々にもやったのです。

彼は教義という新しい革袋を、愛という古酒で充たしたのです。信ずるとは、又愛するとは、更に自由になるとはどんな事かを身をもって示めしてくれたのです。彼の祖国愛、同胞愛、それにより高い物を求めての真摯な一生に、私達は生きた教義を発見したのです。彼は偉

予言大な者であり、又魂の鼓吹者であり、更に言行一致の人、総ての同胞の友だったのです。神の恵み彼にあらん事を！

私は前に、アレキサンダー・グラハム・ベル博士に初めて会った時の事を書きました。私は、ワシントンやチャールズ・ダッドレイ・ワーナーの小説で有名になったベッデック村の近くのケープ・ブレトン島の彼の家で、楽しい日々を過した事があります。ベル博士の実験室や広いブラ・ドオルの浜で、私は彼の実験の話を聞いたり、飛行船発明の為の凧上げの手伝いをしたりして、楽しい時を過しました。彼は多方面の学者で、彼の手にかかると、どんなつまらないものでも素晴らしいものになってしまうのです。又、時には変な理屈を捏造して私を面喰わせる事もありました。彼はどんな人をでも、もっと暇な時間があったら発明家になれるという確信を抱かせる事も出来ました。でも彼が最大の情熱を傾けたのは子供を愛するという事でした。

彼が一番幸福だったのは、聾の子供をその腕に抱いている時だったのです。彼の、聾の人達の幸福への貢献は末長く続き、此れから生れて来る子供達への祝福にもなるでしょう。私達は彼を愛し、その業績と、彼が他の人々の心の中に醒まさせた尊い精神を尊敬せずには居られないのです。

ニューヨークで過した二年間に、私は多くの秀れた人々にお目にかかりました。彼等の名前をそれからも屢々耳にしますが、二度と会える機会はないでしょう。その中の大部分の人々の多くとお目にかかったのは、私の親しい友達であるローレンス・ハットン氏の家ででした。彼や、やさしいハットン夫人を彼等の美しい家に訪ね、多くの才能に恵まれた彼等の友人の寄贈してくれた素晴しい著書を見せて貰うのは、私に許された特権だったのです。ハットン氏は、総ての人々浄化し、又創作意慾をかき立てさせる才能を持っていました。

何も〝私の知っている男の子〟という本を読むまでもなく、彼こそは永遠の友であり、又、人間の友であるばかりでなく、総ての生命あるものを慈しみの目をもって世話した人だったのです。

ハットン夫人は誠実な、信頼すべき友です。

私が優美なものを、かけがえのないものとして手にし得たのは彼女のおかげだと云っても過言ではありません。彼女は、私の大学時代を通じて、私の順調な進歩のために種々心を砕いてくれました。難しい問題や、元気を失う様な苦境に立った時、私はいつも彼女から励しの手紙を貰ったのです。彼女こそが、一つの難関が突破されさえすれば、次に控えた幾多の困難も訳なく克服出来る事を教えて呉れた人なのです。

ハットン氏は、彼の家で、私に沢山の有名作家を紹介してくれました。その中でも特記に値するのはウイリアム・ディーンとマーク・ウエンでしょう。私はリチャード・ワットソン・ギルダー氏、エドモンド・クラレンスス・テッドマン氏に紹介して貰いました。又、チャールス・ダッドレイ・ワーナー氏にもお目にかかりました。彼は多くの作家の中でも特に幸福感に溢れたそして誰にでも愛された人です。彼の同情の深さは、総ての生物を、又その隣人を自己を愛する如く愛す、という表現がぴったりあてはまる位でした。或る日ワーナー氏は、森の詩人、ジョン・バロー氏を紹介してくれました。私は彼等の物腰に、彼等のエッセイや詩に感じられる同じ快活さと人をいたわる心の深さを感じ取りました。

私は、此等の文学者達が様々な問題について、名言や奇句の火花が散る討論を理解する事は出来ませんでした。いくら努力しても、私の存在は、丁度あの、アスカニウス、運命の女神の後を追って大またで急ぐイーニヤの後から息せききってちょこちょこついて行く小さい〃アスカニウス〃みたいだったのです。でも彼等は、私を仲間に入れてくれる事もありました。ギルダー氏は、月夜の晩に砂漠を横切ってピラミッドに向った時の旅行の話をしてくれましたし、彼の手紙の署名の下には、私が指でさわって見れる位に深く彼の判をおしてくれました。此の事は、ハーレー博士が、その署名を、ブレイル点字をかたどったブツブツの針孔で書いてくれ

たのを思い出させました。私は、マーク・トウェンの唇から、数々の素晴しいお話を読み取りました。

私は彼の握手にその慈眼を感ずる事が出来たのです。彼は云う事なす事総てに彼独特の癖を持っています。彼がシニカルな奇智を弄んで、何んとも云えず頓狂な声で話をする時でも、その心は、イリアッドの様な人間的な同情に充ちているのだと感ぜざるを得ませんでした。

ニュー・ヨークでは数々の魅力ある人々とも会いました。セント・ニコラス紙の、皆に愛された編輯者、メリイ・メープス・ドッジ夫人や〃ペスディ〃の美しい著者リッグス夫人（ケート・ダグラス・ウイギン）などです。私は、やさしい心の籠った贈物や、彼女の労作である美しい著書や、いつ読み返しても心を温められる手紙、それに、いくら誇張しても誇張し切れない位美しい写真など数々の思い出の品を持っています。もっともっと書く事は山ほどあるのですが、生憎紙数が制限されていますし、又、文章にするには、あまりに心の奥深く蔵い込まれたり、冷い活字にするには失礼にあたる事などもあるのです。ローレンス・ハットン夫人の事も、私を失しはしまいかと、ためらいためらい、やっとの思いで書いた次第なのです。

最後に、二人の友達のことを、つけくわえておきましょう。その一人は、私が時々リンドハーストの家にお訪ねした。ピッツバーグの、オイリアム・ソー夫人です。彼女は、何時でも不

幸な人々を幸福にするために忙しく働いていました。彼女の当を得た忠告は、常に私の良き指針となつたのです。

もう一人の友達にも大変お世話になっています。彼は大企業の経営者として有名です。その能力の故に広く尊敬されています。総ての人々に親切で、人目につかぬようにと良い事をして廻つているのです。結局私は名前を挙げては失礼にあたる、栄光ある人々の群の前に出てしまいました。たゞもう一言彼についてふれておきたい事は、彼が私の大学入学に大きい力をかして下さつたという事なのです。

結局、私の成長記は、友達の列記という事になつてしまいました。彼等は、様々の方法で私の生理的な不具を精神的な特権にしてくれたのです。それだからこそ私は、冷い暗影の中でも、明るく幸福に成長する事が出来たのです。

第二部　教　育

サミュエル・グリッツドレイ・ホー博士が、彼の指を使ってローラ・ブリッジャンに話しかけてから六十五年経っている。ローラ・ブリジマンと、ヘレン・ケラーの名は常に一緒に考えらるべきであり、ホー博士は、ミス・サリヴァンの業績が世間の注目を惹く以前から、それと同じ事を彼の教え児に行っていたという事に留意すべきである。実に、ホー博士は偉大な先駆者であり、彼の仕事を土台として初めてミス・サリヴァンや、その他の盲聾教育者が存在し得るのである。

サミュエル・グリッツドレイ・ホー博士は、一八〇一年、十一月十日ボストンに生れ、一八七六年の一月九日同地で亡くなっている。彼は偉大な博愛家であり、特に意志薄弱児や盲人、それに聾の人々の教育に関心を持ち、社会に認められない前から、貧困者や病弱者の救済のための社会施設を提唱していた。その当時は、一笑に附されただけだったが、今日それは見事に実現されているのである。彼はボストンのパーキンス盲学校の校長として、ローラ・ブリッジマ

ンの事を聞くと直に同校に引き取った。一八三七年・十月四日の事だった。

ローラ・ブリッジマンは、一八二九年の十二月二十一日、ニューハンプシャー州のハノーバーで生れ、ホー博士のもとで教育を受ける様になったのは、彼女が満八歳になろうとしている時だった。彼女は生後廿六ケ月で猩紅熱にかかり、視覚と聴覚を奪われ、更に、味覚と嗅覚も役に立たなくされたのだった。

ホー博士は経験科学者であり、深い信仰と偉大な慈悲心を特徴とするニューイングランドの先験哲学者の精神を持っていた。此の科学と信仰をもって、彼は、他の総ての人々と少しも変らぬ心を持って生れてきた筈のローラ・ブリッジマンに話しかけようとしたのである。彼の計画は凸版本をつかおうとするものだった。彼は、盛り上った文字を実際の物にはりつけ、文字と実際の物、とを同時に覚えさせようとしたのである。彼女がそれを修得すると、彼は、犬に芸を仕込む様に――此れは彼の表現であるが――単語を一字一字に分解したり、又元通りに一つの言葉に組合わせる練習をさせた。此の事に成功して、初めて、彼は、片言もしゃべれぬ赤ん坊の状態に、いや、自然に成長し得なかった為に、それよりひどい知能状態にある盲で聾の子供にでも形の力をかりて言葉を教える事が出来るという確信を得たのである。

彼はローラ・ブリッジマンを盛り上り文字をかりて二ケ月教育した後に、彼の学校の先生を

聾唖者から手指文字を学ぶ様に遊学させた。「その先生がローラに手指文字を教授したのであり、その時からローラの意志表示の手段は手指文字がつとめる様になったのである。
一年か二年で、ホー博士は、ローラ・ブリッジマンを直接自分の手で教育する事を止め、他の先生達にゆだねた。彼等はその後をうけて、博士の指示通りに教育を進めたのである。
ホー博士の業績は、如何に高く評価されても評価され過ぎるという事はない。彼は、その方法の探究に常に科学者としての態度を失わなかった。彼は研究室の人として、ローラ・ブリッジマンの成長記録を取り続けたのである。当然彼の記録は用意周到で組織的なものである。それに反して、単に科学者としての立場だけから云えば、ヘレン・ケラーの綿密な成長記録が残されていないという事はまことに遺憾に堪えないのである。然し、此の一事に、ローラ・ブリッジマンとヘレン・ケラーの相異点が如実に現われているのである。つまり、ローラは終生、不幸にも一つの研究対象以上に成長出来なかったのであり、ケラーはたちまちに一個の眼醒めた人格に成長してしまい、その先生の科学的な研究の対象となるどころか、彼女を自分の教え児の成長に息せききってついて行かなければならなくしてしまったのである。
　或る意味では、此れは残念な事である。ミス・サリヴァンは、ヘレン・ケラーが、ローラ・ブリッジマンよりも興味ある、そして成功の可能性のある研究対象であると悟り、その手紙の

中で記録を取っておく必要がある事を認めていた。然し彼女の能力をもってしても、その教え児の、その成長自体には何の利益にもならない記録を取る事は出来なかったのであり、実験や観察の対象とする事も不可能だったのである。実験というものはすぐに結果を結ぶものでもないし、結んだとしても、それが明瞭にその結果であるかを見分ける事は不可能な事なのである。更に結果を記録する事は、結果その物や、新たに準備さるべき実験の後廻しにされざるを得ないのである。ミス・サリヴァンの記録が完全なものになり得なかった理由として、更に二つの事を数え上げる事が出来る。一つは、記録を取る事が彼女に取って重すぎる負担であったという事と、他の一つは、彼女の記録が歪められて公表され、彼女はそれにひどく憤慨させられたという事である。

彼女がホー博士の養子で、パーキンス盲学校の校長であるミカエル・アナゴス氏にその記録を送ると、ボストンの新聞が、直ぐに、ヘレン・ケラーについて誇張した記事を載せ出したのだった。ミス・サリヴァンは抗議した。彼女は、ヘレン・ケラーを教育し始めてから五週間目の一八八七年、四月十日附けの手紙で次の様に云っている。

〃——ヘレンの事について馬鹿げた事を載せたボストン・ヘラルドをお送り下さい、ヘレンがもう流暢に話し始めたなどと、馬鹿も休み休み云って貰いたいものです。だったらどうし

て、二つになつたばかりの赤ん坊が〃ちょうだい、うまうま〃といつたり、〃あんよじょうずなどいうのを流暢に話すといわないんでしょうか。若しヘレンが流暢に話すというんなら、赤ん坊が手足をばたつかせたり、キーキー云ったり、ふんふん云ったり、ぶつぶつ云ったりしながら片言を混えるのは流暢いやそれよりも雄弁であるといっても良い筈です。私の友達の期待に添おうとしてやった骨折りを評価して下さるのは有難い事ですが、褒められたからと云って有頂点になる程の馬鹿ではないつもりです。本当に、あまり迷惑をかけて貰いたくないと思っています。

一八八八年三月四日の手紙では、

〃私とヘレンについての噂が全部私達の耳に入ったらどんなになってしまうでしょうか。私は、世間でどんな事を云われているか知っています。毎日毎日馬鹿げた手紙が舞い込んで来ます。事実は新聞種になんかなり得ない事なのです。それで変な事をつけ加えたり、大けさな誇張をしたりするのです。或る新聞に至っては、ヘレンが積み木で遊んでいる所を、幾何の問題を解いているのだという記事を載せました。此の次に、彼女は遊星の起源と将来についての論文を書かせられるかも知れません。

一八八七の十二月に、ヘレンの事にふれたパーキンス盲学校の校長の最初の公開報告書が出

版された。此の報告書のために、ミス・サリヴアンは、アナゴス氏の要請で渋々ながら彼女の記録を提供したのである。此の、報告書の所々に引用された彼女の記録と、それから友人あての彼女の手紙だけが、現存するヘレン・ケラーについての、正確な資料なのである。報告書の事について、ミス・サリヴアンは、一八八七年十月三十日附けの手紙で次の様に云っている。

〃私の、報告書、なるもののために書いた記録をお読み下さいましたか、アナゴス氏は大変悦んで下さいました。彼は、ヘレンの進歩は〃追い風に満帆を張った〃ものだとか何とか、彼女の先生にしきりとおべんちゃらを云っています。彼は誇張しています。全体を通じて彼の文章は華やかすぎますし、何の飾り気のない事実も、私をまごつかせる様な具合にあつかわれています。彼の目には、過去二・三カ月の仕事が満帆に風をはらんだものの様に見えたとしても、それだけでは、人目につかぬ成果を結ぶ、とどこおり勝ちで、苦難に充ちた一歩一歩が見逃がされてしまう事になります。〃

アナゴス氏は、パーキンス盲学校の校長であつたために、とに角、より正確なミス・サリヴアンの意見より、彼の云う事の方が世間に大きい反響を呼び勝ちだつたのである。新聞も、アナゴス氏の含みをうけて誇張しただけに過ぎなかつたのである。ミス・サリヴアンはケラー家に雇われて一年経つと、ヘレンと共に馬鹿げたつくり事の中心に祀り上げられてしまつたので

ある。それにつれて、世界中の教育者達が一齊に云いたい放題の事を云い出し、事態を益々混乱させてしまったのである。今ふり返って見ると到底正気の沙汰とも思われない事が平気で云われたのであった。然し、聾教育者達が、ミス・サリヴアンの行った事は不可能であることを、彼等の経験から割り出して反駁し出すと、彼女の記録は評価し直されたのである。それというのもアナゴス氏の文章が故意に焦点をぼかす様なものであったためであらう。この様にして、若し正確に伝えられていたら全く何の問題も起さなかった筈のヘレン・ケラーの話は、不幸にも誇張されその結果として無知な人々の盲信か、疑心深い人々の不信かの何れか一つを選ばなければならなかったのである。

次いで一八八八年の十一月に再びパーキンス盲学校の公開報告書が、ミス・サリヴアンの記録と共に発表されると、それ以後は、アダムズ氏最後のパーキンス盲学校公開報告書が一八九一年に発表されるまで、ヘレン・ケラーの事にふれたものは何も公表されなかった。一八九一年の報告書に、ミス・サリヴアンは、彼女が嘗つて書いたもので一番長く、そして充実した記録を寄せている。その中に、あの〝大事件を惹起した、〝霜の王様〟の事が取り扱われているのである。そしてそれは、此の事件をいやが上にも大事件にしたのだった。

周囲の人々は、自分以上にヘレン・ケラーの事を知っていると気がつくや、ミス・サリヴア

ンは固く口を噤んでしまい、その後十年間再び口を開こうとしなかった。その例外は〝ヘレン・ケラーの思い出の抽き出し〟に書いた文章と、ベル博士の懇請に動かれて書いた、チョートクアでの全米聾者会話教育促進大会に寄せた論文であった。ベル博士や、その他の人々の、一般的に云って、彼女が気のついた事を記録するという事は、教育として当然の事ではないだろうかという問に対して、彼女は、私の時間と精力は総て教え児に捧げられていると、いみじくも喝破している。

ミス・サリヴアンは、大勢の人々が――彼女の友達までが――公表された報告書からまちがった評価をしてしまっても少しも落胆せず、いやそれ所か、かえって明るい心を持ち続けているのであり、ミス・ケラーの自叙伝に何くれと援助して呉れたのである。それ故に彼女は、ミス・ケラーの教育に当った最初の一年に書いた手紙の抜粋をも、快く提出してくれたのであった。その手紙は、彼女が、心をうちあけた唯一の人であったソフィヤ・C・ホップキンス夫人宛になっている。ホップキンス夫人は二十年間パーキンス盲学校の保母をつとめた関係上、その学校の出身者であったミス・サリヴアンは在学中、彼女を母とも慕ったのである。その手紙は、殆んど一週毎の報告のかたちを取っている。そして段々内容が、一般的になって来るにつれて些細な事がらは略かれる様な傾向を持っている。大勢の人々は、ミス・サリヴアンの教育

に、――若しその結果から捜り出すのでなければ――法則らしいものは何もないと考えて来たのであった。然し、その手紙を読むと、彼女は、自分のやってる事を明確に分析していた事がうかがわれるのである。彼女は自分自身の批評家だったのであり、彼女が後で不注意にも自分は何の方則らしいものにも従わなかったと言明したにも関らず、実は自分の方法をはっきりと意識し、聾者だけではなしに総ての子供達の教育にも適応さるべき、ユニークな法則をまとめあげていたのである。彼女の手紙や、記録の抜粋は、教育学に大きな貢献をなすべきものである。ダニエル・E・ギリマン氏博士が、ジョン・ホップキンス大学の総長だった頃の、一八九三年に書いた文章の、

私は、あなたが、あなたの教え児の教育の為に用いられた種々の方法を説明なさった文章を只今読み了えました。私はただただ、此の素晴しい方法を思いついたあなたの天禀と、それを遂行するにあたつて、あなたを励ました深いあなたの愛情に、讃辞を捧げるのみであります。

いう一節がそれを裏書きしている。

ミス・アン・マンスフイールド・サリヴアンは、マサチューセッツ州の、スプリングフィールドに生れた。幼時に視力を失い、十四才の時の一八八〇年十月七日にパーキンス盲学校に入

学した。然し、彼女の視力はその後少し恢復されたのである。

アナゴス氏は、一八八七年の公開報告書の中で云っている。〃彼女は全くの基礎から教育を受け直さなければならなかったが、彼女はすぐに頭角を現わし、その才能の素晴しい事を示した。そして事実、真摯な努力に依って見事に立派な教養を身につけたのである。ホー博士の黄金色に輝く言葉と、彼が残した実例は彼女の心に滲み込み、自らも不幸な人々のために働かこうとする彼女の決意を固めさせたのである。そして彼女は、今や、彼の仕事の最も大切な分野の有能な後継者として、彼の側の坐を占めるに至ったのである。〃――ミス・サリヴアンの才能こそは、実に、最も高く評価さるべきものである。

一八八六年に彼女はパーキンス盲学校を卒業した。ケラー大尉が先生を探して来た時、彼に推薦されたのが、彼女だったのである。彼女がその教え児の教育のために準備する事が出来たのは、ケラー大尉の手紙を受け取った一八八六年の八月から、一八八七年の二月までの、僅か六カ月の間だけだった。此の間に彼女は、ホー博士の手になる公開報告書を読んだのである。然し彼女に一番有効な助言を与えたのは、ローラ・ブリッジマンと共に過した六年間の学校生活だったのである。成程、ミス・サリヴアンの仕事を可能にしたのは、ホー博士がローラ・ブリッジマンに行った方法であったとはいえ、盲聾者に言葉を教える方法を発見した功績は彼女

に帰せられるべきである。

我々は、ミス・サリヴァンが、他人の援助を一切受けず全くの独力で此の難問題と対決しなければならなかつた事に注目すべきである。彼女は、その教え児に言葉を教え始めた最初の一年間は、タスカンビヤの僻地にいたし、その教え児と二人、パーキンス盲学校に滞在した時も、ミス・ケラーは正規の生徒としてではなく、お客様としての待遇を受けたに過ぎなかった又、ミス・サリヴァンは、アナゴス氏の指示に従つてヘレン・ケラーを教育したのだと考える事もまちがつている。ミス・ケラーとミス・サリヴァンがパーキンス学校のお客様だつた三年間、先生達はミス・サリヴァンに助力をしなかつたし、アナゴス氏に至つては、ミス・ケラーと気作に話そうともしなかつた。アナゴス氏は、一八八八年の十一月二十七日附けの、パーキンス盲学校報告書の中で云つている。〃ヘレンは、私の懇望に依り彼女の母と先生に伴われて五月の下旬に到着し、数ケ月の間私達の学校に滞在した。

私達は、凸版の本や、玩具の動物、貝殻、木や花の模型など、触覚に依る盲人教育の種々の設備を悦んで提供した。私は、それが、彼女の進歩を捉進こそすれ、阻害したとは思つていない。彼女の教育は、たとえ家にいようと又旅行先に居ようと、一切彼女の先生の手にまかせられているのである。誰もそれにくちばしを入れようとも肩入れしようともしなかつた。

ミス・サリヴァンは、その偉大な仕事を遂行するのに全くの自由を与えられているのである。そして、その結果から察せられる様に、彼女は此の特権を遺憾なく駆使したのである。此の限りに於いて、彼女の幼い教え児が獲得した素晴しい進歩は一般に広く知られており、彼女の輝しい業績は、高く評価されている。然し、真に此の仕事の特異性を理解し得る人だけが、彼女の栄誉は、その知性と叡知、そして明朗さと忍耐強さに依って闘い取られたものである事を認識し得るのである。彼女はその教え児を、永遠の暗黒と寂莫の深淵から救い出し、慈母の如く、厳父の如くに保護し続けているのである。

次いで、ミス・サリヴァンの手紙と、報告書に書かれた記録の中でも重要と思われる部分を掲載する事とする。然し、既に説明された事や、繰り返す必要がないと思われる部分は省略する。又、ミス・サリヴァンの承諾を得て、読者の便に益する為に、文章を書き変えたり補足したりした所もある。又、ミス・サリヴァンが、手づから修正した所がある事もお断りしておく。なお、二、三の重要だと思われる箇所には傍線を引く事とする。然し、色々の都合で、ミス・サリヴァンの、追補したり、復元したりしようとする希望に添い得なかった事は哀心より遺憾とする所である。とは云え、此処に纒め得たものは、今迄に出版されたもののうちでも最も完全なものである。

最初の手紙は、彼女がタスカンビヤについた三日後の、一八八七年三月六日のものである。

〃……〃

〃……私がタスカンビヤに着いたのは六時頃でした。ケラー夫人と、ジェームズ・ケラー氏が出迎えに出て居てくれました。毎日毎日、交代で停車場に来ていたのだそうです。停車場からの一里の道はとても素晴しい景色でした。ケラー夫人はとても若々しく、私よりも若く見えるのにはびつくりいたしました。

ケラー大尉は門まで出迎えて、満面に微笑を浮べて心からの握手をしてくれたのです。私は、一番初めに、ヘレンは何処に居るかと尋ねました。自分ながらおかしい位に張り切っていて、自然に歩く事も出来ない位でした。家に入ろうとすると、一人の子供が玄関口に立っていましたが、ケラー大尉は〃あの子がヘレンです。誰にも聞かないうちから、家中で誰かが来るのを待っているのに感ずいてしまったんですよ。そして、あの子の母が停車場に行こうとすると手に負えない程あばれ出してしまって〃と説明してくれました。私が階段に足をかけようとすると、凄い急で私に飛びつくのです。若しすぐ後にケラー大尉が居なかったら、私は危く倒れる所でした。彼女は私の顔や着物などにさわって見たり、鞄を取りあげて手捜りしたり、果てはそれを開けて見ようとしたりするのです。仲々開かないものですから錠前を捜る様な手附

きで注意深く撫で廻し、それを捜し当てると、私に、開けてという様に何かをひねる手振りをして見せました。その時ケラー夫人が彼女の手を抑えて、鞄をいじってはいけないと合図をしたのです。彼女はさっと顔に朱を注いで、鞄を取り上げようとする母親に乱暴をし出しました。

それで私はその代りに時計をあづけてやったのです。彼女はすぐに気嫌を直したので私達は二階に行きました。二階に上ると、私はバッグを開けて見せたのです。彼女は熱心にそれをひっ掻き廻しました。多分食物はないかしらと思ったのでしょう。それは、彼女の友達はいつもお菓子を持って来てくれたのだろうと考えたからなのです。私は、部屋と、私自身を指しては肯き私が鞄を持って此の部屋に居るという事を解らせ、彼女がいつもお菓子を貰ったという合図をして又肯いたりして私の考えを理解させようとしました。と彼女ははっと理解し、あたふたとお菓子のおみやげがあったという事を母親に知らせる為に階下へ降りて行きました。彼女はすぐに戻って来て、私の鞄整理に手伝いました。そして、とっても滑稽な様子で、私の帽子を覆り、まるで見えでもするかの様に鏡をのぞき込んだりするのです。私は、青白いなよなよした子供を想像していたのです。というのは、ローラ・ブリッジマンが、パーキンス盲学校に来た時の模様を書いたホー博士の記録を読んでいたからです。然しヘレンには、暗い陰が少し

も感じられないのです。彼女は、大柄で、頑丈で、血色が良く、まるで若駒の様に跳ね廻り、不自由な所など少しもないかの様にさえ思われるのです。彼女には、盲の子供によくある神経質な面が、少しも感じられないのです。彼女は均整の取れたとても丈夫そうな体つきで、ケラー夫人の話では、あの不幸な病気の後は風邪一つ引かないとの事でした。彼女は正しい姿勢と、恰好の良い頭を持っていますし、面貌を描写するのは難しい事ですけれど、兎に角悧巧そうなのです。でも、何か、動きというか、魂というのか、深い彫に欠けているのです。口は大きく恰好よくひきしまっています。盲であるという事はすぐに判ります。——一方の眼が片方のより大きく、そして一寸でっぱっています。滅多に笑いません。私が来てからでは精々二度か三度位のものです。それから、母親以外の人には、抱擁されても反応を示しませんし、かえって苛ら苛らする事もあります。それにとても怒りっぽく、我儘で、兄のジェームズ以外は誰もそれを抑えようとしないのです。私が一番頭を悩ましている事は、どうしたら彼女の気嫌を損じないで彼女を教育して行けるかという事なのです。先をあせらず初めは、専ら彼女の気に入るようにするつもりです。力づくで云う事をきかせる愚をさけて、一にも理解、二にも理解という線でやって行く考えです。ヘレンの疲れ知らずには誰でもびっくりさせられます。ほんの一寸でもじっとしていません。がやがやと何処にでも姿を現わすのです。彼女の手は何にでも

さわります。
然し、何物も長い間、彼女の注意を引きつけておく事は出来ません。可哀想に、彼女の落着きのない心は、何物かを求めて暗中を模捜しているのです。何も知り得ず、何物にも満足させられ得ない彼女の手は、それが何の役に立つかを知らない故に、触れたものすべての生命を捜りもらしてしまうのです。
彼女は、私の鞄の整理に手伝いながら、小さい女の子達の贈物である人形を見つけてとても悦びました。その時私は、あ今こそ彼女に最初の言葉を教える良い機会だなと思いました。私は彼女の掌に、〃にんぎょう〃と書いて、頭を上下に振って見せました。此の合図は、〃手に入れた〃という意味だったのです。彼女は、何か貰うといつでも、貰ったものを指さし、次に自分自身を指して頭を上下に振るのです。彼女は面喰った様でした。そして私の手にさわて見るのです。
私は同じ事を繰り返しました。彼女は私の真似をして人形を指さします。そこで私は、彼女がその字を書いたら返してやるつもりで人形を奪おうとしました。すると彼女は、とても怒って人形を固く抱きしめて暴れ廻ります。私は、彼女をなだめようとしてくたくたになってしまいました。でもそんな事は一切無駄だったのです。そんなことをやるより、彼女の気分を転換

される事の方が大切だと気がついたのでした。私は、彼女を放してやりました。然し人形は返してやらなかったのです。その代り、階下に行ってお菓子を持って来たのです。彼女は甘いものが大好きなのです。私は彼女に、私がお菓子を持ってる事を示めし、それを彼女の方にさし出しながら〃かし〃と掌に書いてやりました。

勿論彼女はそれが欲かったのです。それをひったくろうとします。私は再び彼女の掌に書き、軽く叩いてやりました。彼女は大急ぎでその字を書き、私がお菓子を与えると一口で食べてしまいました。多分又奪われては大変だと思ったのでしょう。次いで私は彼女に人形を示めし、〃にんぎょう〃と掌に書きながら、お菓子の時と同じ様にさし出しました。彼女は〃にんぎょ〃と書きました。そこで私は〃う〃を書き加えて、それを彼女に返してやったのです。彼女はそれを抱いて階下に駈け下り、その日は二階に上って来ませんでした。

昨日、私は彼女に縫物帳を与えました。私はまず一列に針孔をあけてそれにさわらせ、その他にも沢山の針穴の列があることを解らせました。彼女は嬉々として縫い始め、たちまち一枚のかーどを縫い上げました。とて手際よくやったのです。私は又一つの言葉を教える事が出来ると思い〃かあど〃と書きました。と、彼女は〃か〃だけを書いてやめてしまい、何かを思い出した様に、食べる手振りを、、階下を指し、私をドアの方におっつけるです。それはお菓子

を持って来いという意味だったのです。お気づきの様に、金曜日に教えた〃か〃という字が何を意味するか、はっきりと解らないながらも、彼女に、お菓子を思い出させるのに役立ったのです。私は、〃かし〃と、終りまで書いてやってからお菓子を持って来てやりました。彼女は大はしやぎにはしやぎました。私は、そこで彼女の掌に〃にんぎょう〃と書いて、それを探す様な身振りをしたのです。彼女は何でも人の真似をするのです。その上、彼女は、私が人形を探している事に気がついたのでした。彼女は、人形が階下にあるという意味で、階下を指さしました。私は、彼女が私にお菓子を持ってこさた時の様に、彼女をドアの方におしつけました。彼女はドアの方へ歩きかけましたが途中で立ち止り、行った方が良かろうか、止した方が良いだろうかと思い惑っていました。そして結局、私を取りにやった方が良いと決めたらしいのです。私は頭を左右に振り、前よりも強く〃にんぎょう〃と書いて、ドアを開けてやりました。然し彼女は従おうとしないのです。彼女は、その時まだお菓子を食べ続けていましたので、私はそれを奪い取り、人形を持って来たら返してやると云いました。彼女は満面を朱にして、暫くじっとつったっていましたが、とうとうお菓子欲しさに勝てず階下に駈け下りて行き人形を持って来たのです。云うまでもなくお菓子は返してやりました。然し、彼女を再び私の部屋に入れる事は出来ませんでした。

今朝、私が此の手紙を書いていた時、彼女は散々私の邪魔をしました。背中に廻って便箋に手をついたり、インキ壺に指を突込んだりするのです。此の染点も彼女のおいたです。キンダーガーデン・ビードを与えてやっとおとなしくさせる事が出来たのです。初めに二つの木の玉を通し、次に一つのガラス玉をつないで彼女にさわらせて見させ、それから、糸と、此の二種類の玉が入っている箱にさわらせました。彼女はこっくり背いてすぐやり始めましたが、木の玉だけをつなぎ出すのです。私は頭を左右に振って玉を全部抜かせ、二つの木の玉と、一つのガラス玉にさわらせました。今度は一つのガラス玉を初めにつなぎ、二つの木の玉をその次にし、順序をあべこべにするのです。そこで私はふたたびそれを抜き取ってしまい、二つの木の玉を初めに、その次にガラスの玉をつながなければならない事を解らせました。彼女は一度飲み込むとまちがいませんでした。そして素速く、どんどんつなぎ出したのです。私は、全部つなぎ通すと、その糸の両端を結び首にかけてやりました。次の糸の時、私は、通した玉がすぐに抜けてしまう様に糸の端に結び目をつけてやりませんでした。玉はとおされる尻からどんどん抜けてしまいます。彼女は此の難問を、最初の玉を糸に結びつける事で見事に解決してしまったのです。私は、此の頭のよさにすっかり感心してしまいました。彼女は、時々、私の方に間違いないかと尋ねる様に顔を上げながら、夕食の時までおとなしくとおしつづけました。

私はとても張り切っています。此の手紙も順序立ててかけない程気分が落ちつきません。何から書いた方が良いか見当がつかないのです。此の手紙は成可く他の人に見せない様にして貰いたいのですが、あなたのたってのお望みでたら、お友達に読んで下さるのも止むを得ませんけれども。

私は今朝、ヘレンと彼女の事を思えばこその喧嘩をしました。どんなに強制とい事を避けようとしても、結局そうせざるを得ないのです

ヘレンの食事の行儀と来たら全くあきれ返ったものです。他の人のお皿をつまんでみたり、大皿が廻って来ると手づかみで自分の好きなだけつかみ取ったりするのです。今朝私は、彼女が私の皿に手を伸ばすのを遮りました。彼女が素直に云う事をきかないので私も意地になってしまったのです。一緒に食卓についていた人達は皆気分を害されて席を立ってゆきました。私はドアを閉め食事を続けようとしましたが、何も喉を通りませんでした。ヘレンは足をばたばたさせたり、泣き叫んだり、私の椅子を引っぱったりしながら床の上をゴロゴロ転げ廻っていました。彼女は一時間半もそんな事をやっていましたが、ふと、私が何をやってるのかと起き上って見るのでした。私は、私が何か食べてるかはさわらせてやりましたが、皿には絶対手を

さわらせてやりませんでた。彼女は私をつねるのです。その都度、私は彼女をひっぱたいてやりました。と、彼女は、テーブルの廻りをぐるっと廻って、他に誰かが残っているかを誰べて見ましたが、誰もいないのに面喰った様子でした。暫くして彼女は、自分の席に戻り、手づかみで食事の続きを始めました。私は、彼女に匙を握らせましたが、彼女はそれを床に投げ出してしまったのです。私は拾いなさいと云いつけました。やっとの思いで彼女を坐らせ、匙を握らせ、一掬い一掬い口に入れてやりました。とうとう我を折った彼女は、やっとの事で食事を終る事が出来たのでしたが、安心するのは未だ早すぎたのです。今度はナプキンをたたませる事でもう一悶着起さなければならなかったのです。彼女は食べ終るとナプキンを食卓に投り出してドアの方に駈け出そうとしました。戸が閉ってるのに気がついた彼女は、又かんしゃくを起し出すのです。それでナプキンをたたませるのは次の日まであづかりにしなければなりませんでした。私は、彼女を外に遊びに出し、部屋に戻るやベッドに身を投げ出して充分に涙を流すまで気分が晴れませんでした。此の小さい貴夫人に、服従と愛という、総ての事の基礎を教える為だけでも、此れに類した不快な事を幾度か経験しなければならないでしょう。

でも御心配には及びません。人事を尽して天命を待つだけです。ケラー夫人はとても良い方です。さようなら。

月曜日の午後

此の間のお便りからずつと、ヘレンと私は、彼女の両親の家から約四分の一哩離れた〃蔦の家〃と呼ばれるケラー家の母屋からすぐの所に建っている家で、二人だけの生活をしています。私は彼女の教育は、甘かし放題の家族の中でやっていたのでは何の成果もあげ得ない事に気がつきました。私が来るまで、彼女は、母親だろうが父親だろうが、又召使や遊び相手のニグロの女の子に、誰れかれの見境いもない横暴を働いていたのです。時々、兄のジェームズがやる以外は、誰も真面目になって彼女の我儘をたしなめようとしなかったのです。それで彼女は、総ての暴君の様に、頑固に自分の神聖な特権を保持して、好きなだけの我儘を振舞っていたのです。若し彼女が自分の望む物を手に入れる事が出来なかったら、それは、彼女に、自分の臣下をしてそれを理解させる能力がなかったからなのです。気に入らない事があるとすぐに癇癪の雷を落すのです。此の雷は、彼女の体が大きくなるにつれて益々恐ろしいものになって来ているのです。私は、彼女の教育を始める前に此等の困難を処理しなければなりません。彼女はどんな些細な事でも決してゆづろうとしません。なだめる事もすかす事も出来ないのです。髪を梳くとか手を洗うとか、靴を履かせるとかいうつまらない事にも大悶着を起さなければならないのです。当然家族の人々、特に父親は、彼女が泣き叫ぶのに堪えられず仲裁に入るのです。今まで家族の人々は、此の様な悶着を起すのが厭だったために彼女に譲歩していたに

違いありません。その上、彼女の友達の種類や、その経験は、益々私の立場を不利にするものでした。私は、彼女が素直になるまでは、何をしても無駄だと悟りました。私は反覆熟考して見ました。考えれば考える程従順こそは知識へ通ずる最短距離であり、愛情こそ子供の心を釣る最上の餌であると云う確信を強めたのです。此の間の手紙で云った様にあせらずゆっくりやって行くつもりです。私は彼女を普通の子供と見做してその愛と信頼を得ようと思うのです。でも私は、一般に行われているお菓子をやったり、褒め千切ったりする事が何の効果もない事に気がつきました。彼女は、自分に都合の良い事は、何でもあたり前の様に受け入れるのですが、都合の悪い事だと、抱擁をすら拒むのです。彼女の愛情や共感、叉、是認などという、子供らしい心に接触する方法は何一つないのです。彼女は何をするにも気まぐれで、無目的なのです。此んな状態ですから、私達の折角の計画も全く水の泡となってしまうのです。私達は結局、絶対絶命の瀬戸際に立たされた時にちらと頭をかすめる本能的な魂のひらめきに頼らざるを得なくなってしまうのです。

私はケラー夫人と、心の奥を割って話し合い、現在の環境ではヘレンを教育するが如何に難しいかを説明しました。私は、ヘレンは少くとも二・三週間家族から離れて、私に従順になり、私を信頼する様にならなければ何にも手をつける事は出来ないと、私の考えを話しまし

た。ケラー夫人は、自分でも熟慮して見、ケラー太尉にも相談して見ると答えました。ケラー太尉はすぐに同意し〃屋敷跡〃のあづまやが良いだろうと提案してくれました。彼の話では、ヘレンはそこに幾度も行った事があるから、良く知ってるに違いないという事でした。然し、ヘレンが細い事まで憶えている筈もないのです。毎日誰かしらが様子を見に来ても勿論彼女に気づかれないようにしなければなりません。私は大急ぎで此の計画を実行に移しました。そして、今、此処に居る訳なのです。

此の小さい家は、実に楽園あづのまやです。大きい炉と張り出し窓のある、広い四角な部屋と、召使のニグロの少年が寝る小さい部屋とがあります。家の正面には、物凄いいきおいで繁茂している蔦がからみついた廊下があつて、庭を望む事も出来ない程です。食事は家から運ばれて来ます。大底の時は廊下で食べます。火の気が欲しい時にはニグロの少年がおこしてくれますので、私はヘレンにだけかまっていれば良いのです。

彼女は初めとても怒りました。足をばたつかせたり、金切り声をあげたりして、一時は失神状態になってしまったのですが、夕食が運ばれて来た頃には落着き、おいしそうに食べました。でも、私には一指も触れさせなかったのです。寝るまでおとなしく人形遊びに耽ってお り、着物も素直に脱いだのですが、私が傍に入って行こうとすると、ぎくっととび起き、どう

してもベッドに戻す事が出来ないのです。私は風邪を引かせては大変だとばかり懸命に説得しようとしました。遂には組打ちになってしまいました。二時間位やりました。此んなに力のつよい、片意地な子は見た事がありません。幸な事に、私も一旦云い出したら後に退かぬ方ですし、それも力もいくらか強かったものですから、どうにかこうにかベッドに押し込む事が出来ました。彼女はベッドの隅っこの方に、体を丸くして眠ったのです。

次の朝は、すっかりおとなしくなっていましたが、ホームシックになっていた事も確かでした。誰か迎えに来ないかと戸口に行って見たり、母親という合図の、頬をなでる身振りをしたりしては、悲しそうに頭を振るのです。彼女は人形と遊ぶだけで私を無視し続けました。ヘレンの人形で遊んでいる様子は面白いものでもあり又、哀れをそそるものでもあります。彼女がその人形に愛情を持っているとは露ほども考えられません。抱擁する事もないのです。それでも彼女は、母親の様に、又乳母が彼女の妹にする様に、一日中着物を着せたり脱がせたりするのです。

今朝、彼女のお気に入りの人形であるナンシィは、嫌って牛乳を飲まうとしませんでした。彼女は突然コップを下に置き、背中を軽くたたいたり、やさしくゆすってやったりしながら、そこら中をあやし廻るのです。四、五分も、此んな事をやっていたでしょうか、突然ナンシィ

は冷酷に床の上に投り出され、傍に押しやられ、今度は、大きい桃色の頬をした髪の毛のバサバサした子供達が、此の小さい母親の公平な愛情を受け始めたのです。

ヘレンは様々の言葉を覚えましたが、それをどういう風に使うものかも、又、総てのものに名前がある事も知りません。でも私は楽観しています。前にも書いた様に、彼女はとても明い性質で、活動的で、身のこなしが敏捷なのです。

一八八七年三月十一日　アラバマ州、タスカンビヤ。

私の仕事はとてもうまく行っています。御安心下さい。昨日、今日と、何の悶着も起しませんでした。彼女は三つの新しい言葉を覚えました。私が実物を与えますと、すぐに、その名前を書きます。でも矢張り、勉強の時間が終るのが待ち遠しいらしいのです。

今朝は戸外で本当に楽しそうにはしゃぎ廻りました。彼女は黄楊の垣根にさわって見た途端自分が何処にいるのか解ったらしく、私には解りそうにもない訳山の合図をするのです。それが〃蔦の家〃の人達に馴染みの合図らしい事だけは解りました。

私は今、驚くべき報せを受け取りました。アナゴス氏は、昨年の夏ケラー大尉から手紙を受け取る以前に、ヘレンの事を知っていたらしいのです。ケラー家と親しい、フロレンスで先生

をしているウイルソン氏は、昨年の夏ハーバード大学の講習を終ると、彼の友達の子供の為になる事はないかしらと、パーキンス盲学校に行って見たのだそうです。彼はそこの校長先生らしい紳士にヘレンの事を話したらしいのです。彼の話では、その紳士はあまり気乗りしなかったらしいのですが、兎に角尽力して見ます、と約束したとの事です。アナゴス氏が、此ういう経緯を持ちながら、全然それにふれなかったという事は、驚くべき事ではないでしょうか。

一八八七年、三月十三日

今朝は、私、嬉しくて舞りだしたいようなんですの。奇蹟が起ったので、光明がパット闇を照らしたのです。私の教え児が、理解という事を覚えました。事情は一瞬にして変ってしまったのです。二週間前まで手のつけられなかった駄々っ子がやさしい子供に変貌しました。彼女は今、手紙を書いている私の傍で、おとなしく、スコッチ・ウールを編んでいます。その顔は玲朗で幸福に充ちています。彼女は此の間編物を覚えました。それでとても得意なのです。部屋の隅から隅にとどくような長い糸を編んだ時の騒ぎったら大変でした。自分の腕を叩いてみたり、自分の苦心の結晶に頬ずりして見たり、そこいら中をとび廻るのです。彼女は私にキスさせる様になりましたし、特に御気嫌な時は、短い間ではありますが、私の膝に抱かれたりも

します。でも私に抱擁を返えそうとはしません。第一歩が、本当の意味での第一歩が踏みだされたのです。野獣は素直に躾を容け入れる様になったのです。いざやって見ると案ずる程の事もありませんでした。無垢な心に萌え出した美しい知性の芽を育てるのが私の楽しい務めなのです。ヘレンの変化には、他の人々も気がついています。彼女の父親は、事務所への行き帰りに必ず顔を出すのですが、楽しそうに珠をつないだり、縫物帳に針目の線をつけたりしている彼女を見て〃何ておとなしくなったんだ〃と目をみはるのです。私が出来るまでの彼女の動作は全く行きあたりばったりで、人々は、何処か不自然で、不気味とさえ思えるものを感じていたのでした。又、彼女の食慾が減った事も顕著なものです。彼女の父親などはとても心配して、家に連れて帰ろうか、などというのです。ホーム・シックにかかっているのだというのです。私はそれに同意出来ないのですが、間もなく、私達の小さな深窓を去らなければならないと思います。

ヘレンは此の数日のうち幾つかの名詞を覚えました。〃ゆのみ〃、〃みるく〃が一番厄介だった様です。此の二つの言葉を混同している証拠に、〃みるく〃と書いて湯呑を、〃ゆのみ〃と綴って飲む真似をするのです。総ての物が名前を持っている事はまだ知りません。

昨日は、ニグロの少年をヘレンと一緒に勉強させて見ました。此れは彼女をとても悦ばせ、

パーシイなんかに負けるものかという自負心をかきたたせました。彼が間違ったりするととても悦び、何度もその字を繰り返えさせるのです。若し彼が正しく書いたりすると、彼女は、軽くではありますが、無闇に彼の頭を叩くのです。私には、パーシイが頭をそらそうとするのは、それをさける為ではないかと思われる節もない訳ではありませんでした。

此の間、ケラー大尉は、御自慢のセッターのベルをつれてやって来ました。彼は、ヘレンがベルを忘れてしまったのではないかと心配するのでした。というのは、その時、ナンシイに風呂を使わせていた彼女は、ベルなどに眼もくれようとしなかったのです。ベルは強いて彼女の注目を引こうともしませんでした。どうも彼は、今まで此の女主人にこっぴどくあつかわれて来たらしいのです。でも、彼女は、犬が入って来てものゝ三十秒と経たたぬうちに、クンクン鼻を鳴らし人形をたらいに投り出して部屋のあちこちを捜り始めたのです。彼女は、ケラー大尉が立っていた窓際にうづくまっているベルにつまづきました。彼女が犬に気附いたのは明らかでした。彼女はベルの首っ玉にぎゅっと抱きついたのです。そしてその傍に坐り込むや、その爪をもてあそび始めたのです。私達は初め、何をやっているのか見当もつきませんでした。所が彼女がしきりに自分の掌に〝にんぎょう〟を書いているのを見つけ、ベルに字を教えているのだな、と漸く気がついたのでした。

一八八七年、三月廿日

ヘレンと私は、昨日家に帰りました。もう一週間居れなかつたのは残念なのですが、私の自由な時間だつた過去二週間に、出来るだけの事はしたつもりですし、此れからは、ヘレンとの間の悶着も起りっこないと思うのです。最大の難関は突破されました。首を上下や左右に振つての〃えゝ〃とか〃いゝえ〃とかは、ヘレンに取つて、もう、冷いとか熱いとか、又、気分がよいとか悪いとか云う事と同じ位に、はっきりしたものになつたのです。然し私は、彼女があれ程の苦痛と混乱の代償を払つて学び取らなければならなかつた勉強が、もう此れで終りだなとは思つておりません。きっと、彼女と甘すぎる両親とに板ばさみにされる事でしょう。私はケラー夫人と、ケラー大尉に、決して私の教育に容嘴してくれぬ様にとおねがいしました。ヘレンに、思い通りの我儘を許す事が結果する恐ろしさと、その我儘を矯正する難しさを説明しました。彼等は、私が自分の方針通りにやる事を許してくれ、出来るだけの手助も約束してくれました。自分達の目にあまりながら、手をこまねいて見ているより方法のなかつた事を、私が見事にやつてのけたので信頼してくれたのです。でもそれは余程の決心を要する事なのです。彼等の不幸な、小さい子供が罰を受けたり、気に向かない事をやらされたりするのに目を

覆っている事が彼等に取って並大低でないのは理解出来ます。私が、ケラー夫人と、ケラー大尉は二三時間話しただけで（彼等は総ての点で同意してくれました。）自分がナプキンをきちんとかけなければならなくなってしまったのは、ヘレンに不審を起させたに違いありません。私は、幾度もヘレンにナプキンを掛けさせようとしましたが、その都度彼女はそれをむしり取って床に投げ捨て、仕舞にはテーブルを蹴ったりして暴れ出すのです。私は、彼女の食べ物を取り上げ、食堂から連れだそうとしました。すると彼女の父が私を遮り、自分の子供たる以上仮え理由はなんであろうとも絶食を強いられるような事はないと云うのです。

ヘレンは、夕食が済んでも私の部屋に上って来ませんでした。私と顔を合わせるのが厭なのです。私もその方が良かったのです。次の朝、食堂に下りて行くと彼女は食卓についていました。彼女のナプキンはいつものように顎の下にちょっととめられているだけです。彼女は、私の顔色を窺うようにちらと顔をあげました。そして、別に私が反対しようとしなかったので、軽く胸を叩いて悦びました。食堂を出ようとする時も、私の手を軽く叩いたりしました。彼女が仲直りしたがっているのは明瞭です。それで、私は、今日は勉強をさせる事が出来るなと思ったので食堂に戻りナプキンを持って来ました。ヘレンが、勉強しようと私の部屋に上って来た時には、お菓子の――正確に、早く字を綴った時に褒美として与えていた――ほかは、総て

の勉強道具をテーブルに揃えて置きました。彼女はいち早くお菓子のない事に気がつき、それと合図をします。そんな事はおかまいなしに私はナプキンを示めし、それを彼女の首の後でとめ、ついでそれをむしり取って床の上に投げ捨て、激しくかぶりを振って見せました。此の事を数回繰り返しました。彼女は、完全に理解したようでした。それは、二度、三度と両手を拍ち、こつくりこつくり肯いたからです。それからいつもの勉強を始めましたが実際の物を与えます。彼女がその名前を書きます。（今では十二知っています。）彼女はその様にして六つほどの名前を書いたのですが、ふと何かを思い出した様に書く手を休め、カサカサとナプキンを探し始めるのです。彼女はそれを首の後でとめ、お菓子の合図をします。（〃かし〃と綴る事に気がつかないのです。）私はお菓子を貰ったら良い子になるでしょうね、と約束させました。いつもよりも大きなお菓子を貰った彼女は胸を叩いて悦びました。

一八八七年、三月二十八日

私達は、生きとし生けるものが青々と生い繁り花をつけひらひらと輝く庭で、終日を過す日が殆んど毎日です。朝食がすむと外に出て、野原に働く人々をも眺めます。ヘレンも例外にもれず土を握ったりして真黒になって遊びのが好きです。今朝ヘレンは人形を植えてしまい、人

形が私位に大きくなるんだとふざけていました。彼女には、此んなひょうきんなところもあるのです。ただ快活一方であると思っているあなたには想像出来ない事でしょう。

十時になると家へ戻り、一寸珠つなぎをさせました。既に様々のつなぎ方を覚え、時には自分で新しいのを考案する事もあるのです。それにあきると、縫物道具と、編物道具、それにクローチェット細工の用具を出してやり好きなものを選ばせました。彼女はとても早く編物を覚え、今は、母親のためだといって布巾を作っている所です。先週は人形のエプロンを作りましたが、実に見事なもので、盲の少女のものとはどうしても思えない位です。でも私は、此の種の仕事が終るとゆっくりします。縫物だとか、クロチェット細工だとかは、悪魔が考え出したものに相違ありません。ハンカーチーフの縁取りを縫う位なら死んだ方がましです。十一時には体操をしました。彼女は徒手体操だけでなしに亜鈴体操もだ知っています。彼女の父はポンプ小屋を改造して雨天体操場にしてやると云いますが、やっぱり私達には、戸外で自由に跳び廻る方が性に合っているらしいです。十二時から一時までは新しい言葉を覚える時間です。でも此の時間だけが彼女に言葉を教える時間だと早合点されては困ります。というのは、私は折につけ時にふれて、たとえ彼女に字というものが何の役に立つか解っていなくても、それを掌に書いてやるのです。夕食後の一時間は私の休み時間にあてられています。彼女は、私が来るま

での遊び相手だった=グロの女の子と、庭でふざけ廻ったり、人形遊びをしたりします。休み時間が終ると、私もそれに加ります。そして家の廻りをぶらついて馬小屋に行ったり、物を捜したり、七面鳥に餌をやったり、又時々天気がよかったりすると四哩から六哩位のドライヴや、〃蔦の家〃や、町の従姉を訪問します。ヘレンは社交的な方です。自分の廻りに大勢の人々を集めたり、お客様になったりするのが好きなのです。そんな時は、大好物のお菓子をふんだんに食べられるからじゃないかと考えています。夕方、八時までの時間は好き勝手な事をして過します。八時になると、此の小さい婦人は着物を脱がされ、ベッドに追いやられます。今では私と一緒に寝ています。ケラー夫人は乳母を雇いたかったらしいのですが、馬鹿で怠惰な=グロ女を雇う暇で私が乳母の役を兼ねた方がどれだけ良いか解りません。ヘレンが何にかにつけて私を頼りにし、片時も傍を離れたがらないようにする事こそ一番の肝要事なのです。それは、或る定った時間を限って教えるより、その時々に覚えさす方がずっと効果的だという事に気がついたのです。

三月三十一日に教えて見たら、名詞を十八と、動詞を三つ覚えていました。その言葉を並べて見ます。×印のついているのは、彼女がひとりで覚えた言葉です。人形、湯呑み、ピン、鍵穴、帽子、コップ、箱、水、ミルク、お菓子、×眼、×指、×つまさき、×頭、上菓子、赤ん

坊、お母さん、坐る、立つ、歩く。四月一日には、ナイフ、フォーク、匙、受け皿、お茶、お父さん、などの名詞と、走る、という動詞を覚えました。

一八八七年、四月三日

今朝とても大切な事が起りましたので一筆おしらせします。彼女は総ての物に名前があり、掌に書いて貰う事こそが、総ての物を知る方法なのだという事を知ったのです。

先に、彼女が〃ミルク〃と〃湯呑み〃でとても苦労させられた事をおしらせしたと思います。今度は〃飲む〃という、動作〃と、〃ミルク〃という物、を混同し始めてのです。今までは飲むという動詞を知らず、〃ミルク〃とか、〃湯呑み〃という言葉を書いてやると飲む真似をしていました。今朝、彼女は洗濯しながら〃水〃という言葉を知りたがりました。新しい名前を知りたい時の合図は、その物をさしてなの、私の手を軽く叩く事です。私は〃みず〃と書いてやったきりで何も新しい事に気がつかなったのですが、朝食のミルクを啜りながらふと、此の新しい概念をかりて〃ミルク〃と〃湯呑み〃の問題を解けるのではないかと思ったのです。そこで私は彼女を井戸小屋につれて行き、私が汲み出す水を湯呑みで受けさせました。冷い水が湯呑みに溢れ出ると、私は彼女のあいている方の手に〃みず〃と書いてやったのです。

冷く溢れ出る水と、〃みず〃という言葉の感覚的な緊密性に、彼女ははっとしたのです。湯呑みを取り落し、ぽかんとしてたっていました。と彼女はぱっと顔を輝かせ、〃ミズ〃と何遍も何遍も書きました。それを確かに覚えたと見るや、地面をさし、ポンプをさし、さらに四つ目垣を指して矢継早やに名前を尋ねたかと思うと、突然私に飛びついて私の名前を尋ねます。私は〃せんせい〃と書いてやりました。丁度その時、ヘレンの小さい妹を抱いた乳母が井戸小屋に入って来ました。ヘレンは〃あかんぼう〃と書いて乳母の方を指しました。家に戻る途中も感激がおさまらず、指先にふれる総てのものの名前を尋ね、たちまちのうちに三十の新しい言葉を覚えてしまったのです。その時の言葉は、戸、開ける、閉める、与える、行く、来る、などその他沢山です。

追伸

昨夜の手紙がポストの時間に間に合わなかったものですから一筆書き添えます。ヘレンは今朝、光り輝く妖精の様にとび起きました。彼女は手当り次第物の名前を尋ね、嬉しくてたまらないという様にキスして廻るのです。昨夜、ベッドに入ってから、彼女は私の腕の中にもぐり込んで来て、自分の方から、初めてのキスをしてくれました。私は嬉しくて嬉しくて、叫び出したい位でした。

一八八七年、四月五日

毎日毎日、いえ、一時間毎にヘレンはぐんぐん進歩してゆきます。今では総ての物が名前を持たなければならなくなってしまいました。何処に行っても、家の中で触れた事のないものを見つけてはその名前を尋ねます。とても熱心に言葉を、誰かれの見境いなしに書いて貰いたがり、そして覚えた言葉を教えたがるのです。又、覚えた言葉を、今まで使っていた合図とおき換えてどんどん実用に移します。新しい言葉を知る程楽しい事はないらしいのです。それに、彼女の表情が日増しに豊かになって行くのも見逃し難い事なのです。

当分の間は、時間を限っての勉強を中止するつもりでいます。文字通り二才の子供を教える様に教育しようと思うのです。それは、先日ふとした事から、言葉とは何かということも知らない幼児をつかまえて、一定の時に特定の場所に呼びつけて定った勉強をさせる愚さに気がついたのです。私は、ヘレンを放っておいて、自分で考える様に仕向けました。私自身も、普通の子供はどういう過程で言葉を覚えるのだろうかと考えて見ました。答は簡単でした。模倣に依るのです。総ての子供は学び取る能力を備えて生れて来ているのです。外界に、充分な刺戟さえあれば、自然に何でも覚えてしまうのです。ほかの人々のやる事を見、自分でもやって見

ようとします。ほかの人々が話しているのを聞いて自分でも話そうとします。といっても、自分で話す前に、それを理解する事が必要なのです。私は此の間からヘレンの幼い従妹を観察し続けています。その子は生後一年三ケ月なのですが、理解は可成り進んでいます。尋ねられると、とても可愛い仕草で、鼻、口、眼や頬、それに耳などをさして見せます。〃もう一つのみんみは〃というと間違いなしにも一方の耳をさしますし、花を握らせて、〃ママにあげなさい〃と云うと母親に渡したりするのです。又、〃おいたさんはどこ〃と尋ねると、母親の椅子の陰にかくれ、本当にいたずらっ子らしい身振りで顔を手でかくし、その陰から私の方をのぞきますし、〃おいでなさい〃や〃キスして〃〃パパんとこに行ってごらん〃などと云う言葉にもまちがいなく従います。此の事から察する事が出来る様に、彼女は此等の言葉を繰り返し繰り返し聞いているうちにすっかり理解してしまったのです。でもそれを真似て発音しようとする試みはまだ窺えないのです。此の観察が、ヘレンに言葉を教える方法のいとぐちとなったのです。私は赤ん坊に話しかける様にして彼女の掌に言葉を書く事にします。彼女が普通の子供と変らぬ模倣力と理解力を持ってるものとしてやって行くつもりです。私は省略のない完全な文章で彼女に話しかけます。意味が通じなかった時には随時身振りや合図で補うつもりです。彼女をある一つのものにとらえられさせたくありません。あらゆる手段を使って彼女の興

味を刺戟しようと思います。そしてどんな結果が出て来るかをよく気をつけて観察致しましょう。

一八八七年、四月五日

新しい方法は素晴しい効果を収めています。ヘレンは既に百以上の言葉を覚え、自分がどんなに素晴しい放れ業をやってるかも知らず、毎日毎日新しい言葉を加えています。彼女は小鳥が飛ぶ事を覚える様に、実際の必要にせまられて覚えるのです。でも、彼女が、流暢に話す、などと思われては困ります。彼女の従妹の様に、彼女の意志表示は一つの単語に托されているに過ぎません。身振りを伴った〃みるく〃は、ミルク頂戴、尋ねる仕草での〃お母さん〃は、お母さん何処に行ったの、〃行く〃は外に出たい、などといった調子です。でも彼女は、〃私にパンを下さい〃と書くとパンをよこしますし、〃散歩に行くから帽子を持ってらっしゃい〃と書くと、すぐに云われた通りの事をします。帽子と散歩は同じ意味だと思ってるらしいとさえ考えられます。それでも、日に幾度も、同じ言葉が繰り返されている間に、それはいつか頭に染附いて、自然に彼女の口をついて出る様になるでしょう。

私達は、知能を発達させ、言葉の習得にも役立つ面白い遊戯をやっています。探しごっこです。初め、ボールとか糸巻とかそれに類したものをかくし、二人で探し廻るのです。例えばボ

ールをかくしたのに筆箱の中を捜したり、糸巻をかくすと一寸四角もない様な箱の中を捜すのです。勿論すぐに捜しあぐねてしまいます。でも此の頃は一時間以上も捜し興じ、段々頭の良さを、時には素晴しい勘のひらめきを見せる様になりました。今朝私は胡桃割りをかくしました。彼女はいくら捜しても見つからないので途方に暮れていましたが、突然、なにか思い出した様に私に駈け寄り、口をあかせて熱心に手捜りするのです。所がそこにも見つけだせなかったものですから、私のおなかを指さして、〃食べる〃と書くのです。此れは〃食べてしまったの〃という意味なのですよ。

金曜日に私達は繁華街に行きましたが、ヘレンはそのとき、ある紳士にお菓子を貰い、全部食べてしまわないで、ポケットにしまい込んだのです。家に帰るや彼女はポケットからそれを取り出しながら〃このおかし、あかんぼうにやって〃といったのです。ケラー夫人は〃いいえ――あかんぼう、たべる――いいえ〃と書きました。ヘレンは揺籠のミルドレッドの所に行きその口にさわって、自分の歯を指しました。ケラー夫人は〃は〃と綴ってやったのです。ヘレンは、かぶりを振りながら〃あかんぼう、は、いいえ、あかんぼう、たべる、いいえ〃と書きました。云うまでもなく、赤ん坊は歯が生えてないから何も食べられないという意味なのです。

一八八七年、四月十日

私にはもう子供染みた道具は不要になりました。来た当時は、何から手をつけたら良いのか見当がつかなかつたものですから、珠とか、カードとかクローチェット細工などを使つたのですが、そんなものを使わなければならぬ課程はもう卒業しました。もう要りません。私は全身全力を打ち込んで今やつている教育法を押し進めるつもりです。その精神は云うまでもなく、総ての知識は、実際に考える事に依つて獲得されなければならないという事です。時間が要る方法ですが、子供に知識を獲得させる一番効果的で確実な方法は、放任して置くというやり方です。テーブルに据えつけ〃はい此の綺麗な積木で石垣をつくつて御覧なさい〃とか、〃素晴しい色紙ね、虹を造つて見ましょうよ〃などと、美しい先生の猫撫で声で指導されるより、自由に放つておかれた方がずつと実効があるのです。此の様にしないと、子供達は、実生活から得た確乎たる知識の代り、唾棄すべき人工的な経験だけを覚える事になつてしまうのです。

ヘレンは、名詞を覚えた時みたいに、何の苦もなく、形容詞や副詞を覚えています。此の形容詞とか副詞とかは、本当の順序から云つたら名詞の先に教えらるべきものなのです。彼女は私の来るずつと前から〃大きい〃とか〃小さい〃と云う事を表わす合図を持つていました。彼

女は小さい物を望んで大きいものを与えられると、かぶりを振り、手の裏皮を一寸つまんで見せるのです。又、大きいと云う事を示めす時には、出来るだけ広く両手を拡げて、大きいボールをつかむ様にそれを丸くするのです。先日私は、此の合図に代るべき〃大きい〃という言葉と〃小さい〃という言葉を教えてやったのです。彼女はそれまでの合図をやめてすぐにそれを使い始めました。大きい、箱を持って来させたり、小さい皿を運ばせたり、言葉通りに、ゆっくり、歩かせたり、早く、走らせたりする事が出来るようになりました。それに彼女は今朝初めて、〃そして〃という接続詞を使いました。私が、戸を閉めなさいと云うと、彼女は、そして、鍵をかけなさいと云ったのです。

ついさっき、彼女はとても昂奮した様に、二階へ上って来ました。何が起ったのか、初めのうちはさっぱり見当がつきません。彼女は、〃いぬ――あかんぼう〃と書いては五本の指を拡げ、一本づつそれをすわずるのです。ミルドレッドが犬に嚙まれたのかなと思って見ましたが、彼女の顔は悦びに輝いているのです。見当もつかない儘に、彼女の後からついて行かざるを得ませんでした。彼女が連れて行った所は井戸小屋だったのです。何と、その隅っこに、セッターが五匹の仔犬を産んでいたのです。私は、〃こいぬ〃という言葉を教えてやりました。彼女がちゅうちゅうとすわずっている指を握り、それに〃こいぬ〃と書いてやったのです。彼

女は、親犬が乳房を含ませているのに深く興味をそそられ〃おやいぬ〃〃あかんぼう〃と何度も書くのです。と、彼女は仔犬の眼があいてないのに気がつき〃めあいてない。——ねむる、いいえ〃と書きました。仔犬が親犬の胸にもぐり込もうと、キーキー云って争うのを、彼女はとても面白がり、〃あかんぼうたべる、おおきい〃と書くのです。私は、仔犬が沢山乳を飲むという意味に取りました。又、彼女は、一本宛の指を起しながら仔犬を指すのです。私は、五という数を教えてやりました。すると彼女は、指を一本つき出して〃あかんぼう〃と書くのです。それは、ミルドレッドが一人、という意味らしいのです。そこで私は、ひとつ、あかんぼういつつ、こいぬ〃と書いてやりました。彼女は暫くの間仔犬をいじっていましたが、突然人間の様に個人名を持っていなければならない事に気がついたらしいのです。私にその名前を尋ねるのでしたが、お父さんに聞きなさいと答えてやりました。と、彼女は、〃いいえ——おかあさん〃と云うのです。明らかに、子供のこと一般については母親の方がよりくわしいと考えているのです。そのうち、彼女は、一匹の仔犬が並外れて小さいのに気がついたらしく、〃ちいさい〃と書き、同時に合図までつけ加えるのです。私は〃とてもちさい〃といってやりました。彼女は、〃とても〃という言葉が、自分の認識した並外れてという事を表わするのだと解った様でした。というのは、家に戻る途中で〃とても〃という言葉を適切に使ったので

す。一つの石は〃ちいさく〃もう一つの石は〃とてもちいさ〃かったのです。又〃あかんぼうちいさい、こいぬとてもちいさい〃とも云いました。かと思うと突然歩幅を換えて、小刻みに歩くのが〃とてもちいさい〃のでした。彼女は、この新しい副詞を、家中のものにつけて廻っています。

定った時間の勉強をやめてからの、ヘレンの進歩には実に驚くべきものがあります。私は、一般の先生がよくやる、自分の教えた事に根がついているかどうかを調べて見る為にそれを引っこ抜いて見たりする愚、にはいつも憤慨させられています。私は、子供は子供なりに学んでいて、播かれた種も時宜を得た時に花を開くものだ、と考えた方が双方の為になる事だと思うのです。その方が子供の為に良い事は確かですし、先生の側から云っても時間の節約になるというものではないでしょうか。

一八八七年、五月八日

私達は、朝食後に長い散歩をする事にしました。好天気続きで、ストローベリーの匂が漂っています。私達が一番良く行く所は、約二哩離れた、テネシィ河畔のケラー渡し場です。私達は、今どんな処を歩いていて、時間は何時頃なのだろうかなどという事は一切考えずにぶらぶ

ら歩きます。結局こういう歩き方が一番楽しいのです。特に、総てのものが新しくそして珍らしく感じられる季節にはその感が深いのです。私は、今になって、これまで何を見て来たんだろうと後悔しています。というのは、道すがら、ヘレンはそれはそれは沢山の事を尋ねるのです。私達は蝶々を追ったりして、まぐれにそれをつかまる事もあります。そして、木蔭や藪の陰に坐って、捕えた蝶々を種にして様々の話をしてやります。若し、私達の勉強が終るまで生き永らえている事が出来たら逃してやりますが、大抵の場合、、此の美しい天使は、私達の勉強という祭壇にその浄らかな生命を捧げてしまうのです。然し彼女は永遠の生命を得たのだとも考えられます。何故って、彼女は、生きた思想に姿を変えたのですもの。言葉の〝考え〟を導く力は、本当に素晴しいものです。ヘレンの新しい言葉は、次々に別の新しい言葉を要求するのです。彼女の魂は、此の絶え間ない活動の中に見事な成長を続けているのです。

ケラー渡し場は南北戦争当時兵隊を渡したのですが、今は全く捨てられ、苔や芦に埋れています。その寂寞の気は、人の心を夢の国に誘います。渡し場のすぐ近くには、ヘレンが、リスの水呑み場、と呼んでいる泉が湧き出ています。その名の由来は、リスが水を呑みに来る所から出たのです。彼女は、リスや兎などの野生動物の死骸を見て、〝歩いている〟リスを見たがっています。多分生きているリスの事なのでしょう。大抵はおひる頃までに帰って来ます。へ

レンは途中で見聞した事を細大もらさず母親に話します。此の一ぺん話して貰った事を繰り返す事は、彼女の頭脳を発達させるのに素晴らしい効果を持っていますし、言葉の獲得慾を煽るための恰好の刺戟でもあるのです。私は、彼女の友達に、彼女のやっている事を描写してやって元気づけ、いやが上にも彼女の冒険心と好奇心を煽ってくれる様に頼んでいます。此れは、子供に自信と、新鮮な興味を持ち続けさすのに役立つのです。そして此れこそが真の意志疎通の基礎なのです。彼女は沢山のまちがいをします。単語や表現を誤用します。後向きに馬に乗ったりする事も平気です。名詞と動詞をごっちゃにしては蛇にまかれた様に苦しんでいます。でも此れは普通の子供だとて同じ事なのです。私は此の様な事をあまり苦にしていません。そんな事は自然に解決される事で話そうとする衝動こそが一番大切なのです。私の役目は、時々忘れた単語や表現を補ってやればそれで終りなのです。それで、彼女の語調は確実なペースで増え、新しい言葉から新しい考えが芽ばえ、そして美しい花を咲かせるのです。此の世界も、此の様にして芽生え続ける言葉と思想に依ってこそ支えられているのです。

一八八七年、五月十六日

私の仕事は日増しに忙しく、そして興味深くなります。ヘレンと云う子は本当に素晴らしい

子供です。実に自発的で、そして熱心なのです。彼女はもう三百位の単語と沢山の熟語を覚えました。最初の言葉を覚えてから三ヵ月そこそこしか経ってないのです。生きた魂の生誕、その成長、微妙な葛闘を見守る事が出来たのは稀有の特権です。此の特権が私に与えられたのです。いいえそれだけではありません。私は、此の天禀豊かな知性を醒めさせ、指導して行く事まで委されているのです。ああ此の神聖な仕事に、今少しの自信を持ってあたられたらどんなに素晴らしいでしょう。私の能力は日日に無力さを暴露して行くのです。計画だけは頭が一杯になる程持っています。でもそれを実行に移す力がないのです。あなたも御存知の様に私の勉強は良い加減で欠点だらけなのです。心のあちこちに自信をゆらがせる限り巣喰っているのです。何度それを払拭しようとしたでしょう。ああ力をかしてくれる人があったら、私はヘレンと同じ位に先生が欲しいのです。私は、若し私にそれを遂行するだけの能力と忍耐があったら、此の子の教育は一生の大事業になると思っています。私は此れだけの事を私の胸に秘めています。ヘレンは本を使わなければならない、という事です。二人共本を使う事を覚えなければなりません。お願いですから、ペレズ、サリイ共著の、精神生理学、を送って下さる様、アナゴス氏に伝言下さい。とても参考になるのではないかと思っています。

私達は毎日本を読む勉強をしています。〃リーダーズ〃を抱えて木陰に坐り、二時間でも三

時間でも、ヘレンの知っている言葉を捜して過すのです。私達は、それを遊戯の様にしてやります。ヘレンはそれを指で、私は眼でどちらを先に見附けるか競争するのです。彼女は、そうしているうちに、私が説明する言葉を（既に知ってる言葉と関連させて）すっかり覚えてしまいます。自分が知ってる言葉を、私より先に見つけた時のヘレンの悦びようったら大変です。しがみついたり、キスしたり、何事が起ったかと思われる程なのです。此の楽しい方法で、一時間のうちにどれだけ沢山の言葉を覚えた事か、傍に居て見て貰いたい位です。

家に戻ると、私は新しい言葉を短い文章にして点字板に並べます。時には此の方法で密蜂とか小猫とか、又少年などのお話を書いてやる事も出来ます。もう彼女を、言葉通りに、二階を上下させたり、家から出入りさせたり、戸を開閉させたり、走ったり、坐ったり、立ったり、歩いたり、横になったり、這ったり、転げ廻ったり、木にのぼらせたりする事が出来る様になりました。彼女は動作を表わす言葉に悦んでいます。だから、動詞を教えるのは何の雑作もないのです。彼女はいつも勉強する意慾を湧きたたせていますし、総てのものを熱心にどんどん吸収して行く姿は、側で見ていても気持が良い程です。彼女は、一つの纒った文章を覚えたりすると、鬼の腕を取った様に得意満面なのです。

ヘレンの悪い癖の一つは、――それは一番手に負えない、そして幼い時からのものなので

が――物を壊すという事です。彼女は、何か自分の邪魔になるものがあると、それが何だろうと無頓着に、払い除けたり蹴飛したりします。コップでも壺でも、ランプを投り出す事さえあるのです。彼女は人形を沢山持っていますが、壊されたのは皆、病気や倦怠の発作ででした先日一人の友達がメンフィスから人形を送ってくれましたので、それを使って壊してはいけないと云う事を教えようと思いました。私は、彼女の手に人形を抱かせ、その頭をテーブに打ちつけ〝だめだめ、ヘレンいけない、せんせいかなしい〟と書きました。そして私の悲しそうな表情にさわらせたのです。そして今度は人形を胸に抱かせ、傷ついた所にキスさせ、優しく抱擁させて、ヘレンよいこ、せんせいうれしいの〟と書き、ほほえんだ顔にさわらせました。彼女は細大もらさず私の動作を数回繰り返し、当惑した様な表情で立ち尽していたのですが、すぐにえみを取り戻し〝よいこのヘレン〟と書いて媚るように、にっこり笑ったのです。そして、人形を、二階の衣裳戸棚の一番上に安置し二度と指一本触れないのです。

アナゴス氏に宜しくお伝え下さい。読んで貰う必要があるとお思いでしたら、そうして貰っても構いません。バルティルモア学校で盲で聾の小供が教育を受けてるそうですね。

一八八七年、五月廿二日

毎日毎日焦ぐつくような暑さです。全然雨が降らないのです。ヘレンには家中の人々が心を痛めています。とても神経質になり、夜は寝附きが悪く、食慾も目に見えて減っています。どうして此んな事になってしまったのかよく解らないのです。医者は神経過敏症だと云ってますが、どうしたら彼女をじっとさせておく事が出来るというのでしょう。彼女は眼の綻が切れたと思うと字を綴り始め、四六時中休みなく続けるのです。私が話しかけたりしなくても、自分一人で書き綴っているのです。疑いもなく、一人で夢の国の物語りを書き綴っているのです。

私は、機械的に穴をあける事が、彼女の神経消耗を避けるのに効果があると思い、ブレイル式点字板を与えました。でも驚いた事に、此の小さい幼女はそれに手紙を書き始めたのです。彼女が手紙という概念を知っていようとは夢にも思わなかったのです。私がボストンに行く折など一緒について来た事はありました。そんな時にその内容を彼女に話していたのかも知れません。又、私がブレイル式点字板で〝盲の友達への手紙〟を書いていたのも知っていました。それにしても、それだけで彼女が手紙という概念をしっかり自分のものにしてしまっているとは少しも思いませんでした。或る日彼女は、穴だらけにした紙片を持って来て、封筒に入れ、投函してくれと云うのです。彼女は〝フランク――てがみ〟というのです。フランクにどんな事を書いたの、と尋ねて見ました。〝たくさんのことば。こいぬ、おやいぬ――いつつ。あか

んぼう——なく。あついヘレンあるく——だめ。ひでり、いけない。フランク——こい。ヘレン——キス。ストローベリー——とてもよい。〃

ヘレンは話すのと同じ位読むのも熱心です。

彼女は文章全体の意味から新しい単語も推量します。彼女の知性の進歩と異常な才能はその熱心な質問に容易に窺い得るのです。

いつかの夜などは、本を抱きしめて眠っていました。云うまでもなく本をよみながら眠ってしまったのです。次の朝、どうして本を抱いて寝たのか尋ねて見ると〃ほん——なく。〃と云つて、あやす仕草や、怖がる身振りをするのです。〃こわい〃、という言葉を教えると彼女は〃ヘレンこわくない。ほんこわい。ほんはしょうぢょと一しょにねむる。〃と云うのです。本は、怖がらない、

本は書棚の中で眠らなければならない、少女はベッドの中で本を読んではいけない、と教えました。彼女はいたずらっこらしく微笑みました。自分の云い抜けが見破られた事に気がついたのです。

アナゴス氏が私を教育者として高く評価してくれているのは有難く思っています。でも、天稟とか、独創とか云う言葉は軽々しく使われるべき性質のものとは思いません。此んな大それ

た言葉で褒められるのはかえって迷惑なのです。

あなたにだけの話ですが、私は、自分の将来を夢みて胸をふくらましているのです。若し、周囲に興味本位の馬鹿気た報道をする人々が居なかったら、ヘレンの教育の成果はホー博士の仕事とくらべものにもならない程になると思っているのです。私は、彼女が驚くべき才能を持ってる事を知ってますし、それを成長させ、磨き上げ得る自信もあります。此んな自信がどうして出て来たのかは解りません。つい此の間まではどんな教育をしたら良いかも解りませんでした。暗中模索だったのです。でも今は確信を持っているのです。自分は確信を持ってるんだと云う事も知っています。私は、ヘレンが私なしには何ら価値あるものに成長出来ないという事を知っているのです。此の確信ほど私を昂奮させるものはありません。

ヘレンは既に深い関心の的になりました。何人も深く考えさせられるのです。でも彼女は不具なのです。そして、大部分の人々の、ヘレンの教育に対する関心も健全であるとは云えないのです。私達は、彼女について書いたり話したりする時は、うっかりした事を云えないのです。針程の事が棒の様に大きくなってしまうのです。私は、あなたには卒直に書くつもりです。でも一つ條件があります。それは私の手紙を絶対誰にも見せない事です。私の可愛いヘレンが、神童に祀り上げられたらそれこそ大変です。

一八八七年、六月五日

連日の暑さにヘレンはぐったりしています。焦熱地獄の火が私達を干涸びさせています。ヘレンは、昨日など、おひるからずっと裸になって、ぐんなり坐っているだけでした。窓辺に坐って本を読んでいたのですが、西日が入り始めると、いらいらした様に立ち上って窓をしめるのです。それでも焦光が容赦なく入って来るので、彼女は弱り果てたように私の所へやって来て、〃たいようわるいこ。はやくねんねするといい〃ときつく書くのでした。

彼女は、本当に可愛いいそして悧巧な子供に変ってしまいました。そしてとても思いやり深いのです。或る日私が水を持って来て呉れと云うと、〃あし、たいへんつかれてる、あし、たいへんないている〃と答えるのでした。彼女は今朝方から孵り始めた雛に夢中になっています。私は卵を彼女の掌にのせてやりました。彼女の、卵の中でごとごと云う音を感じ取った時の驚きようったらありませんでした。母鶏は、とてもおとなしく、彼女がいくら卵をひねくり廻しても少しも怒りませんでした。雛の外にも、彼女を夢中にするものは沢山あります。二頭の犢、子馬、豚小屋一杯の愉快な豚など。私はブーブー云う豚の首根っ子を抑え、ヘレンは次から次へと、何れも容易に答えられそうにない難問を発しながらそれを撫で廻す姿を御想像下

さい。雛が卵から孵って来るのを見た後で彼女は云うのです。〃ぶたのあかんぼう、たまごでおおきくなったの。からはどこにあるの。〃

ヘレンの頭廻りは二十吋半です。私のは二十一吋に過ぎません。私は半吋だけしか彼女より悧巧でないのです、

一八八七年、六月五日

暑い日が続いています。ヘレンは相変らず元気がなく、顔色も青白く、頬もこけて来ました。別に病気だという訳ではないのですが……。此の暑気も、彼女の天真爛漫の心の働きには影響しないのですが、体には相当強くこたえるのです。勿論過労にならぬ様に気をつけています。それにしても口さがない雀どもには困ったものです。彼等は、やれ頭の酷使だとか（その実彼等はつい二、三日前まではヘレンに頭があるなどとは思ってなかったのです）やれ忙しすぎるのだかと、口から出まかせの事を云って変な薬を知らせたりするのです。私は、ヘレンがクロロホームづけにされなければよいがと思っています。だって、彼女の自然な活動を止めるにはそれ以外に方法がないのですから。本当にどうして此んなにお節介な人が多いんでしょうね。彼等は、自分達の経験に照らし合わせて見れば、自分達の云っている事が何の役にも立た

ない事だとすぐ気がつく癖に、さもそれが、神様からのお告ででもあるかの様に他人におしつけるのです。

私は、此の間から気晴らしの手段として、スクウエア・ハンド・レターを教えています。彼女は、これでおとなしく遊んでいます。此の身心共ぐんなりしてしまう様な暑気が去らないうちは、成可く体を動かさない様にしている以外に方法がないのです。彼女は、完全に数え気狂いになってしまいました。家にあるもの総てを数え廻りますし、本を開いては自分の知っている単語を数えるのです。今に髪の毛も数え出すのではないかと心配しています。彼女が此んな凝り性なのも、不具という事がその大きな原因になっているのではないでしょうか。といって普通の子供達がうわついているという意味ではないのです。馬蹄形に乳母の廻りを取りまいた線路の上に玩具の汽車を走らせる子供は、頭のこちこちな汽関士などには想像もつかない位熱心なのです。

或る時彼女は思い悩んだ様な顔をして〝しょうじょ——あんまりことばしらない〟というのです。私は〝ナンシイと遊びなさい〟と答えたのですが、彼女は不服そうです。そして〝だめ、ナンシイおもいびょうきなの、〟と云うのです。どうしてかと尋ねると〝たくさんの、は、がナンシイをびょうきにしたの〟（ミルドレッドに歯が生えて来ていたのです）と答えるので

した。

私は先日、つい、塀に這い上っている蔦を昆虫だと口をすべらせました。すると彼女はとても悦んで、自分の行動と植物のそれとの共通点を捜し始めたのです。走ったり、這ったり、飛んだり、跳ねたり、体を曲げたり、降りたり、登ったり、歪んだり、沢山みつけましたが、その中での傑作は、彼女がいたずらっ子らしく云った、〃あたし、あるく、木〃と云う発見でした。

ヘレンは昨夜糸まきの手伝いをしました。それが終ると彼女は、〃かぜおそい〃〃かぜはやい〃と書きながらぐるぐる廻すのです。そして自分の思いつきにとても得意になっているのでした。

一八八七年、六月十三日

昨夜はとても凄い雷がありました。それで今日はとても涼しいのです。皆、シャワーを浴びた様に一遍に元気を恢復してしまいました。彼女は、雷は人間が空に大砲を撃ってるのかとか、木や花が雨をみんな、飲んでしまうのか、などとしきりに質問しました。

一八八八年、六月十九日

私の小さい教え児は相変らず、とても熱心に勉強を続けています。朝起きた時から夜寝るまで一瞬のゆるみもないのです。全く、体をこわさなければ良いが、と案じられます。でも、此の間から、減退していた食慾も恢復しましたし、夜の寝附きも良くなりました。彼女は今月の二十七日で七才になります。身長は四呎一吋、前額部と後頭の凸起を結ぶ線で計った頭廻りは二十吋半です。此の線から頭の頂点までは一吋と四分の一です。

彼女は散歩の時でも字を書きます。そして書いた通りの動作、例えば、跳ねたり、飛んだり、駈けたり、早足になったり、ゆっくり歩いたり、して独り興じているのです。一つかがりを落したりしては〃ヘレンわるい、せんせいなく〃と云ったり、水が欲しいと〃ヘレンにちょうだいみずのむ〃というのです。彼女は四百の単語と沢山の個有名詞を覚えました。或る時私は、寝台、蒲団、敷毛、毛布、ばね、上敷、枕、などという単語を教え、次の日調べて見ると、上敷という言著の外は全部覚えていました。同じ日、それより一寸前、家、芦、埃、ぶらんこ、糖密、早い、遅い、楓糖、靴踵、などを教えていたのですが、此れらの単語は一つ残らず覚えていました。此の事から、彼女の記憶力の良さが御想像願えると思います。彼女は三十までですらすらと数えますし、七つのスクウェア・ハンド・レターと、それから類推した言葉を書く事も出来るのです。又手紙を書く事を覚え、〃フランクにてがみ〃を書きたくてむずむず

しています。彼女は好んで孔あけで紙にあなをあけますが、その理由は自分のやった事を調べて見る事が出来るからなのです。或る日、私達は、彼女が紙にあなを開け、手紙を書いているつもりでいるのにびっくりしました。彼女は、エヴァ（彼女がとても慕っている従姉）と綴って見てから、それをあなにあけるのです。此の様にして、一時間も、手紙、を書いていました。自分が面白いと思った事を書いていたのです。（と思っていたのです）彼女は書き上げるや、それを母親の所に持って行き、〃フランク、てがみ〃と書き、ついで兄に手渡して投函してくれというのです。

彼女は一度会った人の名前は決して忘れず、それを綴る事が出来ます。ローラ・ブリッジマンとは反対に、彼女は男の人の方が好きなのです。そして女の人よりも早く友達になってしまいます。

彼女は、自分の持ち物を他の人々にわけてやる様になっています。時には自分の手をからにしまう事もあるのです。又着物や身廻り品に深い愛着を持っていて、着ているものが一寸でも綻びているととてもしょげ返ってしまいます。勉強の途中などで眠くてたまらなくなると、カール・ペーパー（髪をきつくしめるもの—訳者）をかけるのだといってききません。いつかの朝、彼女は自分の靴に穴があいているのを見つけました。食事がすむと父親の所に行き、〃あ

たらしいくつ、シンプソン（彼女の兄）ばしゃ。おみせのひと〃と書くのです。その意味は云わずもがなでしょう。

一八八七年、六月一九日

今朝、階下で大騒動が持ち上りました。ヘレンの金切り声がしたので、何事かと、大急ぎで下りて行って見ました。彼女は大暴れしているのです。此んな事は二度とないようにと思っています。此の二カ月ばかり、彼女はとてもやさしく、従順だったので、私は、愛の心がライオンの心を屈服させたものとばっかり思っていました。所がライオンは眠っていただけだったのです。それはそれとして、彼女は、ヴイニイを引っ掻いたり、蹴とばしたりして獣の様に暴れていたのです。事の起りは、彼女がコップに石を入れて遊んでいるのを見つけたヴイニイが、割れたら大変だとばかり、それを奪ってしまった事からでした。ヘレンは反抗しましたが、ヴイニイは力づくで奪ってしまい、打ったかなにか、手荒な事をしたのか、かんしゃくのもとになったらしいのです。私に手を取られると、彼女は、ぶるっと震えて火のつくように泣き出しました。そして〃ヴイニイ――わるい〃と書いて一層ひどく蹴ったり打ったりするのです。私はその手をじっと抑えて鎮まらせました。暫くたって、とても悲しそうな顔をして二階に上っ

て来た彼女は、私にキスしようとするのです。私は〃いけないこにはキスできません〃と書きました。彼女は〃ヘレンよい。ヴイニイわるい。〃と答えます。そこで〃あなたはヴイニイを打ったり蹴ったりしてけがをさせた。あなたはとてもいけない。わたしはいけないこにはキスできない。〃と云ったのです。彼女はじっと突立っていましたが彼女の顔は赤く、当惑した様に歪み、良心の苛責を感じている事が窺われました。と、彼女は云うのです。〃ヘレン、先生をあいしません。ヘレンおかあさんをあいします。おかあさん、ヴイニイをしかります〃。わたくしは、もう話す事をよして、静かに考えるようにしました。彼女は、私が当惑しているのに気ついていました。そして私の傍にいたい様な素振りを見せるのでしたが、一人でおいた方が良いと考えた私は、彼女に下に行くように、と云ったのです。夕食の時、何も食べようとしない私を見た彼女はとても気を揉み、〃コックせんせいにおちゃ〃というのでした。でも私は、悲しくて何も喉に通らないと云ったのです。と彼女はすすり泣き始め、私にすがりつくのでした。

私達が二階に帰った時も、彼女の昂奮はおさまっていなかったので、私は、スティック・バッグというとても珍妙な昆虫で気を紛せてやろうと考えました。此の虫は私の見た範囲では一番奇妙な——薪束の様な恰好をしているのです。この虫が動き出すまでは生きているものとは

思えませんでした。動き出した所を見ても、生きものというよりは機械仕掛けの玩具みたいなのですこの虫が相手になっても、可哀そうな少女は気を落着かせる事が出来なかったのです。彼女の頭は様々な事で一杯になっており、それについて話したかったのです。彼女はとうとう口を切って〝バッグがいけない子をしってるのバッグはしあわせなの〟といい、両手を首に廻して〝あしたはいいこだわ（なるわ）ヘレンはいつもいいこだわ（なるわ）〟とつけ加えるのでした。私は〝あなたは、さっきヴィニイをうったり、けったりして、ごめんなさいと、いったの〟と尋ねて見ました。彼女は微笑みながら〝ヴィニイことばかかない（かけない）と云うのです。そこで私は〝せんせいかわりに云ってやります〟と云いました。〝さあ、ヴィニイのところにいきましょうのというように同意した彼女はヴィニイにキスさせたのです。でも抱擁し返そうとはしなかったのです。でも今朝から彼女は急にやさしさを増した様に思えます。気のせいか知れませんが、その表情も和やかになってきたようです。

一八八七年、七月三日

同封のいたずら書きでおわかりになると思いますが、ヘレンの字はとても綺麗です。此の間から手指文字を教えていますが、彼女は、言葉を自分でも感じ取れる様に書く事が出来るので

とても悦んでいます。

彼女は、今や、疑問を持つようにまでなりました。一日中、〃なあに？〃〃何故？〃〃何時？〃特に〃どうして？〃の連発なのです。彼女の知性が発展して来るにつれてその質問は合理的になって来ます。私は、自分が、友達の子供の質問攻めにいらいらさせられた事があるのを思い出しますが、今になって、質問こそが、子供達の次第に深くなって行く、種々の物の成因への興味を示すものだと気がついたのです。此の〃どうして？〃の戸口を通って、彼等は原因結果の世界に入って行くのです。どうして大工は家を建てる事を覚えたの？　誰が雛を卵の中に入れたの？　どうしてヴィニイは黒いの？　蠅はどうしてとまるの？　蠅はとまらないでおれないの？　どうしてお父さんは羊を殺すの？　勿論彼女は、此の様に理知的な質問だけをするのではありません。彼女の頭は、普通の子供のそれ程は論理的でないのです。それにしても彼女の質問は、三才の幼児にしては分析的です。彼女の知識慾は旺盛で、質問は後からと後からと尽きる所がないのです。そして私の乏しい知識の蓄えを涸渇させ、私の思考力に苛酷な重圧をかけるのです。

今朝、ローラ・ブリッジマンから手紙を貰いました。どうぞ、彼女に宜しくお伝え下さい。ああそれから、ヘレンのキスをお忘れなく。彼女は夕食の席でその手紙を家中の人に読みまし

た。と、ケラー夫人は〃あらミス・アニイ、その程度だったらヘレンだって書きますわ〃と叫んだのです。全くその通りなのです。

一八八七年、七月三十一日

私達は、ハンツヴィルで楽しい時を過しました。ヘレンは人気の中心になりキスやら贈物やらを、応接のいとまもない程沢山受けました。ついたその日のうち、彼女はホテル中の人々の名前を憶えてしまいました。二十人位だったと思います。そして翌朝になっても一つも忘れずその上、その顔と一致させていたのには全く唖然とさせられてしまいました。彼女は小さい人達に手指文字を教えましたが、その中の四、五人は、彼女と話せる様になろうと意気込んで憶えたのです。或る少女は彼女にポルカの踊り方を教えてくれ、又一人の男の子は兎を見せてくれたのでした。彼女はすっかり悦んで、その子をキスしたり抱擁したりして、すっかり面喰わせてしまいました。

ヘレンは、毛のばさばさした赤眼の老犬を抱いて写真を撮って貰いました。その犬は、犬特有のなつっこさで、此の小さな貴婦人の胸にクンクンと鼻を鳴らしてもぐり込むのです。この貴婦人はすっかり此の犬が好きになってしまいました。

彼女は帰って来てから、口を開けばハンツヴイルと云ってます。彼女の用語能力が一段と上った事は誰でもが気のついている所です。一寸奇異な事なのですが、あの老犬は例外として、彼女に一番深い印象を与えたのは、ハンツヴイルから程遠からぬモンテ・サノという美しい山の頂上にドライヴした時の思い出なのです。彼女は、その時私が描写してやった事を細大もらさず覚えていて、母親に、私が使ったと全く同じ単語や云い廻しで説明するのです。そして最後に、お母さんも高い山が美しい雲の帽子をかぶってる所を見たい、かと尋ねるのです。私は、そうは云わなかったのです。私は、雲は花みたいに柔らかに頂にかかっていますよ、と云ったのです。お気附きの様に、私は感覚的な言葉やイメージを使う必要があったのです。でも山に登った経験のない人に、言葉だけでその壮厳さを解らせようというのは馬鹿気た事です。私は、彼女の受けた印象はどんなものであったか、又彼女の感激（彼女が感激している時に、私は私の感激を描写してやったのです。）の原因は何であったかは、永遠の謎だと思います。ただ確かな事は、彼女は楽しい思い出と、豊かな想像力を働かす機会に恵まれた事、それに社交的な雰囲気の中で楽しみ得たという事です。

一八八七年、八月二十一日

ああ総ての物が生れた儘の状態に止っていたらどんなに良い事でしょうか。〃新生の仔犬〃〃新生の犢〃それに〃生れたばかりの赤ん坊〃はヘレンを〃何故？〃と〃どうして？〃で夢中にしてしまいます。〃蔦の家〃に赤ん坊の帰って来た事が、赤ん坊や、その他一般の生物の起源についての質問のきっかけになったのです、〃レイラはどこであかんぼうをてにいれたの？〃〃どうしておいしゃさまはあかんぼうのいどころをしってるの？〃〃レイラはおいしゃさんに、とてもちいさいあかんぼうをくださいって、いったの？〃〃おいしゃさんはどこでガイとプリンス（共に犬の名）をみつけたの？〃〃どうしてあかんぼうは、エリザベス・エヴイリンのいもうとなの？〃……と云った調子なのです。此等の質問は、時に皆を当惑させてしまう様な状況のもとで発せられたのです。そこで私は、何とか手を打たなければならないと決心しました。ヘレンに取って質問する事が当然である以上、それに答えるのが私の義務なのです。子供達が折角、観察と判断力を働らかして様々の事を知ろうと一生懸命になっているのに、頭から馬鹿な、とか、そんな事を尋ねるものではないと云ってきめつけてしまうのは許し難い事だと思うのです。第一歩から、私は、ヘレンの質問に私の能力の及ぶ限り、納得が行くように、そして正確に答える様につとめてきました。

どうして此の問題だけを特別あつかいにしなければならないというのでしょうか。私は自問

してみました。そして、それには何ら確固たる理由がないのだと確信しました。あるとすれば、それは肉体的実存への慨歎すべき無知なのです。私が、経験豊かな天使ならば誰でも尻込みしてしまう問題へ、無謀にもぶつかって行こうとするのは、私の無知がさせるわざである事は解っています。此の問題に関しては、いいえ、此の問題だけに限りません、教育全般の問題ででも同じ事なのです——信頼して相談を持ちかけれる様な人が見当らないのです。私の唯一の方法は、がむしゃらに突き当って行く事であり、間違いから学び取って行く事です。この方法だけは間違っていないと思います。私は、生物は如何に生育するか、という本を抱え、ヘレンを木蔭に連れて行きました。その木蔭は、今までも屢々読書したり、勉強したりする所です。私は、解り易い言葉で植物の生活史を話してやりました。

彼女に春に小麦やえんどうや、西瓜の種を播いた事を思い出させ、庭に生えている丈の高い小麦やえんどうや西瓜は、あの種から成長したのだと話してやりました。私は、大地がどういう風にして種を温く、そして湿潤にしておき、それから茎が強い力で芽をふき、光と空気の中に伸びて行き、そこで息をついたり、日光浴をしたりして次第に成長し遂には花を咲かせ、沢山の種を実らせるか、そしてその種から走ん坊の植物が生れるのだと説明しました。又、植物と動物の共通点を引き、種は動物の場合だったら卵に——あの鶏や小鳥が産み、母鳥があった

めて雛が孵える様にする卵に当るのだと教えました。私は、総ての生命は卵から生れるという考えをうえつけてやったのです。母鳥は巣に卵を産み、雛が生れて来るまでそれを温め続けるという事、母魚は、魚の赤ん坊が孵えるまで温く、そして危険のない所に卵を産む事などを例に引き卵は生命の揺籠だと話しました。それから、犬や牛や人間など、又その他の獣は卵を産む代りに、自分達の体の中で赤ん坊を養うのだと教えました。此の生殖生活の神秘は、若し植物や動物が、彼等の死んだ後に子孫を残さなかったら、此の地球上に生きたものが居なくなるという事を指摘して解いてやりました。しかし、性の問題では出来るだけ話を簡単し、ただ愛が、子孫を残す事でとても大きい役割りを果しているのだという事を匂わしておきました。私は自分の責任を果した事でほっとしています。或程、つまったり、どぎまさぎせられたりして、完全な説明でなかった事は事実です。然し、私の教え児に悟らせるものがあった事は確かなのです。そして、彼女の、肉体的な生活の飲み込みの早さは、子供が先験的に種族維持の法則を知っているという、私の前々からの考えを確かなものにしてくれました。此の先験的な知識は、光に当てられる前の写真原板みたいなものなのであり、言葉と知性こそが、光、にあたるものなのです。

一八八七年、八月二十七日

ヘレンは今日、彼女の叔父、ケラー博士から手紙を貰いました。その手紙で彼はホット・スプリングに招待してくれました。彼女は、ホット・スプリング（温泉）という名前を珍しがり、しつこく様々の事を尋ねています。彼女は、普通の泉なら知っているのです。タスカンビヤの近くに、五か六つの泉があり、その中の一番大きい泉に町の名が由来しているのです。〃タスカンビヤ〃というのは、インディアン語で〃大きな泉〃という意味なのです。彼女は、地下から熱い泉が湧き出るという事にとても驚ろかされ、土の中で火を燃すのはだれだとかその火はストーブの中で燃えてる火と同じなの、だとか、草や木の根をもしてしまわないのかなどと云って頭をひねっています。

彼女はその手紙をとても悦び、したいだけの質問をすると、広間で裁縫をしていた母親の所に行ってそれを読んで聞かせました。私がやったばかりの事そのままに、手紙を眼の前にかざし、文面を指で書き聞かせる彼女の姿は、可愛いいったらありませんでした。母親に読んでやった彼女は、今度はミルドレッドとベル（犬の名）に読んで聞かせるのです。ケラー夫人と私は、その母親振った仕草をしきいの所に立って見ていました。ベルはうつらうつらするだけ、ミルドレッドに至っては振り向こうともしません。でもヘレンはとても真面目なのです。やっと気がついたミルドレッドがその紙をひったくろうとすると、いらいらした様に手をひっこめ

てやります。ベルが起き上って大きい呻をし、外に出ようとします。

ヘレンはその首環をつかまえて無理矢理に坐らせようとします。そのすきにミルドレッドは手紙を奪ってゴソゴソ這い出します。ヘレンは捜しても見つからないので犯人の目星をミルドレッドにつけ、赤ん坊を呼ぶ時のかすかな声を出します。そして立ち上り、ゴソゴソと云う赤ん坊の這い廻る音に耳を澄ませる様な身振りをします。やがて何処に居るか見当がついたらしく、素速く、小さな犯人の後を追います。とっつかまえて見ると、小さな犯人は手紙をグシャグシャにしています。それは当然、彼女にとって我慢の出来ない事なのです。彼女は手紙を取り上げるや、ピシャとばかり犯人をひっぱたきます。此の無言劇を興味深く眺めていたケラー夫人は事此処に至るや、だまって居る訳に行かずミルドレッドを抱き上げました。私も一緒にあやしながら、〃あかんぼうにどんな事をしたの〃と彼女に尋ねてみました。彼女はまごついた様でした。暫く間をおいて〃わるいあかんぼうてがみをたべたの。ヘレン、とてもわるいあかんぼうをぶったの〃と答えたのです。私は、ミルドレッドはまだ小さくて、手紙を食べてはいけない事を知らないのだと教えてやりました。〃あかんぼうに、たくさん（何遍も）だめだといったの〃というのがヘレンの抗議なのです。

私は、〃ミルドレッドはあなたのゆびがいうことわからないの。みんなでかわいがってやり

ましょうね〃と喩してやりました。
彼女は肯きました。
〃あかんぼうかんがえない、ヘレン、あかんぼうにたいせつなてがみあげる〃というや、彼女は二階に駈け上り、綺麗に包んだブレイル式点字の手紙を持って来たのです。それには沢山の言葉が書いてありました。それをミルドレッドに渡しながらの彼女のせりふはこうです。
〃ここにかいてることばみんなたべてもいいわ〃

一八八七年、九月四日

私が公開報告書の資料を書く事を引き受けたと聞いてさぞ意外に感じた事と思います。それを引き受けた動機は何も特別な事ではないのです。ただ、いやでは済まされなくなって来た事と、ケラー大尉がすすめて下さったからなのです。彼は、私が私の貴重な経験を多くの人々に頒ち与えるのは当然の義務だと云うアナゴス氏の意見に賛成なのです。その上、彼等は、ヘレンの素晴しい進歩は多くの不幸な子供達に希望を与えるに違いないというのです。
引き受けては見たもののいざ机の前に坐って見ると、私の考えていた事は凍りついた様になってしまい、どこから手をつけた方が良いかさっぱり見当がつかないのです。ヘレンが、嘘で

も誇張でもなく、本当に素晴しい子だという事は確かです。先週、彼女が云う程の事を全部記録してみたら、彼女は六百の単語を知っていました。と云っても、此等の言葉を全部正確に使えるという意味ではないのです。時には、判じ物、みたいな文章を書く事もあります。それはヘレンだけではなく、よく纒りもしない考えを、出鱈目な言葉で表現しようとする子供の場合などにはごくありふれた事なのです。彼女の語学的才能は素晴らしいものですし、自分の意志を表現したりする時など、とても豊かな作文力を示めすのです。

此の間から、彼女は色彩に関心を持つようになりました。初等教科書で〝茶色〟という言葉を見つけ、それを説明してくれというのです。私が、あなたの髪は茶色だと云いますと、〝ちゃいろって、とってもきれいなの〟というのです。私は、家中を廻って、彼女の指先にふれるものの色を教えました。彼女は、今度は鶏舎と家畜小屋に行こうと云うのでしたが、もうくたくたになっていたものですから、明日の事にしましょうね、と責任を廻避せざるを得なかったのです。私達はハンモックに坐ったのですが、そこでも全然休めませんでした。ヘレンは、もっとたくさんの色を仕切りに知りたがるのです。私には、彼女が不具になる前の色や音の印象をまだ失わずにいるのではないかと思われるのです。意識を伴わないとは云え、生後一年半も見聞していれば相当明瞭な印象を受けるものと考えられます。その証拠に、彼女は、さわるだけ

では到底感受出来そうもない云を沢山知っているのです。例えば、空や、昼、夜、それに太洋や山などについては仕切りに質問します。そして、私が絵で見たりしたものについて話すのをとても悦ぶのです。

つい横道にそれましたが〝いろってどんなきがするものなの〟、というのが、ヘレンの、ハンモックに揺られながらの寝物語りだったのです。私は、私達が幸福な時、周囲は明るい色だし、悲しい時は暗い色なのだと話してやりました。と、彼女は、ぱっと気がついた様に、ヴィ＝イの考えは黒いんだわというのです。彼女の考えに依ると、人の考えは皮膚の色に一致するという事になるらしいのですね。私は思わず吹き出してしまいました。だって丁度その時、ヴイ＝イがキンキン声で

良い気になって、瑠璃の寝床にゃ眠る奴等を、
と思ったら、もんどり転げる、そんな奴等を見たいもの、ああ見たいもの、

と唄っているのが聞えて来たんですもの。

一八八七年、十月三日

公開報告書の資料はやっと書き上げ、すぐに送りました。写しを二組取ってますので、一組

お送りします。でも誰にも見せないで下さい。出版されるまではアナゴス氏のものですから。ヘレンの手紙は、子供達をさぞ悦ばせたと思います。子供の表現をかりると、あれは彼女の〃頭から作り出〃されたものなのですから。

彼女は、ボストンに行ったら、あれもしよう、これもしなれば、と、とても楽しみにしています。先日彼女は、ボストンや、そのほかのもの全部をつくったのは誰、と尋ねるのでした。又、彼女の云う所に依ると、赤ん坊は一日中泣いているから、ボストンに連れて行って貰えないそうです。

一八八七年、十月三日

先日ヘレンは、又一通の手紙を書き、父親に頼んでアナゴス氏に郵送して貰いました。見せて載くと良いと思います。彼女はひとりでに代名詞を使うようになりました。今朝私は、〃ヘレンおにかいにゆきなさい〃と云ったのです。と、彼女は、〃せんせいまちがっている。あなたおにかいにゆきなさいっていうのよ〃と云って笑うのです。此れこそ刮目すべき進歩なのです。万事が此の調子で、昨日の不思議は今日の日常茶飯事になり、今日の難問も明日は暇つぶしになってしまうのです。

ヘレンの進歩は一緒にやっていても楽しい程です。嘗つて此んなに忙しく、そして楽しい教育をする事が出来た先生が一人でもあったでしょうか。私は余程せぐり合せの良い星の下に生れたものらしいのです。此の頃一層その感を深くしています。

先週、アナゴス氏から手紙を二通貰いました。彼は、私の資料をとても悦んでくれていま す。そして此度は、〃可愛いヘレンと、優秀な先生の写真を、近く出版される事になっている公開報告書に花を添えるためにお送り下さい。〃というのです。

一八八七年、十月二十五日

此の手紙がつく前に、ヘレンの二通目の手紙をお読み下さったと思います。二通の手紙を較べて見て、ヘレンの文章が如何に進歩したかお気附になったでしょう。毎日彼女に接している人だけが、彼女の素晴らしい言葉獲得能力を本当にする事が出来るのです。お気附きになったでしょうが、彼女は代名詞をまちがいなしに使っています。日々の会話でも、滅多にそれを抜かしたり間違ったりする事がありません。彼女の手紙を書こうとする慾望と、自分の頭の中にある事を文章に書き表わそうとする慾求は日々に強くなるばかりです。

彼女は、想像力が欠くべからざる、お話、を作るようにさえなっています。彼女は、朧げな

がら、自分が普通の子供達と違っている事に気がつき始めています。先日、彼女は〝あたしのめ、なんのやくにたつの〟と尋ねたのです。私は、私達は眼で物を見る事が出来るのだが、あなたは指で見る事が出来ると答えてやりました。一寸考えていましたが〝あたしのめわるいんだわ〟と云い〝あたしのめ、びょうきなんだわ〟と言葉を換えるのでした。

ミス・サリヴァンが、一八八七年に出版されたパーキンス盲学校公開報告書に発表した第一回の記録は、此れまでに掲載した手紙であます所なく述べられた事の要約である。次に、あの、水、という物を覚えた特記すべき四月二十五日以降の事を記録した、その最後の部分を載せる事にする。

此の記録では、ミス・サリヴァンは勉強を規則正しくやった様に書いている。これは要点を抜き出す必要から起ったものである。事実、勉強、などという形式ばったものを、毎日続けてやったらたまったものではない。

或る日私は彼女を井戸小屋につれて行った。

水がポンプから溢れ出た時〝みず〟と書いてやった。彼女は繰返してくれと私の手を軽く叩

き、顔を輝かして自分でも書いて見た。丁度その時、乳母が彼女の妹を抱いて入って来たので私は彼女の手を握り、それで赤ん坊の体に〃あかんぼう〃と書かせてやった。すると彼女は、知性的な光に顔を輝かせながら、自分一人でそれを繰り返した。家に戻る途中、私は彼女の指がふれる総ての物の名前を教えてやった。彼女は同じ物を繰り返して尋ねる様な事はしなかった。いくら長い名前でも、叉合成名前でも直ぐに覚えてしまったのである。例えば、〃忘れな草〃とか、〃ヘリオトロープ〃とかをより短い名前と同じ様にたやすく覚えたのである。八月末現在まで六二五の単語を知っている。

私は、その次に、場所、を示めす言葉を教えてやった。彼女の帽子は箱の〃中に〃入っており、それを頭の〃上に〃。覆る、などという前置詞の事である。彼女は、〃上に〃と〃中に〃の違いにすぐに気附いたが、それを実際に使うようになるまでは少々の時日を要した。どんな勉強の時でも、彼女はすぐに実物を利用する。例えば、椅子の〃上に〃立ったり、衣裳戸棚の〃中に〃入ったりして悦んでいる。前置詞と一緒に彼女は、家族の名前と、あらいる動詞、を覚えた。〃ヘレンはいしょうとだなの中にいる〃〃ミルドレッドはゆりかごのなかにいる〃、〃はこはテーブルのうえにある〃〃パパはベッドのうえにいる〃などは、四月下旬頃の彼女の作文の傑作である。

次いで、形のあるものの性質を教えた。最初に、大きい毛糸のまりと、鉛の玉を与えたが、すぐに気がついたのは、その大きさの違いだった。鉛の玉を手にして、手の裏皮をちょっとつまみ上げる、小さいという合図をし、毛糸のまりを指して、大きいと云う、両手を大きく拡げる合図をした。私は、それらの合図の代りに、小さいという言葉と、大きい、という言葉を教えてやった。それから彼女は、硬さの相違に気がつき、柔い、という言葉と、硬いという言葉を覚えた。彼女は、妹の手にさわって見て、母親に〝ミルドレッドのてはちいさくて、かたい〟と云ったりするのである。次に教えたのは、早い、と、遅い、という言葉だった。彼女はいつか私の糸巻きに手伝った事がある。初めのうちは早かったがそのうちのろくなって来たので手を取って実地に教えながら、〝はやくしない〟とか〝おそくしなさい〟とか書いてやった。次の日私達は体操をしていたのだが、彼女は、〝ヘレンはやくする〟と云って早く歩いたり、〝ヘレンおそくすると〟云ってはゆっくり歩くのだった。

私はそのうち、彼女に印刷されたものを読む方法を教える必要を切実に感じ始めた。そこで、小さいカードに盛り上った字で、〝はこ〟と印刷されたのを実物の箱の上に載せるという方法を思いつき、沢山の例で実験したのだが、カードに書かれた字が、実際の、物、を意味する事を仲々飲み込めなかった。そこで私はAという字を掌に書いてやりながら、ABC表のA

という字にさわらせた。そうしているうちに彼女は私が書く字をABC表から拾い上げる事が出来る様になり、その日のうちにABCの大文字と小文字を全部覚えてしまった。それで私は、初等教科書の一頁目を開けて、〃ねこ〃と書き、その単語を拾わせた。彼女は訳なくそれを見つけ、今度は犬という字などもっと沢山書いてくれと云うのである。所が、その本にはそんなに多くの言葉が載っていなかったので、私は彼女の気嫌を損じてしまった。その時私は凸版の本を持っていなかったので、彼女は終日自分の本で言葉捜しをしていた。自分の知っている単語を捜し当てた時の彼女の表情は幸福そのものであり、心なしか、その顔附きも段々しまって来たようである。此の間、私はアナゴス氏にヘレンが知っている単語の表を送り、それを凸版にして載いた。彼女の母親と私はそれをばらばらにし、彼女が文章に並べる事が出来る様にしてしてやった。

彼女はとても悦び、文章を書く上で大きな進歩を見せたのである。此の、紙片で文章を書く事から、それを紙と鉛筆でやる事を覚えさせるのは何の困難もなかった。そのうち彼女は、今までの様に、教わった文章を書いてるだけでなく、自分の頭に浮んだ考えを書いて見ようとするようになった。私は彼女に書かせようとする文章を点字板の上に書き、それにさわらせ、それから、彼女の手を取って、〃ねこがミルクをのむ〃という風に書かせてやった。それを書き

上げた時の彼女の悦びようは大変なものだった。母親の所に持って行ったが、母親は、正にその通りの文章を彼女の掌に書いてくれたのだった。

毎日毎日、彼女は飽む事も知らない様に條のついた紙に字を書いている。

彼女は、自分の考えている事を紙に書く方法を覚えたので、今度は、それをブレイル式点字で書く事を教えた。彼女は自分の書いた事を、自分で読める事に気がついて非常に悦び、今でも夢中になっている。そして夜、寝るまでの間は、机にすがりついて、特別に忙しい頭に去来する考えを書く事にしている。出来上ったものも、それ程の苦労なしに、私達に読める。

彼女は算数でも驚ろくべき進歩をしている。百以内の加え算や引き算はとても素速くやってのけるし、五の段までの九九にも同様である。彼女は此の間、四十は何の何倍かという事を仕切りにやっていたが、私の〝四十は二の何倍か〟という問に対し、二かける二十は四十と間髪をいれずに答えた。それで私は、十五の三倍は、という問題を出した。三つの倍数をたどって行ければ良いがと思い、彼女に解けない事はないと確信していたのだが、即座に、十五の三倍は四十五と答えられた時は、唖然とさせられざるを得なかった。

彼女は、自分達は白く、召使いは黒いと聞いて、職業に依り皮膚の色が一定していると思い

込んでしまった。召使いの色は、というといつも決って〃黒〃と答えるのである。何時か、彼女の知らない職業の人を皮膚の色を尋ねられてはたと当惑してしまい、苦しまぎれに〃青〃と答えたのである。

彼女は今迄〃死〃とか〃埋葬〃とか云う事を聞かされた事がなかった。いつか彼女の母親と私と一緒に、墓場へ花摘みに行った時、彼女は両手で眼を覆い、繰り返し繰り返し、〃なく――なく〃。と書くのだった。そして彼女の眼には涙が溢れていたのである。

或る日の散歩で、彼女は、随分離れていたのだが、近くに兄が居る事に気がついたらしかった。その名を呼びながら、彼の方に駈けて行ったのである。

彼女は、散歩や乗馬の折など、殆んど会う人毎に名前を尋ね、二度目に会った時にはその人の名前を云い当てるのである。

此処でまた手紙を続ける事にする。

私達はヘレンをサーカスに連れて行き、〃とても生き生きした時〃を過しました。サーカスの人々は、ヘレンに深い同情を寄せ、あらゆる方法を尽して、彼女に深い印象を与えようとし

ました。彼等は、動物達の気嫌が良い折を見つけてヘレンにさわらしてくれるのです。彼女は象に餌をやったり、その中でも一番大きい〝東洋の王子〟という象の背中に乗せて貰ったりしました。その象は彼女を乗せて、王者の様に、のっしのっしと場内を一巡りしました。彼女はライオンの子供にもさわって見ました。それは子猫の様におとなしかったのですが、大きくなると、とても獰猛になるのだと教えてやりました。すると彼女は、ライオン使いに〝あたし、うちにつれてかえっておとなしくなるようにおしえてやるわ〟と云うのです。熊使いは、一匹の黒くて大きい熊を立ち上らせ、前足を彼女の方にさし出させましたが、彼女は、それにいとも丁寧に握手しました。彼女は猿に大悦びさせられ、その中でも一番の人気者だった猿が芸をする間その手を握り続け、その猿が観衆に帽子を取って挨拶した時は心から面白そうに笑い出したりしました。そのうち、一匹の素ばしこい猿がリボンを取ったと思うと、他の猿が帽子の花飾りを奪おうとしたり、本当に、一番楽しい思いをしたのは猿なのか、ヘレンなのか、それとも観衆だったのか、さっぱり見当もつかない位でした。又、一匹の豹は彼女の手をなめましたし、キリン使いは、キリンの背がどの位高いものかを解らせようと、彼女を高くさしあげてその耳にさわらせました。彼女の手はギリシャの花馬車にもさわりました。その馭者は、ヘレンに、乗って一巡りして見ないかと云ってくれたのですが、彼女は、〝たくさんのはやいおう

ま〃におじけづいたのです。曲乗りや綱渡り、それに道化使などは寸暇を盗んで此の小さい盲の少女に、彼等の衣裳を手さぐりさせてくれました。彼女は感謝の意を表するために満遍なくキスをしてやるのです。彼等は大業に悦んで見せたりしましたが、ボルネオの未開人は、此の小さな天使にきまるがつて尻込みするだけでした。彼女は口を開けばサーカースの話をしています。彼女の質問に答える為に、私は沢山の、動物の事を書いた本を読まなければならない羽目になつてしまい、全く目の廻る様な忙しさです。

一八八七年、十一月三日

ヘレンは、クリスマス、クリスマスと、一日中クリスマスの事を云つていますが、私にはどうしてもクリスマスが近いなんて思いません。一緒に過したクリスマスの事、よもやお忘れぢやないでしょうね。

ヘレンはやつと時計を見るすべを覚えました。彼女の父は、クリスマス・プレゼントに時計を買つてやると約束しています。

ヘレンは、見た事もない程、お話の好きな子供です。〃赤い騎兵の頭巾〃を、終りの方からでも語れる位、何度も何度も繰り返えさせます。彼女は特に、彼女の——いえ私達皆の涙をそ

ゝる様なお話が好きなのです。……何の心配も無い時に、悲しい話しを聞いて涙を流すのは気持の悪い事ではないのですけど……私は今、韻文や韻の事を教えています。此れは子供達に楽しい思い出を残しますし、理解力をも増進させます。その訳は、とても想像力を刺戟するからです。勿論管々しい説明はしません。そんな事をしてたら、折角の、空想を働らかせる機会がなくなってしまうでしょう。繁鎖な説明は、子供達の注意を個々の単語や文章に向けてしまい、全体としての美しさを把握出来ないようにしてしまうのです。私は、何人たりとも、単語や学術的な文章に気を配っている間は、全体としての思想を握む事が出来るものではないと思っているのです。

一八八七年、十二月十二日

自分は此の世の中で必要とされている者だ、とか、或る人にとって欠くべからざる存在なのだ、と云う風に感ずる事は本当に素晴らしい事です。何かにつけての、ヘレンの私へ の信頼は、私を強くし、そして有頂点にならせるのです。

クリスマスの準備のいそがしさは当方とて例外ではありません、ヘレンは、子供パーティに招待されています。出来るだけ、たくさんのパーティに連れて行きたいと思っています。出来

るだけ多くの子供達と知り合つて一緒に遊ぶ事を願つているのです。数人の女の子は手指文字を覚えて得意になつていますし、七つ位でしょうか、一人の男の子は無理矢理に覚えさせられてヘレンに、自分の名前を書いてみせてくれました。ヘレンは夢中になつて悦び、その子を抱擁したり、キスしたりして、すつかり面喰わせてしまいました。

土曜日に、学校子供達がクリスマス・トリーを作つて貰つたので、私はヘレンを連れて行つて来ました。それは、彼女が生れて初めて見るクリスマス・トリーだつたのですが、とても当惑した様で、矢継早やの質問をしました。〃だれがうちのなかにきをうえたの？〃〃どうして？〃〃だれが、きにさまざまのものをつるしたの？〃。彼女は一本の木に種々の実がなつているのに承服出来ず、それをむしり取り始めたのです。てつきり、此の木は自分への贈物だと思つたのです。でも、それが皆の物であるという事を理解させるには手間がかかりませんでした。彼女は、一人一人の子供に贈物を手渡しても良いと云われてとても悦びました。又、彼女への贈物も用意されていたのです。彼女は自分が貰つたものを椅子の上に置き、全部の子供達が貰い終るまでは開けて見ようとしませんでした。と、一人の小さい女の子の贈物が他の子供達より少ない事に気がついた彼女は、自分のを分けてやるんだと云つてきゝませんでした。それに子供達の、ヘレンへの思いやりは、傍で見ていても心温るものだつたのです。お祝は九時

に始まり終つた時は一時でした。私は、指先チクチク痛み、頭はふらふらになつてしまいましたが、ヘレンは平気なもので、家を出た時と少しも変つていませんでした。

夕食が済む頃から雪が降り出し、私達は楽しく雪遊びをしながら、興味津々たる勉強をする事が出来ました。日曜の朝起きて見ると、満目銀世界です。ヘレンと料理人の子供、それに私は、雪達磨を作つて興じましたが、お午頃まではすつかり溶けてしまいました。此の雪は、当地に来て初めてのものです。私は些かホーム・シック気味です。クリスマス週間中、ヘレンは貴重な勉強をし、三四十の新しい言葉を覚えました。

本当に何週かかの間、私達はクリスマスの事だけを話題にしていたのです。実におびただしい程のお話をしたり、本を読んだりしました。勿論、私は出て来る程の言葉は説明出来ませんでした。自然、彼女が隅から隅まで理解出来たとは云えません。然し、同じ言葉は、繰り返されているうちに頭にこびりつき、自分の方から意味を明かにするのです。私は、会話の習得だけを目的にした、お坐なりの勉強には好意を持てません。第一馬鹿げていますし、それに退屈でやりきれません。話し、は自然でなければならないと同時に、お互いの感じている事を交換し合う事が興味の焦点にならなければならないと考えるのです。子供の頭の中が空っぽな時に〝猫〟とか〝小鳥〟とか〝犬〟とかと、ばらばらな、無味乾燥な言葉を黒板に書いたりする事

は何の意義もないと思うのです。私は初めから、自然に話しかける様にし、本当に面白いな、と思った事だけを話す様に仕向け、又、本当に知りたいと思っている事だけを尋ねる様に導いて来ました。とても話したがっているのに、言葉を知らなくて出来ないでいるのだな、と見て取った時は、その単語なり、熟語なりを補ってやります、此のやり方はとても素晴らしい効果をあげています。言葉の意味を管々しく説明してやらなかったら、子供達は何も覚えないでしまうのではないかという心配は、子供達の熱心な知識慾を見逃している人々だけが持つものなのです。若し子供の知能力を測定するのに、言葉の意味を説明する事だけに頼ったりしたとするとどんな事になるでしょうか。もしそんな事になったら、私なぞは、尋常小学校の一年生からやり直さなければならなくなってしまうでしょう。

ヘレンの、クリスマスのはしゃぎ様ったらありませんでした。勿論彼女はストッキングを吊しました。それも、サンタ・クロースに見落されたら大変とばかりに両方です。そして、ベッドに入ってからも、何か変った事が起ってないかと、二度も三度も起き上って見るのです。〃サンタ・クロースは眠らないうちは来ませんよ、と云われるとさっそく眼をつむり〃サンタ・クロースはもうねむったとおもってるわね〃と云うのです。翌朝彼女は誰よりも早くはね起き、ストッキングを調べに、炉辺にとんで行きました。両方のストッキングに贈物がぎっしり

つまっているのに雀跳りしてよろこび、そこいら中をとび廻っていましたが、突然真顔になって、サンタ・クロースはまちがったのではないか、二人分の贈物をおいて行った事に気がつき取り返しにやって来るのではないだろうか、と尋ねるのです。あなたが贈って下さった指環はつま先の方に入れておいたのですが、此の指環はホップキンス夫人がサンタ・クロースに頼んであなたに贈って下さったのだと教えてやると、〃あたしホップキンス兄さん、とてもすき〃つ云うのでした。彼女はナンシイにトランクと着物を贈ったのですが、その時の文句がふるっています。〃さあナンシイ、あなたもパーティに行けるわ〃。又、ブレイル式点字板と紙を見つけた時の言葉はこうです。〃あたし、おてがみたくさんかくわ、サンタ・クロースありがとう。〃ヘレンが迎えた、昨年のほとんど度外視されて過ぎてしまったクリスマスと、今年の人気の中心となった明るいそれとの相違を、一番微妙に反映させたのは、ケラー夫人と、ケラー大尉でした。私達が階下に下りて行くと、ケラー夫人は涙ながらに云うのです。〃ミス・アニイ、私、あなたを私達に遣わして下さった神様に感謝しています。でも、今日の今日まで、それがどんなに素晴らしい事なのか気がつかずに居たのです〃ケラー大尉は、ただ私の手を握りしめるだけで物も云えませんでした。然し、彼の無言程雄弁なものはなかったのです。私も何とも云えない感激で胸が一杯になってしまいました。

先日ヘレンは〝祖父〟と云う言葉を見つけて、母親に〝おじいさんはどこにいるの〟と自分の祖父の事を尋ねるのでした。ケラー夫人は〝おじいさんしんだの〟、と答えました。〝おとうさんがうちころしたの、〟ヘレンは続けます。そして更に〝ばんごはんときおじいさんをたべたいわ〟。というのです。お解りの事と思いますが、彼女の、死、は食べられる動物にだけ結びついているのです。彼女は、父親が松鶏や鹿などを獲って来るのを知ってるのです。

今朝彼女は〝だいく〟の意味を尋ねましたが、それが今日一日の勉強の材料になりました。大工が作る種々のものについて質問した後で、彼女は〝だいくがあたしをつくったの？〟というのです。そして私の答えも待たず〝いいえ、シェーフィールドのしゃしんやさんがつくったんだわ〟と涼しい顔をするのです。

シェーフィールドに大鉄工場が建てられたので、私達は先日の夕方その作業を見学に行ったのでした。ヘレンはその火気を感じて、〝たいようがおちてきたの〟と尋ねるのでした。

一八八八年、一月一日

報告書は昨晩受け取りました。アナゴス氏の、ヘレンと私に対する好意は有難いと思ってますが、あまりに誇張した云い方には気分を害されています。真実、程に感銘を与えるものはな

い筈ですのにねえ。一例を云うと、どうして、ありもしなかった動機などを、あった事にして下さったんでしょう。あなたも御存知の筈ですし、彼も知らない筈はなく、私も忘れは致しません。私が、此処に来た動機は、決して、博愛精神に基いたものではなかったのです。ホー博士の精神に誇吹されて、此の小さいアラバマツ子を、暗黒と蒙昧の深淵から救い出そうと奮い立った、なんて何処から拾って来た文句なんでしょうねえ。私は、自分で自分の生活費を稼ぎ出さなければならないというだけの理由で、最初に見附かった仕事にとびついたのです。此の仕事に適任かなどとは、私も考えませんでした。彼だって考えた筈がありませんわ。

一八八八年、一月九日

ヘレンの手紙、受け取って下さった事と思います。此の小さいおてんば娘は、鉛筆などでは、金輪際書かないと決め込んでしまいました。今朝、フランク叔父さんに書きなさいと云ったのですが承知しなかったのです。彼女の云い分は、〝えんぴつでかくと、あたまがつかれるわ。フランクおじさんにブレイルでかくわ〟なのです。私は、〝だって、フランクおじさんはブレイルよめませんよ〟と云いました。〝あたしおしえてやるわ〟彼女は云うのです。そこで私は、フランク叔父様はとても齢がいっていて、簡単にブレイルを覚えれないのだと説明して

やりました。と、間髪を容れず、〃フランクおじさんたくさんとしをとってるから、ちいさいじよめないわ〃と逆襲するのです。そして、やっと、三、四行で良いからと説得する事が出来ました。彼女は、それを書き上げるまでに、鉛筆の芯を六回も折ったのです。〃あなたいけないこね〃と云ってやると、〃ううん〃彼女は答えるのです。〃えんぴつよわいの。〃彼女が鉛筆で書きたがらない理由は、とても沢山の友達や、又未知の人から、優れた手紙を求められているためじゃないか、と思っています。あなたも、盲学校の子供達が、どんなにそれを嫌がるか御存知の筈です。早くも書けませんし、自分が書いた事を読めもしなければ、誤りを訂正する事も出来ないのです。

ヘレンは、益々〃色〃への興味を深めて来ました。ミルドレッドの眼は碧い、と教えてやると、〃ちいさな空みたい？〃というのです。それから一寸経ってから、先刻私があげたカーネーションは赤いと云うと、唇をすぼめて〃くちびるはももいろのカーネーションね〃と答えるのです。私は、〃チューリップ（ツウ・リップス、二つの唇――訳者）〃だと云ってやりましたが、勿論、此の酒落は通じませんでした。私には、彼女が生後一年半の間で得た〃色〃の印象が全く消えてしまっているとはどうしても思えません。見、聞きしたものは、心の隅の何処かに残っているものです。成程、それは、はっきりと意識しようとするには、あまりに混乱し

た、そしてぼんやりしたものでしょう。でも残っている事には変りないのです、あの暮光に薄れて行く景色の様に。

一八八八年、一月二十六日

私達は、昨夜家に帰って来ました。メンフィスではとてもたのしかったのですが、私の保養には少しもなりませんでした。ドライヴ、昼食会、お招きなどと、ヘレン見たいに明るくて、疲れ知らずの子供と一緒に居ては、つい引きずり込まれないではおれない昂奮と感激の連続だったのです。私はただ惘然としているだけで、若し、幾人かの若い人達が手指文字を習ってくれなかったら、何の世話も出来ない程でした。彼等は何くれとなく私を助けてくれたのです。それにも拘らず、半時間と静かに過す事が出来なかったのです。いつもこういう調子なのです。〃おお、ミスサリヴアン、早く来て！ヘレンは何と云ってるの〃。とか〃ミス・サリヴアン、此の事ヘレンに説明して下さいな。私達では解らす事が出来ないの〃。等々。私は、メンフィスの白人人口の半分は私達を尋ねて来たのではなかったかと思っています。ヘレンは、壊れてしまいはせぬかと思われる位に愛撫、愛玩されました。でも生憎、彼女は、壊されるにはあまりにも丈夫で、元気すぎました。

メンフィスの商店はとても良心的でした。お陰様で財布の底をはたいて帰って来ました。

或る日ヘレンは云うのです。〃ナンシイに、とってもかあいぼうしをかってやらなくては〃私は〃そうね、お午から買物に行きましょう〃。と同意しました。彼女は一弗銀貨と、十仙銀貨を持っていました。店頭で私は、〃ナンシイの帽子はいくら位のが良いの。〃と尋ねると、即座に、〃じっせんとのよ〃と云うのです。〃一弗銀貨では何を買うの。〃と私は更に問いました。〃おみやげに、とてもおいしいおかしをかうの、〃というのが彼女の答えでした。

私達は株式取引所と蒸気船を見に行きました。彼女は蒸気船に興味を煽られ、機関室からマストまで全部見せてもらうのだといってききませんでした。ネイションン誌、がヘレンにふれた文章を載せていたのには悦ばされました。

ケラー大尉は、例の報告書なるものが発表されてから二通の興味ある手紙を受け取りました。一通はアレキサンダー・グラハム・ベル博士から、もう一通はエドワード・エヴアレット・ヘイル博士のものです。ヘイル博士は、自分がヘレンの遠縁にあたるのを誇りに思ってらっしゃるのです。ベル博士の手紙は、ヘレンの進歩ぶりは、他の不具者が真似の出来ないものだとして、その先生に盛んに嬉れしがらせを云ってくれています。

一八八八年、二月十日

昨日は忙しくて、手紙を書き了える事も出来ませんでした。ミス・エブがヘレンの習得した言葉の表を作る手伝いに来てくれています。

やっとPの所までやりましたが、それまで九百語を教えています。ヘレンは三月五日から日記をつけ始めています。果してどの位続くものかは解りません。此んな事は馬鹿気た事だと思っています。今の所ではとても面白がっています。彼女は、自分の知ってる限りの事全部を書くのが面白いらしいのです。

次の文章は、日曜日のものです。

〃わたくしは、おきては、ことかおをあらい、かみをとかし、つゆのついた三ぼんのすみれをつんでせんせいにあげ、ごはんをたべました。ごはんがすんでから、すこしにんぎょうとあそびました。クロスは、ないたり、けったりします。わたくしは、おおきい、こわいどうぶつのほんをよみました。こわいものはとてもきげんがわるくて、つよくて、とてもおなかがすいています。わたくしは、こわいどうぶつはさらいです。わたくしは、ジェームズおじさんにおてがみをかきました。かれはホット・スプリングにすんでいます。かれはおいしゃさんです。おいしゃさんはびょうきのこどもをなおします。わたくしはびょうきはきらいです。それからごはんをたべました。わたくしはたくさんのあいすくりーむがとてもすきです。ごはんがすむ

と、おとうさんは、とおいバーミンガムにきしゃにのってゆきました。ロバートからおてがみがきました。かれは、わたくしをあいしています。かれは、かわいい、ヘレン・ロバートは、ちいさいヘレンからおてがみをもらつてとてもうれしかつた。おてんきのよいひにゆくとかいていました。わたくしは、ニューサムさんは、ロバートのおくさんです。ロバートはかのじょのおっとです。わたくしは、ロバートといっしょにはしったり、はねたり、とんだり、おどったり、ぶらんこにのったり、ことりや、はなや、くさなどのはなしをします。シャボンとパールはわたくしたちといっしょにきます。せんせいはわたくしたちばかだとおっしゃるでしょう。せんせいはおかしいのです。おかしいことは、わたくしたちをわらわせます。ナタリイはよいこでなきません。マヨさんがダックヒルにいってたくさんのきれいなはなをもってきたくださいました。マヨさんとフアリスさんとグレーブさんは、わたくしとせんせいをあいします。わたくしはかれらにあいにメンフイスにゆきます。かれらはわたくしに、きすしたりだいたりするでしょう。リーントンはがっこうにいってかおをまっくろにします。おとこのこはもっときをつけなければなりません。ごはんがすんでから、わたくしはせんせいとべつどのなかでふざけました。かのじょはわたくしをまくらのしたにうずめてしまいました。それでわたくしは、つちからでるきのようにとてもゆっくりしました。もうねなければなりません。

ヘレン・ケラー

一八八八年三月五日

只今教会から帰って来たばかりの所です。ケラー大尉は今朝食事の時に、ヘレンを教会に連れて行って貰いたいというのでした。彼の血管の中には長老教会主義がひそんでいるのでしょう。牧師にヘレンに会わせたいのだそうです。私達が行った時は丁度日曜学校の時間でしたが、ヘレンが会堂に入って行った時の騒ぎは、お目にかけたい程のものだったのです。子供達は、ヘレンが日曜学校に来たのにすっかり悦んでしまい、先生の話などそっちのけにして、席から立つや私達の廻りに集ってしまいました。彼女は、男の子だろうが、女の子だろうが、また、いやがろうが悦ぼうが、そんな事には一切おかまいなしで皆にキスしたのです。彼女は最初、その子達は皆、よそから来た牧師の子供だと思ったらしいのですが、すぐに、その中に自分の友達がいる事に気がつきました。私は、牧師は子供達を連れて来ていないのだ、と教えてやりました。彼女はがっかりしたらしく〝そのこたちに沢山のキスをおくるわ〟と云うのでやりました。一人の牧師がヘレンに話したいと云うので通訳してやりました。〝牧師さんて、どんな事をする人ですか〟。彼女は〝かれらは、おおぜいのひとがよいひとになるように、おおごえでほんをよんだり、おはなしをしたりします〟と答えたのです。牧師はそれをノートに書いてい

ました。礼拝の時間になった時、ヘレンはとても昂奮していたので、外に連れ出そうとしたのですが、ケラー大尉は〝すぐ静かになりますよ〟、というのです。それで仕方なく、残って居ざるを得ませんでした。でも、ヘレンをじっとさせておく事は不可能でした。

彼女は、私だけならまだしも、隣に坐っていた物静かな、神学者にキスしたり、抱きついたりするのです。その人は彼女をおとなしくしておこうと時計をあづけたのですが、そんな事でおとなしくなる筈はありません。かえって、彼女はその時計を、後の席の男の子に見せびらかそうとするのです。聖餐式が始まると、彼女はいちはやく葡萄酒の匂いを嗅ぎつけ、会堂中の人々に聞える様な大きい音でくんくん鼻を鳴らし出す始末です。葡萄酒が私達の隣まで廻って来た時、その人は、彼女がそれを横取りしようとするものですから、やむをえず席から立ち上らなければなりませんでした。実際、教会から出た時ほど、ほっとした事はありません。引きずるようにして外に出ようとしたのですが、彼女は両手をひろげられるだけ拡げ、ふれる程の人々を立止らせては、家に残して来た子供達の事を話したり、順番にキスを受けなければならないようにするのです。皆が皆、彼女の道化に大悦びをし、教会に居るというよりは、サーカスにでもいる様な顔をしていました。ケラー大尉は幾人かの牧師を夕食に招きましたが、その時のヘレンは全く手に負えなかったのです。

彼女は手指文字を混えた大熱演で、ブルースターに行くんだと説明するのです。最後には、ほんだわらを摘んだり、貝を拾ったり、失礼に当る程スカートをまくしあげてじゃぶじゃぶ水の中を歩く真似をします。それでも足りなくて、私達など蹴跳ばされる様な物凄い勢いで床板水泳を始める始末です。それにしても、彼女の身振りは実に堂に入ったもので、時には、言葉など到底及びもつかない様な効果を発揮する事もありますが、本人は全く無邪気なものです。

私は、自分でも処理し切れない様な自分自身の昂奮と興味深さを、半分でもあなたに分けてあげたい程です。私達は、一日中、ボストンボストンと云いながら、計画を練ったり、種々の空想をえがいたりしています。ケラー大尉も私達と一緒に行って下さる事は間違いないと思います。でも、夏一杯滞在する事はないでしょう。

一八八八年、四月十六日

此のお手紙を最後に、長い長い間御無沙汰致さなければならないのですよ。此の次のお便りは何時頃になるかはっきり申し上げられませんが、その時あなたがお受け取りになるのは、ボストンからの手紙なのです。私は、手紙など書いているには勿体ない様な楽しい日々を送っています。でも、シンシナチに行った時の事は是非お知らせしなければなりません。

私達は、お医者達と一緒の楽しい一週間を過しました。ケラー博士はメンフイスまで出迎えに来てくれました。汽車に乗っている人達は、みんな医者ではないかと思われる程でしたが、ケラー博士とは、一人残らずお知り合いの方々の様でした。シンシナチについてみたら、そこも又、医者で一杯だったのです。その中には、ボストンの有名な医者もいました。私達は、バーネット館に宿を取りましたが、ヘレンは皆の人達に大歓迎されました。教養のある人々は、彼女の悧発さと明るさにびっくりさせられたのです。彼女は、妙に人を魅きつけるものを持っているらしいのです。その魅力をなしているものは、彼女の人見知りをしない、明るい、生き生きとした関心だと、考えられます。

彼女は、どんな所に行っても人気の焦点になってしまいます。ホテルのオーケストラにとても悦ばされた彼女は、それが音楽を始めるといつでも、そこら中を跳び歩き、触れる程の人にキスしたり、抱きついたりしてはしゃぐのです。彼女のいかにも幸福そうな陰のなさは、ホテルの中の人々に深い印象を与えました。誰一人彼女を哀れだなどとは思っていません。或る人などは、ケラー博士に向って、〝私は今までだって、幸福に充ち充ちた人々の顔を沢山見ていますが、此んなに、美しく、光を放つ様な顔を見るのは、今夜が初めてです。〟と云うのでした。又もう一人の人は、〝えゝ畜生、あの子が傍に居てくれるっていうんなら、一切合財なん

でもやっちまわあ。〃などという始末です。残念ながら、その他の人々が云った事をいちいち書いていたら一冊の本になってしまうでしょうし、又、様々な人達が示めして下さった親切を細大もらさず書いたら、それも一冊の本には纒められないと思います。そんな暇がないのです。ケラー博士は、アナゴ氏が送ってくれた公開報告書の抜粋を分類分けして下さいました。若し彼が、それをもっと早く手に入れていたら、不合理な点など残らず処理出来たのに、と思うと残念でたまりません。所で話は変りますが、あなたは、数年前までメイン州の知事だったガースロン博士を憶えていらっしゃるでしょう? 彼は或る日の午後、私達をドライヴにさそってくれました。その時、ヘレンに人形を買ってあげようと云い出したのです。それに対する彼女の返事は、あたしこどもがあんまりたくさんいるとこまっちゃうの。ナンシイは病気だし、アデリンはおかんむりだし、それにイダはとってもてがやけるのよ〃ですって、私達は涙が出る程笑いました。彼女は真面目だったのです。〃ぢゃなにがいゝの?、〃ガースロン博士がもう一度尋ねると、〃おはなしするときの、きれいなてぶくろほしいわ〃と答えるのです。博士はどぎまぎしました。〃おはなしするときのてぶくろ〃なんて聞いた事がないのです。そこで、私は、彼女が、アルファベットを刺繍した手袋を見た事があり、それを何処ででも買えるものだと思っているに違いないと説明し、御好意に甘えて手袋を買って戴けたら、こちらでそ

れにアルファベットを刺繡します、と提案しました。
私達は、サイヤー氏あなた方の、此の前の牧師さん）夫妻と昼食を共にしましたが、その時どんな方法で、形容詞や、善悪とか、幸福などという抽象名詞を教えるのかという質問が出されました。此れと同じ質問は、今までも何度となく、立派な教養を身につけているお医者達からも受けていたのです。どうして、こんな簡単な事がそんなに不思議なんでしょうねえ。だって、或る一つの概念がはっきりと頭の中に形づくられていたら、その名前を覚えさせる事位、何の訳もないぢゃないですか。実在の物の名を教えると同じ事なんですもの。若し、子供の頭がからっぽだったら、言葉を教える事なんて、ヘレクレスにも出来ない事でしょうけど……。
若し、日日の経験や観察が、しらずしらずのうちに、小さいとか、大きいとか、又良い悪い、更に、甘いからいの区別を教えなかったら、言葉を教える事なんて逆立ちしても出来るものではないのです。
私は、此の無知な私がですよ、方々から集った。教養豊かな人々を前にして次の様に説明しました。〃子供に何か甘いものを見せてやると、例外なく舌なめずりをしたり、唾を飲み込んだりしますね。それは、その子供が心を動かされた証拠なんです。そして、此の様な反応を示

めした時に、あまい、という言葉を聞かしたり、常に書いてやったりすれば、子供達は、この嬉れしくてぞくぞくする様な言葉を、自分達が舌に感ずるなんとも云えない感じを表わすものだな、と悟ってすぐに覚えてしまうのです。同じ様に、レモンを口の中に押し込んでやると、子供達は顔をしかめてはき出そうとします。此んな事を二、三度繰り返すと、もうレモンを見ただけで、口を固く結んで顔をそむけてしまいます。その時、苦いという言葉を教えれば苦もなく覚えてしまうのです。これは、白いとか、黒いとか云う色、の場合にだって同じ事です。子供達は、何回となく繰り返えされる経験に依って、自分達の感じたものに区別をつけ、はっきりさせる事が出来る様になるのです。こうして、良いとか、悪いとか、やわらかいとか、ごつごつしたとか、又幸福なとか、悲しいとか、と云う、言葉も発明されたのです。言葉というのは、単なる名称ではなくて、此の様に、子供達の経験した感動をよりはっきりと、そして生き生きしたものにする働きをもっているのです。

次に掲げる文章は、ミス・サリヴァンが、他人のやり方を見た時に感じた、率直な意見である。

私達はいつか聾学校を訪ねた事がありました。快よく迎えられ、ヘレンは子供達に会って、とても悦びました。先生の中には二人程手指文字を知ってる人があり、ヘレンに直接話しかけたりしましたが、ヘレンのよく出来るのに、二年も三年も学校に通っている生徒でも此れには及ばないと感心していました。私は、切めのうちお世辞だと思ったのですが、二時間ばかり授業を参観してみて、それが本当だった事を知り、又、此んな方法ではと思ったのです。或る教室では、二人の子供が、いかにもむずかしそうに、〃簡単な文章〃を黒板に書いていました。その一人が書いた文章は〃わたくしは、あたらしいきものをもっています。きれいなきものです。わたくしのおかあさんが、わたくしのきれいで、あたらしいきものをつくりました。わたくしはおかあさんがすきです。もう一人の子は〃ぼくは、おおきいぼーるをもっています。ぼくは、ぼくのぼーるを、けるのがすきです〃と書いていたのです。私達が教室に入って行くと、生徒達は一斉に振り向き、その中の一人は私の袖を引いて〃あの子めくらね〃と云うのです。先生は黒板に、〃此の子のなまえはヘレンです。かのじょはつんぼです。めもみえません。きのどくですね〃と書くのでした。それで私は、〃どうして黒板にかいたりなさるんですか、直接話しても生徒は理解出来るんじゃないですか〃と尋ねてみましたが、その先生の云い分は、正しい文章を教えるため、という事でした。そして、ヘレンを種にして勉強を続けさす

のです。そこで私は、さつき、着物の事をかいた女の子は、本当に、あの着物の事を嬉しがつているのかと尋ねて見ました。〃いいえ〃その先生は答えるのです。〃本当に嬉しがつてはいないでしょうねえ。それでも、身の廻りの事から題材を取つてやらした方が、覚えが早いんですよ。〃理解などという事は念頭に置いてなく、全く機械的なのです。私は、途端に子供達が可哀そうになつてしまいました。耳の聞える子だつたら、冒頭に〃わたくしは、あたらしいきものをもつています〃なんて書かない筈です。此の子供達は舌足らずに〃マヽ、うまうま、あかんぼかあい〃などと云つて自分の顔をさしてみせる赤ん坊より確かに劣つています。かと云つて、此の先生が強調している、言葉の正しい理解という点でも、あまり秀れているとは云えないようです。

此の光景は、何もその教室ばかりのものではなく、どの教室の黒板にも、文法を理解させるためとか、此の前の時間の復習のためとかいう文章が書かれていたのです。文法も一応覚えておく事は確かに必要でしょう。でもそれは、言葉を覚えるたしには全然ならないのです。子供達の、自然に話そうとする衝動を殺してしまうには、此の、黒板の前でやる作文練習程効果的なものはありません。教室などという所は、決して、子供達に言葉を教える事が出来るような所ではありません。聾の子供なら例外だろう、なんて云う理屈は何処から出て来るんでしょう

ねえ。耳の聞える子でも、『無意識のうちに言葉を覚える様に教育されなければならないのです。頭が段々進んで来て、自然に文章という纒ったものを生み出すようになるまでは、一音節の言葉が適当だと思われたら、それでも仕方がないですから、兎に角自分の指で書いたり、又は鉛筆でかいたりして、それを覚えてしまう様に仕向けられなければならないのです。言葉、というとすぐに、退屈な、そして思って見るだけでもぞっとする様な七面倒臭い文法の問題など、我慢のならない程不快な、彼等の楽しい遊戯の仇である教室での時間を思い出させる様では、どうにもならないのです。でも、他人のやってる事にはあまりとやかく云わないでおきましょう。私がやってる事とて、それと五十歩百歩なのですから。

再びミス・サリヴァンの記録を取り上げて、ヘレン・ケラーの成長の跡を追う事にしよう。次に掲げるものは、一八八八年十月一日から筆を起している。

過去一年、ヘレンは風邪一つ引かなかった。

眼と耳は夫々の専門医に調べて貰ったが、全然感知能力がないとの事だった。それにしても女の味覚と嗅覚の鋭さは驚くべきものであり、外界の物を感知するのにどれだけ役に立って

いるかは想像を絶するものがあり、倫理的な面での成長にも大きな貢献をしている。

事実、此の両感覚は、知性的な面や倫理的な面の成長に大きい力を持っていると云われている。ダゴールド・スチュアートは〃人間の心理を最も微妙に表現出来るのは嗅覚関係の言葉である。此の、嗅覚という、総ての国々の文学史上で大きな役割りを果している感覚は、空想に充ちた、情緒豊かな、更に、洗練された精神とあいまって、偉大な作品を産み出す〃と云っている。ヘレンは確かに此の感覚の力に依って様々の楽しい事をみつける。温室などに入って行った時は、ぱっと顔を輝かしながら、香だけで花の名前を云い当てるのである。又、彼女の嗅覚に依って得た記憶は、いつまでも生き生きと頭の中に残っている。彼女は、バラや菫の匂いをかいで楽しんだり、私達が作ってやった花環に夢中になったりするのである。彼女は、匂いをかいで此の上もなく楽しい空想を描く事が出来るし、又、誕生日など、楽しかった様々の記録も匂いと結びついて回想されるのである。

彼女の触覚も、過去一年間のうちにとても鋭さを増した。彼女の体つきは実に見事な均整美を持っていて、彼女がその体の感覚を充分に活用して、周囲の人々とより緊密な関係に入って行くのも当然の事の様に思われるのである。彼女は、音や、動作による空気のかすかな動揺や、床板の震動を感知して周囲の状況を悟る事が出来るし、更に自分の手や着物にさわられた

瞬間にその人の名前を云い当る事も出来る。それだけなら異とするに足りないが、彼女は周囲の人々の心理状態をさえ感知するのであり、彼女と話していて、自分の感情を悟らせまいとする事は、どんな人にも不可能な事なのである。

彼女は会話などの折の微妙な強調や、身を乗り出したり、引いたりする事や、又、その一挙手、一投足をも感知してしまうし、愛情の籠った体のもたせかけや、承諾のしるしの軽い連打不気嫌な押しつけ、それに有無を云わせぬ何かを云いつける時の触り方、など、数多くの感情を表わす動作を微妙に見分けるのである。彼女の此の種の動作という言葉の理解は、非常な熟練を積んでいるのであり、私達には想像もつかない位なのである。私は昨年の資料の中に、彼女の微妙な心理を感知する能力を如実に示めすと思われる例をいくつか挙げておいたが、その能力は、彼女が接する程の人々の感情を表わす動作の意味を、完全に理解出来た為なのだと云う事に気がついたのは、やっと近頃の事である。彼女は、周囲の人々が考えている事を知るために肉体的な感触に頼らざるを得ない。彼女は、肉体的な動作を、人間心理の喜怒哀楽に結びつける事を覚えたのである。いつか、彼女が、母親とアナゴス氏の三人で散歩をしていて、一人の子供に癇癪玉を投げつけられた事があった。それは母親をとても驚かした。彼女は、素速く母親の身の動きを感じ取って〃なにかこわいことがあるの〃と云ったのである。又、或る

日私達が草刈り場を散歩していた時、一人の警官が罪人を停車場に連行して行くのに出会った事がある。私はとてもショックを受け、それが動作にも現われたものらしい。というのは、ヘレンがとても昂奮した様に〃なにかあったの〃と尋ねたのである。

此の異常な能力を示めす全くの好例が、シンシナチの耳鼻科医の所で彼女の耳を調べて貰った時に起った。彼女の耳が実際に聞えないのかという事を調べるための実験が、数回繰り返して行われたのである。立合った人々は皆、彼女が物の転る音や、人の話し声を聞き分ける事が出来るらしい様子をするのにびっくりさせられてしまった。彼女は頭をかしげたり、微笑んだり、云い換わされて居る事が聞える様な仕草をするのである。私はその時彼女の手を握ってすぐ傍に立っていた。私は、彼女が私の居る事に感ずいたらしいと思ったので、握っていた手をテーブルに乗せて部屋の隅に退き下った。それでやった実験の結果は前の時とは全然ちがってしまったのである。彼女はその間じっとすわっているだけで、自分にどんな実験が行われているかを知っている様な合図は何一つ見せなかった。私の提案である一人の人が彼女の手を握って、三たび実験が繰り返された。此の時は、話しけられる度に、彼女の表情に変化が表われたが、それでも私が手を握った時の様にはっきりしたものではなかったのである。

昨年の資料で私は彼女が、死や埋葬については何も知らなかったに拘らず、私達が墓場に入

れて行った時、彼女の感情が動揺したらしかった事実——彼女の両眼に涙が溢れた事——にふれておいた。

それと同じ様な事件が此の夏に起ったのである。でも、それについて述べる前に、彼女は既に、死という事を知っている事を明らかにしておかなければならない。彼女は、私が来るずっと前から鶏や小鳥、その他の小動物の死骸をもてあそんでいた。先に述べた墓場事件から少し後の事、ヘレンは、突発事件で、足にひどいけがをした馬に興味をあおられて、毎日毎日、その馬を見に、私を連れ出すのだった。傷は非常に悪化し馬を余儀なく梁から綱で吊しておかなければならぬ程になってしまった。馬は痛さにたまりかねて泣き声を出すのだった。ヘレンはそれを聞き、可哀そうでならないというのである。そのうち、馬は遂に殺されなければならない事になり、ヘレンが又、私に馬を見に行こうと云った時、私は、あの馬は死んでしまったと云ったのである。此の時彼女は初めて〝死〟という言葉をきいたのである。そして、私は、あの馬は苦痛からまぬがれる為に射ち殺され、今はもう土の中に埋められている、と説明してやった。その馬が故意に殺されたという事が彼女に強い印象を与えたとは思わないが、あの馬にも、彼女がもてあそんだ小鳥の死骸の場合と同じ様に、生命があったという事と、それが今は土中に埋められているという事は理解出来たと思っている。私はそれから以後、折にふれて、

死んでいる、という言葉を使う様にしている。然し、その意味を詳しく説明しようとはしていない。

話を戻す事にする。マサチューーセッツ州のブルースターに滞在中の事、彼女は、私の友達と私に伴われて墓場を通った事があった。彼女は墓石の一つ一つをたんねんに撫で廻して、その文字を判読出来るのに悦んでいた。彼女に花が匂わない筈はなかったが、それを摘もうともしなかったし、私が摘んで着物に飾ってやろうとしても拒むのである。そして彼女は、ある一つのフロレス、と浮き彫りにされた大理石の墓標の前に来るや、何かを捜すような身振りで突然膝まづき当惑した様な顔を私達の方に向けながら、〃かあいそうなフロレンスはどこにいるの〃尋ねるのである。私はその質問をそらそうとしたが、彼女はきかなかった。私の友人の方に向きを変えながら〃かあいそうなフロレンスがしんだとき、おゝごえでないてやった〃と尋ね、更に〃かのじょもうつめたくなってしまったんだわ、だれがうづめてしまったの〃とつけ加えるのである。彼女の質問には答えず、私達は墓場を通り抜けてしまった。フロレンスと云うのは、小さい時に死んだ、その友達の娘だったのである。でもヘレンがそんな事を知ってる筈はないのである。いや、「それどころか、その友達に娘が居るという事すら知らない筈だった。ヘレンは人形用のベッドと乳母車を贈られ、それを、他の子供達の場合と同じ様にして使

っていたがその墓場から帰るとすぐに此の二つの玩具が入っている押し入れに飛んで行き、それを私の友達の所に持って行き〃かあいそうなフロレンスにやって〃というのである。これには、私達も、彼女の意図が解らずどぎまぎさせられてしまったのだが、少しの誇張もない、本当にあった事なのである。一週間後に、母親宛てにだした彼女の手紙が、彼女のその時に受けた印象を、たどたどしくではあるが説明している。

〃あたし、フロレンスをちいさいべつどにねかしてやったの。そしてそれをうばぐるまにつんでやったの。かあいそうなフロレンスはしんだのよ。Hさんは、かのじょのかあいゝちいさいこどものためにおおきなこえでないたの。かのじょはつちのなかにいるの。そしてきたないの。そしてつめたいの。フロレンスはサデイのようにかあいかったの。だからさHんは、たくさんきすしたりだいたりしたの。フロレンスはおおきいあなのなかでかなしいの。おいしゃさんはよくなるようにおくすりをのませたのだけどよくならなかったの。とてもびようきがおもくなると、くるしがってあたまをふったり、うんうんいったりしたの、Hさんはもうすぐ、かのじょにあいにゆくのでしょう。〃

ヘレンは実に活動的で鋭い頭を持っているが、同時にとても純真な子供である。彼女は他の子供達と一緒に楽しくあそび、決していらいらしたり、ぢりぢりする事がない。事実私は、遊

び友達が自分の云う事を理解してくれないからと云って腹を立てたりする彼女をついぞ見かけた事がなかった。彼女は、自分の書き綴る言葉を全然理解出来ない子供達と何時間も遊んでいる時がある。その様な時の、自分の考えている事を解らせようとして、一生懸命に身振りをしたり、真剣な無言劇をやったりする彼女の姿を見かけると、つい涙を誘われてしまうのである。時には、手指文字を覚えてみようとする子供もいる。私は、思わずほゝえみながら、彼女が、小さい友達のなれない指を、忍耐強く、そして、やさしく直してやっている光景を見守るのである。

或る日、ヘレンは、とても綺麗なジャケツを着て得意になっていたが、母親は云うのだった。〝きものもなくてはさむさにふるえているこがいるのよ、あなたのきものをやったらどう？〟と、ヘレンは、自分のシャツを脱ぎながら云うのである。〝あたし、このジャケツをかわいそうなこにあげなけあならないわね。〟

彼女は自分より年下の子供がとても好きであり、特に、赤ん坊は例外なく、彼女の母性本能を誘う。彼女は、よく気のつく乳母のように、とてもやさしく赤ん坊をあやしたりするのである。又、彼女の、小さい子供達への思いやり深さや、彼等の我儘を通してやろうとする姉さんぶった考え方も、とても気持が良いものである。

彼女は非常に社交好きであり、彼女の忙しい指話について訪れる人々と過す時間はかけがえのない楽しみを感じさすのである。と云っても、一人で家に残されたりしても結構おとなしく、裁縫したり、編物をしたりして楽しんでいる。

彼女は大変な読書家である。熱心に本の上にかがみ込み、左手の四本指で行を追い、右手でその字を書きながら読んで行く。その指の動きは実に早く、彼女の素速い。そして変化に富んだ指話によく慣れている人々でも、彼女が何を読んでいるのか見当をつけ兼る事も稀ではない。

彼女の微妙な感情の動きはその表情に表われる。又彼女の挙止はこだわりがなく自然である。その率直で、熱心な性質は人を魅きつけないではおかない。我儘な所がなく、思いやりが深い。いじけた所とか、意地の悪さは全然ない。親切さと愛情の凝集である。彼女には、自分を卑屈にしなければならない理由など一つもないのである。それだからこそ、彼女の物腰は伸び伸びとわだかまりがないと云える。

彼女は家に飼っている生きもの総てが好きである。若しも手荒に扱ったりなどすると彼女はとても怒るのである。馬車などにのっても、馭者が鞭を使うのを許さない。〝かわそいうなうまがなく〟というのである。いつかなどは、犬が鎖につながれているのを見つけてとてもかわいそうがるのだった。私達は、パールが逃げないように、と説明してやったが、それでも彼女

は、その日一日中、その泣き声をきゝつけては同情し続けるのだった。

彼女は、去年の夏の事、小魚や蜜蜂の為に葡萄がすっかり喰い荒されてしまったという父親の手紙を受け取った。最初はとても怒り、あの小さい奴等は〃とてもわるいやつ〃というのだった。然し、私が小鳥や蜜蜂はとてもおなかが空いていて、それに葡萄を食べるのはいけないという事を知らなかったのだと説明してやると、すぐに気嫌を直したのだった。その後で書いた返事では次の様に云っている。

〃ばんぶるばちや、くまばちや、ことりなどにおとうさまのたいせつなぶどうをたべられてしまって、ヘレンはとてもかなしいです。かれらはにんげんとおなじようにあまいくだものがすきですし、それにおなかがすいているのです。たくさんのくだもの をたべ てしまいましたが、そんなにわるいやつではないのです。だって、かれらは、それがわるいことだとしらなかったのです。

彼女の言葉の習得は、その経験が豊かになって来るのと歩調を合わせて急速な進歩を見せ続けている。その経験が数の面でも、質の面でも、共にあまり豊かでなかった時は、彼女の語調も必要なものだけに限られていた。然し、周囲の世界の事を、より広く学ぶにつれて彼女の判断は正確になり、理性は強靱に、活動的に、そして微妙になり、その表現手段である言葉もよ

り流暢に、又論理的になつて来た。
彼女は旅行中にも考えを深め語調を増すのである、彼女の傍に坐つて、私は丘や野原、それに綿畠、ストロベリーや梨、桃、レモン、野菜などの植つている果樹園、広々とした牧場に草を喰む牛や馬の群、丘の麓に点在する羊の塊、教会、学校、ホテル、倉庫などが建ち並び、それぞれの仕事に忙しく右往左往する人々の市街など、窓外の風物誌を描写してやる。私が此等の事を説明してやつているうちにもヘレンの興味は、はつきりした姿を形成し、彼女は、言葉が足らないために、身振りや無言劇を混えて自分を取り巻く世界や、いたる所で偉大な物を産み出している人間の力を、もつと熱心に学びたいという事を示めすのである。此の様な方法で、彼女はさしたる困難も感じないで無数の新らしい表現方法を身につけるのである。
彼女が総ての物に名前があり、それを指の働きで伝えたり、知らせてもらつたりする事が出来ると悟つた時から、私は、彼女の耳に話す代りに、総ての事をその掌に書き続けて来た。此の不利のために、彼女は自然、一つの文章の中でも重要な単語だけを話す傾向を持つていた。〃ヘレン、みるく〃という具合なのである。私は、彼女が正しい言葉を使つたという事を解らせるために、ミルクを持つて来てはやるが、私の助をかりながらでも、兎に角〃ヘレンにのみたいからみるくちょうだい〃と、完全な文章にして云うまで、それを与えなかつた。此の様な

初歩の過程の時、私は、同じ事を様々な表現で云って彼女の気を換え、元気づけてやった。例えば彼女がお菓子を食べている時などに、〃せんせいにもおかしちょうだいな〃とか、〃せんせいヘレンのおかしたべたいんだけど〃などと、特に〃の〃という言葉を強調して云うのである。彼女はすぐに、同じ事が、実に沢山の云い廻しで表現出来る事に気がついた。二、三カ月後には〃ヘレンねたいわ〃を〃ヘレンねむいの、それでねたいの〃という風に云い換える事が出来る様になった。

私はよく、〃どういう風にして知性的な概念や、倫理的な観念を教えるのですか〃と尋ねられる。私は、それが私の菅々しい説明よりも、実験と経験に依ったと思っている。此の傾向は、彼女の語調がとぼしく、うまく説明する事が出来なかった初期の段階で特に強かった。私は実生活から卑近な例をひいて、情熱や理性的な概念や、倫理的な観念などを理解させた。私が来てから間もなくの事、彼女は大のお気に入りである人形を壊してしまった事があった。彼女は泣き出した。そこで私は、その掌に、〃せんせいかなしい〃と書いてやった。此んな事が二、三度繰り返されている間に、彼女は悲しいという言葉を、その心理状態に結びつけて考える事が出来る様になったのである。

〃幸福な〃という言葉も同じ様にして覚えたのである。又、正しい、よこしまな、良い、悪

いといった様な形容詞も同様である。〃愛〃という言葉は、他の子供達の場合と同じ様に、抱擁と関連さして覚えた。

或る時私は、彼女が既に知ってるという事を承知の数々の質問をした。彼女は出鱈目に答えるのである。私がその態度を叱ってやると彼女は如何にも真面目に考えていると云う様な顔附きをしてじっと立っていた。私は、彼女の額に〃かんがえなさい〃と書いた。此の言葉は、こうして、丁度手に実物を握らせながらその名前を綴ってやった時と同じ効果で彼女の頭に印象づけられたのである。その時以来彼女は何かあるとすぐにかんがえる〃という言葉を使うのである。

段々進歩して来ると、私は、多分……かもしれぬとか……とすると、とか、期待する、忘れる、思い出す、などと云う言葉を使い始めた。ヘレンが、〃おかさんどこにいるんだろう〃などと尋ねると、私は〃さあねえたぶん、レイといっしょにいるかもしれないわ〃といった具合に答えるのである。

彼女は、馬車に乗ったりすると、一緒になった人々の名前とか、何処に行くか、又何の用事で行くのかなどと云う事を根掘り葉掘り知りたがる。次の様の会話はいつもの事なのである。

ヘレン〃あのちいさいこのなまえなんと云うの。〃

先生〃しらないわ。だってよそのこなんですもの。でも、たぶん、ジャックというのかもしれないわ。〃
ヘレン〃どこにゆくのかしら〃
先生〃くさかりばに、ともだちとあそびにゆくところかもしれないわ〃.
ヘレン〃なにしてあそぶのかしら。〃
先生〃ぼーるあそびだとおもうわ。〃
ヘレン〃ともだちはいま、どんなことやってんでしょう〃。
先生〃たぶん、ジャックがくるとおもって、かれをまってるかもしれないわ〃。
言葉は、しっかり自分のものになって始めて作文の中に出て来るのである。
〃けさ、せんせいとヘレンは、まどべにすわって、ひとりのちいさいおとこのこが、ほどうをあるいているのをみました。あめがとてもはげしくふっていましたので、かれはぬれないようにおおきいかさをもっていました。あのこ、いくつぐらいかわからないけど、たぶん、むっつになってるかもしれないことね。たぶん、かれのなまえはジョーっていうのかもしれないわ。あのこは、ちいさいよそのこだから、どこにゆくのか、わからないわ。でもたぶん、おかあさんのおつかいで、おひるのかいものにゆくのかもしれないわ。かれはおおきいかごをもっ

ているんだもの。かれはそれをおかあさんのところにもってゆくのかもしれないわ。

一八八八年、九月二十六日

彼女に言葉を教えるのに、私は何も特別な法則には従わない。私は、私の教え児の、積極的な心の動きを充分に観察して来たが、それにこそ最上の法則が示唆されているのである。ヘレンはとても鋭い神経を持っているので、此の、ただでさえ過敏だと思われる神経を不要意に刺戟しない様に極度の注意を払わなければならない。今年の大部分は殆んど旅行に費されたので、自然彼女の勉強は旅行中の様々な経験や、その風景がその内容となった。彼女の学ぼうとする熱心さは初めの頃と少しも変っていない。傍からの使嗾は全く無用である。それ所か、却って手減させる為に散々苦労させられるのである。

或る一定の法則に従わない事にした以上私は、彼女を、周囲の事情に明るくし、他の人々との交際を容易に、そして自然にするために、一般的な常識や経験など、それに代るべきものを与えるようにつとめなければならなかった。日記を続けさすようにしたのも此の考えから出たものにほかならなかった。次の文章はその抜粋である。

〃アナゴスさんがもくようびにおいでになりました。わたくしは、とてもうれしくて、かれにきすしたりだきついたりしました。かれは六十にんのめのみえないおんなのこと、七十人のみみのきこえないこをせわしています。めのみえないおんなのこたちは、わたくしに、きれいな、ぬいものばこをおくってくれました。そのなかには、はさみと、いとと、はりのたばと、はこと、ものさしと、ぼたんと、はりさしがはっていました。わたくしは、おれいのてがみをかくつもりです。わたくしは、ナンシイと、アデリンと、アリイにきれいなきものをつくってやります。わたくしはごがつにシンシチナにいって、もうひとりのこどもをかいます。そうすると、わたくしのこどもはよにんになります。あたらしいあかんぼうのなまえはハリイです。ウイルソンさんと、ミッチェルさんがにちようびにおいでになりました。アナゴスさんは、げつようびに、ちいさい、めのみえないこどもたちにあうためにルイスヴイルにゆきました。おかあさんはルイスヴイルにゆきました。わたくしはおとうさんとねて、ミルドレッドはせんせいとねました。わたくしはせいおんということばをおぼえました。それはしずかで、こうふくだというのみです。モーリおじさんが、きれいなどうわのほんをおくってくださいました。わたくしはことりのおはなしをよみました。うづらは十五から二十のたまごをうみます。それはしろいろです。あおいこまどりは、きのあなにすをつくります。そのたまごはあおいろです。

こまどりのたまごは、みどりいろです。わたくしは、はるのうたをおぼえました。さんがつ、しがつ、ごがつがはるです。

ゆきはきえ、
あたたかきかぜそよとふく。
みずながれ、
はるきたれりと、あいらしの
あいらしのこまどり。

ジェームズが、あさごはんに、しぎ、をうってきました。ちいさいひよこが、とてもつめたくなってしにました。わたくしはかなしいです。せんせいとわたくしは、テネシィがわにぼーとのりにゆきました。ウイルソンさんとジェームズがぼーとをこいでいました。ぼーとは、はやくみずのうえをすべり、わたくしはてをつっこんでみずがながれるのをしらべました。

わたくしは、やすやつりざをでさかなをとりました。わたくしたちは、たかいおかにのぼりました。せんせいは、ころんであたまにけがをしました。わたくしは、ゆうごはんのとき、とてもちいさいさかなをたべました。わたくしは、おやうしとこうしのおはなしをよみました。ちいさいこうしは、おんなのこがぱんや、ばたーがすきなのとおなじようにくさがすきです。ちいさいこ

うしのはらで、とんだりはねたりします。かのじょはふざけまわるのがすきです。だって、たいようがてってあかるく、そしてあたたかいとき、かのじょはこうふくだからです。ちいさいおとこのこは、かれのこうしをあいします。かれは、ぼく、おまえにきすするよ、といってこうしのくびにてをまわして、かのじょにきすしました。こうしは、ながい、ざらざらした、したで、かれのかおをなめました。こうしは、きすするとき、あまりくちをあけないにちがいありません。わたくしはつかれました。せんせいは、わたくしにあまりかいてはいけないとおっしゃいます。

一八八八年、三月二十二日

今年の秋に彼女はサーカスを見に行った。私達がライオンの檻の前に立った時、そのライオンは吠えたのであるが、彼女はすぐに、空気の震動でそれを実にはっきりと感知し、極めて正確に真似したのである。

私は駱陀の姿を彼女に説明してやったのだが、さわらして貰えなかったので、どんな恰好をしているか、はっきり理解出来なかったのではないかと危んでいた。所が、二、三日経った或る日の事、教室の方から時ならぬ笑いさざめきが聞えて来たので、私は何事かしらと急いで行

って見た。するとヘレンが、背中に、二つの枕をこぶの様に結びつけて、四這いに這い廻っていた。そのこぶの間には人形が乗せられており、這い振りも、私が彼女に描写してやったときの、大きな歩幅を真似している事が一目で解る様なものであったのである。私は、彼女に何の真似をしているのかと尋ねて見ると〝あたし、とってもゆかいな、らくだなのよ〟と云うのだった。

次の二年の間は、アナゴス氏（氏はその間にヨーロッパに行っていた。）も、ミス・サリヴァンも、ヘレン・ケラーの事については何も公けにしていない。一八九二年に一八九一年のパーキンス盲学校の公開報告書が、ヘレン・ケラーの事についての総括的な発表をした。その中には、彼女の手紙や、課題作文、それに自由作文が載せられている。然し、既に若干の手紙と、〝霜の王様〟が出版されているので、改めてここにヘレン・ケラーの文章の、第三、四、五、三ケ年間の作例を掲げる必要はないと思う。そして、特に重要なものは最初の二年間のものなのである。私は、此の一八九一年の公開報告書の、ミス・サリヴァンの記録から、自叙伝を書く上での細かい材料を、ケラー女史に提供したのである。

次に掲げる文章は、アナゴス氏が、ミス・サリヴァンの記録の中から抜粋したものである。

或る日、ヘレンの小馬が、驢馬と並んでつながれていた事があった。ヘレンはあっちにさわったり、こっちを撫で廻したりして、熱心に両方を較べて見ていた。と、彼女は、ネッディの頭をさすりながら立止り、〃ざんねんだけどネッディ、あんたがブラック・ビューテイよりうつくしくないことはたしかね。あんたのからだつきはあまりすまーとでないし、かおつきもりこうそうぢゃないわ。それに、くびもゆみなりになってないのよ。それにおまえのみゝは、こつけいなくらいながいのよ、でも、そんなこと、どうでもいゝわね。あたし、おまえがどんなにへんなかっこうをしていても、せかいじゅうでいちばんうつくしいものよりあいするわ〃。というのだった。

ヘレンは、〃ブラック・ビューテイ〃の話にとても興味をそゝられた。彼女が如何に、敏速に、一つの概念を自分のものにする事が出来るかを示めすために、本を読んだ事がある人なら誰でも経験した事のある一つの例をあげる事にしよう。私は、次の様な一節をよんでやっていた。

〃その馬は年老いて、栗毛も色が褪せ、骨ががきもきしていた。膝もがくがくしていて、歩

きっぷりはひょろひょろしていた。私は干草を食べていた。時々風が吹いて来て干草を飛ばした。するとその哀れな奴は、長い首をのばして、飛ばされて行った干草を拾っては食べ、食べては拾った。そして、もっとないかと、きょろきょろあたりを見廻した。その眼はとても悲しそうで、いくら見まいとしても見ないでは居れなかった。私は何処かで見た事があったんじゃないかと思った。彼女もじっと私の方を見凝めた。はっとして私は〃ブラック・ビューティじゃないか〃と叫んだ。と、此処まで読み進むと、ヘレンは私の手を抑えて止してくれと云うのだった。彼女はしきりにしゃくりあげていたのである。そしてやっと〃それは、かあいそうなヂンガーだったんだわ〃と云うだけだった。漸く昂奮が鎮まった後で彼女は云うのである。

〃かあいそうなヂンガー、ヂンガーということばが、ずっとむかしのことを、めにみえるようにおもいだささせるの。ヂンガーのまなざしもおもいだすわ。もうすっかりみにくゝなってしまったの。あのうつくしくゆみなりになってたくびはうなだれてしまい、ほうせきみたいだっためのひかりもきえてしまい、きびきびとみをこなすこともできなくなってしまったの。かわいそうね。こんなにひどくなってしまうなんておもわなかったわ。ヂンガーのいっしょうでたのしかったことはほんのこれっぽちで、かなしいことだけがたくさんあったんだわ。〃そして、本当に悲しそうに〃にんげんのいっしょうにも、こんなでないといゝんだけど〃と云うのだ

った。

今朝ヘレンは、ブライアントの詩、〃あゝ力強き種族の母よ〃を読んでいた。詩を読むのは初めての事である。私は云って見た、〃この詩をおしまいまで読んだら、母はだれなのか考えてごらんなさい。〃と、彼女は、〃汝の門前に自由と憩あり〃という所まで読むと、〃此れアメリカのことだわ〃と叫び、〃門はニューヨークね。自由は自由せんげんのことだわ〃とつけ加えたのである。彼女が同じ詩人の〃闘いの野〃を読み了えた時、どちらの詩が素晴しいか、と尋ねて見た。すると〃あたしこれが一番すきだわ〃と云って、

地にまみれし真理は再びたち上らん。
神の国の永遠の時は彼女のものなり、
たとえ、過誤、闘争、苦痛が
神の国にてたおれんとも

と朗吟し、たちまち詩中の人物になり切ってしまい、正しいものが勝利を収めるのに悦び貞節な人々が苦境に陥るのに悲しみ、又、英雄の素晴らしい活躍を描写した所を読んでは顔を輝かしたり、目をみはったりし、闘争という概念もはっきり理解出来たらしく、〃人々がよこしまな事や、暴君に反抗して立上るのは正しい事だわ〃と云うのだった。

次に掲げるのは、ミス・サリヴァンの、一八九一年の公開報告書に発表された記録である。

過去三年間ヘレンは急速に言葉を覚え続けた。彼女は、同年輩の普通の子供より寧ろ優っている。此の成果をなしたのも、彼女の勉強熱心が、外界の何物にもはぐらかされなかったためである。

然し、此れだけの進歩を見せるには、それ相当の犠牲を払わなければならなかった。それは神経の極端な酷使である。彼女の神経は、常にある一つの事に集中されている。丁度、休息のない熱病にかかっているに様、自分自身も気がついていない、或一つの意識があるのである。彼女は、まだ自分が理解出来ないものがあったりすると、決して勉強を途中で止めようとしない、私が、算数の問題などを明日にしたらどうかなどと云うと、〃あたし、がまん強くなるように、今やってしまうわ。〃と云うのである。

二、三日前の或る夜、私達は関税の事を話し合っていた。ヘレンが、それを説明してくれと云うので〃とてもむずかしくて、あなたにはまだわからない事なの〃と答えると、彼女は暫く黙っていたが〃どうしてわからないっていうことわかるの。あたし何でもわかるのよ。ねえせんせいおぼえていらっしゃるでしょう。ギリシャの人々は、彼等の子供達をとても愛して、沢山

のわかりそうもない偉大なことを話してきかせたのよ。あたし、その子供達はそのうちの幾らかは理解できたと思うわ〃。と意気込んで云うのだった。私は、彼女に難しくて解らないなどとは二度と云ってはいけないと考えさせられた。それは、彼女の心を無用に刺戟するばかりであるからである。

そんなに前の事ではなかったが、私は彼女に、積木で塔を建てる事を教えてやった事があった。その建て方はとても複雑で入り込んでいたものだったので、ちょっとのずれがあるとすぐに崩れてしまう様なものだった。暫くやって見たが、うまく出来そうにもなかったので、あなたには難しすぎるから別の方法を教えてやると云ったが承知しなかった。彼女はどうしても建てるんだと云い張って、崩しては搔き集め、建てては崩しながら、三時間位の間実に忍耐強く頑張り続け、とうとう見事な塔を建ててしまった。

一八八九年の十月まで、私は彼女に規則的なそして組織的な教育をするのは適当でないと思っていた。何故なら、彼女が知性的に物を見るようになった初めの二年間というものは、彼女はよその国に居るようなもので見るもの聞くもの総てが珍しく、そして不思議に充ちていたのである。此の様な理由で、彼女の組織的な、そして規則的な教育は或る程度までの言葉を覚えるまで差し控えなければならなかったのである。

その上、彼女の、二年間の知識慾は異常なまでに激しいもので、若し絶え間なく湧いて来る疑問にその都度答えてやらなかったならば、彼女の芽を順調に育んでやれないのでないかという恐れがあった。云い換えるならば、彼女は自分が尋ねたいと思っていた事を忘れてしまい、折角の事も説明してやる機会がなくなってしまうと考えたのだった。それで私は、ある質問が、その時の勉強に全然関連性のないものであっても、その都度答えてやるのが一番良い方法だと結論したのである。事実、彼女の突飛な質問は、私が前もって計画していたものよりも、ずっと素晴らしい結果を収める事があった。

彼女は算数でも相当な進歩を示めして来ている。彼女は既に、掛け算やよせ算、引き算、それに割算とはどう云うものであるかを知っているし、実際にやって出来ない事もない。

此の間などは、最後の問題が仮分数のものでなかったら、コルバーンの暗算を全部やってしまう所だったし、筆算でも相当な問題をやった。彼女の頭は実に鋭く、私が問題を書き了えるか了えないかのうちに、正しい答えを出してしまう事も稀ではない。又、問題の説明文などには殆んど注意を払わないし、若し知らない言葉や云い廻しがあっても平気で問題を解いてしまう。或る時、問題が非常に難しく、ちょっとやそっとでは解りそうもなかったので、私は散歩に行って頭を休めて来ようと云って見た。彼女は断固として頭を振り、〃あたしの敵は、あた

しが逃げ出してしまったと思うかも知れないわ。頑張って、今すぐやっつけてしまうの〃と云い、綺麗に解いてしまった。

彼女が過去二年間に、如何に大きい知性的な進歩を遂げたかは、彼女の言葉使いと、話された言葉の微妙な意味を識別する能力に、はっきりと現われている。

彼女は毎日毎日新しい言葉や、手に触れるもの、体に感ずる事を覚え続ける。彼女があるとき、現象、含む、精力、再生産、異常な、永久の、神秘、などと云う言葉を教えてくれとせがんだ事があった。此等の言葉は、簡単な事実や現象から説明し始めて、次第にその抽象性に導いて行かなければならない様な、高次な言葉なのであり、特に神秘などという深遠な意味を持つ言葉を彼女に理解させようなどとするのは無謀に近い事だとさえ思われる。然し、彼女は既に、その言葉が、何か目に見えないものとか、秘められたものと云う意味を持っているのだと知っている以上、より頭が進んだ時には、今その表皮の意味を知っている様に、何の雑作もなく最も深い意味を悟る事が出来るものと思う。私は今の程度では解りそうにもないなと思われてる様な単語や表現で説明しなければならない事でも、何も教えないよりは、簡単な言葉ででも説明してやった方が良いと思っている。というのは、例えその説明が皮相であり、仮りの間に合せであるとしても、言葉同志がお互いに意味を補いあって、ある一つの概念を産む出すも

のだからである。

私は、私の教え児を、伸び伸びした、活動的な積極性を持った子供だと見做している。そして、此の積極性こそが、私の最も信頼すべき案内者でなければならないのである。私は、彼女を見えもし、聞えもする子供達と全然区別しないで話しかけて来た。そして、此の態度を総ての人々に取って貰うようにお願いして来た。私は、彼女がこれこれの単語を理解出来るだろうか尋ねとられると、例外なく〝いいえ、彼女に取っては、一つの言葉や一つの文章なんか、解ろうが解るまいが問題じゃないのですよ。彼女は、知っている言葉との関係から、新しい言葉の意味も訳なく悟ってしまいますから〟と答えている。

彼女に与える本にしても、聾だとか、盲だとかと云う事を念頭に置いて選んだ事はない。彼女は、同年輩の普通の子供達と、何の変りもなく、読んだり悦んだりするのである。勿論初めてのころは、内容が身近なもので、興味をそそると同時に、その表現も簡潔なものを選ぶ必要があつた。私は、彼女が初めて簡単な話を読もうとした時の事を憶えている。彼女は印刷された文字が読める様になると、暫くの期間、盛り上った文字が刷られているカードを並べる云う方法で、簡単な文章を作って悦んでいた。然し、その文章は、互いには何の関連性もないものだつた。或の日の朝、私達はねずみを捕えたのだつたが、その時、一つの名案が閃めいた。生き

ているねずみと猫を使って、簡単な話を作って見れるのではないかと思ったのである。そうすれば、彼女に言葉の新しい用法を悟らせる事が出来るかも知れないのである。そこで私は、点字板に、〝ねこは、はこのうえにいる。ねずみは、はこのなかにいる。ねこにはねずみがみえる。ねこはねずみをたべたい。ねこにねずみをとらしてはいけない。そのねこはみるくをのめるんだし、そのねずみはおかしをたべられる〟という文章を書いてヘレンに示した。彼女は、その（定冠詞―訳者）という言葉を知らなかったので、例に依ってそれを知りたがった。彼女の進歩は相当なものであったが、それを解るように説明してやる事は不可能だった。そこで私は、その言葉はそのままにして、次の言葉にふれさせた。彼女は、それをみてほほえんだ。次いで私は、実物の猫を、実物の箱の上に坐らせた。彼女は驚いた様な声をあげた。自然、一番初めの文章の意味ははっきり理解する事が出来たのである。それで私は二番目の文章にさわらせ、本当に、ねずみが箱の中にいるのをさわらせてやった。彼女は益々興味をあをられて次の文章をさぐって見たのである。〝ねこには、ねずみがみえる〟と、私は、猫の頭をねずみの方に向けさして、ヘレンにさわらしてやった。彼女はとても当惑している様だった。私は次の文章にさわらした。彼女は、ねことたべるとねずみの三つの言葉しか知らなかったが、全体の意味は解ったらしかった。何故なら、彼女は、猫を箱の上から床に下ろして、ねずみの入った箱

に点字板でふたをしたからである。それからさわってみた文章が、〃ねこにねずみをとらしてはいけない〃だったのである。彼女はその文章の中の否定語に気附いた事から、猫にねずみを捕してはいけないという事を悟ったらしかった。とるとさせるは新しい言葉だった。おかしという言葉は彼女のおなじみの言葉であり、実物を与えられてとても悦んだのである。彼女は身振りで、もう一つ話をしてくれとせがんだ。そこで、私は極く簡単な文体で書かれた短い話の本をあづけた。彼女は、行づたいに指を走らせ、知っている言葉には悦びながら、知らない言葉は見当をつけて、どんな頭の古い教育者をでも、あゝ盲の子供でも普通の子供と同じ様に、たやすく、自然に読書が出来るんだな、と考え直させる様な勢いで読み始めたのである。

私は、ヘレンが自国語を読めるようになったのも本に親しんだのが一番大きい原因だと思っている。彼女は、二時間でも三時間でも、ぶっとおしで読み続け、とめられて渋々本をおく事も稀ではない。或る日、私達が図書室から出て来た時、彼女の表情は、いつもより真面目くさっていた。その訳を尋ねると、だって、私達は、朝ここに来たときより、出る時の方がずっと悧巧になってるんだと思うのよ〃と答えるのだった。

又どうしてそんなに本が好きなの、という問に対して〃だって、私の知らない沢山の事を話してくれるし、人みたいに退屈にも、まごまごもさせないの。それに、私が知りたいと思う

事、何べんでもくり返してくれるのよ〃と答えた事があつた。
又、或る時、ディッケンズの〃少年英国史〃を読んでいて〃ブリトンの精神はいまだに生き続けているのである〃という文章に出会つた。私は、どう云う意味だと思うと尋ねて見た。彼女は、〃あたし、勇敢なブリトンは、ローマ人が幾度も幾度も彼等を打ち破つてもがつかりしないで、敵をもつとひどくやつつけてやりたいと考えたんだと、思うわ〃と答えたのだつた。勿論、文章中の言葉の解釈に基いた意味を理解出来なかつた。然し彼女は、著者の意とする所を捕え、それを自分の表現で云い表わしたのである。次に出て来た文章は更に難しかつた。〃ストニウスが国を去ると、彼等は、彼の軍隊を襲い、アングルシー島を奪回したのである。彼女の解釈は〃ローマの将軍が帰つてしまつたのでブリトンは又戦を始めたの、するとローマの軍隊は命令する人がいないものだからブリトンにまかされて、彼等が占領していた島を失つてしまつた。〃というものだつた。
彼女は、手仕事よりも、知的な職業の方が好きである。然し、他の子供達の様に、空想ごつこ、はあまり好きでない。といつても、他の子供達が何かやつてると、たとえどんな時でも、その仲間に入りたがる。彼女はカリグラフ式タイプライターを習つて居り、とても正確にキイを打つことが出来る。でも、未だ始めてから一ケ月と経つていないので、早く打つという訳に

はゆかない。

二年以上前の事だったが、彼女の従兄が、手の裏に指で書いて、電報暗号の、やーを教えた事がある。それ以来彼女は、その符号を知っている人々と会うと、会話にそれを使って話すのである。此れは、私がヘレンの傍にいない時などに、床を蹴ったり掻いたりして話し会える様にしてくれた。彼女は、床板の震動で私の云った事を理解するのである。

ヘレンは、豊かの天分の故に、若し完全に放置して、自然のままの成長にまかせるならば、ホー博士にも究明し尽されなかった心理学上の問題の解決に、何らかの光明を投げかけるのではないかという期待を寄せられていた。然し此の期待は未だ実現されていない。ローラ・ブリッジマンの場合でもそうだった様に、ヘレンの場合にもこの失望はさけ得られなかったのである。一人の子供達を完全に社会から隔離し、その子が後でも周囲の人々から全然影響を受けない様に育てるのは不可能である。ヘレンの場合では、此の様な目的は、彼女の人格の一番根本的な要素を形成している、他の人々の交りを犠牲にしなければ達成されないのである。

彼女の急速な成長を見守って来た人なら例外なく、彼女の知識慾に充ちた魂をたとえ一時たりとも社会から隔離して、何の刺戟もない、生命そのものの神秘的な成長に委ねる事が不可能だと思っている。然し私は、人間の心を当惑させそして混乱させる様な問題には、成可く近付

けない様に気を配って来た。子供というものは時々、実に深遠な質問をするものである。然しそれは浅薄な答を得るに過ぎない。――より正確に云えば、誤間かされてしまうのである。

〃あたしどこからきたの〃〃あたしがしんだらどこへゆくの。〃という質問は、ヘレンが八歳の時に発したものだった。然し、それに対して与えられた説明は（彼女はその時、それを理解出来なかった）彼女を満足させる事が出来なかった。そして、彼女は彼女の魂がより高次な力を発揮して、種々の本や、日常の経験から吸収された無数の考え方や、実験から、ある一つの結論を割り出す事が出来る様になる迄の沈黙を強いられたものであった。然し、彼女の魂は、物の起原、という問題を詮索し続けるのである。

彼女の、一般的な種々の現象の観察に幅が出来、その語調が内容に於いても数に於いても豊かになり、彼女が自分で感知したものや、考えた事を明瞭に表現する事も、又他の人々の思想や経験を理解する事も出来るようになって来ると、彼女は、人間の力の限界と、人間以上の、太陽や地球など、既に彼女の馴染みになっている無数の自然物を創り出した力の存在に気がつくようになった。

そして、遂に彼女は、既に実在すると確信しているその力の名前を教えてくれと云い出したのである。

彼女は、チャールズ・キングスレイの、〃ギリシャ英雄伝〃を読んで、ギリシャ神話の男神や女神が出て来る物語を知ったり、同時に、神とか、天とか、魂とか、又それに類する沢山の言葉を覚えたらしかった。

それまで、彼女は決して此の種の言葉の意味を尋ねた事がなく、又、話しの途中などに偶然出て来ても何らの関心を払わなかった。一八八九年の二月までは、誰も、彼女に神の事を話していなかったのである。

丁度その頃、熱心なキリスト教信者だった親戚の人が、彼女に神の説明をして見たのだったが、彼女の理解に適する様な言葉を使わなかったため、深い印象を与える事が出来なかった。すぐ後で、私が彼女に尋ねて見ると、彼女は〃とてもおかしな話をきいたのよ。Aさんがね、あたしも、そして全部の人も、神様が砂で作ったのだというのよ。でもそんなこと嘘ね。あたしの体は、肉と血でできているんだわね。そうでしょう？〃と云い、自分の腕をすかして見る様な身振りをして笑いこけるのだった。そして更に、〃神様はどこにでも居て、愛でかたまっているんですって、でも私、人間が愛で出来てるなんて考えられないわ。愛って心の中だけにあるんですものねえ。それからもう一つ、とってもおかしな事云うのよ。神様はあたしのお父さんなんですって、あたし、おかしくってふきだしちゃった。だってあたし、お父さんの名前

は、アーサー・ケラーだって、ちゃんと知ってるんですもの。〃と続けるのだった。

私は、彼女に、あなたはそのお話の本当の意味が解らなかったのだと説明してやり、もっと賢くなってからお話ししてあげる、と宥めてやったのである。

彼女は或る日、本を読んでいるうちに、母なる自然、という表現を見つけ、それから暫くの間は、超人間的な力を感ずると、いつも、それを、母なる自然、のせいにしていた。例えば、植物の成長などを話題にしている時など、母なる自然が、木や花それに草などが成長する様に太陽の光りや、雨を降らす、と云う具合なのである。その頃の彼女の考え方は、次の、私の記録の抜き書きによく出ていると思う。

〃夕食が終った時、ヘレンはとても真面目な顔をしていた。H夫人が不審に思って尋ねて見ると〃やさしい、母なる自然は、春になるととても忙しいんだろうな、って考えているの〃と彼女は答えるのだった。どうしてと追求されて、〃だって沢山の子供のお世話をしてあげなければならないんでしょう。彼女は総てのものの、母、なんですもの。木や、花や、それから風や。〃と云ったのである。

〃母なる自然、は、どういう風にして花のお世話をするの〃私は尋ねて見た。〃花が大きくなる様に、太陽の光や雨を降らすのよ。〃と彼女は答え、暫く間をおいて、〃あたし、太陽の

光は彼女の微笑みで、雨の滴は涙じゃないかしらと思うの〃。と加えたのである。

それから余程たってから、彼女は云うのだった。〃母なる自然が、私をつくったのかどうかは解らないわ。私、私のお母さんが天からつれて来て下さったんだと思うの。でも、天、って何処にあるのか知ら。私、雛菊や三色菫は土に埋められた種から生えるんだ、とは知ってるわ。でも、人間の子供が土の中から生えて来たんじゃないって事位解るわ。木の人間なんて見た事ないんですもの。……母なる自然を作ったのは誰なんでしょうねえ……。あたし、美しい春とっても好きよ。新しい木や花や、それに小鳥なんか。あたし嬉しくてたまらなくなるの。お庭に行って見ようと雛菊や三色菫が忘れられたと思ってるかも知れないわ〃。

一八九〇年の五月頃から、私は、日々の生活で信仰深い人々に取り囲まれている彼女を宗教から切り離して置くのは不可能だと考える様になった。彼女は、その問題で、毎日毎日応接のいとまもない位に私を苦しめだし、彼女の知性がその問題を求め出して来た事を痛感させるのだった。

五月の初め頃、彼女は、次の様な質問の一覧表を書いた。

〃私の知りたい事。地球や海など沢山のものをつくったのは誰ですか。太陽を温くしているものは何ですか。お母さんから生れる前、私はどこにいたのですか。私は、植物は種から成長

する事を知っています。でも人間は種から成長するのではありません。私は木の人間なんて見た事がないのです。小さい鳥やひよこは卵から生れます。本当に見ました。でも、卵が卵になる前は何だったんでしょう。どうして地球は落ちないんでしょう。あんまり大きく、そして重すぎるからですか。父なる自然はどんなことをやったんですか。聖書、という本をよんではいけませんか。どうぞ、ひまな時、あなたの小さい生徒に沢山の事を教えて下さい。

此の一覧表を読んだ人なら例外なく、此の様な鋭い事を質問するだけの頭を持った子供だったら、例え繁瑣な事は理解出来なくても、その一番根本的な問題だけは理解出来ると気附くに違いない。勿論彼女は、此等の疑問を完全に解いてやるためには当然必要な抽象的な概念や、学術語は理解出来ない。然し、人生とは、此の様な問題の理解過程に外ならないのである。

彼女に様々な事を教えるに当って私は、もし知りたいと思っている事なら、必ず理解出来るものだという一貫した考え方をして来た。若しヘレンの頭が、此等の質問にも窺える、知性的な成長を遂げていなかったならば、どんなに丁寧な説明をしても何も理解させる事は出来なかったであろう。超人間的な創造力の実在を感知するだけの感受性と知性的な発展がなかったならば、自然現象の説明など不可能なのである。

彼女の頭の中で成長して来た様々の事は、次第に一つの焦点を持つようになった。と見るやその焦点はたちまち彼女の頭を独占してしまったのである。彼女は、総ての事を説明して貰いたくてたまらなくなってしまった。彼女の質問一覧表は、世界一週旅行だったのであり、その途中、〃真の世界は誰が創ったか〃と云う質問の前で立往生してしまったのである。私は〃地球や、太陽や、その他の、星、と呼ばれているものがどうしてつくられたかは誰も知らない事。昔から大勢の偉大な人々が此の問題を解こうとして、又、自然の神秘的で偉大な力は何だろうかと、一生懸命研究して来ている事を説明してやった。彼女は、ギリシャ人が沢山の神を信じ、それに種々の自然力を持たせたのは、太陽や、雷や、その他多くの自然力がそれぞれ独立していて、人間の力を絶したものであると思っていたためだ、という事を知っている。でも私は、彼女をそこにとどめておく事に満足出来ず、〃人間は様々の本を読んだり、深く考えたりして見て、やっと、総ての現象は、ただ一つの力の、顕われ、である事に気がつき、その力に、神、という名前を与えた〃のだと説明してやった。

彼女は暫くの間じっと考えていたが、〃誰が神を創ったの〃と尋ねるのである。私はそのほこ先を転ぜざるを得なかった。私には、自己の力、だけで存在するものの神秘的な実存を説明する事が出来ないのである。実際、彼女の質問には、私の様なものでは到底間に合わないので

ある。それに類した質問をあげてみると、〃神は何から新しい世界を創り出したのか〃、〃彼は何処から、土や、水、種や、一番初めの獣を持つて来たのか。〃〃神は何処にいるのか〃、〃神をみた事があるか〃などである。私は、神は何処にでもおり、人間の容姿をしていると考えてはいけない。神は生命であり、心であり総てのものに宿つている魂なのだ、という事を説明してやつた。彼女は私を遮つて、〃総てのものが生命なんかもつていないわよ。岩には生命はないし、考えもしないわ。〃というのである。そして時には、どんなに賢明な人にも解決出来ない問題が沢山あるの、と逃げなければならない羽目に追い込まれるのである。

ヘレンは教義とか、教旨とか云うものは何も教えられなかつたし、宗教上の信仰を持つようにも仕向けられなかつた。神とか魂とか、又永遠などと云う事に含まれた神秘性を説明するにはあまりに無知だと痛感していた私は、私の教え児への義務観念に駆られて、余儀なく出来るだけ精神的な問題にはなるべくふれない様にした。そして、ブルック司教に、神の美しい父性について説明して貰つたのである。彼女は、まだ聖書を読む事を許されていない、何故なら、若し今それを読ませたりしたら、神の属性についてとんでもないまちがつた観念を形成してしまうに違いないからである。

然し、キリストの美しくも人々の魂の糧となつた生涯や、その悲惨な最後については、平易

な言葉で話して聞かせる様にした。彼女はそれを聞いて、キリストのやさしい心に、強くうれたのである。

そして彼女の質問する事と云えば〃どうしてキリストは彼の敵方につかまえられない様に遠くへ逃げてしまわなかったの〃だったのである。又彼女に取っては、キリストの行った奇蹟が不思議でたまらなかったのである。キリストが彼の弟子達に会う為に海の上を歩いて行ったという話を聞かされた時、彼女は確信ありげに、〃それは歩いて行ったという意味じゃないわ。泳いで行ったという意味よ。〃と云い、キリストが復活したと聞いた時は、とても当惑した様な顔で、〃一ぺん死んだ人が蘇るなんて、とても信じられないわ。〃と呟くのだった。

或る日などは悲しげに〃あたしめくらでしょう。だから神様が見えないんだわ〃と云い出すのだった。そこで私は、不可視、という言葉を教えて、神は魂なのだから誰も目で見る事は出来ないという事を、そして、若し私達の心が清く、正しく、そして思いやりに溢れている時には神を見る事が出来、その時こそ私達は神の姿に一番良く似ているのだと説明してやった。

又或る時彼女は、〃魂って何？〃と尋ねた。〃魂がどんな形をしているかは誰にも解らないの。でも、それが肉体を持ったものではなくて、私達に、愛したり、考えたり、希望を持たしたり、又、キリスト教信者は、肉体が腐ってしまってからでも生き続ける事が出来ると信じさ

せたりするもの〃だと私は答えた。そして反問して見た〃ヘレンは、自分の魂が、肉体から離れているものだと思っているの？〃〃え、そう思うわ。〃彼女は云うのだった。〃だって、さつきあたし一生懸命にアテネにいらっしゃるアナゴスさんの事を考えていたのよ。あたしの心――言葉を換えて――魂はその時アテネに居たけど、肉体は此処に、勉強室にいたのよ。〃そこで私は、魂も、不可視、であり、形を持っては居ないのだと説明した。〃だって〃と、彼女は云い張るのだった。〃もしあたしが、あたしの魂が考えた事を字に書けば、それは眼に見えるわ。だから字は、魂の肉体なのよ。〃

いつの事だったか、ヘレンが私に、〃あたし、千六百年も生きられたらなあ〃と云うのだった。それぢゃ、天国という美しい国に行き、そこで、永遠に、生きていたくないのか、と尋ねると〃天国って何処〃と逆襲するのである。残念ながら、知らない、と告白せざるを得なかったが、多分星の世界にあるんでしょう、と云った。一寸黙っていたが、こんどは〃先生先に行って様子を見て来て下さらない〃と云い、〃だって、タスタンビヤはとっても素晴らしい所なんですもの〃と弁解めいた事を云うのだった。その後、此の種の問題は一年間そっと伏せられていた。然し、再びその問題が登場するや、彼女の質問は、堰を切った様にどっと流れ出した。彼女は尋ねる。〃天国は何処にあるの。どんな様子なの。どうして外国を調べる様に調べ

られないの。〃私は、出来るだけ嚙み砕いて、天国は何処にでもあるが、何処にある天国でも同じ事は、そこでは、精神的な不安が充たされ、正義、が愛され且つ尊ばれる、という事だと答えた。

彼女は〃死〃という言葉を聞くと、とても狼狽し、そして身をすくめるのである。つい最近、彼女は、兄のジェームズが射って来た鹿の死骸をみて、ひどく心を痛めれ、涙を浮べながら、〃どうして、総てのものは死なけあいけないの。あんなに足の速い鹿までが〃。というのだった。又いつかは、〃若し死なくて良いんなら、毎日毎日がどんなに楽しいでしょうね〃というのである。私は〃そうぢゃないの。若し、死ぬ人がいなかつたら、世界中がとても混雑して、とてもとても、楽しく生活するどころぢゃないわ。〃と答えた。間髪を容れず彼女は〃だつたら神様にお願いして、もっと沢山の世界を創ってもらえばいいぢゃないの。〃と急追するのだった。

友達などが、幸福なもう一つの世界が彼女を待っている、などと云ったりすると、〃あなた死んだ事ないんでしょう。だったらどうしてそん事解るの〃とやり込めるのである。

私達は、彼女の日常用語に注意して見て、余程慎重に話さないと彼女に間違った意味で覚えさせる事になりかねないと、気がついた。ハンガリヤ人は、生れついての音楽家だという話を

聞いて、生れた時すぐにうたい出すの〃と云いブダペストで見た学校子供の頭には百以上の歌がつめ込まれている、とその人が続けるのに、〃頭がいつもガンガンしているでしょうね。〃と笑いながら云うのである。彼女は、骨稽な事に気附くのがとても早く、比喩なども、たとえ、として取ろうと頭を悩す事はしないで、それを字義通りに受け取り、一人でおかしがっているのである。

彼女は、魂に形がないと云い聞かされていたので、ダヴィッドの〃我が魂、我を導く〃という言葉に面喰ってしまった。〃足があるの？　歩けるの？　目はあるの？〃と尋ねるのであった。と云うのは、〃導く〃は〃盲〃という言葉と結びついていたからである。

ヘレンを当惑させ、まごつかせた多くの事の中で、特に彼女を悲しませたのは〃邪悪〃という事が存在し、それに災いされる沢山の災害であった。彼女に此の事実を知らさない事は出来たし、実際の邪悪や悪徳に触れさせない様にする事も困難な事ではなかった。でも、彼女は、成長するにつれて、自分の周囲を取り巻く他の人々の生活や思想を段々はっきり理解してきたのである。自然、彼女は罪悪が存在する事に気がつかなければならなかったし、法律や罰則の必要な事も説明して貰らはなければならなかった。然し、たった今神を知ったばかりの彼女に取って、邪悪、の存在は黙視すべからざることだったのである。

或る日彼女は、〃神様は、いつも私達の事に気をつけていてくさだるの。〃と尋ねるのだった。そうだ、という答を得て〃だったら、どうして、今朝ミルドレッドが揺籠から落ちてけがをしたのに知らないふりをしてたの？〃と重ねて問うのだった。又、神の力と、善良さについて質問した事もあった。そして或る時は、大暴風雨で数人の犠牲があったと聞かされて、〃神様は何でも出来るんだから、どうしてその人々を助けてやろうとしなかったの〃と尋ねたりするのである。

思いやりの深い人々や、とてもやさしい人々の中に成長した彼女は、意識づいてから常に、正しい事をしようと心懸けていた。本能的に正しい事をみつけ、悦んでそれを実行するのである。彼女は、総ての邪悪は有害であり、そして悪果を刈り取らなければならないものであり、又、邪悪な心から、産み出されるものである、と考えている。彼女の清浄な心には、総ての邪悪は、一様に邪悪なのである。

次に掲げるものは、ミス・サリヴァンが、一八九四年の七月、チョートッカで開かれた、全米聾者会話教育促進大会への出席に際して準備したものであり、彼女が、自分の教育法について書いた最後の記録である。

〃ヘレンが総ての物に名前があると云う事を知ったと云っても、一部の盲信的な人々の様に、彼女が突然に言葉を自分のものにした、と云う風に考えてはいけない。先ず第一に考慮に入れなければならない事は、彼女が日常の会話で使う言葉は取りも直さず、私達が彼女に話してやったものを彼女が絶え間努力によってものにし、その結果彼女の意志表現となって再現されたものであるという事である。此の事は総ての子供達についても云える事である。彼等の言葉は、家庭で話されたものが記憶されたものである。日常生活での絶え間ない繰返しが、言葉や云い廻しを記憶させ、いざ彼等が話そうとするとき、自然とそれが口をついて出るのである。同じ様に、高い教育を受けた人々の言葉は本に依って供給されるのである。言葉は実生活上の必要や経験に依って自分のものとされるものなのである。初めの頃、私の教え児の心は空虚そのものだった。彼女は、自分自身で知覚し得ぬ世界、に住んでいたのである。言葉と知識は、切っても切れない縁にある。言葉の上での進歩は、実在物の正確な知識に依らなければならない。ヘレンが、総てのものには名前があり、その名前は、お互いに手指文字を使って伝え合う事が出来るものであるという事を理解するとすぐに、私は彼女の注意を、彼女が欣喜雀躍して書き綴った名前の本体である、実物、に向ける様にした。私は、単に言葉を覚えさせる事だけを目的にして言葉を教えたのではなく、言葉は、常に、考え、を伝えるものとして教えた。此

の様にして始めて、言葉の習得は、知識の獲得と、並行する事が出来るのである。言葉を知性的に使うには、何か話すべきものを、うちに持たなければならない。うち、に話すべきものを持っているという事は、経験する、という事である。いくら語調を豊富にしてやっても、その子供の〝うち〟に伝うべきものが何もなかったり、又、知りたいと思うものを他の人々の心の中に見つけ出す事が出来る様にしてやらなかったなら、その子供をすらすらと話せる様にする事は不可能である。

初めのうち、私は、私の教え児を組織的なものの中に閉じ籠めたりはしなかった。私は、私の計画したものへの関連性などを眼中におかず、成るだけ彼女が自分自身の眼で興味あるものを見つけ出す様にしむけ、その興味に魅かれた問題を、私達の新しい勉強のきっかけ、としたのである。初めの二年間、私はごく稀にしか書く勉強をさせなかった。何かを書かせるには、書かるべきものが必要だし、いざ書く段になると、それ相当の知識が必要なのである。書く、と云う事が楽しいものになるには、考え、と、知識、がしっかりと自分のものになっている事が必要である。私には、子供達はあまりに早く何かを書かされ過ぎると思われてしようがない。初めに彼等はすらすらと楽しく読む事や、話す事を練習すべきである。そうすれば、自然に、書かずに居られなくなるのである。

ヘレンは、文法的な言葉の吟味というよりは、実際聞いたり、使ったりする事で、言葉を覚えた。分類や動詞の変化など、厄介極まる文法は、初めから無視してしまったのである。彼女は、生きた言葉から、じかに言葉を学びとったのである。毎日の会話や本でそれを実行し、正確に使える様になるまで、種々の方法で幾度も幾度も繰り返した。云うまでもなく、私は、口で話す事も出来ない程の、沢山の事を、指で掌に書いてやらなければならなかった。何故なら、盲で、聾である彼女は、何かにつけて私一人だけを頼りにしたからである。

私は、子供達の心の中の何処かには、私達から見出され、そして善導される事に依って、成長させ、発展させる事の出来る、高貴な能力が潜んでいると信じている。然し、彼等の心を、がらくたもので充たす事を止めない限り、私達は、幼い子供達の高貴な能力を順当に発展させる事が出来ない。数字は、決して、彼等を思いやりある大人にする事は出来ない、、地球の形や大きさ等についての正確な知識は、その美しさを見つけ出さす上に何らの貢献もしない。私達は、先ず子供達を、自然の中に歓喜を見附け出す様に導くべきである。子供達を自由に野放しにし、動物や植物など実在物、を観察させるようにしなければならない。それだけの条件が揃っておれば、子供達は正しい自己教育をするものである。彼等に取って真に必要なのは、教示より、指導なのである。

私は、ヘレンの流暢な話し振りの原因を、彼女が殆んど総ての印象を、言葉、という仲介に依って得た、という事に帰している。言葉の修得への積極的な欲求や、恵まれた環境から結果された利点を否定する訳ではないが、私は、彼女の教育上に一番大きな結果を齎らしたものは、常に供給され続けていた、良い本、であると考えている。多くの人々が云うように、私達が本から読み取る事の出来るものは、私達が自分で経験したものの範囲を出ないと云うのは事実である。然し、私は、ヘレンが解りそうもない難解な詩などを読んで、とても楽しんでいたりするのを見つける事があるのである。〃もう此れから先は難しくて解りませんよ。〃とある先生が、今まで読んでいた本を閉じながら、子供達に云ったとする。〃先生解らなくてもいいから全部読んで下さい〃。彼等は、読んで貰ったばかりの話に、自分達にも説明のつかぬ悦びを感じながらお願いするのである。子供達が本を読んで楽しみ、そして利益を得る事が出来る以上、その中の総ての言葉を理解する必要はないのである。もし説明してやるとすれば、どうしても必要だと思われるものだけに限るべきである。ヘレンは、総ての言葉を吸収したのであり、初めのうちは理解出来なかった言葉も、必要とされるまでは長く温存されたのである。そして必要になった時には自然に会話や作文の中に出て来たのである。然し、此の事は、彼女が非常に多くの本を読んだ事、本を読む事に大きな悦びを感じた事、それに、若し彼女が様々の

事を自分の眼でみたり、自分の口で話したりしたとしても、それは他人の眼を通して見、そして他人の言葉をかりて話した事になるのだ、という事を度外視しては理解出来ない。読書に依って得た知識なしに独創的な文章を書くと云う事は不能なのである。ヘレンは、常に、自分が接している文章の中に最上の、そして最も簡潔な、表現、の手本を見つけ出していたのであり、彼女の会話や文章は、それを無意識に再現させたものなのである。私は、読書を学校での勉強から切り離すべきであると考えている。悦ばすためだけの目的で、子供達に読書をすすめるべきであり、知らず知らずのうちに本を手にするように仕向けるのが最も賢明な方法である。想像の偉大な所産である、本、を、嘗ってそれが著者の一部であった様に、子供達の生活の一部とすべきである。思想絵巻や、文学的幻影を感受する能力が豊かであり、そして鋭ければ、それに歩調を合わせて、その能力に依って再現される文章も立派なものになるのである。ヘレンは、生き生きした感受性、熱烈な、そして新鮮な興味、芸術的価値の洞察力、などを持っており、自然、他のより天禀に恵まれなかった人々よりも大きな悦びを、生活それ自体に、自然に、又、本、に感じ得るのである。彼女の心には、実に豊富に、偉大な詩人の思想や理想が蓄えられているため、如何に平凡なものでも、平凡なままで存在する事が出来ないのである。何故なら、彼女の想像力に依って、総てのものは、その面目を遺憾なく発揮させられるか

らである。〃

ミス・サリヴアンの意見は、今までも、出版される毎ににぎやかな論争を惹起した。聾者教育に何らの専門的知識を有しない人々からまで論議された程なので、私は、屋上に屋根を架するの愚を敢てしようとは思わない。然し、ミス・ケラーの教育が投げかける問題は、語学教育上に於いて根本的な要素を含んでいるため、聾者の場合にだけ局限して考えてる事が許されないのである。此の問題からどんな結論を引き出すかは、すべての教育者に許された自由であるが、私は教育者としてミス・ケラーの教育を読む訳ではない多くの読者のために、ミス・サリヴアンの取った方法の要点を摘出して見ようと思う。

ミス・サリヴアンは、ホー博士の仕事を承け継ぎ、更に一歩前進させたのである。博士は聾盲者の教育に要する設備や、肉体的訓練の方法を発明したが、言葉を教えるという事は、その様な機械的なものとは全然別のものである。ミス・サリヴアンは、実験や、他の子供を観察する事に依って、言葉を自然に教える方法を会得したのである。ホー博士が手搜りしていたものこそ、この、〃自然な方法〃だったのであるが、彼は一語一語教えるだけで、解りもしない言葉を何度も繰り返して聞かせるという方法に気がつかなかったのである。此の発見こそ、ミス・サリヴアンの功績に帰せらるべきものなのである。遊んでいる時だろうが、勉強している時

だろうが、ミス・サリヴァンは、四六時中彼女の教え児の掌に言葉を書きつづけたのであり、此れに依ってミス・ケラーは、あたかも揺籠の中の幼児が、言葉を話し出す前に幾千回となく聞き、そして、それを話された周囲の状況にあてはめながら覚える様にして習得したのである。此の方法によって初めて、言葉は、実在物や、行動や、感情の名称である事に気附かせる事が出来るのである。そしてこれこそミス・サリヴァンの、素晴らしく実効的な第一の原則だったのであり、私の知る限りでは、総ての聾盲の子供は云うまでもなく、聾の子供にもさきがけて、ヘレン・ケラーに試られたものだったのである。此の法則が此の世に紹介されたのは、実に、ミス・サリヴァンの手紙に依ってであった。

第二の原則は（勿論、第一とか第二などと云うのは愚な事であるが）決して無味乾燥な事を話さない事である。ミス・サリヴァンが初めて訪れた聾学校では、生徒達が、突然の訪問者に好奇の眼を見開いて寄り集って来たのに、その先生は、彼等が知りたいと思わぬ事で黒板を白くする事に忙しかった。〃どうして、〃とミス・サリヴァンは云っている。〃彼等が興味を感じた事を話題にして、言葉の勉強を進めようとしないのだろうか。〃

興味を魅きつける事だけについて話すという事と似ている原則は、子供の質問に手をふさいだりしないで、出来るだけ忠実に答えてやるという事である。ミス・サリヴァンの表現をかり

れば、質問は、子供の心の、扉、なのである。ミス・サリヴァンは、故意に子供の知能程度にまで自分の水準を下げたりしなかった。ミス・サリヴァンは、ヘレンの理解などには無関係に総ての人々に自然に、そして完然な文章で話す様にして貰ったのである。此の様にしてミス・サリヴァンは、他の大多数の人々が経験しながらも気がつかなかった、帽子、コップ、行く、坐る、などという文章の構成要素たる単語が、それ自体立派な文章である事に気がついたのである。我々は、文章を書く時に一語一語などは意識しない。我々が意識するのは、全体だけである。此れこそが、我々の考えを伝える、という事をほのめかしている。一つ一つの単語は、一つの考えを暗示する事が出来るし、時には説明し尽す事も出来る。小供達の〃まゝ〃という一語は、〃まゝどこにいるの〃という事になるのである。子供は、完全な文章を聞いて母に関係のある部分だけを覚えているのである。ミス・サリヴァンは、彼女の、指先で片言を云えるばかりになった教え児に完全な文章を強要したりはしなかったが、ミス・ヘレンが〃まゝみるく〃、と云う毎に、彼女自身では、その省略を補って完全な文章にしながら〃まゝヘレンにみるくをもってきましょうね〃と云ってやったのである。

此の様にして、ミス・サリヴァンは、一眼見た所では無謀とさえ思われる、全く単純な、そして無技巧な方法を、自然に実行したのである。若しミス・サリヴァンが、他の場所で子供達

と接触した経験を持っていなかったならば、ヘレン・ケラーは有名になれなかったであろう。その子供達を観察する事に依って、彼女は自分の教え児に、普通の子供に接するのと同じ態度で接する事が出来たのである。

ヘレン・ケラーに言葉を教える方法は、手指文字だけとは限らなかった。本、が、殆んど手指文字にも匹敵する重要な役割を果したのである。彼女は読めもしない本の上にかがみ込んで、仕切りに自分の知っている言葉を手捜りし、話の筋などは眼中におかなかったのである。途中でぶつつかった新しい言葉は、既に知っている言葉との関係や、その位置かの推測で彼女の語調の中に加えられたのであった。本は、言葉の倉庫であり、若し子供達の注意が印刷された頁に向けられるならば、その子供が不具である事には無関係に、言葉の意味は自然に明かになるのである。子供は、自分が理解し得るものを読む事に依ってではなしに、彼が理解しもしない言葉を読み、かつ記憶する事に依って、それを覚えてしまうのである。例えヘレン・ケラーの様な特異な興味を本に寄せる子供はないとしても、或る程度の健康な好奇心を持っている子供ならば、特にミス・サリヴァンがやった様に、賢明な先生が居て、言葉遊び、をやってくれるならば、容易に本が好きになるのである。ヘレン・ケラーは、特別に激しい言葉の獲得慾を持っていた様に考えられている。然し、それよりも、彼女の特異性は、思考慾にあった、と

考えた方がより正確を窺っており、彼女が言葉を学ぼうとしたのも、彼女に取っては、言葉が人生その物を意味していたからである。彼女の勉強の対象となったのは、地理学とか数学などという専門的なものではなくて、外界の一般事象だったのである。

十四歳の時、彼女はドイツ語をほんの一寸学んだだけで〝ウイルヘルム・テル〟を読み始めどうにかこうにか話の筋を握む事が出来たのである。文法に関しては何らの知識もなかった、し、又必要なものとも思ってなかった。彼女は、言葉を、言葉自体から覚え取ったのであり、此の方法こそが、話された言葉を聞く、という事は例外としても、総ての、外国語を学ぶ人々に残された唯一の、そして学校などでやる文法から入って行くのより、結局は効果的な、更に賢明な方法なのである。これと同じやり方で彼女は、ラテン語をも物にしたのである。更に詳しく云えば彼女がラテン語を覚える事が出来たのは、ラテン語の先生について勉強したからではなくて、一冊の本を何度も何度も繰り返して読むという一人遊びをしたからに外ならない。

ハムソン学校の先生である、ジョン・Dライト氏は、私に下さった手紙で次の様に述べている。

〝時々、私は彼女が暇な折など、お気に入りの部屋の隅っこで肘掛け椅子に、モリエールの〝意にそはぬ医療〟の大冊を拡げ、ゆっくりと文字の上に指を滑らせながら独りで楽しそうに

くつくついっている彼女の姿を見かけました。当時、彼女のフランスの語調は、ごく限られたものでしたが、私達が冷し半分で、知的推察と呼んでいる、あてずっぽう、で子供達がばらばらのヒントから謎々を解く様に一語一語を推しはかって、全体の意味を知ってしまうのです。それで、彼女と私は、彼女がその本で読んだ気品高いユーモアや、溌溂たる奇智に溢れた話を聞きながら、楽しい夕方の一時を過す事が出来たのです。それは彼女に取って、勉強というよりは、娯楽といった方が近いものでした〃。

つまり、彼女の言葉への慾求は、その儘、理性的な慾求であると云い換える事が出来る。彼女に取っては、言葉が計り知れない程の魅力を持っていたので、一般的な理性の慾求が、言葉の慾求という姿に変形してしまっているだけに過ぎないのである。

ヘレン・ケラーの今日を築いたものは、彼女の才能であったのか、それともその教育法だったのか、という事が激しい議論的の的となった。

ミス・サリヴァンの十倍も有能な先生でも、愚鈍で精神的欠陥のある子供をヘレン・ケラーの様に育て上げる事は不可能である。然し又、ヘレン・ケラーに、その十倍の才能が恵まれていたとして、その初歩から、実にその初歩からあの素晴しい教育を受けていなかったなら、矢張り今日の大を築く事は出来なかったろう。そして、彼女が、ミス・サリヴァンの、発見しつ

つ、又有効に実行しつつ、ホップキンス夫人に宛てた手紙の中にそつくりそのまま載っている、聾者へ言葉を教える方法に依って教育された事は厳正な事実である。そして、その方法こそは、総ての聾者に試みらるべきものであり、又、より広い観点から解釈して、総ての、言葉を習得しようとする子供の教育にも、適応されてよいものである。

今まで、多くの人々は此の問題の解決をヘレン・ケラーの天与の才能に求めようとして来た。両方とも誤っているとは云えない。然し、一方だけを正しいとすると、他の一方が承服せず結局問題は振り出しに戻ってしまう事になる。ミス・サリヴァンは異常な力に恵まれた人である。彼女が発見した方法は、その力に依って初めて実行に移されるし、彼女の、何物にも屈しない、そして独創的な頭がその教え児の性質をいやが上にも明るいものにしたのである。若し、ミス・ケラーが語学に興味を持ち、数学を嫌ったとしても、ミス・サリヴァンの嗜考を考慮して見れば、何も不思議ではない。と云っても、ミス・ケラーが、盲目的にミス・サリヴァンの云う事を聞いていたと云う意味ではない。ミス・ケラーが八才の時、自分の思い通りの事を出来なくさせられてしくしくないていた。どうして泣いているのか、と尋ねられて〝あたしどくりつしたいの〟と答えたという逸話が伝えられている。此の鋭気は、例えミス・サリヴァンの様な人に指導されたとしても、決して盲目的な依頼心に変るべきものではない。それどこ

ろかミス・サリヴァンは、彼女の自然な慾望を、分析や定義づけを寄せつけないものに育てあげたのである。それは、その教え児に、個人個人のちっぽっけな感情を超越した〃篤い友情〃というものを吹き込んだからである。若し、ミス・ケラーに、〃驚歎すべき心やさしさと善良さ〃や〃すべて、美しく、そして正しいものを愛する心があるとすれば、それは、彼女と十六年間を共にした先生の成した何物かを示唆しているのである。

もし全く同じ方法でやったとしても、ミス・サリヴァンだけが成し遂げ得た事が沢山あるのである。ヘレン・ケラーをもう一人産み出すには、もう一人のミス・サリヴァンが必要なのである。然し、もう一人の教養ある聾で盲の人を育てあげるには、良い環境と、生き生きした興味の渦巻く人々の中に生活し、そして片時もその教え児から離れようとしない、自由に手腕を揮う事を許された先生が、必要に応じてミス・サリヴァンのやった方法を適度に活用しつつ、又、新らしい発見をしつつ、健康で明るく、未だ社会の悪に染ってない純真な子供を教育すれば、それで事は足りるのである。聾であろうが、聾盲であろうが、健康でありさえすれば総ての子供は教育を受ける事が出来る。然し、それは学校で出来る事ではない。両親か、家庭教師にまたなければならない。私は、聾学校関係の人々の真向からの反撃を予想している。聾学校が、聾者教育の唯一の州立機関である事は事実である。然し又、真に教育を必要とするのは、学

齢以前の年齢の時であるというのも事実なのである。ミス・サリヴアンは彼女の教え児を裏庭に連れて行き、花を摘んではそれを描写してやる。此の方法こそ、四方を壁に囲まれ、部屋一杯の生徒を相手にしては逆立ちして出来ないやり方なのである。

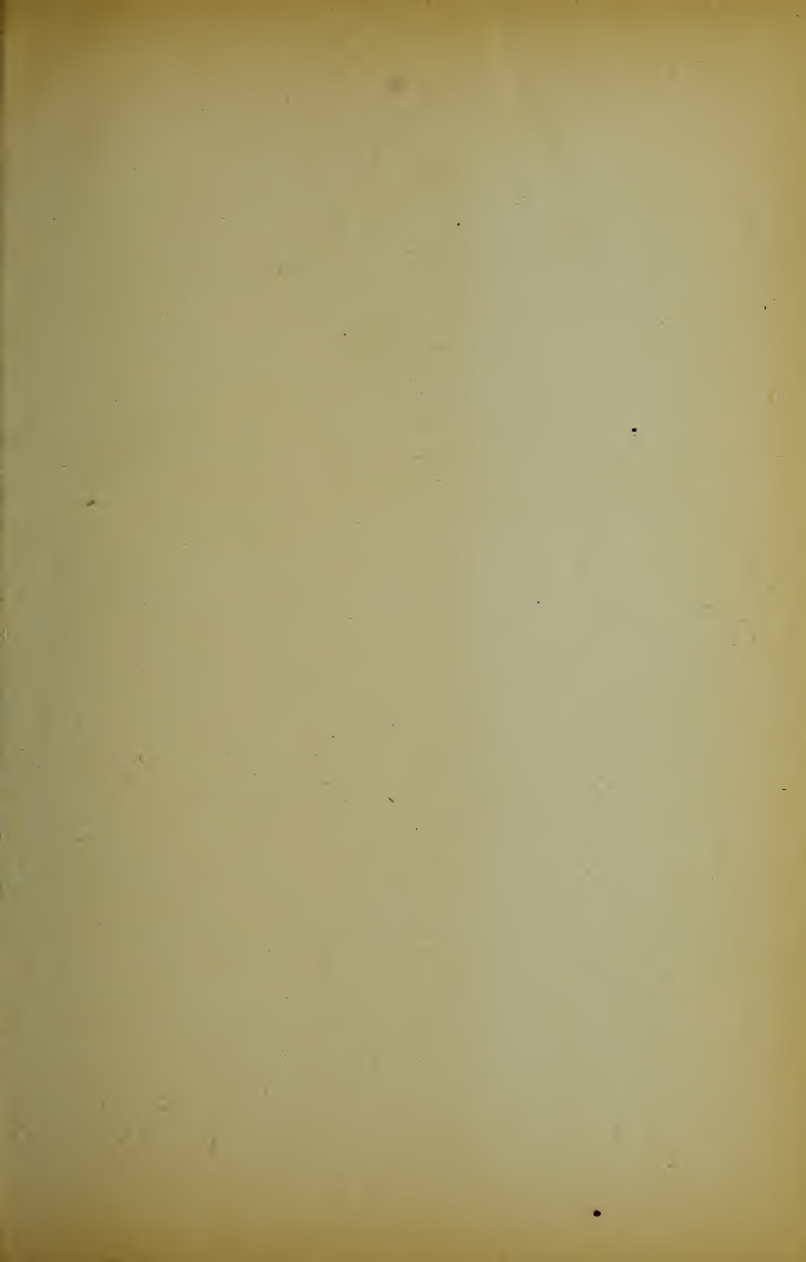
ホー博士の〃先生は子供と同じ心になる事は出来ない〃という意見は正しくない。それこそ、聾の子供を教える先生に望まれなければならない事なのであり、子供が興味を持っている遊戯とか、ふざけ廻りとか、その他の子供っぽい事を、彼等と一緒にやる事が一番肝要なのである。

ヘレン・ケラーだけを問題にして聾者教育を云々する事は無謀な事であるのは解り切っているのだが、私は別に何の権威を持っている訳でもないし、又自分の意見を述べているというのでもない。単に、ミス・サリヴンの意見を要約しているのであり、ミス・サリヴアンこそが権威者なのである。ヘレン・ケラーの成功が、今や聾の子供達にあまり多くのものを期待させてしまった事は事実の様に思わはる。私は、聾や盲の子供達が、事実を歪曲した、けばけばしい報告書の種にされて、家庭教師や周囲の友達に無理無態なあつかいを受けている例を、沢山知つている。

此処でヘレン・ケラーの今日を築いた二、三の要点をあげて見ようと思う。第一に、彼女は

一年七カ月の間、音と光の世界に生活した事があった事。此れが理性的発展を示唆している。第二に、彼女は、心身共に強壮であった事。第三に、彼女は、言葉を覚える以前から身振りで話していた事。ミス・ケラーに頂いた手紙の中には、彼女は、あの病気にかかる前でさえも身振りで話すので、母親などは、それで言葉の覚えが遅いのだと思っていた程だ、という意味の事を書いたものがある。病気の後、それが唯一の方法になると、身振りは急速に発展したのだった。彼女がどの程度まで、外界の事を感知出来たかは、正確に云えないが、ただ相当程度のものだったろうとは容易に推察し出来得るのである彼女は、他の人々が〃唇〃を使う事に気がついているし、父親が新聞を読んでいるのを〃見て〃、彼がそれを下におくと、こんどは自分でその真似をして、眼の前にかざしたりしている。彼女の幼い時のかんしゃくは、あとで訓練され、組織立てられた、力、となるべき、性格の強さの自然な顕われだったのである。

それ故に、ミス・サリヴァンが、全身全霊を捧げて、彼女の素晴しい方法を実行したのは、実に当を得た事だったといえる。ミス・サリヴァンの方法は実に立派なものであり、一々実験して見なくても、その成果に満腔の信頼を寄せ得るのである。その上、ミス・サリヴァンは人格的にも偉大な人である。そして最後に忘れていけない事は、その教育が自然の中で行われ、先生と教え児は、互いに縺れ合う影と形の様に、共に学び共に遊んだのだという事である。

ミス・ケラーの、大きくなってからの教育は、彼女自身自叙伝の中でふれている程度で充分理解出来る事と思う。特に興味をお持ちの方は、ヴォルタ・ビューロー・ワシントン・DCに連絡し、ケンブリッジ女子学校の先生である、アーサー・ギルマン氏と、マートン・S・ケイス氏の、彼女の大学入学準備当時の記録を申し込まれたい。

THE STORY OF MY LIFE
BY
HELEN KELLER
COPYRIGHT, 1954,
DOUBLEDAY &CO. INC.
NEW YORK, U. S. A.

いのちの夜明け

昭和30年5月20日 印刷
昭和30年5月27日 発行

定価 320円

著者 ヘレン・ケラー
訳者 澁谷夏雄
発行者 筒井光彦
印刷者 西村徳次
東京都千代田区神田鎌倉町1
印刷所 東陽印刷製本株式会社

発行所 学習館

東京都武蔵野市吉祥寺二七七七
電話武蔵野六〇七五番